
仮面ライダーディケイドEX ～なのはの世界～

diend

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダーディケイドEX ～なのはの世界～

【Nコード】

N4475H

【作者名】

d i e n d

【あらすじ】

シンケンジャーの世界を回り終え、新たな世界旅立とうとした仮面ライダーディケイド・門矢士は突然見たこともない世界に飛ばされた。そこは絶対に行くことのできないはずの“なのはの世界”だった……

第一話：なのはの世界（前書き）

はじめまして。diendといいます。

今回が祝初投稿です。これは他の某二次創作小説投稿サイトにあった作品を少し改造を加えたものです。見た事あると思うかもしれませんが、どうかご覧ください。

第一話：なのはの世界

ここはミッドチルダ。魔法文化が発達し、時空管理局という組織によりこれ以外のあらゆる世界を管理している。しかし、近日“ガジェット・ドローン”と呼ばれる無人機械が“ロストログア”と呼ばれる古代の遺産を回収するために徘徊していた。

そんな中にある者が舞い降りた。すべての世界を破壊する悪魔といわれる者が・・・

薄暗い夜の街、一人見つからないような中にオーロラのような揺らぎが現れ、その中から1人の青年が現れた。

「なんだ？ここは・・・」

青年・門矢士はその異様な光景に驚いていた。

「まったく・・・またなんか妙な世界に来ちゃったのか？ご丁寧にバイクまで置いてある。」

士が見ていた先には彼のバイク“マシンディケイダー”がそこにあった。

「しかし困ったもんだな・・・次の世界へ行こうと思ったら急にこんなところに来ちゃった・・・ナツミカン達はおろか写真館すらないとはな・・・」

士はため息をついた。ちなみにナツミカン達というのは彼が居候し

ている光写真館の館長光栄次郎の孫娘・光夏海と旅の途中“クウガの世界”で出会った仮面ライダークウガ・小野寺ユウスケのことである。

この青年は今までクウガ、キバ、龍騎、ブレイド、ファイズ、アギト、電王、カブト、響鬼といった九つの“仮面ライダー”と呼ばれる戦士達の世界を渡り歩き、時に争い、時には力を合わせて戦ったりして、世界を救ってきた。そして九つに世界をすべてまわり終え、夏海が元々いた世界の裏にある世界“ネガの世界”を訪れ、世界は九つだけではないことが分かった。

それから世界をめぐるもう一人の戦士、仮面ライダーディエンド・海東大樹が元々いた“ディエンドの世界”、そして仮面ライダーが存在せず外道衆と呼ばれる集団と戦う侍達“シンケンジャーの世界”とあらゆる並行世界を訪れる旅を続けていた。そしてシンケンジャーの世界を渡り終え次の世界へ行こうと写真館へ入ろうとした時、突然目の前にオーロラの揺らぎが現れ、今の状態にいたっている。

（さて・・・これからどうすっかな・・・ん？）

士がこれからのことを考えていると目の前にカプセル型の機械・ガジェットドローンが数機現れた。

「なんだ・・・あの機械は？」

不思議そうに眺めていると、ガジェットの中心の球体が光だし、士に向け光線を発射してきた。

「うわ！？なんなんだよいきなり！」

士はその光線をかろうじて避けると、再び光線を発射してきた。士

はなんとか建物の間に隠れた。

「来て早々に大歓迎か・・・だったらお返しするぜ!!」

そう言う土は専用バックル“ディケイドライバー”を腰に当て、ベルトを装着する。そしてバックルのサイドレバーを引き、左腰についている“ライドブッカー”からカードを一枚取り出す。

「変身!!」

<KAMENRIDE・・・DECADE!!>

バックルの中央部分の挿入口にカードをセットし、サイドレバーを押しこむと、電子音と共に複数の影が土に集まり、土は全てのライダーを破壊する者といわれる戦士【仮面ライダーディケイド】へと変身した。

ディケイドは向かってくるガジェットの前に立ちライドブッカーをソードモードにして、光線を避けながらガジェット1体を切りつけて破壊した。

「なんだ？ずいぶんともろいな。」

そう言うカードを一枚取り出し、ベルトにセットする。

<ATTACKRIDE・・・SLASH!!>

電子音と共にディケイドのライドブッカーの能力を向上させ、ガジェットに斬りかかる。すると、斬った軌跡が影のように現れる。ディケイドスラッシュで現れたガジェットの残りを破壊した。

「しかし・・・何なんだこりゃ？ライダーのいる可能性は薄くなってきたが・・・」

ディケイドはライドブッカードを腰に戻しつつ、破壊したガジェットの残骸を眺めていた。すると足音が近づいてきているのが分かり、音のする方向へ振り向いた。

するとそこには赤毛の髪に赤い服を着た子供と金髪の白衣を着た女性と一匹の大型犬がいた。

「なあ、シャマル。この辺だったか？妙な反応があったのは・・・」

「ええ・・・近くにガジェットのような反応もあったのだけど・・・」

「ん？誰かいるぞ！」

大型犬・ザフィーラはディケイドの姿を見つけると二人に警戒させた。

（何なんだ一体・・・ともかくここはライダーの世界じゃなさそうだな。）

ディケイドはライダーのいない世界ということを改めて認識したが、特に驚きもしなかった。

なにせ、前の世界では様々な怪物と戦っていたのだから。

「おい、そこのお前。一体ここで何やって・・・なっ！それガジェットの残骸じゃねえか！」

赤毛の少女・ヴィータが土に尋ねる。最初は軽く言っていたが、ガジェットの残骸を見て急に激しく問う。

「ん？ああ、これか。いきなり襲いかかって来たんでな。軽く払ってやった。」

士がユルい感じで答える。するとヴィータはさらに目つきを鋭くし、ゲートボールのハンマーのような愛用のデバイス“グラーフアイゼン”を持ち、ディケイドに襲いかかった。ディケイドは「うわっ！」と言いつつも何とか回避する。

「いきなり何しやがんだ！」

「一体どうやってこいつらを破壊した！答えろ！！」

ヴィータはハンマーを振り回しながらディケイドを問い詰め続ける。

「どうやってって・・・簡単に壊せたぞ。すげえもろかったし。」

「そんなんで納得いくか！！！！」

ディケイドの回答にヴィータは納得がいかず、まだ問い詰める。すると、白衣の女性・シャルマルが叫ぶ。

「！？待ってヴィータちゃん！クラールヴィントが何かをキャッチしたわ。」

シャルマルの叫びにヴィータは攻撃を止め、後ろに向きなおす。ちなみに“クラールヴィント”というのはシャルマルが使っている指輪型のデバイスである。

ディケイドが不思議そうに眺めていると、先ほど破壊したのと同じガジェットドローンが近づいてきた。

「行くぞ。でりゃああああっ!!」

ザフィーラがすさまじく叫んだ。すると地面から白い突起物が出現し、ガジェットを串刺しにした。

「!?なんだ、今は・・・」

デイクイドはザフィーラの攻撃に咄然とする。そしてザフィーラの攻撃を回避したガジェットがこちらへ向かってきた。それをいつの間にか空にいたヴィータがグラーフアイゼンで吹き飛ばし、破壊する。そして残った一体が上空へ逃げようとしていた。

「アイゼン!!」

《Schwalbe fliegen》

ヴィータの掛け声に反応したグラーフアイゼンは鉄球を生み出し、ヴィータは鉄球をアイゼンでガジェットに向かって飛ばした。凄い勢いで飛んでいった鉄球はガジェットの装甲を打ち抜き、ガジェットは爆発した。

「おいおい・・・空を飛んでるだけでもびっくりだってのに・・・」

デイクイドはヴィータの戦いぶりを見て驚いていた。そのあとで再びシャマルが叫ぶ。

「また反応!?! 反対側からよ!」

反対側とはちょうどディケイドのいる方向である。4人が一斉に振り向くと、ガジェットがまた数機接近していた。ヴィータは素早く地上に降り、ディケイドの前に立つ。ザフィーラも向かってきて、ちよūdディケイドを挟むように並ぶ。

「おい、お前らは十分暴れたろ。次は俺の番だ、下がってな。」

ディケイドの発言にヴィータが逆上する。

「ふざけんな！誰がお前みたいな変な奴に・・・！！」

「変で悪かったな。まあ、見てろって。お前の言うどうやってってのも見せてやる。」

そう言いながらディケイドはヴィータの肩をポンと軽くたたき、前に出る。そしてライドブッカーからカードを一枚取り出し、ベルトにセットした。

<KAMENRIDE・・・HIBIKI!!>

その電子音の直後、ディケイドの体が突然紫色の炎に包まれた。炎を手で払うと、ディケイドは魔化魍と呼ばれる伝承などに語られる妖怪のような怪物と戦う“鬼”と呼ばれる戦士【仮面ライダー響鬼】へと変身した。

「なっ・・・姿が変わった！！？」

ヴィータが驚きの声を上げる。そして響鬼へと変身したディケイドはさらにもう一枚カードを取り出し、装填する。

<ATTACK RIDE・・・ONGEKIBOU REKKA!
>

その電子音の後ディケイドが手を後ろに構えると、響鬼の使う武器“音撃棒・烈火”が現れ、その先に火がともった。そしてディケイドは音撃棒をガジェットに向かって振ると、灯った炎が炎弾となり、ガジェットを破壊する。次々放たれる炎弾によってガジェットはあっという間に全て撃墜された。

「これでわかったか？」

ディケイドは呆氣にとられているヴィータ達に声をかける。その声でヴィータ達も我に返ったようだ。

その様子を見たディケイドはサイドレバーを引き、響鬼からディケイド、そして士の姿へ戻った。

「あなた・・・人間だったの？」

「人を化けもの扱いすんな。どっちかって言うと、あんたらのほうが化けものに見えるぜ。」

「なんだとっ!!！」

士の発言に怒ったヴィータが士のスネを蹴った。

「いってゝ!!！何すんだこのガキ!!！」

「ガキって言うな!あたしはヴィータだ!と言うかお前化けものってなんだよ化けものって!!!!」

士とヴィータがにらみ合っていると、その間にシャルが入ってきて「まあまあ」と二人をなだめる。ヴィータは「ふんっ!」とそっぽを向く。

「ところで、あなたはどなたですか？」

「ああ、名前は門矢士。通りすがりの仮面ライダーだ。・・・で、あんたたちは？」

「はい。私はシャル、こっちはザフィーラ、そしてこの子がヴィータちゃんです」

「ザフィーラだ。しかしカメンライダーとは何だ？聞いたこともない。」

「なるほど、これで確定だな・・・」

ザフィーラの発言により士はようやくここは“仮面ライダーが存在しない世界”であることを確信した。士のつぶやきに対してシャルが「えっ?」と言ったので士は「いや、こっちの話だ。」と適当にあしらった。

「ところでここは一体何処なんだ？」

「ここはミッドチルダという魔法文明が発展した世界です。知らないのですか？」

「魔法? そんなの本とかゲームの中の話じゃないのか？」

士の発言にシャル達（そっぽを向いていたヴィータを含めて）は

顔を見合わせた。

「もしかして……こいつ時空漂流者か？」

「確かに、先程の姿にガジェットを大量に倒すほどの力を持った存在だ。時空漂流者というのが妥当だろう」

ヴィータは魔法の事を知らない士の事を“時空漂流者”の類ではないかと答えるとザフィーラはヴィータの答えを肯定する。

「じゃあ、やっぱり保護するのが妥当かしら？」

「おい。なんの話だ一体？」

士の声に反応したシャル達は士を見る。

「門矢士さん、あなたを時空管理局の名において保護させていただきます。ご同行願います」

「時空……管理局？なんだそりゃ？」

「ま、ついて来ればわかるって。」

（ま……行くあてもないし、それにこの世界のことを少しは知れるかもな……）

士はシャルとヴィータ、ザフィーラについて行った。

ヴィータ達に連れられて、士は時空管理局本局へと赴いた。その一室に案内されるとそこには茶色の髪をした少女が椅子に座って待っていた。

「ああ、ヴィータにシャルにザフィーラ。お疲れ。」

「ただいま。はやて。」

はやてと呼ばれる少女の傍にヴィータが駆け寄る。シャルは今回のガジェットと士に関してのおおまかな報告をはやてに伝えるとはやては士の方を見る。

「どうも。私は八神はやてって言います。この子達が世話になったみたいでおおきにな」

「門矢士だ。よろしくな。」

はやてと士は軽く挨拶をすますと部屋のインターホンが鳴り、はやての「どうぞ。」の声と共に扉が開いた。その扉から黒い髪をし、きりつとした格好で一人の男が入ってきた。

「クロノ提督、忙しい中来てくれて、ありがとな。」

「なに、時空漂流者を保護したというなら本局の時空航行部隊の提

督である僕が赴くのは当然だろ、はやて・・・」

はやては訪れた男・時空管理局本局次元航行部隊提督・クロノ・ハラウウンに挨拶をする。そしてクロノははやての後ろにいた士の姿を見る。

「それで、そちらの方が？」

「そうや、ガジェットとの戦闘現場にいた時空漂流者、名前は門矢士さんや」

「なあ、ちよっといいか？」

二人の話に士が割り込む。

「んっ、何や？」

「さっきから時空漂流者とか時空航空なんたらとかわけのわからん単語ばかり出てきてるんだが・・・説明してくれないか？」

士の指摘に、♀クロノは「ああ、そうだったな。」と思い出し、クロノは士に時空管理局、そして時空漂流者の事などを説明した・・・

<数時間後・・・>

「なるほどな・・・俺のいた世界とは別の、平行世界の管理をしている組織が時空管理局で、時空漂流者ってのは何らかの理由で別世界に迷い込んだ迷子みたいなもの・・・それが俺ってわけだな？」

士の確認にクロノがうなづく。

「しかし、君はどうしてあの場所にいたんだ？」

「いや、俺は元々世界を救うために様々な世界を旅していたんだが、次の世界に行こうとしたら突然現われた妙なオーロラをくぐってこの世界に来ちまったってわけだ・・・」

クロノの問いに士は答える。

「しかし、どうやって別世界に？」

「それは・・・うまく説明できない。」

士の場合は光写真館の背景ロールがその世界のモチーフにした絵に代わると、気づかぬ間に別の世界へ行っていたので、こんなことを言っても無理だと思ったのだろう。

それを聞いたクロノは「まあ、いいだろう。」と答えた。

「とにかく、君のいた世界に戻すために座標を調べなくてはな・・・
士くん、君のいた世界の星の名とかは分かるか？」

「星の名前？地球だけど・・・」

「へっ？地球やって!？」

士の発言にはやてが驚きの声を上げる。はやての話によれば彼女も地球出身であり、もしかしたら同じ星の人間かとクロノは思ったのだが、士の

「といっても、俺が旅した世界も同じ地球だったぞ。」

という発言によりその発想は崩れた。

「なるほど・・・もしかしたらはやてやなのはのいた地球とは別の次元の地球というかもしれない・・・」

クロノはそう納得させた。

「それで、俺は元のいた世界に戻れるのか？」

「ああ、時間は掛かるかもしれないが探してみよう」

「でも士さんのいた世界が見つかるまでの間、彼の身柄はどうするのですか？」

「そうだな・・・我々の世界にない力を持った存在だ。行動が制限される事は覚悟した方がいいかもしれない・・・」

「ほんなら私らの新部隊、機動六課に預からせてくれへんか？」

シャルは士の身柄のことを心配していると、はやてが士を自分に預からせてほしいとクロノに提案した。

「おいおいはやて、六課設立にはかなりの裏技を使っているんだぞ。これ以上は無理じゃないか？」

「でも、士さんの力をこのまま隠しておくより、危険なロストログイア搜索の担当になる六課にいたほうが良いと思うで。それに士さんのいた世界が見つかるのも時間がかかるんやろ？ だったら“民間協力者”という形で預からせてくれればいいやん」

クロノの説得にもはやては応じない。

「しかし、士くんの意志は・・・」

「別に構わないぞ。どうせすぐに見つからないならこの世界を見て回るって言うのも悪くない。それにこの世界にいるとしても力が使えなくなるのはなんか嫌だしな・・・」

士の回答に、はやては隣で「よっしゃ！」とガッツポーズをとる。

「・・・仕方ない。それならさっそく士くんのIDを発行しなければ・・・」

「ん・・・あれ？」

「士さん、どないしたん？」

「いや、ポケットに何か入ってる・・・」

士は上着のポケットの中の違和感に気づき、その中に入っていた物を取り出す。それは4枚のカードだった。そのうち一枚は・・・

「それはIDカードじゃないか。どうしてそれを・・・」

「いや、気づいたら入ってた。そういえば他の世界へ行くと、俺の役割も勝手に変わるから、多分その類だろ。」

士はこれまで様々な世界を旅して、クウガの世界では警察官、キバ世界ではバイオリニスト、龍騎の世界では弁護士、ブレイドの世界では食堂のチーフ、ファイズの世界では高校生、アギトの世界では郵便配達員、電王の世界では旅人、カブトの世界ではゼクトルーパー隊員、響鬼の世界では音撃道大師匠、ディエンドの世界ではセールスマン、シンケンジャーの世界では黒子と様々な役割が与えられていた。今回もそんな感じだと士は悟った。

（今回は民間協力者・・・さっきはやてが言ってたやつか。）

クロノは士からカードを受け取り内容を確認すると、問題なかったので士に返却した。

それを受け取った士は、残りの3枚のカードを眺めていた。

「士さん、それは？」

「ああ、さっきのIDってやつといっしょに入ってた。」

シャルが尋ねると、士は答える。

それは士が変身や、攻撃に使用したりするのと同じカード。だが絵は入っておらず空白のままである。

「じゃあ、はやて。今日のところは彼も疲れているだろうから、六課へつれて行くのは明日にしてあげてくれ。」

クロノがはやてに頼み、はやてはそれに同意した。

「ほんなら士さん、また明日な！」

はやてはウキウキした表情で部屋からでていく。その後をヴィータとシャマルとザフィーラがついて行く。

「では、部屋を用意させるから今日は休んでくれ」

「ああ、悪いな。」

クロノの案内で士は自分にあてがれた部屋に向かった。部屋の部屋に入った士は色々あった事を頭の中で整理をつけ、一息つくとベッドに横になった。

（まあ色々あるかもしれないが、この世界を楽しませてもらうでしょう。だが早いとこナツミカン達のもとへ帰らないとな・・・）

士は期待と不安を抱えながら眠りについた・・・

<・・・次の日・・・>

ミッドチルダ中央区画、湾岸地区。そこには八神はやてが設立した新部隊、機動六課の隊舎があった。しかしまだ完全ではないらしく、色々な場所にコンテナやらダンボールやらが置かれていた。

「まだ内装が完全やないけど、まあ気にせんといてな」

本局で一晩過ごした士を迎えに来たはやてはさっそく士を連れて地上に戻り、はやての案内で士は舎内を見て回っていた。

「そういえば、あのハンマー持ったチビッコは何処に行ったんだ？」

「ヴィータの事か？あの子は今、私の友達の子と一緒に陸士部隊の隊舎に行ったよ。でもあまりいじめんといてな・・・本人も結構気にしてるみたいやから・・・」

士のヴィータの扱いに注意するはやて。

「はやてちゃん」

そこへ何処からかはやてを呼ぶ者がいた。はやての傍に着せ替え人形サイズの大きさと、薄い青白の髪をした物体が飛行しながら現われた。

「あっリイン。皆に挨拶回りしとったんか？」

「はいです。さっきアルトとルキノに挨拶してきましたです。あれ、そちらの方はもしかして……」

リインと呼ばれる人形サイズの物体ははやてと仲良く話している。するとリインは士の姿を見つけるとはやてに問い掛けると、はやては「そや。」と返す。

「はやて、この人形みたいなものは何だ？」

「人形じゃないです、リインの名前はリインです……!!」

「ああ、この子はうちの末っ子のリインフォース2（ツヴァイ）や」

「いやいや……末っ子にしても限度ってもんがあるだろ……」

はやてはリインことリインフォース2の紹介をする。士は小さすぎるリインの末っ子という言葉が正しいのかと疑問を持った。……

「確か、門矢士さんですよ？宜しくです。」

「ああ、宜しくな。どうせだから俺もリインって呼んでもいいか？」

「はい。是非そう呼んでください。」

士はリインに挨拶する。その後はリインを加えて隊舎の見回りを再開した。

「しかしこの機動六課っていうのは具体的にどんな活動を主体にしているんだ？」

「そやねー簡単に言えば“ロストログア”と呼ばれる古代遺産の捜査と保守管理が主な仕事やな」

隊舎内の案内を終えて、海岸沿いを歩きながら答え、その近くにあったベンチに座ってから詳しい説明をする。

そのロストログアの中にはとても危険なものもあり、四年前にもそれが原因で大災害が起きたという。今から四年前、ミッドチルダの臨海第8空港でロストログアが原因の大火災が起きてしまい、近くの災害担当局員だけでは対応しきれなかったという。しかし大規模火災は偶然休暇で近くにいたはやてとその友達の二人の魔導師の活躍で負傷者は出たものの、奇跡的に死者は一人も出なかったという。そしてその時、はやてにある決意が生まれたという。今の地上の管理局部隊は何かと行動が遅すぎると、救助任務やロストログア対策もいつも後手に回ってたこと、だから少数精鋭のエキスパート部隊、そんな部隊を作って成果を上げていけば上の方も少しは変わるかもしれないと思い、機動六課を設立したという。

そこで士は、一つ疑問を投げかける。

「しかしはやて。どうして俺なんかを引き取ろうとしたんだ？魔法なんてものだってこの前初めて見たってのに・・・」

「まあ一番の理由としては、あのガジェット・ドローンを難なく撃破出来るほどの力を持っているという事かな。言い方は悪いんやけど、今あのガジェットにはうちらも手を焼いているんや・・・」

その質問にはやてが答える。なんでもあのガジェットという機械には“AMF”通称“アンチ・マギリンク・フィールド”という魔法が使えなくなってしまう特殊な力を持っているという。

「まあ、その魔法に関してはこれから徐々に覚えていくとしよう。」

「そうしてもらえると助かるわ。」

はやてと士はベンチから立ち上がり、再び歩き出す。

「ああ、主はやて、こちらにいましたか」

そのとき不意に後ろから声がして振り返る。そこにはポニーテールに桃色の髪をした女性が立っていた。

「おお、シグナム。あつ、士さんには紹介がまだやったな。この子はシグナムっていうんや」

「シグナムだ。お前のことは軽くヴィータやシャルから聞いている・・・」

はやては士にシグナムを紹介すると、シグナムは士を警戒しているのか冷たい態度を取っている。

「はやて。主って何だ？」

「ああ、それはな・・・」

「主はやて、少しよろしいでしょうか？」

はやてが士に答えようとすると、シグナムが止めた。

「どないしたんシグナム？」

「この男の実力を確かめさせてほしいのです。ヴィータ達の言った事が本当かどうか・・・」

シグナムはヴィータ達から士の力について聞いたらしく、それが本当かどうか確かめたいという。そしてシグナムは士に向けて不敵な笑みを浮かべる。それを挑戦と認識した士は笑い返して答える。

「いいぜ。いっちょやるか。」

「ならばついてこい。戦いの場へ案内する。」

そう言うとシグナムは士がある場所に案内し、はやてとリインも二人の後を追いかける。シグナムが案内した場所は六角形の大形パネル板がいくつも連結して海に浮かんでいる施設だった・・・

第一話：なのはの世界（後書き）

いかがでしたでしょうか？元々あった作品はファイズの世界からのものだったので、せっかくライダーのいない世界も出てきたので書いてみようと思いました。これからもテレビの次の世界を無視して書いていくので、温かく見守っていただけると幸いです。

第二話：初対面・剣の交え

ミッドチルダ機動六課では、シグナムの案内で連れてこられた場所に士はいた。

「こんなところに一体何があるんだ？」

「ここは陸戦用空間シミュレーターだ。実はこのシステムを作ったシャーリーという奴が試運転したいと申し立てていたからな、丁度いいと思ったのだ」

士の問いにシグナムは答え歩いていると、一人の女性が操作パネルを操作しながらシグナムを待っていた。

「あっ、シグナムさんにはやて隊長にリインさん。お待ちしていました。」

「どうもっ！士さん、この人は“シャリオ・フィニーノ”六課のメカニックなんやで。」

女性はビシッと敬礼する。シグナムとはやては敬礼し返すと、はやては士に彼女の事を紹介する。士もシャーリーに自己紹介をする。

「シャーリー、準備はできているか？」

「はいっ、大丈夫です。さっそく戦闘エリアの展開を開始します。」

シャーリーはシグナムの問いに答え操作パネルを叩いていく。すると海に浮かんでいる大型パネルが光だし、伸びるように廃墟の街が

姿を現した。

「ほう・・・こいつはすげえな。」

さすがに士も何もない場所から突然出現した廃墟の街に驚きの声を上げる。

「でしょう？このシミュレーターは本物と大差なく、まるで本当の廃墟にいるような感じに思えてきますよ。」

シャーリーは驚く士の顔に満足している。シグナムはさっそく士を戦場である廃墟へと連れて行った。はやとリインはシャーリーの傍に行きモニター越しに見学する事にした。

「士と言ったか、お前の実力・・・見せてもらおう。」

シグナムはレヴァンティンを起動し、シグナム自身も騎士甲冑を纏う。

「ああ・・・じゃあ、やるか！」

士はディケイドライバーを取り出し腰に当てベルト状にする。そしてライドブッカードからカードを取り出し、ベルトにセットする。

「変身！！」

<KAMENRIIDE・・・DECADE!!>

士はディケイドに変身した。士の初めて見るディケイドの姿をモニターで見っていたはやとリインは驚き、シャーリーは士の持っている

たベルトに興味が湧いた。

「行くぞっ!!」

「来いっ!!」

シグナムはレヴァンティンを構えディケイドに突っ込む。ディケイドはライドブッカーをソードモードに切り替え応戦する。剣と剣のぶつかり合い火花が飛び散る。鏖迫り合いからお互い飛んで離れ、ディケイドはライドブッカーをガンモードにして放つ。だが、シグナムはレヴァンティンで防御しながら突っ込み、ディケイドに向かって振り下ろす。ディケイドはかろうじて避ける。

「中々やるな、士・・・だがっ!!」

《Explosion!》

シグナムはレヴァンティンのカートリッジをロードすると、刃の部分から炎が出現し、シグナムはディケイドに向かって斬りかかった。

「紫電・・・一閃ッ!!」

「うおおおおっ!!」

魔力付加のかかったレヴァンティンの斬撃にディケイドはライドブッカーで防ぐ。が、すさまじい衝撃に耐えられず、ビルの中に吹き飛ばされた。そこからさらにシグナムが攻撃を仕掛けるが、士はかろうじてそれを交わし、体勢を立て直す。

「なるほど。ヴィータってやつの時もそうだが魔法ってのはホント

何でもありだな。」

「そういうわけではないが・・・まさか怖気づいたか？」

「バカ言え。そっちがその気なら、こっちも俺のやり方でやらせてもらう。」

そういうとディケイドはライドブッカーからカードを一枚取り出す。シグナムはその様子に少し警戒する。

「剣士には剣士でってな。」

そういつてディケイドはカードをベルトにセットする。

<KAMENRIDE・・・BLADE!!>

電子音が鳴ると青色のカードのようなものがベルトから飛び出し、それを走って通り抜ける。するとディケイドは現代に甦った不死身の生命体・アンデットを封印するために生まれた戦士【仮面ライダーブレイド】へと変身した。

「何!?!くっ!!」

突然のディケイドの変身に驚くシグナムだが、ディケイドの攻撃は何とか避ける。

「なるほどな。ヴィータ達の言っていたのはそれか・・・」

「ああ。あいつらに見せたのとは少し違うけどな。」

そして再び向かい合った。その様子を見ていたはやてたちもディケイドの変身には驚いていた。

「はわわ〜！ 士さんの姿が変わったです〜！！」

リインは思わず声を上げた。その隣でシャーリーが分析する。

「う〜ん・・・やはり魔法ではないようですね。魔力の発生がありません。あのベルト、やっぱり一度調べてみたいですね〜。」

「まあ構わんけど、士さんにちゃんと許可を取ってからせえよ。」

はやてがそう言うと、シャーリーも「はあい。」と少々子供っぽく答え、見学を続ける。

そのころディケイドとシグナムは一進一退の戦いを繰り返していた。先ほどと同じ剣と剣とのぶつかり合いだが、剣勝負のエキスパートであるブレイドへと変身したディケイドは先ほどとは違い、隙のない動きでシグナムを追い詰める。だがシグナムも負けておらず応戦する。そしてお互い距離を取り、シグナムはレヴァンティンのカードトリッジをロードし、炎もまとった。

「またあの技か・・・今度はそうはいかねえぞ！」

そう言うディケイドはカードを一枚取り出す。シグナムはカードを使わせまいと、必殺技「紫電一閃」を繰り返すが間に合わず、デ

イケイドはカードをセットする。

<ATTACKRIDE・・・METAL!!>

その電子音と共にディケイドの体が鋼鉄化しシグナムの斬撃を受け止めた。ディケイドはカメンライドするとそのライダーの能力や武器を使うことができ、ブレイドに変身するとアンデットを封印した“ラウズカード”の力を使うことができるようになる。今のはスピードのカテゴリー^{セブン}7‘メタルトリロバイト’の能力である。

「何だっ!?」

シグナムは自分の技が受け止められたことに驚いた。その様子を見たディケイドは素早くレヴァンティンを自分のわきの下で抑え込み、動きを封じた。

「しまった! くっ、離せ!!」

「そう言っで離すやついるか?」

そう言っでディケイドは新たなカードをセットする。

<ATTACKRIDE・・・BEAT!!>

するとディケイドの右手に炎のようにエネルギーが集まり、強烈なパンチを繰り出した。これがカテゴリー3^{スリー}‘ビートライオン’の力である。

「うわあああっ!!」

パンチを受けたシグナムは強烈な勢いを受け、吹き飛ぶ。そして続けざまにディケイドはカードを取り出し、セツトする。

「どンドン行くぜ！」

<ATTACKRIDE・・・TACKLE!!>

電子音が鳴るとディケイドの周りに蒸気が立ち、シグナムに向かって突進していく。これがスピードのカテゴリ4^{フォー}‘タックルボア’の力である。その攻撃をシグナムは上空へ飛び回避する。

「少し侮っていたな・・・ならば本気でいくぞ!!」

《Schlange form》

シグナムはレヴァンティンのカートリッジをロードすると、蛇のような連結刃形態‘シュランゲフォルム’へと変形し、地上のディケイドを攻撃する。ディケイドは何度もぎりぎりだが、確実にかわしていく。

「・・・たく、飛ぶなんて反則だろ。ま、こっちにもそれっぽいのあるけどな。」

そう言うときディケイドはあるカードを取り出し、ベルトにセツトした。

<FORMRIDE・・・BLADE・JACK!!>

電子音が鳴ると、ディケイドの前に鳥のようなものが現れ、ディケイドは金色の鎧と翼をもつ【ブレイド・ジャックフォーム】へと変

わった。

そしてディケイドはシグナムに向かって、その黄金の翼を広げ飛び立つ。

「何だと！？お前も飛べるのか！？」

《Schwert form》

空を飛んだディケイドに驚いたシグナムだが、すぐさまレヴァンテインを‘シュベルトフォルム’へ戻し、接近戦に備える。空中へ場所を変えての剣と剣のぶつかりは、すさまじくとても激しいものだった。シグナムはもちろんディケイドも空中は初めてながらもお互い一步も譲らない戦いである。

「さすがだな。だが、そろそろ決着をつけるぞ。」

「ああ。俺もそう思ったところだ。行くぜ！」

そう言うシグナムはレヴァンテインのカートリッジをロードした。ディケイドは金色のカードをライドブッカーから取り出し、ベルトにセットする。

<FINAL ATTACKRIDE・・・B・B・B・BLADE>

シグナムは剣に炎をまとった「紫電一閃」を、ディケイドはカードをセットするとスクラッチ調の電子音が鳴り、ライドブッカーソードに稲妻が現れ敵を斬るブレイドの必殺技「ジャック・ライトニングスラッシュ」をお互い構える。そして同時に一気に突っ込む。

「はああああああああ！！！！」

「うおおおおおおおお！！！！」

「はい！そこまで！！」

突如はやての声が響き、二人は動きを止める。お互いの剣は首へぎりぎりの状態で止まった。

「二人ともそこまでや。さすがにケガしたらあかんしな。」

シグナムとディケイドははやてたちのところまで飛んで行き、お互い騎士装甲と変身を解除する。

「主の命令では仕方ない。だが士、決着はいずれつけるぞ。」

「ああ。いつでも待ってるぜ。」

士は笑顔でこたえ、シグナムも「ふっ。」と笑みを浮かべた。そこでシャーリーが士に話しかける。

「ところで、士さんの使ってたあの力は一体何なんですか？シグナムさんの剣を受け止めるわ、空を飛ぶわいろいろ出ましたよね。」

「あ、それは私も気になります。教えてください。」

シャーリーの疑問にリインが同意する。

「ならちようどお昼時やし、ごはん食べながらゆっくり聞こか。」

はやての提案に全員は同意し、腹ごしらえに向かった。

昼食を終えたはやてたちは士からディケイドの力や旅についての話を聞いていた。

士が今まで旅してきたさまざまな世界、そこで出会った様々なライダーやシンケンジャーなどについて士は話した。そしてテールの上には士の持っていたディケイドとクウガの仮面ライダーのカードとシンケンジャーの世界で手に入れたシンケンレッドの武器‘烈火大斬刀’のカードが置かれていた。

「まあ、こうしてみると、俺の旅もずいぶん長いもんだな。」

士は今までの旅を振り返り、感慨にふけていた。そこではやてがカードを一枚手に取った。

「しかし不思議なもんやな。こんなカードであんなすごい力が出るなんて。」

その隣でカードと一緒に置いてあったディケイドライターを手に取り、シャーリー。

「士さん、このベルト一度調べてみてもいいですか？何か仕組みが

わかるかも・・・」

シャーリーのお願いに士はカードをまとめながら答える。

「別にかまわないが、また今度にしてくれ。理由はないが何となくだ。」

そう言うとシャーリーは残念そうにバックルを士に手渡す。その後士はふとあるものをポケットから取り出した。それはこの世界にきてから手に入れた空白の3枚のカードだった。それを見たリインが尋ねる。

「士さん、それは何ですか？」

「ん？ああ、この世界にきてから手に入れたんだ。まだ絵は入っていないけどな。」

そう言うと士はカードをテーブルに置く。

（あれ？この絵柄・・・どこかで見たような気が・・・）

はやては士の持っているカードに何か違和感を覚えた。

それから数ヶ月の新暦0075年4月。八神はやてが立ち上げた時空管理局、古代遺物管理部・機動六課が正式に発足する日。

部隊長室ではやてとリインはそれぞれのデスクの椅子に腰かけていた。リインにいたってはデスクをこすったり、椅子でくるくると回転したりと、新しいおもちゃを手に入れた子供のように喜んでいた。

「このお部屋も、やっと隊長室らしくなったですね。」

「そやね。リインのデスクもちょうどええのが見つかってよかったな。」

「えへへ。リインにピッタリサイズです。」

ふとその時、インターホンが鳴ったのではやては「どうぞ。」と声をかけ扉が開く。そこには士の姿があった。

「よっ、二人とも。」

「あっ、士さん。」

「どうも。あ、ちゃんとバッジつけてくれてるな」

「これつけないと、不審者に思われるかもってお前が脅すからだろ・
・」

士はいつも来ている服に、はやてが作らせた“機動六課隊員バッジ

”をつけていた。というのも元々は陸士隊の制服を着るはずだったのだが、士が「かたつくるしい。」という理由ではやてが特製のバツジを作ったのである。もちろん、ちゃんとした許可も取っている。「それ許可取るのも作るのも結構手間かったんやから、なくさんといてな。」

「ああ、せいぜい気をつけるよ。」

そう話していると再びインターホンが鳴り、扉が開くとそこには栗色の髪に左側に髪をまとめた女性と、長い金髪に冷静沈着な感じを漂わせる女性が入ってきた。

「あっ、お着替え終了やな」

「お二人ともステキです！」

「あははははっ。」

「ありがと、リン。」

リンがほめると2人は返す。

「あ、士さん。この二人が・・・」

「ああ。高町なのはとフェイト・T・ハラOWNだろ。お前が散々話してたじゃないか。」
デスタロッサ

はやてが二人を紹介しようとした時、士はすでに知っているような感じで答える。実をいうと士は六課ができるまで八神家で世話にな

っていて、その時になのはとフェイト、その他大まかな隊員達の話も聞いていたのだ。士の話聞いたのはとフェイトが士に挨拶する。

「私たちもはやてちゃんから聞いてましたよ。」

「確か門矢さんですよ。改めてよろしくおねがいします。」

「ああ、よろしくな。」

お互いに挨拶をすますとフェイトが切り出す。

「さて、それでは・・・」

「うん」

フェイトとなのはは、はやてに向かってビシッと背を伸ばす。士は「？」と二人を眺めている。

「本日ただいまより、高町なのは一等空尉・・・」

「フェイト・T・ハラOWN執務官・・・」

「両名とも、機動六課へ出向となります。」

「宜しく願います。」

「はい、宜しく願います」

二人ははやてに出向の挨拶し敬礼する。はやては二人に宜しくと挨拶

撓する。するとインターホンが鳴った。

「どうぞ」

「失礼します。つと、高町一等空尉、テストロッサ・ハラオウン執務官、ご無沙汰しています」

入室してきた眼鏡を掛けた青年がなのはとフェイトの姿を見て挨拶する。

「え〜と・・・」

「もしかしてグリフィス君？」

「はいっ。グリフィス・ロウランです」

フェイトとなのはは青年の事をグリフィスと分かると久しぶりに会った人のように話をしだした。

「ああ、こいつがグリフィス・・・確かお前の補佐だったか？」

「うん、そや。あ、ちなみにシャーリーの幼馴染なんよ。」

はやてが補足説明すると士は「ほう。」とうなずく。グリフィスのこともはやてから少し聞いていた。グリフィスはやてにフォワード四名をはじめ、機動六課部隊員とスタッフが全員ロビーにそろった事を報告した。

「ほなら、行こか。」

『うん!』

「よし。」

ロビーには機動六課全隊員約30名が待っていた。士はやて達がいる側ではなく、隊員たちのいる側の後ろの方に立っていた。機動六課にはそれぞれ優れた専門技術を持つメカニックやバックヤードスタッフがおり、部隊の大半は機動六課課長及び総部隊長であるはやてをはじめ、なのはやフェイトとの昔からの関係者が多く、まるで家族のような集団でもあった。

その中には、なのはに憧れを持つスバル・ナカジマ、執務官を目指しているティアナ・ランスター、守りたい物の為に頑張る心を持つエリオ・モンディアル、小さな竜を従えるキャロ・ル・ルシエの四人の姿があった。

機動六課発足の挨拶を済ませたはやては、フェイトとリインと共にヘリで首都クラナガンにある中央管理局へ出発していった。なのははさっそくスバルとティアナとエリオとキャロを海上にある訓練シ

ミュレーターへ行くよう指示を出した。

士は六課内で特にやる事がなかったのか背伸びしながら一人ブラブラ廊下を歩いていた。

「ま、六課発足つつても、ちゃんとした隊員じゃない俺にはやる事がないからな。ちゃんとできた隊舎でも見学するか。」

士は首から下げている二眼レフのトイカメラを手に取ると外に出た。士はカメラを構え、写真を撮りながら訓練ミュレーターのある海上に向かって歩き出した。

海上シミュレーターでは、なのはと新人四人が訓練をしていた。そこにヴィータとシグナムが訓練の様子を見ていた。

「よう、あの子達はやてやなのは達がスカウトしたっていうフォワード部隊の四人か？」

「ああ。さっそくなのはとシャーリーが今の实力を見るみたいだ。そ
士が声を掛けるとヴィータが返事を返す。

「しかし、いつ見てもこの訓練施設は本物そっくりだな。」

「この間の私とお前の模擬戦の後、シャーリーがさらに磨きをかけたらしくてな、より実体感を向上させたらしい」

「おいおい・・・あの時でも十分、本物っぽかったんだが・・・伸ばせるものはとこん伸ばすんだな・・・」

シグナムが言った言葉に士はシャーリーのメカニック技術に驚嘆する。

「そういえばヴィータ、お前は参加しないのか？」

「ああ、四人ともまだヨチヨチ歩きのヒョッコだ。あたしが教導を手伝うのはもう少し先になる」

「そうか・・・」

「それに自分の訓練もしたいしな。なのはと同じ分隊だから、あたしがなのはを守ってやらないと・・・」

「ほう。大変だな。まあ頑張れよ。」

「お前に言われるまでもねえよ。」

そんなやり取りの後、士はふと訓練場を見るとスバル達がターゲットである目標に向け駆け出していた。

「ん？なあシグナム。あの新人たちが追いかけている機械って前に俺が戦ったガジェットって奴だよな？」

「ああ。あれは訓練用にシャーリーが現在まで収集したガジェットのデータを元に再現したものだ。本物と大差ない」

「なるほど。しかし、あんな子供が前線部隊のメンバーとは・・・この世界は余程人手不足みたいだな・・・」

「お前が旅をしてきた世界ではありえない光景か？」

「いや、いないわけでもなかったが、かなり少数だ。今まで十二個もの世界を回ったが2，3人ぐらいだったしな。」

「なるほど。それは確かに少ないな。」

士の言う2，3人とはキバの世界のワタル、響鬼の世界のアスム、アキラのことである。渡は幼いながら自ら王となる決意をし、アスムは幼くアキラは女性ながらもそれぞれの師匠、響鬼と威吹鬼の心を引き継ぎ鬼となった。士は今はどうしているのかと考えていたが・・・

「おい、聞いてんのかよ士！」

「あ！？ああ・・・」

とヴィータにかき消されてしまった。その時、訓練場から爆音が響いた。どうやらスバルたちが目標であるガジェットを全機破壊に成功したようだった。士はトイカメラをスバルたちに向け写真を撮った。

「士。お前写真撮んのヘタクソなんだから、撮らないほうがいいんじゃないか？」

「うるさい。俺が下手なんじゃない。世界が俺に撮られたがっていないんだ・・・」

ヴィータに馬鹿にされ、士は怒りを込めて返す。これまで様々な世界を旅していた士だがどんな世界に言ってもその写真は歪んで撮れてしまう。だがカブトの世界のマユだけはおばあちゃんの言葉とひっかけて、才能、だと言っていて、士はそれ以来自分の撮る写真を才能だと自負している。

（もしかと思ったが、この世界も、俺の世界じゃなさそうだな・・・だが・・・そうだとすると、鳴滝が言ってたようにまた何か拒絶反応とやらが起こるのか・・・）

鳴滝というのは様々な世界でディケイドを、悪魔、称して消そうと企む謎の男である。クウガの世界ではクウガ・ユウスケに「ディケイドは敵だ」といい、ディケイドを倒させとした。それから様々な世界で資格を送り込んだり、その世界のライダーに吹き込むなどを行ってきた。そしてシンケンジャーの世界では士に「あらゆる世界がお前という異物に拒絶反応を起こす。」「お前が消えることで世界は救われる。」などといい、士を追い詰めようとした。

そんなことがまた起こるのかと士は少し不安になりながら、カメラのシャッターを切った。

<その同時刻・・・>

「では、そのディケイドと言う奴を倒す手助けをしてほしいというのだね？」

「そうだ。奴さえ倒せばお前の野望は確実にかなうだろう。」

広域次元犯罪者“ジェイル・スカリエッティ”は謎の男・鳴滝とディケイドを倒す手伝いをしてほしいという頼みを聞いていた。

「しかし、そんな奴が世界の破壊者というのか？それほどの力を秘めているのか？」

「ならばこれを見てみる。」

鳴滝はある映像データをスカリエッティに見せた。それは士がこの世界に来たばかりの頃、初めてガジェット戦った時の映像だった。圧倒的な力でガジェットを破壊するディケイドの姿を見たスカリエッティは笑みを浮かべた。

「ほう。これはこれは・・・私の玩具おもちゃをこれほど簡単に破壊するのは・・・確かに興味深い存在だ・・・」

「恐ろしいだろう。こいつにこの世界が破壊される前に奴を倒さねばならない。そのためにお前にあれらを渡したのだ。ディケイドさ

え倒してくれさえすれば、あれらは全てお前の自由に使ってかまわない。」

「わかった。協力させてもらうよ・・・あ、それと一つ聞きたいんだが彼に似た戦士をこの前見つけたんだ。何か心当たりはないかい？」

スカリエッティは鳴滝に問う。

「似た戦士？・・・そうか、奴も来ていたのか・・・確かにそいつもまたディケイドのように世界を旅する力を持っているが、お前の計画には支障はないはずだ。」

「そうか・・・それを聞いて安心したよ・・・」

「では私は行く。頼んだぞ。」

話を終えると鳴滝はオーロラの中に消えていった。その姿がいなくなったのを確認すると、スカリエッティは笑みを浮かべる。

「フフフフ・・・さて、これから楽しくなりそうだ。フフフフフフフ・・・」

スカリエッティはそのまま不気味に笑い続けていた。

第二話：初対面・剣の交え（後書き）

こんにちわ。die ndです。

今回ある工夫を施しましたが、お分かりでしょうか？

実は劇中未使用カードを自分の想像で作ってみました。これからも簡単なから考えてみますのでよろしかったらそちらもお楽しみに。

（あとサブタイトルを変更しました。劇中っぽいのを考えてみましたがいかがでしょうか？そちらも感想お願いします。）

第三話…ツイン・ファースト・アラート

六課設立から数日後、士は海沿いを写真を取りながら歩いていた。その時ふと訓練施設に教導官制服を着た高町なのはが立っていた。

「あれ？士さん。」

「よお、なのは。」

士の存在に気づいたなのはが士に声を掛ける。

「どうだ？なのはが教えている新人たちの様子は？」

「ええ、いい感じです。みんな才能や希望に満ち溢れてて、やりがいがありますよ。」

「この前お前たちの訓練をのぞかせてもらったが、あの歳であればどの技量をもってるのには驚いたな。エリオとキャロにいたってはまだ10歳だそうじゃないか。」

「だからこそ、成長が早いかもしれないのも考えてます。」

「なるほど。そりゃ楽しみだな。」

士となのははお互いに笑う。

「ところで、お前のやってる戦技教導ってのはどんなものなんだ？」

「そうですね…例えば訓練部隊の仮想敵として演習の相手とか、

預かった部隊を相手に短期集中での技能訓練とかですね。今もそんな感じです。」

「ほう、そりゃ楽しそうだな。自分の腕もなまらせることなく、誰かのために訓練をする。一石二鳥ってやつか。」

「あはははは・・・そんな簡単なものじゃないですけどね。」

なのは士の解釈に苦笑いする。そのあと、士は他の場所へ向かうことにして、なのはと別れた。

（あいつ、よほどあの新人たちのこと思ってるみたいだな・・・あいつらも幸せ者だ。）

午後になり、なのはの元にフォワード部隊であるスバル、ティアナ、エリオ、キャロとフリードがやって来た。

「それじゃあ、午後の訓練をはじめようか！」

『はいっ!!』

「なのは。俺も訓練を見学したいんだがいいか？」

なのはの声にフォワード四人は元気よく挨拶する。するとどこからか士が現れ、なのはに声をかける。フォワード全員の視線が士に集中する。

「（ねえティア。あの人って確か・・・）」

「（ええ、発足式の時に後ろの方にいた人ね。何でも八神部隊長の知り合いだとか・・・）」

士の姿を見たスバルは念話でティアナと会話する。

「いいですけど、あまり近くにいると危険ですよ?」

「なに、高台の方にいるし、自分の身は自分で守るさ」

士は自分の身は自分で守ると言う。

「そうだ。どうせだからみんなにも紹介しておこうか。この人はちよつと訳ありでこの機動六課で働いている・・・」

「門矢 士だ。まあ、よろしく頼む。」

「あつ、あたしスバルっています、スバル・ナカジマ」

「ティアナ・ランスター・・・です・・・」

「はじめまして。エリオ・モンディアルです」

「キャロ・ル・ルシエです。よりしくお願いします。」

士はフォワード四人の名前ぐらいは一応はやてから聞いていたが、こうして直接会うのは初めてだった。士は軽く四人に挨拶するとスバルたちも挨拶する。その後、なのはとフォワード四人は訓練に向かい、士は訓練場から少し離れたビルの上で見学する事にした。

「さて、お前達の力・・・たっぷり見せてもらうぜ・・・」

士が呟くと訓練が始まった。訓練ではコンビネーションとチームワークが中心で、個人の得意分野を生かして協力し合うことが主な内容だった。要は個性を生かして能力をフルに活用して、四人のチームでの戦いを身に付けるというものだった。

（えーと・・・確かなのはの話じゃスバルは防御力を生かして単身で切り込むフロントアタッカー。ティアナは指揮をしながら見方を守る援護射撃。エリオは高機動の突破型。キャロは魔法による補助支援型だったな・・・）

士は、以前なのはから聞いたことを思い出しながら見学する。目標であるガジェットコピーの集団にまずエリオが高速移動でガジェットの足を止め、スバルが突撃を掛けガジェットを一体破壊する。その後ろからティアナがキャロの補助魔法で威力の上がった魔力弾でガジェットを破壊していく。

なのははその訓練を往復させるように繰り返す。しかしガジェットコピーの動きも徐々に変えているため、その度色々連携を変えながらフォワード部隊は対抗していく。

「チームプレーか・・・いままで好き勝手戦ってた俺にとっては、未知のジャンルだな・・・」

士はそう思いつつ、激しく動き回る四人にいつものようにトイカメラを構え、写真を撮っていた。

数時間後、いつの間にか夕暮れになっていた。

「はい、今日の訓練は終了。お疲れ様」

『ありがとうございますっ!!』

なのはの訓練終了の言葉にスバルたちはボロボロになった姿で返事をする。士は訓練場から退場していく四人の姿を後ろから一枚写真を撮る。

「士さん。どうでしたか、あの子たちの動きは？」

「ああ。チームプレーなんてのはやったことないが、四人ともなかなかいい連携だと思うぞ。これを極限まで極めれば最強かもな。」

なのはの問いに士は率直な意見を言う。

「だが、ティアナか？あいつの動きはどうも力み過ぎてる感じだな。」

あまり感情的になりすぎてはいい指揮もできんだろうしな。」

「やっぱり分かります？ 実は私もそれが心配で……」

士はティアナの動きがどうも急ぎすぎていると思うことをなのはに話すと、なのはも心配しているようだった。

「まあその辺はなのはがちゃんと教えていくんだろ？ 頑張れよ。」

「もちろんです。あの子たちがちゃんと、自分の道を戦っていけるように……」

なのはは隊舎に戻っていくスバルたちの後ろ姿を見つめながら呟いた。

<次の日……>

スバルたちはいつものようになのはと早朝訓練をしていた。

「はい。整列！」

なのはの声にスバルたちはなのはの元に集まる。

「じゃあ、本日の早朝訓練、ラスト一本。みんな頑張れる？」

『はいっ!!!』

「じゃ、シュートイベーションをやるよ。レイジングハートッ!!」

《A l r i g h t . . . A x e l S h o o t e r》

なのははレイジングハートを構えると、魔力スフィアがなのはの周りに複数出現する。

「私の攻撃を5分間、被弾なしで回避しきるか、私にクリーンヒットを入れればクリア。誰か一人でも被弾したら最初からやり直しだよ。頑張っていこう!!」

『はいッ!!!』

勝利条件を聞いたティアナはボロボロの状態でなのはの攻撃を回避し続ける自信はあるかと聞くと、スバルもエリオも自信が無いと答える。その返事にティアナは何とかなのはに一撃を与えるていくことを選択した。

「それじゃあ、レディ・・・ゴー!!!!」

「全員絶対回避ッ！二分以内に決めるわよっ！！」

『おうっ！！』

なのはから放たれたアクセルシューターが四人に向かって飛んでくる。ティアナは三人に指示を与えると全員四方に散開した。

「ふわああゝ・・・朝っぱらから頑張るなゝあの四人は・・・」

士はあくびしながら食堂に向かって歩いていく。食堂に行き、朝飯を食べているとリインがやって来た。

「あ、士さん。おはようございますですゝ。」

「おう、リイン。おはようさん。」

「今から食事ですか？」

「ああ。リインはもう済ましたのか？」

「はいです。はやてちゃんと一緒に食べたですゝ。」

食事をする士の肩にリインが乗る。いつからか士の肩がリインにとって指定席のような感じになっていた。食事を済ませ、お茶を飲んでみると士の視界にはやての姿が入った。よく見るとフェイトも一緒だった。

「ん？ なありイン、今日ははやては何処かに行くのか？」

「はい。はやてちゃんは聖王教会の教会騎士、カリムさんのところに行くんですよ。」

「ああ、前に言ってた六課設立に大きく貢献してくれた人らしいな。いつか会ってみたいもんだ。」

「そうですね。とてもいい人ですから、気が合うと思いますよ。」

士の率直な意見にリインが同意する。

その頃、訓練場でスバルとティアナのデバイスがそろそろ限界に近づいていたのを聞いたのはは実戦用デバイスに切り替えようと判断し、四人と共に機密機器室へ赴いていた。スバルとティアナは自分の新たなデバイス見て、エリオとキャロも今まで自分達が使っていた物に最低限の機能しか付いていなかったのを聞いて驚いていた。そして、なのはがやってきてさっそく新デバイスの微調整に入ろうとしたその時、六課内にアラートの警報が鳴り響いた。

「このアラートって・・・」

「一級警戒体制!？」

スバルとエリオが驚く中、なのははグリフィスに状況を聞いてみると、聖王教会に行っていたはやてから通信が入った。それによると山岳地帯を走行中のリニアレールにレリックと思われる荷物を運んでいるという情報が入ったのだ。しかもリニアレールはレリックを追っていたガジェットによってコントロールを奪われ、今のリニアレールは暴走列車と化していた。

「内部にいるガジェットは最低でも30体、大型や飛行タイプの未確認タイプも出てるかもしれへん。いきなりのハードな初出勤やけど皆行けるか？」

『はいっ!!』

はやての問いになのは、フェイト、そしてフォワード四人は元気よく返事をする。そしてなのはたちは移動の為にヘリポートへと走り出した。

六課の隊舎に鳴り響くアラートの音に士は「何事か？」とリインを探していた。そこにヘリポートへと向かっているなのはたちを見つけた。

「なのは!リイン!」

「士さん！」

士の呼ぶ声になのはトリインは立ち止まり、なのはは四人に先にヘリポートへ向かうよう指示を出した。

「一体なにがあったんだ？」

「山岳地帯を走行中のリニアレールにガジェットが出現したんです。今から私たちが現場に行ってガジェットを破壊しに行きます。」

「ガジェットが！？てことはロストログアって奴の関係してるってことか・・・俺も行った方が良いか？」

「はやてちゃんは何も言ってますでしたから、士さんは隊舎で待機してください。こっちはトリインたちで頑張るです！」

士に状況を説明したなのはトリインはヘリポートへと駆け出ししていた。士は隊舎で待機する事にした。

<その頃・・・>

なのは達がりニアレールのいる場所へついた頃、ジェイル・スカリエッティはその様子を見ていた。

「ふむ・・・これが機動六課・・・」

スカリエッティは機動六課の実力に感心していた。

「このままいけば、レリックは奪われてしまうか・・・しかし・・・」

「

スカリエッティは笑みを浮かべる。

「この二人・・・生きて動いているプロジェクトFの遺産を手に入るチャンスがあるのなら、レリックなど惜しくは無い・・・」

スカリエッティが特に興味を持たせたのはフェイトとエリオだった。そこへ濃い紫色にウェーブかった長い髪をした女性が通信を入れた。てきた。

『ドクター、よろしいでしょうか？』

「どうしたんだい、ウーノ・・・」

スカリエッティに通信を入れてきたのは彼の最高傑作、戦闘機人ナンバーズのNO.1・ウーノであった。

『はい、ドクターが前日鳴滝様からお預かりして製作していた生物の一体が逃げ出してしまいました。追撃用にガジェット数機送りましたが悉く破壊されてしまいました。』

「おやおや・・・脱走したのはどんな奴だい？」

『鳴滝様から聞いた“イマジン”という生物です。しかし調整が足りなかったため自我も無く、ただ暴れるだけしか考えられなくなっていました。』

ウーノの報告にスカリエッティはコンソールを操作し、逃げ出した生物の逃走ルートを導き出す。

「ふむ・・・ならガジェットを数機追撃に出したまえ、ただし攻撃させずにただ追いかけるだけでいい。」

『追いかけるだけよろしいのですか？』

「ああ、うまくいけば管理局の者たちが迎撃に出るだろう。あの生物相手に管理局がどう出るか見ものではないか。」

『了解しました。』

スカリエッティの命令にウーノは返事を返すと、ガジェット数機を追撃に出すよう準備をする。

「さあ管理局よ・・・どう出るかな？」

なのはたちがリニアレールの暴走及びレリックの回収に向かっている時、聖王教会から六課に急ぎ戻ったはやてが司令室に現われた。

「ごめんな、おまたせ。」

「八神部隊長！」

「皆は？」

「ここまでは比較的順調です。」

司令室にやって来たはやてをグリフィス迎える。シャリーリーの報告ではリニアを停止させようとガジェットとリニアを繋ぐケーブルを切断すれば停止できるとティアナが実行してみるが効果は無く、代わりにリインがリニアの停止に向かい、ティアナはスバルと合流してレリックの回収に向かわせたと言う。

「!?! 大変です。別のエリアにもガジェットの反応がっ!!」

司令室にいた通信士・アルト・クラリエッタが別の場所にガジェットが出現した事を報告する。

「なんやて!?! 場所は何?」

「ここから市街地を抜けた先の森林区画です。あとガジェット以外に正体不明の反応が一つあります。レリックではなさそうですが、ガジェットたちは正体不明の反応を追跡しているように見えますが・・・」

「どうします? 隊長たちを呼び戻しますか?」

はやてはアルトからガジェットのいる位置を聞き、グリフィスはどうするかはやてに問う。

「今、リニアの制空権は確保できてるけど・・・まだ何が起きるかわからんし、せめてレリックの確保が確認できたら・・・」

「だったら俺が行ってやろうか?」

はやてがガジェットと正体不明の反応に対し、どうするかを悩んでいると、司令室の出入り口の壁に寄りかかっている士がはやてに声を掛けてきた。

「士さん!?! どうしてここに?」

「まあそれはほっといてくれ。それよりはやて、こういう時こそ俺

の出番じゃないか？市街地を抜けた先なら飛べない俺でもバイクを走らせていける距離だ。俺ならガジェットも相手に出来るし、あいつらが戻ってくるまで時間稼ぎくらいは出来る」

「でも……」

「心配するな。とにかく今はレリックを回収している現場の指揮に集中している、部隊長殿っ！」

士は自分がガジェットたちの場所へ行くと話し、はやてをはやてはそんな士に心配そうな顔をするが、士の言葉ですぐに部隊長の顔に戻った。

「ほんなら士さん。お願いします!!」

「ああ。任せとけ！」

「あ、シャーリー。その未確認のほうのデータ、端末にコピーして、士さんに渡してくれるか？」

「はい。すぐに！」

はやての命令にシャーリーはすぐさま取り掛かる。士はそれを受け取り、バイクを走らせてその場所へ向かった。

第三話：ツイン・ファースト・アラート（後書き）

こんにちは、最近次話投稿のタイミングが分からずにいるdien
です。（笑）

さて今回戦闘はありませんが、気になる伏線が一つあります。どう
なるかは楽しみに。

第四話：復活・ディケイドの追放

士が別の現場に向かっていく頃、リニアレールを襲撃したガジェットたちの撃破に成功し、無事レリックを回収したフォワードチーム。

「スターズF、レリックを無事確保。」

『車両のコントロールも取り戻したですよ。今止まします。』

「ほんならちようどええ。スターズの3人とリインはヘリで回収してもらって、そのまま中央のラボまでレリックの護送をお願いしようかな。ライトニングは現場待機。現地の局員に事後処理の引き継ぎや。あ、あとフェイトちゃんにお願いなんやけど・・・」

『どうかしたの、はやて？』

「実はミッド周辺の森林地区にガジェットの別働隊と正体不明の反応が確認されたんや。今、士さんをその現場に向かわせたけど、士さん一人じゃ心配やから現場に飛んでくれんか？」

『分かった、じゃあ現場の場所の情報を教えて』

はやては各分隊の役割を振り分け、フェイトに士の援護を頼み、フェイトは場所を確認後、現場へと飛んでいった。

「えーと・・・確かこのへんだったな？」

士はバイクを走らせていると、目的地付近へ着いたのでバイクを止め、ヘルメットをはずして森の中へ入っていく。

「シャーリーのにもらったデータによると・・・この先か。」

シャーリーからもらったデータには未確認とガジェットの位置情報が送信される。ちなみにその形はちょうど小型テレビぐらいの大きさで、タッチパネル形式なので士でも簡単に扱える。その時何処からか爆発音が鳴り響く。

「どうやらなんかあったらしいな・・・よし、行くとするか！」

士はデイケイドライバーを装着し、森の中へ入った。

暫く森の中を進んでいると、森の一角に焼け野原と化していた場所

に辿り着いた。

「さっきの爆発はここであつたようだな・・・ん？誰だ！！」

その時何かの気配を感じ取った士は振り向く。そこにいたのは深い緑の体に、ワニのような姿をした存在だった。

「何！？お前がどうして・・・俺やモモタロス、ユウスケが倒したはずなのに・・・」

それは以前、電王の世界で戦った人から人へ渡り、世界を消し去ろうとした怪物【アリゲーターイマジン】だった。

士が驚いていると、アリゲーターイマジンは士に向かって突っ込んでくる。

「うおあっ！！」

士は何とか回避し、アリゲーターイマジンと向かい合う。

「まったく・・・なんでお前がここにいる？地獄からの生還ってやつか？」

「グルアアアアアアア！！」

士が話しかけるがアリゲーターイマジンは聞かずに、また突っ込んでくる。それを士はかわす。

「まったく、聞く耳持たずか・・・ならもう一度地獄行きだ！」

そう言うとき士はベルトのサイドバックルを引き、カードを取り出す。

「変身!!」

<KAMENRIDE・・・DECADE!!>

ディケイドに変身した士は、ライドブッカーソードモードを構えて
アリゲーターイマジンに向かって行った。

ディケイドとアリゲーターイマジンの戦いの様子を見つからないように観察していた物体があった。その物体が見ている映像は、ある者のところへ元へ送られていた。

「ほう、中々やるじゃないか・・・私の手で強化した怪物相手にあそこまで戦えるとは・・・」

「あの戦士は、たしか以前鳴滝様が見せたのと同じです。もしやこれが・・・」

「ああ、‘世界の破壊者’、ディケイドという奴だね・・・」

迷彩処置の施されているガジェット1型の送られてくる映像を見ていたのはスカリエッティと機械を操作していたウーノの二人だった。

「確かに鳴滝が見せた映像と瓜二つだ。独特の姿に緑色の瞳、それに魔力反応もない存在・・・“彼”とも同じだ。」

「?“彼”というのは、あの青年ですか？たしか妹たちがロストロギア搜索の時に突然現れたという・・・」

「ああ、彼も似た力を持っていると鳴滝が言っていた。ウーノ、彼は今何処にいるんだい？」

「実はあの後、姿を消してから連絡がつかない状態になっていて、申し訳ありません・・・」

スカリエッティの問いにウーノは頭を下げ謝罪する。

「ああ構わんよ、彼曰く“自分の道は自分が決める”と言っていたくらいだ。それに彼の目的はこの世界の価値のある“お宝”らしいからね。もしかしたら私の夢への手助けともなりえるかもしれないよ・・・それにデータもちゃんと取れたしね・・・」

「しかし同時に、我々の敵になるかもしれない。彼の消息が判明次第、迷彩処置を施したガジェットを追尾させます」

「それにもかまわんさ・・・鳴滝は支障はないと言っていたんだ・・・別にいいさ・・・」

スカリエッティは思い出したように笑みを浮かべ、ウーノは表情を

変えずドクターの言う“彼”という存在への対処法を報告したが、スカリエッティは「別にいい」とあしらった。

「おや・・・どうやらもう一人のお客さんがあの戦士の元へやって来たみたいだ。しかもこれは・・・」

その頃、士のいる地点へ急行していたフェイトが森林地区の上空まで来ていた。

「・・・・はやての言ってた場所はこの辺りだけど・・・・」

フェイトは高度を落として士を捜そうとした時、突然フェイトに向かって衝撃波が襲い掛かってきた。

「きゃっ・・・何？今の！？」

フェイトはギリギリの所で回避に成功し、衝撃波の放たれた方向を見ると、焼け野原で戦っている者たちを見つけた。そこには見慣れない姿をした戦士と緑色の怪物が戦っていた。

「あれは？一体何？」

フェイトは二体の戦いを暫く眺めていたが、周囲を見てみるとガジェットの残骸が転がっており、士の姿もないことに気づき「まさか・・・」と思ったフェイトは急ぎ地上に降り立った。

その頃ディケイドとアリゲーターイマジンは激しい攻防戦を繰り広げていた。

「ちっ、なかなか手ごわい。こいつはほとんどモモタロスのやつが戦ってたが、前より強くなってるのは確かだな・・・」

「その人！ここに男の人がいませんでしたか！？」

ディケイドはアリゲーターイマジンが強くなっていることを悟った時、空からフェイトが降りてきてディケイドに向かって士の事を聞いてきた。

「んっ？なんだフェイトか、何の用だ！？」

「えっ？もしかして士さん！？それにその緑色の生物は・・・」

フェイトは自分を知っているような口ぶりをするディケイドが士ではないかと思ひ尋ねてみたら、案の定ディケイドの正体が士であったことが発覚した。ちなみに士がディケイドであることを知っているのは六課内で、八神家とシャーリーぐらいである。

「ウウウウ・・・ガアアアアアッ！！」

アリゲーターイマジンは突如現われたフェイトにも敵意を示し、叫ぶ。そして両手に力を込め、二人に向けて衝撃波を放ってきた。

「フェイト！手伝いに来たのなら、こいつを倒すのを手伝えっ！！」

「わっ、分かりましたっ！！」

ディケイドとフェイトはアリゲーターイマジンの攻撃を回避し、フェイトはバルディッシュを構えると魔法を発動させる。

「バルディッシュュ！！」

《Plasma Lancer》

フェイトの周囲に電気を帯びた魔力スフィアが生成される。すると球体は一つ一つが槍状に変化する。

「プラズマランサー・・・ファイアッ！！」

フェイトの掛け声に、ランサーはアリゲーターイマシンに向かって飛んでいく。しかしアリゲーターイマシンはフェイトの攻撃を拳で簡単に弾き飛ばした。

「まさか・・・プラズマランサーを素手で！？」

「グウウウウ・・・グアアアッ！！」

アリゲーターイマシンはフェイトに向かって襲い掛かるが、そこへディケイドがライドブッカーをガンモードに切り替えて、アリゲーターイマシンに向けて発砲する。

「まったく・・・イメージから生まれただけあって、イマジンの強さは何でもありか・・・」

「イ、イマジン？」

「ん、ああ・・・後で説明してやるさ。」

フェイトは「イマジン」という単語に疑問を覚えたが、士は適当にあしらう。

「さて・・・そろそろ本気を出すとするか・・・」

そう言うとき、デイクイドはライドブッカーからカードを一枚取り出す。

「お前にとっても懐かしいやつだぜ。」

<KAMENRIDE・・・DEN-O!!>

その電子音と共にデイクイドの周りに銀色の破片が舞い、体に装着される。そしてオーラアーマーと電仮面が装着され、デイクイドは人間の時間を契約によって奪おうとする怪物・イマジンと戦う戦士【仮面ライダー電王・ソードフォーム】へと変身した。

「なっ・・・変わった!？」

フェイトは突然のデイクイドの変身に驚き、咄然とする。そして電王に変身したデイクイドはライドブッカーをソードモードにし、アリゲーターイマジンに向かって行く。アリゲーターイマジンはそれをやすやすと受け止め、自分も攻撃を繰り返そうとするが、デイクイドも負けじとそれをかわす。

「おい、フェイト! 何ぼーっとしてんだ!！」

「えっ!?! は、はいっ!?!」

《H a k e n F o r m》

ディケイドの声で我に返ったフェイトはバルディッシュを鎌状の魔力刃を発生させた‘ハーケンフォーム’に変形させ、アリゲーターイマジンに向かって振り下ろす。そして二人が戦っているうちにディケイドは新たなカードをセットする。

<ATTACKRIDE・・・DENGASHER!!>

その電子音の後、ディケイドライバーから4つのパーツが出て、それが組み合わさり剣型になる。これが電王の専用武器“デンガッシャー”である。それを持つとディケイドはライドブッカーとの二刀流でアリゲーターイマジンに向かって行く。その凄まじい斬撃にアリゲーターイマジンは転げる。そして体勢を立て直したアリゲーターイマジンは衝撃波を大量に放つ。そのあまりの数の多さに二人は吹き飛ばされた。

『うわあああああ!!』

二人は付近の木にぶつかる。それと同時にディケイドは電王への変身が解除された。

「この野郎・・・もう頭きた!!」

そう言うディケイドは‘ネガの世界’で手に入れた新たなアイテム“ケータッチ”を取り出し、コンプリート用カードをセットする。そしてクウガからキバまでのライダーのシンボルマークをタッチす

る。

<KUGA! AGITO! RYUKI! FAIZ! BLADE!
HIBIKI! KABUTO! DEN-O! KIVA!>

電子音が順になり、それぞれのマークをタッチし終わると、最後に
ディケイドのマークをタッチする。

<FINAL KAMENRIDE・・・DECADE!!>

電子音になるとディケイドのカードが現れ、ディケイドの頭部に付
く。そして新たなアーマーが形成され、胸と肩に仮面ライダーのカ
ードが並べられ、ディケイドの目が赤色になる。最後にディケイド
ライダーのバックルを取り外して右腰へ装着し、残ったベルトのと
ころにケータッチをセットすると、ディケイドは10枚のカードか
たどった真の姿【仮面ライダーディケイド・コンプリートフォーム
へと変身した。

「!!? また姿が・・・」

フェイトは姿が変わったディケイドに再び驚く。そしてアリゲータ
ーイマジンが向かって来たのをディケイドはライドブッカーでなぎ
払うと、ケータッチの電王のマークをタッチし、Fマークをタッチ
する。

<DEN-O! KAMENRIDE・・・LINER>

その電子音が鳴ると、ディケイドの胸と肩の部分、ヒストリーオー
ナメントのカードが変わり、ディケイドの隣に【仮面ライダー電
王・ライナーフォーム】が現れる。そしてディケイドはすかさず新

たなカードを取り出し、右腰に移したバックルにカードをセットし、バックルを押しこむ。隣の電王もまったく同じ動きをする。

<FINAL ATTACKRIDE・・・DE・DE・DE・D
EN-O!!>

スクラッチ調の電子音が鳴ると、ディケイドと電王の間に金色のレールが現れ、アリゲーターイマジンの足元にまで伸びる。そしてディケイドと電王はレールに乗り、オーラライナーと共に突っ込んで行く、ライナーフォームの必殺技“デンカメンスラッシュ”でアリゲーターイマジンをぶった切った。

「ハッアアアアアアアアアア!!」

「グッ!? ガアア・・・ガアアアアアアアアア!!」

そのすさまじい衝撃に破れ、アリゲーターイマジンは爆発した。そしてディケイドのヒストリーオーナメントのカードが戻り、電王が消える。そこへフェイトが駆け寄ってくる。

「やりましたね、土さん。でも、今のイマジンと言うのは一体・・・」

「ああ、そうだったな・・・」

ディケイドはフェイトにイマジンについてのたまかな説明をした。イマジンとは電王の世界にいた存在で、人間に憑き、その人間の望みをかなえる代わりにその人間の過去へ飛び、未来を変えようとする怪物であるとフェイトに話す。

「・・・だが奴は俺がその世界に行った時倒したはずなんだが・・・ん？」

「どうかしましたか？」

ディケイドは何かを感じ取ったのか後ろを振り返った。突然ディケイドが別のほうを見たのでフェイトはどうしたのかと尋ねる。すると突然オーロラが現れ、その中から一人の男が出てきた。

「・・・やはり・・・こいつでは駄目だったか・・・まあ、無理もないか・・・」

「鳴滝っ!!」

中から出てきたのはディケイドをつけ狙う謎の男・鳴滝であった。

「ディケイド・・・お前のせいでこの世界も破壊の一途をたどっているぞ・・・」

「そんなことはどうでもいい！それより、今のはお前の仕業か!？」

「その通り。お前を倒すためにある者に依頼してよみがえらせた。お前を消すためにな・・・」

ディケイドと鳴滝の話聞いていたフェイトは、何がなんだか分からないのでディケイドに尋ねる。

「あの、士さん・・・あの人は一体・・・？」

「あいつは俺を狙ってくる鳴滝ってやつだ。これまで旅してきた世

界であいつが係わらなかったことはほとんどない！」

ディケイドは鳴滝のことを大雑把に説明する。

「しかしディケイド。お前の旅はここで必ず終わる。」

「何だっ!?」

「この世界は元々お前にとって“絶対に来ることのない世界”なのだ。それなのになぜ来れたのか・・・わかるか？」

「んなもん知るか!もったいぶんじゃねえ!」

鳴滝の問いにもディケイドは耳を傾けない。

「あらゆる世界がついにお前を追い出したのだ。」

「なっ!!!?」

「あらゆる世界がお前がいなくなることを望んだ。だから行くことができず、戻ることもできないこの世界へ飛ばされた。だからお前はここにくたばる、それはもう決まっていることだ。」

鳴滝は世界がディケイドを追い出したと告げる。

「なるほどな・・・だが、んなもんは関係ない。俺は前の世界に戻る。絶対にな!」

「ふん、まあいい。しかし先に言ったように、お前の影響がこの世界にないわけではない。それを阻止するため、私は奴らを用意した

のだが・・・既に崩壊は始まってしまった・・・そしてもう一つ、前はどの世界からも不要な存在・・・それをよく覚えておけ・・・」

そう言うとき、鳴滝はオーロラの中へと消えていった。ディケイドは変身を解除すると、シーンとなった場所に立ちつくっていた。

「フェイト。鳴滝のことははやてたちには言わないでくれ。あいつのことは俺だけで決着をつけたいからな。」

「は・・・はい・・・。」

今までの話をすべて聞いていたフェイトは複雑な思いで士の頼みを聞いた。

そのころジェイル・スカリエッティはディケイドの戦闘データを改めて確認していた。

「ふむ・・・なるほど。これはすごい力だ・・・」

「別の姿への変身・・・武器の召喚・・・さらに他の戦士の召喚・・・
これが大まかなディケイドという者の戦力でしょうか・・・」

その隣でウーノがディケイドの能力を軽くまとめる。

「そうだね・・・これほどとは思わなかった・・・だが鳴滝の見せた映像とは違う姿をしている・・・となるとまだ別の姿がいくつかある可能性もある・・・フッフ・・・だとすると鳴滝が渡した‘他の彼ら’も早く使えるようにしなければ・・・」

スカリエッティの後ろのカプセルには狼の姿をした怪物、ステンドグラスのような姿をした怪物、両手に鎌の付いたカマキリのような怪物、銀の体に虎のような姿をした怪物、槍を持ったバツファローの様な姿の怪物、ギザギザの体をしたアブラムシの様な怪物、強靱な肉体に二本の巨大な角を持った怪物、そして中年くらいの男が静かに眠っていた。

「そしてもう一つ・・・」

スカリエッティは横の装置に置いてある‘それ’を持つ。

「‘これ’を早く完成させれば・・・私の夢の達成はさらに素晴らしいものとなる・・・フッフッフッフ・・・」

‘それ’は紫と黒を主調としたどこかで見たような形をした銃だった・・・

アリゲーターイマジンを撃退した士とフェイトは六課へと戻って来た。なのはたちスターズは既にレリックを中央のラボへの護送任務を終えて、ライトニングと共に隊舎へと戻ってきていた。フェイトは今回の件の報告をしにはやてのいる隊長室へと向かった。士はフェイトと分かれた後、一人ロビーを歩きながら鳴滝が言っていたことを思い出す。

『あらゆる世界がついにお前を追いつ出したのだ。』

「まったく酷いもんだな・・・そこまで俺は嫌われ者ってわけか。」
そう言うともう一つ思い出す。

『既に崩壊は始まってしまった。』

「・・・ってことは、また前みたいにライダーのいないこの世界にライダーが出てくるってのか？」

士はこの世界にライダーが生まれるのではないのかと考えた。というのも、士がこの世界に来る直前までいた“シンケンジャーの世界”ではその敵集団・外道衆の怪人であるアヤカシ・チノマナコがデ

イエンドのディエンドライバーを奪い、変身したことでその世界で最初のライダーが誕生した。鳴滝はこれもディケイドのせいだと言っていた。

「ま、そしたらまた倒せばいいだけだけどな・・・」

士はそんなことを言っても内心は不安なようだった。

その頃なのはやフェイト、はやてたち隊長陣はさっきの戦いのことを話していた。モニターにはアリゲーターイマジンの戦闘記録が表示されている。

「うーん、見るからに別世界の存在と言えるな。こんな怪物見たことが無いわぁ・・・」

「士さんが言うにはイマジンっていう種族で、この世界に来る前に倒したって言うていたけど・・・」

映像に映し出されるアリゲーターイマジンの姿と戦闘能力にはやてものなのも啞然とする。

「まあ、士さんとフェイトちゃんがその怪物を倒してくれたんやろ

「? だったら安心やな!」

「うん・・・けど、士さんの力はもつとすごかったよ・・・」

そういうとフェイトは画面を切り替えた。そこには士が変身したデイクイドと電王、コンプリートフォームとライナーフォームが映し出された。

「これ・・・全部士さんが?」

「うん。私も始めてみて驚いたよ・・・」

「私も初めはそうやったな。あ、ちなみに・・・つと。」

そう言うとはやては映像を追加した。そこにはヴィータ達が士と初めてであった頃の響鬼、シグナムと戦った時のブレイドとジャックフォームが映っていた。

「この他にも士さんから聞いた話だと姿はまだまだあるそうや。」

「なんかもう色々と・・・すごいね。」

「うん・・・。」

はやての追加説明になのはとフェイトは声を失う。

「まあ実を言うと、士さんも前線メンバーに入れようと思ってるんですよ。」

「え!?! それは・・・大丈夫なの?」

「そこら辺は大丈夫や、それに今度の仕事は士さんの力が必要な気がするんや……」

「えっ？それってどういう事？」

なのはとフェイトははやての言った今度の仕事の事を聞いてみた。実は数日後に控えているホテル・アグスタで骨董品のオークションが行われることになり、その骨董品の中にあるロストログアに反応してガジェットがやってくる可能性があるとの事で機動六課のメンバーで警備に向かう事になっているという。

「会場には大勢の人が来るはずやから、戦力は多い方がいいと思うんや。そやから士さんにも手伝ってもらおうと考えているんや」

「なるほどね……分かった。部隊長であるはやてちゃんの判断を信じるよ」

なのはもはやての判断に任せると頷く。その隣でフェイトは少し重い顔をしていた。

「フェイトちゃん、どないしたん？」

「え？……ううん、何でもないよ。」

はやてには何でもないと答えるフェイトだが、やはり顔には元気がなかった。

（士さんに言うなって言われたし……でも、本当にそれでいいのか……世界の破壊者って言うのも気になるし……）

フェイトは鳴滝のことを言うか言うまいか悩んでいた。だが、話すことは結局なかった。

第四話：復活・ディケイドの追放（後書き）

こんにちわ。d i e n dです。

えーと・・まあ、勘の良い方々ならお気づきかもしれませんが、今回オリジナルライダーを登場させようと思います。

名前やスペックは少しずつ出てきますが、未熟な者であまりいい出来とは言えません。ですがどんなライダーか温かく見守っていただけると幸いです。

第五話：RIDER、S RONDO

ホテル・アグスタへ向かう一週間前・・・機動六課初出動と土が電王の世界で倒したアリゲーターイマジンとの戦いから二日後、一人ソファで座っているリインは独り言を言いながらコンソールを叩いていた。

「5月13日、部隊の正式稼働後、初の緊急出動がありました。密輸ルートで運びこまれたロストログア・レリックをガジェットが発見、輸送中のリニアレールを襲撃、それを阻止、レリックを回収するという任務でしたが、六課前線メンバー一同の活躍もあって無事に解決。確保した刻印ナンバー9のレリックは、現在中央のラボにて保管調査中。初任務としてはまず問題ない滑り出しだと、部隊長のはやてちゃん、六課の後見人・騎士カリムやクロノ提督達も満足されているようです・・・と」

「リイン曹長。」

「あ、シャーリー！」

そこへシャーリーが通りかかり、リインに声をかける。

「ご休憩中ですか？」

「休憩半分、お仕事半分、個人的な勤務日誌をつけてたですよ。」

「なるほど。」

そう答えながら、リインはモニターを閉じて、シャーリーのほうへ

浮遊する。

「シャーリーは？」

「新しいデバイス達の調子を見に、訓練場の方へ言って来たんですよ。」

「そうですか。みんな元気でした？」

「はい。フォワード陣もデバイス達も、もう絶好調！」

シャーリーは満面の笑みでそう答えた。

その頃、士は一人、六課の敷地内の海岸沿いのベンチで風に当たっていた。

「・・・ふう・・・ん？」

士は海から流れてくる心地よい風を受けて一息つく。そしてふとスバルたちがいつものように訓練をしている会場訓練施設のほうに目をやる。

「頑張るな、あいつらも。よほど初出動がうれしかったのか・・・はたまた重さを実感したのか・・・」

スバルたちは暴走リニアでのレリック回収を任務とした初出撃を終えてからさらに気合が上がったようで、訓練にも熱が入っている。今まではなのはのみで訓練を行っていたが、今日からはスターズの副隊長であるヴィータが参戦し、ヴィータはスバルとフロントアタッカーの訓練、なのははティアナと射撃訓練、ライトニング隊隊長であるフェイトは同じ部隊であるエリオとキャロと一緒に訓練を行っていた。

「ここにいたのか？士・・・」

「んっ？シグナム・・・。」

ふと声のした方を士は振り返ると、そこにはシグナムが士の隣に歩いてきた。

「剣士殿は訓練に参加はしないのか？」

「私は古い騎士だからな・・・スバルやエリオのようにミッド式と混じった近代ベルカ式の使い手も勝手が違うし、剣を振るうしかない私が、ボックス型のティアナとキャロに教えてやれるようなことは無いしな・・・っと、お前に魔法のことを話してもピンとこないだろうがな」

「まあな。けど、ようするに自分に合ってるやつがいないと。」

「そんなところだ・・・まあ、それ以前に私はあまり人にものを教

えるという柄ではない。戦法など、届く距離まで近づいて斬れ、ぐらしいか言えん。」

「それには俺も同感だな。いちいち作戦なんか立ててらんねえよ。」

「おっ、話が合うな。」

「そう言ってもらえとうれしいね。ところで、俺に何か用があったんじゃないのか？」

「ああ、そうだった。主はやてがお前を呼んでいたぞ。何でも折り入って手伝ってほしい事があるそうだが・・・」

「はやてが・・・？」

シグナムから用件を聞いた士はベンチから立ち上がると、六課の隊舎に足を運んだ。

「警備任務？」

「そや、一週間後にホテル・アグスタって場所で行われるオークションがあるんや。骨董品を扱う場所なだけにガジェットたちがロス

トロギアと誤認して襲撃してくるかもしれへんから、六課の主力メンバー全員で警備につくから、士さんも手伝ってほしいんよ」

はやての口から出た士への手伝ってほしい事という話とは、ホテル・アグスタで行われるオークション会場の警備任務の話だった。

「でもシグナムたちヴォルケンス全員出るんだろ？俺がいなくてもそんなに苦勞はしないと思うんだが？」

「せやけど場所が場所なだけに戦力が多い方がいいと思うんや、オークションに来る人たちの中には結構大物の人もおるみたいやし・・・」

「でもなく・・・」

「頼む、士さん！この通りや！」

そう言うとはやては手を合わせて頼みこんだ。そこまで言われると、士も断りずらくなってしまった。

「しょうがねえなく。まあ、世話になってるんだし、これくらいはな・・・」

しぶしぶ承諾した士を見てはやては「わーい！」と子供のように喜んでた。そんな様子を見ながら士はため息をついた。

はやてはあの話の後出かけてしまったので、士は廊下をぶらぶらと歩いていた。そこへシャーリーが来て士に声をかける。

「あつ、士さん。やっと見つめました」

「ん？なんか俺に用事か？」

「はい。実は士さんのデバイス、そろそろ調べさせて頂きたいんです。何度頼んでも断られちゃうし、そろそろいいですよね？」

「お前も懲りないな・・・」

シャーリーは士の持つディケイドライバーの事を一種のデバイスかと思っっているようで、魔力機関を持ちいらず、自身を特殊な騎士甲冑のような姿に変化させることができ、さらに特殊なカードを用いて能力やデバイスを使用できることにメカニックデザイナーとしての興味が湧いたらしく、士にディケイドライバーを調べさせてほしいと六課完成前から何度も頼み込んでいたのだ。士はことごとく断ったが、今回はちよつとやそつとじゃ追い返せそうもないのがシャーリーの真剣な眼から感じ取った。

「しょうがねえな・・・あんまりごちゃごちゃいじるなよ。」

「はーい。それはもう！」

シャーリーはすさまじい笑顔で、士はため息を何度もつきながらあ

る場所へと向かった。

「調べるのって時間がかかるのか？」

「いえ、デバイスをスキャンして調べるだけですからすぐに済みますよ」

士の質問にシャーリーが答えると士とシャーリーは六課内の精密機器室へと足を運んだ。

「では、その台の上にデバイスを置いてください」

「ああ・・・」

シャーリーの指定した台の上にデイクイドライバーを置くと、デイクイドライバーが光の膜に包まれ、シャーリーは手元のコンソールを操作してデイクイドライバーの調査を開始した。

「うーん・・・やっぱり魔力機関などは積んでいませんね・・・それに構成物質などもミッドチルダでは見た事の無い物質で出来ているようですね・・・」

シャーリーは次々と調査結果が映像として表示される情報に目を光らせる。そしてあるデータを見てシャーリーはさらに目を光らせた。

「おや？これは・・・だとすると・・・もしかしたら・・・」

「なんだ？どうかしたのか？」

「い、いえ！大丈夫です！あ、もういいですよ。」

シャーリーの意味深な反応に士は尋ねるがシャーリーは適当に流した。そして光の膜が消え、士はディケイドライバーを取り出す。

「ではもう一つ。カードを取り出して、武器にもなるほうも調べたいんですが……」

「ああ。」

そう言うと士はライドブツカーを台に置くと同じように光の膜で包まれ、解析する。

「ふむ……これはどこからかカードが自動的に転送されるようですね。何処かはわかりませんが、おそらく無限にカードを取り出せるんじゃないかと。」

「ふん。」

シャーリーの解説に士は軽く答える。確かにライドブツカーは境界や表裏の区別を持たないと言われている別次元‘クラインの壺’へ通じていて、士の意味により任意にカードを取り出すことができる。さすがのシャーリーでも‘士の任意’や‘クラインの壺’まではわからなかった。

「でももし仮に……だとすると……やっぱり……」

シャーリーがまたブツブツと独り言を始めたので、士は呼び掛けて止める。

「おい。もういいか？」

「えっ！？あ、はい。データは一応取れましたので。」

シャーリーがそう言うコンソールを叩き光の膜が消えてから士はライドブッカーを取り出す。

「ではまた後日、伺いますので。」

「おいおい・・・まだあんのかよ・・・」

「ええ。今度は変身や、カード使用時のデータをお願いします。」

「勘弁してくれよ・・・」

そして士はこの先何度もシャーリーの調査を受けることになるのだった。

それから数時間後・・・士は食堂のテーブルの椅子に座って、体

を伸ばした。

「まったく・・・これから何度もやられるとなると・・・相当まいるな。」

士がこの先シャーリーの調査を受けると思うと軽くため息が出た。その時午前の訓練を終えて昼食をとりに来たスバルたちの姿が目に入った。

「あっ、士さんっ」

スバルは士に声を掛けると、士は顔を上げる。

「ん、スバルか・・・メシでも食べにきたのか？」

「はいっ、士さんはお昼まだですよね？士さんも皆と一緒に食べましょう！」

「おっ、おいっ!!」

（こっ、こいつ・・・女の癖になんて力だ!?!）

スバルは士の手を掴むと半ば強引に士をティアナたちのいるテーブルに連行していった。士はスバルの女とは思えない力の前に抵抗できないうでいた・・・

スバルに連れて行かれたテーブルには、エリオとキャロが食事の準備を行っていた。そのテーブルの上に置かれている食事の量を見て我が目を疑った。そこには、中央に普通ではあり得ないほどに山盛りに積み上げられているパスタの山に、個別に飲み物とサラダが置かれていた。その山盛りのパスタの量に士は声を失った。

「あつ、スバルさん。それに士さん・・・でしたっけ？」

「あつ、ああ・・・」

「さあさあ、士さんも座って。キャロ、士さんの分の皿を持ってきてくれないかな？」

「あつ、はいっ」

スバルがキャロに士の分の皿を持ってくるように頼むと、キャロは頷いて皿を取りに行く。その後、士を加えたフォワードチームとの食事が始まった。

「・・・・・・・・」

食事をはじめて暫くたった。士はスバルとエリオの食事に啞然としていた。スバルとエリオは山盛りのパスタをもの凄い勢いで完食し、再び大盛りのパスタをおかわりし、どんどん食べていくではないか。

（こいつらの胃袋・・・どうなってんだ？）

士は驚きのあまり、食欲が徐々に失われつつあった。スバルとエリオの食べっぷりには見ているだけでお腹が一杯になってしまう。当の二人は「カロリー消費が激しい」と言っているが、それだけで納得しているのか？ ティアナはそんな二人を見慣れたといわんばかりにキャロと普通に会話をしながら食事をとっていた。

「あれ？ 士さん、食べないんですか？」

「いや・・・見てるだけで腹が一杯になりそうだ・・・」

「さすがにはじめて見ると誰もそうなりますよね。私もそうでした」

エリオの問いに士は答え、キャロも最初は驚いたと話す。さすがにこれは誰もが驚くだろう。そんな感じに食事を進めていると話の話題はスバルたちの出身地の話になった。

「そういえば、六課の人たちって八神部隊長やなのはさんたちとの知り合いの方が多いですね？ 出身地も一緒だとか・・・」

「ああ、はやてから聞いた話では、なのはとフェイトはお互い幼馴染みたいで、他の連中も以前は一緒に仕事した仲みたいだな・・・」

「たしか・・・出身地は管理外世界97番目ってフェイトさんから

聞きました」

「97番って言ったら、私のお父さんのご先祖様のいた世界なんだよね」

「そういえば、土さんの名前もスバルさんと似ていますね。名前の響きが・・・」

ティアナの問いに土が答え、エリオはなのはやフェイト、はやての三人の出身世界の話をするとスバルが自分の父親の先祖がいたことを話し、キャロは土とスバルの名前の響きが似ていると言う。確かに「スバル・ナカジマ」という名前は言い方を変えれば「門矢 土」と何処か似ている。

そんな中、スバルはエリオの出身地は何処かと聞いてみると、エリオは「本局の特別保護施設育ち」と答え、ティアナとキャロの顔が険しくなった。

エリオは昔、ある出来事があって本局の執務官をしていたフェイトに保護され、施設に入ってから、フェイトから魔法や色々な知識などを教えてもらい、今ではフェイトがエリオの保護責任者という事になっているという。そして自分は今が一番幸せだとスバルたちに話した。

「別に何処出身だろうと関係ないだろ。エリオが「今が幸せ」だと言ってるんなら、それでいいんじゃないのか・・・」

土はそう言って飲み物を飲みきると席から立ち上がり、そのまま食堂から出て行った。

「ねえティア、土さんって案外良い人かもね」

「そうかしら・・・自分の事はあまり喋らないし、そもそも六課にどんな理由でいるのかしら。なのはさんとはある理由って言ったけど・・・」

スバルは士の事を良い人と言うが、ティアナは士が何故ここにいるのか疑問に思っていた。

それから一週間後・・・士はシグナム、ヴィータと数名の隊員たちと共に六課前線メンバーより一足先にホテル・アグスタに赴いていた。会場には次々とオークションに出される出品物が運びこまれ、準備は着々と進められていた。

「おい、士あ」

「んっ、何だヴィータか・・・どうかしたか？」

「お前に渡すもんがあったから持ってきたんだ。ほれっ！」

ヴィータは士に向かって何かを投げよこした。

「・・・何だこりゃ？」

「通信機だってよ。今回は広範囲での戦闘になるかもしれねえから

ってシャルマルから渡された」

士は投げよこされた物を受け取ると、よく警備員が耳に付けているインカムだった。士は六課メンバーみたいに念話などが出来ないため、声だけはインカムを使って行い、情報の受信については以前シヤーリーから渡された受信機で行うことにした。士はさっそく右耳にインカムを付け、試しにヴィータと会話してみると、特に異常など無く正常に機能していた。

その後、オークション開始日。ホテル・アグスタには大勢の人たちが訪れていた。ここでの警備担当はホテル内には、客に扮したはやて、なのは、フェイトの三人が警備し、残りのメンバーは外の警備の担当になった。そんな中、ティアナはスバルと念話で部隊長であるはやての事についての話をしていた。

「（……ま、八神部隊長たちの詳しい能力とかは特秘事項だから、私も詳しくは知らないけど……）」

「（レアスキル持ちの人はみんなそうよね……）」

「（？ティア、なんか気になるの？）」

「（別に。）」

「（そつ、じゃあまた後でね・・・）」

スバルと念話を終えたティアナは六課の構成員について考えていた。六課の戦力は能力限定が施されているにしても無敵を通り越して明らかに異常だった。以前新デバイスを受け取る際にシャーリーやなのは、ラインから聞いた話では、隊長格全員がオーバーSランクであり、シグナムたち副隊長でも二アSランク。他の隊員たちでも前線から管制官まで未来のエリートたちばかり、同じフォワードメンバーであるエリオとキャロは10歳という歳でBランクを取っており、キャロは強力な竜召喚術士でもある。危なっかしい部分はあるが、潜在能力の塊であり優しい家族のバックアップのあるスバル・・・

「そして・・・」

ティアナはふと屋上でシャマルと周囲の情報の事を話している士の姿を見る。

（魔力もないのに、どうして六課にいるのか・・・あの時どうやってあの人たちを助けたのか・・・そして正体も知らされていない人が何故ここにいるのか・・・）

ティアナは八神部隊長やなのはたちがこうも士を六課内で自由にさせているのか理解できなかった。ちなみにあの時とは別世界への派遣任務の話だが、それはまた別のお話。

（でも・・・そんなの関係ない。・・・私は、立ち止まるわけには行かないんだっ）

そんな時、ホテル・アグスタから離れた森の中にローブを羽織った男性と女の子がいた。

「あそこか・・・お前の探し物はここにはないのだろう・・・」

「・・・・・・・・」

男性の問いに女の子は黙ったまま男のコートの裾を掴んでいた。この二人はスカリエッティに人造魔導師の実験体として生み出された“ゼスト・グランガイツ”と“ルーテシア・アルピーノ”だった。

「あれ？先客がいたんだ・・・」

ゼストは背後に何者かの気配を感じ振り返る。するとそこには右手に銃を持った青年が立っていた。

「・・・お前は・・・」

「お久しぶり・・・かな、人造人間の出来そこないの人」

ゼストは青年の「出来そこない」という言葉と態度に睨みを利かせるが青年は全く動じていなかった。

「……………一体何の用だ、ここにはお前の欲しいような物は無いぞ」

「いや、あそこで行われているというオークション。あれを隠れ蓑にして密かに運び込まれている物の中に、お宝があるかもしれないんでね……………」

ゼストの問いに青年は答えると、青年は右手に持っていた銃をトリガー部分で回して構え、一枚のカードを手にした。そして銃身側面中央に設けられている挿入口にカードを装填し、銃身をポンプアクションの要領で前にスライドさせる。

<K A M E N R I D E……………>

「……………変身!!」

<D I ! E N D ! ! >

青年は掛け声と共に頭上に向かってトリガーを引いた。すると電子音と共に青年の周囲を二虹色の影が幾多も入れ替わり、頭上に青いカード状の物体が下りてきて、青年は世界を旅するもう一人の戦士【仮面ライダーディエンド】へと変身した。

「さて、さっそく獲物を頂きに行くとしますか……………言っておくけど、邪魔したりしたら容赦しないからね……………」

ディエンドは指鉄砲で二人に狙いを定めて「邪魔をするな」と付け加えて一人ホテル・アグスタへ向かって走り出した。この者こそ、士と同じく様々な世界を渡り歩き、お宝を狙う“怪盗”と名乗っている“海東 大樹”（かいとう だいき）だった。

大樹が向かって行った直後、ルーテシアの元に羽のついた紫色の小さな物体が来て、それをルーテシアは自分の指にとまらせる。

「・・・ドクターの玩具が近づいて来ているって・・・」

ルーテシアがその虫の情報を言うと、二人のいる場所とは別の場所からガジェットたちがホテル・アグスタに向けて接近していた。ガジェットの群れにいち早く気づいたのはシャマルのクラールヴィントだった。

「クラールヴィントのセンサーに反応・・・シャーリー！」

「はいっ！」

シャマルはロングアーチのシャーリーにホテル・アグスタに向かって来るガジェットの接近を感知させる。現時点で確認されている敵の数はガジェットドローン陸戦1型が35機、陸戦3型が4機となっていた。

シグナムはエリオ、キャロにティアナの指揮でホテル前での防衛ラインの構築を指示し、シャマルは現場の指揮を務めることになった。

「士さん、あなたはもしもの為の準備をお願いします。迎撃はシグナムとヴィータちゃんとザフィーラが行ないますが、突破された場合に備えて防衛ラインの近くにいて下さい」

「ああ、分かった」

シャルの指示に従って士は屋上から室内に駆け出していった。通路を走っていると窓の外に赤色と紫色の光が飛んでいった。

（ヴィータとシグナムが出たか・・・さて、何事もなければいいが・・・）

士はこの時、どうも嫌な予感がすると感じていた。

「新人どもの防衛ラインまでは一機たりとも通さねえ、速攻でぶっ潰すっ！！」

「お前も案外過保護だな・・・」

「うるせえよっ！！」

そんなやり取りの後、ガジェットのいる迎撃地点に到着した。シグナムの指示でヴィータが小型、シグナムが大型を担当することになった。

「行くぞ、アイゼン！」

《J a w o h l》

ヴィータは自分のデバイス・グラーフアイゼンに声をかけるとアイゼンはそれに答える。そして、自分の周囲に八つの魔力スフィアを生成し、赤いベルカ式の魔法陣を展開するとアイゼンを構える。

「まとめて……ぶち抜けええええっ!!!!!!」

ヴィータはガジェットの大群に得意の魔法の一つくシュワルベ・フリーゲン＞を放ってガジェットを撃破しようとする。ガジェットの群れもAMFを展開して防ごうとするが、魔力効果を打ち消しても、物理的な衝撃の効果は防ぎきれず、撃ち貫かれて爆発する。その後方から今度はガジェット3型が出現するが、その行く手をシグナムが塞ぐ。

「レヴァンティンッ!!」

《Explosion!》

シグナムはレヴァンティンのカートリッジをロードし、剣に炎をまとわせる。

「紫電……」

シグナムは剣を構えて突撃しようとしている所に3型はケーブルを出して捕まえようとするが、シグナムはその場から飛び上がる。3型はさらにアームで迎撃しようとする。

「……一閃ッ!!」

シグナムは3型の反撃に怯むことなく、アームごと3型を縦一閃に斬り裂いた。そして崖沿いの別ルートで接近していたガジェットの目の前にザフィーラが立塞がり、ガジェットは攻撃を仕掛けるがザフィーラの防御魔法で攻撃が通らない。

「ここは通さん……でりやあああああつ!!!」

ザフィーラの雄叫びと共に地面から白い槍状の突起物がガジェットを貫いて動きを止める。そしてザフィーラはもう一度雄叫びを上げると崖側面から突起物を出現させてガジェットを十字に貫いて破壊する。

その様子をスバルとティアナは通信画面越しに見ていた。

「副隊長達とザフィーラ……すごい!」

「これで……能力リミッター付き……」

スバルは驚きで声を上げていたが、ティアナは彼らの実力に劣等感を覚え、拳を握りしめていた。

「この分だと、俺の出番はなさそうだな……」

その頃士も、受信機に送られた同じ映像を見ながら、そう呟いていた。

その頃、シグナムらの様子を見ていたゼストたち二人の元にスカリエッティが通信を入れてきた。

「ごきげんよう、騎士ゼスト、ルーテシア・・・」

「ごきげんよう・・・」

「何の用だ・・・」

スカリエッティの挨拶にルーテシアは挨拶を返し、ゼストは冷たく言う。

「冷たいね、近くで状況を見ているのだろうか？あのホテルにレリックはなさそうだが、実験材料として興味深い骨董が一つあるんだ・・・少し協力してくれないかね？君達なら実に造作もないことのはずなんだが・・・」

「断る。レリックが絡まぬ限り、たがい不可侵を守ると決めたはずだ。それにあそこには既に怪盗を向かわせているだろう？」

「怪盗？おやおや、彼もそこにいたのか・・・だが彼とは全く連絡を取っていないくてね、故に彼の狙っているものが同じとは限らないのだよ・・・なら、ルーテシアはどうだい？頼まれてくれないかな？」

「いいよ。」

「やさしいな・・・ありがとう。今度是非、お茶とお菓子でもおごら

せてくれ。」

ルーテシアの答えに、スカリエッティは礼を言う。

「君のデバイス…… “アスクレピオス” に、私のほしい物のデータを送ったよ……」

「うん……あ、そうだ。」

スカリエッティとの通信を終えようとした時、ルーテシアが何かを思い出す。

「じゃあついでに、ドクターが前に渡してくれたこれ……試してみたい？」

そう言うところ、ルーテシアは紫色の銃を取り出す。その銃にゼストが反応する。

「それは……あの怪盗が持っていた……」

「ああ。以前彼の協力してもらい、そのデータを元に独自の改良を加えて作ったんだ。」

実は大樹がスカリエッティに合った際、大樹のディエンドライバーを「調べさせてほしい」といった。もちろん大樹は断ったが、その場から立ち去ろうとした大樹を捕らえ、ディエンドライバーを強引に奪い調べたのだ。つまり協力というよりまた強奪されたのであった。その後大樹に返却し、月日をかけて完成させた。それを先日、ルーテシアに渡したのだ。

「実はそろそろ、動作テストをしてもらおうと思っていたんだ。かまわないが、骨董のほうを優先してくれよ？」

「わかった・・・」

ルーテシアはそう答えるとスカリエッティとの通信を切り、銃を一旦しまうと、召喚魔法の詠唱を始めた・・・・・・

ルーテシアが魔法の詠唱を始めた時、ホテルの敷地内にいたキャロのケリユケイオンが反応し、シャルのクラーヴイント、ロングアーチのセンサーにも同じ反応が出た。しかしその魔力反応は徐々に大きくなっていき、ホテル・アグスタの周囲を軽く覆い被せるほどの魔力数値だった。その直後、迎撃に出ていたシグナムやヴィータの攻撃を、直進的に動き回るだけのガジェットは攻撃を受け止めたり、回避したりと突然動きが良くなったのだ。

くスカリエッティのアジトでは・・・・・・>

「やはり素晴らしいな・・・」

「あの小娘は一体何をしたのだ？」

「なんだか動きが良くなっているようですが・・・」

アジトにいたスカリエッティがルーテシアの魔法に感激していると後ろから中年の男と青年が歩いてきた。

「もう動いても大丈夫なのか？」

「ああ、大丈夫だ。それよりあれはどういう原理なのだ？」

「僕たちが腕慣らしで戦ったときは、あんなに機敏に動きませんでしたか？」

「あれは彼女の能力の一つ、インゼクトツークという極小召喚虫による無機物操作でガジェットを操作しているのさ。もっとも彼女にとってはほんの一部でしかないがね・・・」

「ほう・・・」

「ふうん・・・」

（まああの小娘ともども、対抗している機動六課という組織のことも、見られるだけ見せてもらうことにしましょう・・・）

（所詮人間の産物・・・期待はしないがどこまでできるか見せてもらおうかな。）

スカリエッティの説明に、中年の男と青年はそれぞれ笑みを浮かべ

てスカリエッティと映像を見ることにした。

その頃、ホテル・アグスタではルーテシアによって遠隔転送でガジエット1型が10機、3型1機がホテルのすぐ近くに出現した。

「あれって・・・召喚魔法陣？」

「召喚って、こんなこともできるの？」

「優れた召喚師は、転送魔法のエキスパートでもあるんです。」

召喚魔法のことについて感心しているスバルとエリオに、キャロが軽く説明する。

「なんでもいいわ・・・迎撃行くわよ！」

ティアナの指示にスバル達はそれぞれ答え、かまえる。

（今までと同じだ・・・証明すればいい・・・自分の能力と勇気を証明して・・・あたしはそれで、いつだってやってきた。）

ティアナはそんな思いを抱えながら、自分のデバイス“クロスミラーージュ”を構え、魔法陣を展開した。

それからしばらくして、士に向けて通信が入った。

『士さん、敵がホテル付近に出現、現在スターズ及びライトニングが迎撃に出ていますが苦戦しています。援護してください。』

「どうやら出番か。すぐに向かう！」

『お願いします。』

シャマルとの通信を終えた士はディケイドライバーを腰に装着し、そしてディケイドライバーの両脇のサイドハンドルを引っ張り、室内から外へと飛び出した。

「つつ、士さん！？ここに来たら危ないですよ！ここは僕たちに任せてください！！」

「バカ言えっ！それじゃ、俺がここに来た意味がないだろ！！」

エリオは飛び出してきた士に戻るよう叫ぶが、士はガジェットに向かって走り出し、ディケイドのカードを手にしてカードを装填する。

「変身！！」

<KAMENRIDE・・・DECADE!!>

デイクイドに変身した士はすぐさまライドブッカーをソードモードにしてガジェット一体を捕まえて中心を貫いて破壊した。

その頃、一体のインゼクトがホテル地下駐車場で警備員に気づかれないように潜んでいた。

「ドクターの探しもの、見つけた。」

ルーテシアはあのインゼクトにスカリエッティが頼んだ骨董を探させていた。

「ガリユー、ちょっとお願いしていい？」

ルーテシアはアスクレピオスに話しかけると、アスクレピオスの宝玉部分が紫に光る。

「邪魔な子はインゼクト達がひきつけてくれてる。荷物を確保して。言ってくれば援軍も送るから。」

ルーテシアがそう言うと、アスクレピオスが強く光る。

「うん。気をつけて行ってらっしゃい。」

すると突然アスクレピオスの宝玉部分から黒い影が飛び出し、ホテルのほうへと飛んで行った。

「じゃ・・・私も、もしものために準備しなきゃね。」

そう言うところ、ルーテシアはスカリエッティから渡されたディエンドライバーそっくりの銃を手にし、一枚のカードを取り出す。そしてディエンドライバーとまったく同様にカードを挿入口にセットし、ポンプアクションの要領で前にスライドさせる。

<KAMENRIDE・・・>

するとデケイドライバーやディエンドライバーより暗い電子音が鳴った。そしてルーテシアは銃を前に構える。

「変身・・・」

<DI! RONDOR!!>

ルーテシアが引き金を引くと、電子音と共に彼女の周りをいくつもの漆黒の影が円を描くように回転する。その影が渦を描くようにルーテシアに重なると、新たなバリアジャケットが形成される。そして、前方のカードがルーテシアに向かって行くと、肩や胸の部分に突き刺さり、アーマーを作りだす。そして額に紫のマークが浮かび、ルーテシアはジェイル・スカリエッティがディエンドライバーのデータをもとに編み出した“ディエンドライバー”によって生み出さ

れたこの世界最初のライダー【仮面ライダーディロンド】へと変身した。

「ん・・・ジャケットはとりあえず問題無いかな・・・」

ルーテシアは動作テストも兼ねているせいか、ジャケットの着心地を確かめる。その様子をゼストは複雑な顔して見ていた。

第五話：RIDER、S RONDO（後書き）

こんにちは。diendです。

ついに登場しました。EXオリジナルライダー『ディロンド』です。まあ・・・ほぼパツと出で、「仮面もねえじゃん」と言う方もいるかと思いますが、どうか温かい目で見ていただけると幸いです。能力については後に書きます。（大体分かるかとは思いますが）それでは、またお会いしましょう。

第六話：怪人・凡人・御用心（前書き）

こんにちは。diendです。

本日はディケイド最終回。ですがこの物語はまだまだ続きます。というわけで、今回は早めにアップします。（タイトルがわけわからなくなりましたが）

第六話：怪人・凡人・御用心

フォワードの援護に現れたディケイドはライドブッカーソードで倒したガジェットから剣を引き抜いて、他のガジェットに向かって駆け出す。

「ハアアアアッ！！」

ディケイドは再びガジェット1型を切り裂いて破壊していく。

（凄い・・・ガジェットをたった一撃で・・・）

（どういうこと？ 私たちでも苦戦する程のガジェットを一撃で倒していくなんて・・・一体何者なの？）

ディケイドの姿を横目にスバルは驚き、ティアナはその力を持つ士に疑問の念を抱いていた。ガジェットの群れに奮闘するディケイドの前に大型のガジェット3型が二本のアームを振り上げて攻撃してくる。ディケイドは横殴りにライドブッカーを振るうが装甲の厚い3型にはあまり効果がなかった。

「ちっ、随分と硬い奴だな。だったらこれだ！！」

ディケイドはライドブッカーから金色のカードを取り出し、ベルトにセットする。

<FINAL ATTACKRIDE・・・DE・DE・DE・D
ECADE！！>

スクラッチ調の電子音が鳴ると、ディケイドとガジェット3型との間に装填したカードが数枚出現し、ディケイドが飛び上がるとディケイドに沿っていくように上昇する。そしてディケイドが右足を突き出してガジェット3型に向かって飛び込みながらカードに吸い込まれると徐々にスピードが上がっていき、ガジェット3型の目の前にディケイドが出現し、ガジェット3型を打ち貫いた。これぞディケイドの必殺技の一つである“ディメンションキック”である。打ち貫かれたガジェット3型はバチバチを火花を出しながら爆発した。

「凄い！あの3型を倒すなんて・・・」

「AMF効果範囲内であれだけの力を発揮できるなんて・・・」

エリオとキャロもディケイドの力に驚いていた。フォワード部隊とディケイドの力でその場にいたガジェットたちを撃破したが、再び召喚魔方阵が出現し、ガジェットが次々と送り込まれてきた。

「これじゃあキリがありませんよ・・・」

「でも諦めるわけにもいかない、なんとしてもここを死守しなくちゃ！！！」

ティアナがエリオに励ましを入れた直後、ディケイドに通信が入った。

『士さん、聞こえますか？』

「シャマルか、どうした？」

『みんながいる場所から反対側に、ガジェットの接近を確認しまし

た。今ヴィータちゃんが防衛ラインに向かって来ているので、士さんは反対側に向かってくれませんか？ヴィータちゃん合流後、スターズかライトニングのどちらかを援護に回しますので。』

「新人どもでも撃退は無理でも、ヴィータが来るまで何とか持ちこたえるだろうな。よし、そっちに行く。」

『分かりました。お気をつけて。』

ディケイドはシャルの報告を聞いた後、現在フォワード部隊のいる場所から反対側から接近してきているガジェットに向かって駆け出した。

その頃、ホテル内の地下駐車場入り口では、警備の人が周囲の警戒をしていた。

「んっ？うぐっ……」

「おいつ、どうし……がはっ！」

警備員の一人が何かが通りすぎたと感じた瞬間、突然倒れてしまい、その警備員の姿を見たもう一人の警備員は声を上げようとしたが背後から何者かの攻撃を受けて倒れてしまう。

「……この程度で警備だなんて、よく言うよ……」

倒れた警備員の後ろにはディエンドがいた。ディエンドは人より高速で動く事が出来るので、一瞬で警備員の背後に回りこんで気絶させたのだ。ディエンドは地下駐車場の扉を開けて中に入る。そして薄暗い駐車場内に止めてある一台のトラックに向かって歩き出し、トラックの錠前をディエンドライバーで撃ち壊すとトラックの荷台の扉を開けた。

「さてと、お宝お宝っと。」

ディエンドは中に入っている木箱やら何やらを物色しはじめる。その中にある荷物の一つに目を光らせ手に持った。

「おっ、これなんか良い物がありそうだな……」

ディエンドは荷物の中を確認しようとした瞬間、何か黒い影かディエンドの手に持っていた荷物を奪い取っていた。ディエンドはその場から逃げようとする黒い影の動きを読んでディエンドライバーを発射した。銃で撃たれた黒い影は動きを止めた。

「んっ？お前は……たしかあのお嬢ちゃんの下僕くんか……」

ディエンドが撃ったことにより足を止めた黒い影の正体は、全身が

黒く、間接部分が紫色で首に薄桃色のマフラーを巻いたルーテシアの人型サイズの召喚獣【ガリユー】だった。

「まさか、僕のお宝を奪おうというのかい？ だったら・・・容赦はしないよっ!!」

ディエンドは自分のお宝を奪ったガリユーに対して銃を連射して攻撃する。ガリユーは持ち前の格闘能力でディエンドの懐に入ろうとするが、ディエンドも高速で移動してガリユーの格闘攻撃を捌きながらカウンターを仕掛ける。そして距離が開いた瞬間、ディエンドは再び銃を連射してガリユーに攻撃する。

防衛ラインの反対側に到着したディケイドは早速接近してくるガジェット数体を確認した。ディケイドはライドブッカードをガンモードに変更し、銃を発射してガジェットを次々と撃ち抜いていく。ルーテシアのインゼクトツークによってガジェットの動きが変則的になっていたが、ディケイドは確実に目標を撃破していく。そして周囲に敵の増援が確認されなくなってからディケイドは一息つく。

「ふう、こんなもんか・・・ん？」

すると、何かを感じ取ったディケイドは後ろのほうを振り向く。そこにはトランクを抱えたガリユーと、見慣れた戦士の姿が見えた。

「海東!!」

「あれ？士。やっぱり君もこっちに来てたのか。」

ディケイドの存在に気付いたディエンドはディケイドに話しかける。

「お前、こんなところで何やってんだ!？」

「おいおい、僕の目的は世界のお宝だと言っただろ？でも、どうしてこの世界に来たのか僕もよくわからないんだ・・・でもこの世界にもお宝はあるらしいし、それをいただこうと思ってね。まったく、こっちに来てからは散々だったよ・・・突然変なのに襲われるわ、コイツを勝手に調べられるわ・・・」

最初は自信家のように話していたディエンドも少しずつ暗くなってきた。それを聞いたディケイドが馬鹿にしたように話しかける。

「おい、まさかお前・・・また盗られたのか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ディエンドは答えない。その様子を見たディケイドは「あっはははははは」と笑い始めた。

「おいおい、昨日の今日でまた盗まれるとは・・・学習能力ない奴だな!」

ディケイドが馬鹿にしていると、ディエンドは黙ってカードを取り出し、ディエンドライバーにセットした。

<ATTACKRIDE・・・BLAST!！>

電子音が鳴ると、ディエンドドライバーを頭上に放つ。すると放った球が弾け飛び、大笑いしているディケイドと荷物を持って逃げようとしているガリユーに雨のような弾丸が襲いかかる。ディケイドは「うぉぁぁぁぁ!」と転げて、ガリユーもその場に倒れこむ。

「何すんだよ!?!」

「僕だって怒る時は怒るんだ。ま、今はお宝最優先だからいいけど次言ったら許さないよ。あと、せいぜい邪魔しないでくれたまえ。」

そう言うディエンドはトランクを持ったガリユーのほうへ向かって行った。

「士さん!!大丈夫ですか!?!」

突然ディケイドの後ろから声が聞こえ、ディケイドは振り返るとスバルとティアナがこちらに向かって走ってきた。

「スバルとティアナか。表のガジェットたちは?」

「ヴィータ副隊長が来てくれたおかげで何とかなりました。それでシャマル先生から士さんの援護に向かってほしいと言われたので・・・」

「それより、あれは何ですか!?!」

ディケイドが表の戦況を聞くと、スバルは答え、ティアナは目の前

で戦っているディエンドとガリユーの姿を見てディケイドに問い掛ける。

「とりあえず、あの黒い奴が持っている物を、あの青い奴が奪い取ろうとしているらしい。恐らくオークションで出される骨董品か、あるいは・・・」

「・・・オークションを利用して運び込まれた密輸品ってことですか・・・」

ディケイドは戦っているガリユーとディエンドのことを話すと、ティアナはホテル・アグスタに向かうヘリの中ではやてが「この手のオークションは密輸ルートに使われる」と言っていた事を思い出した。

「だったら、あの二人？を拘束しますっ！！」

「あっ、ティア！」

スバルの静止も聞かず、ティアナはクロスミラージュを構えてガリユーとディエンドに向け発砲した。

「その二人ッ！貴方たちを密輸犯として拘束させて頂きますっ」

「・・・だそうだ。とりあえずその黒い奴が持っている物を返してもらおうか」

「士、邪魔はしないでくれと言ったはずんだけど？」

「そう言われて今まで邪魔しなかったことあったか？」

「まあ、そうだったね。じゃあ・・・容赦しない！」

ガリユーからお宝を奪おうとするディエンドの邪魔をするティアナに加えてディケイドが言い放つと、ディエンドは再び邪魔をしてくるディケイドに向けてディエンドライバーを発射する。しかし、ディエンドの攻撃はあくまで牽制の意味も含んでいたらしく、三人の足下に着弾した。

「スバル、ティアナ、あの黒い奴を頼む。あの青い方は俺が相手をする！」

「えっ？あ、はいっ！！」

「ちょっと、勝手に決めないで下さい！！」

再び発砲してくるディエンドの攻撃を回避し、ディケイドの指示にスバルは答え、ティアナは文句を言いつつもスバルと一緒にガリユーの相手に向かう。そしてディケイドはディエンドと対峙する。

「しょうがないな・・・じゃあ、まずはっと・・・」

ディエンドはそう言いながら左腰のホルダーからカードを三枚取り出す。

「あの鉢巻きの子には・・・これかな。」

<KAMENRIDE・・・THEBEE!!>

「で、あのオレンジ頭の子にはこれ。」

<KAMENRIDE・・・DELTA!!>

「あの下僕君にはこれがいい。化け物同士仲良くねっと。」

<KAMENRIDE・・・CHALICE!!>

ディエンドがカードをセットすると、ディエンドライダー側面に蜂、デルタ、ハートのマークが浮かび上がる。ディエンドはスバル達に向かって銃を発射すると、赤と青と緑の三つの影が集まり【仮面ライダーザビー】、【仮面ライダーデルタ】、【仮面ライダーカリス】がそれぞれ出現した。

「わわっ！いきなり何っ!？」

「黒い体に仮面・・・銃使い!？」

スバルとティアナは突如乱入してきたザビーとデルタに驚き、ガリユのほうもカリスの格闘能力に言葉に出さずとも少し焦っているようにも見えた。

ザビーはスバルに格闘戦を挑み、素早いフットワークを駆使しスバルを翻弄する。デルタとティアナも銃使い同士、一進一退の攻防を繰り広げた。

カリスとガリユはお互いに素早い動きで互角の戦いを繰り広げていた。カリスは自らの持つ鋭い爪でガリユを攻撃しながら蹴りなどを組み合わせて攻撃を仕掛ける。対するガリユも強靱な肉体を活かした攻撃でカリスと対等に渡り合っていた。

「ガリュー、危ないの？」

その頃、ディロンドに変身したルーテシアはガリューのピンチを感じ取った。

「じゃ、ちょっと待ってね。」

ルーテシアはそう言うと、新たに装備されたジャケットのベルト横に付いたカードホルダーから三枚のカードを取り出し、ディロンドライバーにセットした。

<KAIJINRIDE・・・VERBER WORM!！>

<KAIJINRIDE・・・STAGBEE TLE ORPHN
OCH!！>

<KAIJINRIDE・・・PLANT UNDEAD!！>

電子音が鳴ると、それぞれを象徴するマークが浮かび上がる。ルーテシアは前に向かって銃を放つと、黒と灰と白の三つの影が集まり、【ベルバーワーム】【スタッグビートルオルフェノク】【プラントアンデッド】が現れた。

「よろしくね。行ってらっしゃい。」

ルーテシアがそう言うと、怪人たちはホテルのほうへ向かって行った。

ディケイドはディエンドに向かって駆け出し、ディエンドはディエンドライバーを連射してディケイドの足を止めようとする。ディケイドは左右に動きながらディエンドの攻撃をかわしながら接近する。ディエンドは接近してきたディケイドに高速移動による格闘で応戦し、ディケイドもどうにかその動きについていくが一瞬の隙を突いてディエンドが銃を連射、再び間合いが開いてしまう。

<ATTACKRIDE・・・BLAST!!>

<ATTACKRIDE・・・BLAST!!>

二人は同時にカードをセットし、連射能力向上の【BLAST】のカードでお互いに攻撃する。しかし直線的な連射攻撃のディケイド

の【BLAST】に対し、変則的なホーミング連射を取るディエンドの【BLAST】によってディケイドの攻撃は撃ち落され、別方向から飛んできたディエンドの攻撃はディケイドに命中する。

「つたく、しょうがねえな。」

そう言うディケイドはカードを一枚取り出し、セットする。

<KAMENRIDE・・・KUGA!!>

電子音が鳴ると、新たな鎧が形成される。そしてディケイドは古代からよみがえった戦闘種族“グロンギ”と戦う戦士【仮面ライダークウガ・マイティフォーム】へと変身した。ディエンドが一瞬怯む。そのすきを逃さず、ディケイドは新たなカードをセットする。

<FINAL ATTACKRIDE・・・KU・KU・KU・KUGA>

スクラッチ調の電子音が鳴ると、ディケイドはクウガのキックの構えをし、クウガの必殺技“マイティキック”をディエンドに放つ。ディエンドは防いだが防ぎきれずその場に転げ、ディケイドは変身を解く。その時どこからか攻撃が飛んできた。ディケイドは攻撃が来た方向を見て、驚いた。

「なっ・・・あれは!？」

そこにはオルフェノクやアンデットといった仮面ライダーの世界の怪人がいた。その怪人たちはそれぞれ自分の世界のライダーのほうに向かって行った。スバルとティアナはまた新たに現れた敵に驚いた。

「わああ！今度は何！？」

「あゝもう！何なのよ次から次へと！」

怪人とライダーが戦っているため、戦線を一時離脱したスバルとティアナ、ガリユールは目の前の状況に収拾がつかなくなっていた。その様子を見たディケイドとディエンドも同じように驚いていた。

「なんでライダーの敵がこの世界に・・・」

「なるほど・・・コイツを調べたのはこのためか。」

「何だと！？どういうことだ！！」

「さあね。それより、そろそろお宝を頂戴しようかな。」

ディケイドは意味を訪ねるがディエンドは適当にあしらいい、ライダーと怪人の戦う様子を見ていたガリユールのすきを突いてトランクを奪い、中身を確認する。

「ふうん、大したお宝じゃないな。君にあげるよ・・・」

ディエンドはトランクの中身が大したものではないと確認すると、ガツカリしたような態度でガリユールに返す。

「あの人、簡単にトランクを手放しちゃった・・・」

「でもチャンスだわ。スバル、クロスシフトAで一気にケリをつけるわよ！！まずはあの怪人たちよ！！」

ティアナの指示にスバルは「うんっ」と頷いてウイングロードを展開、ライダーと怪人、ガリューをウイングロードで取り囲むようにしてスバルはその上をマッハキャリバーで駆け抜ける。囲まれたライダーや怪人は遠距離攻撃で対抗するがプロテクションで防御する。

（証明するんだ・・・特別な才能や凄い能力が無くたって、一流の隊長たちのいる部隊でだってどんな危険な戦いだって！！）

クロスミラージュのカートリッジをロードすると、ティアナの周りに魔力弾が現れる。

「私は・・・ランスターの弾丸はちゃんと敵をうちぬけるんだって！」

ティアナの持つクロスミラージュから魔力オーバーによる火花が散る。そしてティアナは標的に狙いを定める。

「クロスファイアアア・・・」

ガリューの傍にいたディエンドはその声に気づき、すぐさまその場から離れた。

「シューウウウツツ！！」

ティアナ放った複数の魔力弾をくらったライダーと怪人は消滅する。ガリューは弾丸の軌道を読みながら回避する。そんな中、一発の弾丸が軌道を反れて、ウイングロードで走るスバルのほうへ向かって行く。

「スバル、危ねえ！！」

「え・・!？」

ディケイドの声に振り返るスバルだが、魔力弾は向かってくる。「当たる!！」と思ったその時、ヴィータが現れて魔力弾をグラーフアイゼンではじいた。ライトニングに合流した後、反対側の様子を見に来たところ、スバルに弾丸が当たりそうだったので助けたのだ。

「ヴィータ副隊長!？」

「ティアナッ!!この馬鹿!!無茶したあげく、味方撃ってどうすんだ!」

スバルの声を無視してヴィータが叫んだが、ティアナは啞然としていた。

「あのっ、ヴィータ副隊長・・今のも、その、コンビネーションの内で・・」

「ふざけろ、タコ!直撃コースだよ、今のは!」

「違うんです。今のはあたしがいけないんです・・」

「うつせえ!バカども!」

スバルは必死にティアナをかばおうとするが、ヴィータはそれを聞かない。その下で、ティエナは涙を浮かべてうつむいていた。

「やれやれ・・なんか面倒なことになっちゃったみたいだね。下僕君も逃げちゃったし。」

ディエンドはあきれた様子でガリユーの逃げたことを確認する。

「海東・・・お前・・・」

「何か言いたそうだけど、僕はこれで失礼させてもらうよ。」

そう言うディエンドはカードを一枚取り出し、セットした。

<ATTACKRIDE・・・INVISIBLE!!>

「待て！海東！」

ディケイドは止めようとしたが間に合わず、ディエンドは【INVISIBLE】のカードを使って姿を消した。

「くそっ・・・あいつ、いったい何を知ってんだ？」

ディケイドはディエンドの言っていた言葉に違和感を覚えていた。

結局ディエンドとガリユーは見つからず取り逃がすことになった。その後、現場の検視を他の管理局の局員に任せて、機動六課のメンバーはヘリの乗り込み、六課隊舎へと戻った。隊舎に戻ったスバルたちフォワード部隊は疲れもあるだろうと後の訓練は無しにして休

息を取るように、となのはとフェイトに言われて解散していった。

六課に戻った士はしばらく隊舎内を歩いていたが、ロビーでなのは、フェイト、ヴィータ、シグナム、シャーリーの五人がティアナの事について話をしていた。

「訓練中から時々気になってたんだよ・・ティアナのこと。」

「うん。」

「‘強くなりたい’なんてのは若い魔導師ならみんなそうだし、無茶も多少はするもんだけど、時々ちょっと度を超えてる。あいつ、ここに来る前に何かあったのか？」

「それはぜひ、俺も聞きたいもんだな。」

士の突然の声に全員少し驚く。

「士さん。」

「確かに、あいつなんか必死すぎるところあるしな、俺も気になってたんだ。」

「って言うか、お前盗み聞きしてたのかよ。」

「細かいことは気にするな。それより、話してくれないか？」

士は椅子に腰かけながらなのはに言うと、いになのははティアナの事を語り出した。ティアナの兄“ティータ・ランスター”は執務官志望のエリート魔導師であった。しかし彼は違法犯罪者の逮捕の際、

犯人の追跡中に死亡してしまい、ついには犯人を取り逃がしてしまった。地上の陸戦部隊の協力もあって犯人はその日のうちに逮捕することができたが、兄の葬儀の日、彼の上司は「首都航空隊のエリートでありながら犯人を取り逃がしたのは失態」と言い、さらには「例え死んでも任務を失敗するような役立たずは・・・」などと言っていたらしい。その時のティアナはまだ10歳で、たった一人の肉親である兄の最後の任務が「無意味で役に立たなかった」と言われて深く心に傷付いてしまった。

「だからティアナは、自分の兄の夢であった“執務官になる”という願いを自分が叶えるんだって躍起になってるんだと思う・・・」

（なるほど。ようするに、兄の無念を晴らしたいだけってわけか。）

士は椅子から立ち上がり、「まあ、サンキューな。」と言って部屋を後にした。

なのはからティアナの話聞いた士は隊舎の周辺を歩いていると、ティアナが一人で自主訓練をしていた。

「ハア、ハア、ハア・・・」

「ご苦労なこったな、こんな時間まで・・・」

「!？」

ティアナは声のあった方を振り返るとそこには士がいた。

「士さん・・・」

「よう。」

ティアナが話しかけると、士は軽く返す。

「・・・ところで、お前は死んだ兄貴の為に頑張っているんだってな？」

「!?!? どうしてそれを・・・」

「・・・なのはたちが話していたからいっしょに聞いてな、執務官志望だったそうだな・・・」

士の話を聞くとティアナは納得する。

「私は、兄の成せなかった夢を代わりに叶えたいんです。だからこうして努力しています。私はあなたと違って、ただの・・・」

「・・・俺から見れば、お前はただ兄貴の背中を追いかけているとしか見えないけどな・・・」

「それが・・・何か？」

士の一言にティアナの顔は険しくなる。

「結局お前は“兄は無能ではない”って証明させたいだけじゃない

のか？兄貴の妹である自分が頑張れば、兄貴を侮辱した上の連中に自分たちの判断が間違っていたと認めさせる為に・・・」

「・・・・・・・・・・」

「確かにそれで認められればお前は満足だろう。だがな、お前が無茶をして、他の連中に怪我をさせてしまうような事をしてまで兄の実力を認めてもらいたいのか？自分の体も気にせず、ただ認めてもらうためだけに無茶を続けてもお前の兄は・・・・」

「・・・・・・・・さい・・・・」

「ん？」

「うるさいっ！！あんたに何が分かるのよっ！！両親が死んで、たった一人で私を育ててくれた兄さんを・・・・無能な連中の一言で“役立たず”という烙印を押された兄さんの悔しさが・・・・あんたに分かるはずが無いわっ！！」

「ああ、分からないな。俺にしてみれば、そこまで自分を犠牲にするようなマネまでして、兄貴の無念を晴らそうとするお前の方がおかしいな・・・・」

ティアナは士の話に怒りを露にするが、士はティアナの怒りの声に全く動じていない。そして数分間沈黙が続き、士はティアナに背を向ける。

「まっ、お前がどうなろうと俺には関係ないからな・・・・じゃあな」

背を向けた士はそのまま歩いていった。ティアナは士の態度に怒りの念を士にぶつけるかのようにずっと睨んでいた。

それから数日後、なのはとヴィータの訓練をいつも通りにこなしているスバルたちだったが、早朝訓練の前と、最終訓練の後の開いた時間帯にスバルとティアナが自主訓練を一緒に行っている姿を士は度々見かけるようになった。そしてある日の夜、士は部屋のベッドで寝ていたがどうも寝付けず、ふいに窓の外を見ると、スバルとティアナがいつもみたいに自主訓練をしていた。

「あいつら・・・まだやってたのか・・・」

士はスバルとティアナの様子を何度も見ていたので見慣れたのか既に軽く呆れていた。

「接近戦・・・後方支援のあいつには無縁の技なのに・・・」

士はその様子に明らかな違和感を覚えた。ティアナのポジションはあくまでフォワード内の援護射撃と後方指揮担当、故に接近戦などはなのはの教導とはかけ離れていた。

「やれやれ、どうやら俺もひと行動起こすべきかもな・・・」

その次の日の夜・・・士は訓練を終え、訓練場のセッティングを行なっているのはの所にやって来た。

「なのは、ちょっといいか？」

「あれ、士さん。珍しいですねこんな所で・・・」

なのはも士が訓練場にやってきたことが珍しかったようだ。まあ最初の方ではちよくちよく訓練の様子を見に来ていた士だったが、最近はめつきり来ない状態になっていた。

「それで、私に何か用ですか？」

「ああ、なのはは教導隊とかいう部隊にいたんだよね？」

「ええ、元は航空戦技教導隊って部隊にいましたけど、それがなにか？」

「・・・例えばの話なんだが、もし訓練の中で訓練生の一人が言う事を聞かずに暴走するような行為を行ったりして反抗してきたらどうしていた？」

「そうですね。細かい事で叱ったり怒鳴りつけたりする暇があったら、模擬戦で徹底的に打ちのめしてしまいましたね。そのほうが教えられる側には学ぶ事が多いとよく教導隊の人たちが言っていましたし・・・」

「そう・・・なのか・・・」

士はなのはの説明を聞いて背筋が凍った。このエースオブエースで名の知れている高町なのはに逆らったりしたら、命がいくつあっても足りない・・・

「それに、教導隊では新人たちを教えて育てるのではなくて、強くなりたいてって意思を持っている子たちに今よりハイレベルな戦闘技術を教えて導いていく。それが戦技教導ですから・・・」

「ほう・・・」

「でも、どうしてそんな事を聞くんです？」

「いや、ちょっと参考までにな・・・」

士はなのはの言っていた「教導隊でのやり方」を知り、そのやり方を実行しようと考えていた。

「そういえば、リインの奴から聞いたが、二日なのは高町とフォワード連中とで模擬戦をやるそうだな」

「ええ、ツーオンワンの模擬戦を、士さんも模擬戦を見に来ますか？」

「まあ、気が向いたらな……」

士はなのはと会話後、士はその場から立ち去った。

ティアナとスバルは最後の自主訓練を終えて部屋で模擬戦での話をしていた。

「それでティア、明日の模擬戦……いけるかな？」

「成功率は五分五分かな。それよりスバル、本当にいいの？」

「えっ？何が？」

「今回の模擬戦で、あんたの憧れのなのはさんに……ある意味、歯向かう事になってしまうけど……」

「大丈夫だよ。強くなる為の努力だもん！ちゃんと結果を出せば、認めてくれるよ！！」

ティアナはスバルの憧れであるなのはに逆らう事になることを少し戸惑っていた。しかしスバルは大丈夫と断言した。

「そう言えばティア、この前士さんと話してたよね。その時何か叫

んでみたいけど・・・」

「あんた・・・見てたの？」

「え・・・うん、ごめん。」

「別に謝らなくていいわ。そんな大した話じゃないしね。気にしないで。」

「でもっ・・・」

「いいから。」

「う、うん。」

スバルへの態度はいつも通りだったが、ティアナはスバルの発言で士への怒りが込み上げてきた。

（あいつは私の兄さんを馬鹿にした・・・絶対に許さない・・・絶対）

自分のたった一人の肉親を侮辱した士への怒りは消えずに次の日、
なのはとの模擬戦が行なわれようとしていた・・・

第六話：怪人・凡人・御用心（後書き）

改めてこんにちは。die ndです。

最終回・・・なんかしつくりこない感じだなあ。

まあ冬の映画とWに期待しましょう。

ではここでオリライダーディロンドについて。

基本はカイジンライドです。様々な怪人を召喚でき、さらにあのカードも一応用意しています。と、こんな感じでは、またお会いしましょう。

第七話：解き放て！過去の鎖（前書き）

仮面ライダーW第1話記念。早めにアップします。
これからWも楽しみです。

第七話：解き放て！過去の鎖

今日は午前の訓練でのまとめとしてなのはとの模擬戦が行なわれようとしていた。最初の相手はスターズ分隊であるスバルとティアナだった。その間、エリオとキャロはウィータと見学する事になった。

「あつ、もう模擬戦始まっちゃってる？」

「フェイトさん！？」

なのはとスターズ分隊の模擬戦を見るために戦闘圏外のビルの屋上にフェイトが駆け込んできた。

「私も手伝おうと思ってたんだけど・・・」

「今はスターズの番。」

「ホントはスターズの模擬戦も私が引き受けようと思ったんだけどね。」

「ああ、なのはもここんどこ訓練密度濃いくからな。少し休ませねえと。」

「なのは、部屋に戻ってからずっとモニターに向かいっぱなしなんだよ。訓練メニュー作ったり、ビデオでみんなの陣形をチェックしたり。」

「なのはさん・・・訓練中もいつも僕達のこと見ててくれるんですね。」

「本当に・・・ずっと。」

フェイトとヴィータの会話にエリオとキャロも「ずっと自分達のことを見ていてくれている」と話す。

「それにしても・・・士の奴なにやってんだ？模擬戦を見に行くとか言っておきながら来ねえじゃねーか・・・」

ヴィータは士が来ない事を呟いている頃、士はヴィータたちに内緒で別の場所で模擬戦を見学することにした。

「さて、あいつらはどう出るかな・・・現状からみれば間違いなく勝手起こすだろうがな・・・」

士が考えているとなのはを相手にスバルとティアナの模擬戦が始まった。最初にティアナがなのはに向かってクロスファイヤーを放つが動きが遅くどうも切れが無い、なのはは飛行しながら回避しふと前方を見るとウイングロードの上を走ってくるスバルの姿があった。

「フェイクじゃない・・・本物!？」

なのは自分に向かってくるスバルがティアナの魔法で生み出した幻影などの類ではなく本物だと見破ると得意のアクセルシューターで攻撃し、スバルはギリギリの所をすり抜けながらなのはに攻撃を仕掛ける。しかしなのはの防御障壁に阻まれて足払いをされてスバルはバランスを崩して落下していく。

「・・・スバルの防御力を生かしての足止めか・・・だが思いつき、一か八かって感じだな・・・」

その様子を見て冷静に分析をして「はあ」と溜め息をする。

「全く・・・それじゃあ行くか・・・」

士はスバルとティアナの行動を見ながら呟いて、歩き出した。なのはとスバル&ティアナが模擬戦をやっている“戦場”へ・・・

ティアナが念話で今まで特訓してきた連携を仕掛けようとスバルに告げると、スバルは元気よく返事で返し、スバルはリボルバーナツクルのカートリッジを一発使用して再びなのはに突っ込んでいく。なのはは防御障壁を展開してスバルの攻撃を防ぐと魔力と魔力のぶつかり合いによって火花が散る。その間にティアナはスバルの作っ

たウイングロードの上を走ってなのはのいる場所の真上に来る。

「バリアを切り裂いて、フィールドを突き抜ける……一撃必殺ッ!!」

ティアナはクロスミラージュに魔力刃を生み出し、なのはに向かって急降下による奇襲攻撃を仕掛けようとする。しかしそのティアナとスバルの耳に銃声のような音が聞こえ、その音のあった方を見ると自分達に向かって何かが飛んできた。

『!?!』

「なっ、何!?!」

ティアナは自分に向かってくる物体を避けるために咄嗟に防御魔法を発動させ、バランスを崩しつつもウイングロードの上に着地する。スバルもなのはへの攻撃を中断して後ろに下がって回避する。スバルとティアナ、そしてなのはや見学していたヴィータたちが攻撃のあったほうを見ると、そこには廃ビルの上でライドブツカーをガンモードにして構えている士ことディケイドの姿があった。

「士さん!?!」

「よう、面白そうだから俺も混ぜてもらおうか」

驚くなのはにディケイドは「自分も混ぜろ」と言わんばかりに飛び上がってウイングロードの上に着地する。立ち上がったティアナは睨みつけるようにディケイドを見る。

「どういうつもりですか?今はなのはさんと模擬戦の最中なんです

が・・・」

「模擬戦であろうと戦闘中での突然の“増援”と言うものも含まれるんだろ？それにお前らのあんな戦い方が模擬戦というのは到底思えないな・・・」

冷たく、そして怒りを乗せたような言葉でディケイドに言うティアナ。しかしディケイドは動じることなくティアナとスバルに戦い方がおかしいと答える。

「くっ、だったらあんたを“敵”と認識して叩きのめしてやるっ！」

ディケイドの指摘にティアナはディケイドを模擬戦での“敵”と認識し、クロスミラージュをディケイドに向けて発砲する。ディケイドはティアナの攻撃を回避しながらウインググロードの上から身を投げ出して地上に降り立った。そして人差し指を立てて「かかって来い」と挑発するようにディケイドは駆け出していく。そのディケイドの余裕にティアナは怒りを露にして叫んだ。

「スバル、あいつを叩きのめすわよっ！！」

「えっ、ちよっとティアア!？」

「待ちなさい、ティアナッ!!」

戸惑うスバルになのははティアナを止めようとしたがティアナは聞く耳を持たず、ディケイドを追いかけるために地上に降りた。

（あいつを・・・あいつを倒して私が強いことを・・・証明してや

る!!」)

ディケイドの乱入にフェイトにエリオ、キャロの三人は驚きの顔になっていた。しかしヴィータはどこか冷静な顔をしていた。

「ちょっとヴィータ、これは止めないといけないんじゃないの!？」

「いや、止めねえ・・・」

「どうしてですか!？あれじゃあ模擬戦じゃなくてももう喧嘩ですよ!!」

フェイトの質問にヴィータはあえて止めようとしなかった。その態度にエリオはヴィータになぜ止めないのかと疑問に思いながらその場からティアナたちを追いかけるために駆け出す。キャロはどうしているのか分からずオロオロしていたが、エリオの後を追うように駆け出していった。ヴィータはディケイドを追って地上に降りたティアナの姿を確認するとなのはに念話を送った。

「(なのは、聞こえるか?)」

「(ヴィータちゃん、何?)」

「（後は士に任してお前は下がってくんねえか？）」

ディケイドを追ってティアナは廃ビルの市街地を駆け回っていた。壁に背を向けて周囲に気を配る。するとビルの瓦礫からディケイドがティアナを狙って発砲してきた。ティアナはすぐさま横っ飛びして回避してから発砲のあった方向にクロスミラージュを構えて反撃する。ティアナの攻撃はディケイドのいる位置のすぐ傍の瓦礫に命中する。

「・・・発砲のあった位置への反撃時の判断力はさすがと言ったところか・・・」

士とはティアナの射撃能力がなのはの訓練や今までの実戦の中で徐々に向上していることを確認する。しかしティアナの攻撃の後、ディケイドが姿を見せると発砲を繰り返しながらすぐに接近戦を仕掛けてきた。

「はああああっ！！」

クロスミラージュの先端に発生させた魔力刃がディケイドの装甲を斬ると装甲から火花が散る。ディケイドも負けずと格闘で反撃するが、ティアナはスバルとの訓練中に敵との接近戦での対応法を応用してディケイドの攻撃の後にクロスミラージュの射撃でカウンターを繰り出してこようとする。

「ちっ!!」

ディケイドは顔面を撃たれる前に体を反らしてギリギリの所を回避、その直後に地面に転がってしまうが転がることを利用してティアナと距離を取りながら立ち上がりティアナと対峙する。

「なるほど、今の格闘戦術はスバルとの訓練の成果か？」

「ええ、私のメインは兄さんが教えてくれた精密射撃のシャープシュート、でもそれだけでは駄目・・・私には切り札と呼べるものはないし、中距離から撃っているだけでは勝てない相手が出てくれば行き詰まる。あんたみたいな相手のように・・・だからスバルとの訓練で技数を増やして対抗する事にしたのよっ!」

ディケイドの質問にティアナはスバルとの訓練で得たものを話す。

「だが・・・」

「!？」

「それでお前は俺に勝てるのか？今の状況じゃあスバルの援護は無いし、たった一人で俺に勝てる自信はあるのか？」

「・・・・その傲慢な態度、すぐに言えなくしてやるっ!!」

ディケイドの一言に完全にキレたティアナはディケイドに向かって射撃攻撃を繰り返してディケイドの動きを封じそれと同時に砂煙を巻き上げる。

「くっ、目くらましからの強襲か？・・・って何！？」

ディケイドは砂煙が晴れた瞬間周りを見て驚いた。なんと数人のティアナが自分を取り囲むかのように展開していたのだ。

「そういや・・・前に訓練見に行った時、少し見たっけな。」

ディケイドは訓練時に見たティアナの技を思い出す。自分や仲間とまったく同じ姿を作りだす“フェイク・シルエット”である。考えていると数人のティアナが一斉にディケイドに向かって攻撃を始めた。四方八方からの攻撃にディケイドはとにかく走り回って近くのビルの中へと逃げ込んだ。

「ふう、さてこれをどうするか・・・まあ分身には分身って言うのが妥当だろうな。」

そう言うとディケイドはライドブッカードから一枚のカードを取り出した。

「(下がってろって、どういふことなのヴィータちゃん!)」

ディケイドとティアナが戦闘している頃、なのははヴィータの言った言葉が理解できないでいた。

「(なのは、ここんどこ休んでないだろ?それにオメー最近フラつくことがあっただろ、だからここは士のヤツに任せてくれないか・・・)」

「(!?)」

ヴィータはなのはの事を氣遣ってか「士に任せてほしい」と真剣な表情でなのはに話す。なのはは何かヴィータに氣づかれたと思い、ヴィータの頼みに大人しく従うことにした。しかしスバルはティアナのことが心配でしようがない状態だった。

(ティア・・・!!)

「スバル、一旦下がって・・・ってスバル、何処に行く氣なの!?!」

スバルは突然、意を決したかのようにティアナを追って駆け出していつてしまった。なのはは止めようとしたがスバルの耳には届かなかった。

ディケイドが潜んでいるだろうビルの前にはティアナの幻影が取り囲み、その中に本物のティアナがディケイドの気配を探る。

（さあ、この包囲をどう突破してくる？ あいつはカードみたいな物を使って特殊な力を発揮するようだけど、いかなる力を持っているだろうと……倒してみせる！！）

ティアナがディケイドを警戒しつつも倒してみせると気合を入れる。その時だった、ディケイドがビル内から飛び出してきた。

「出てきた！ 仕留めて……って、何っ！？」

ティアナは自分の目を疑った。ビルから出てきたディケイドに続いて、一人、また一人と計三人のディケイドが出てきたのだ。出てきた三人のディケイドの一人は格闘、一人は剣で、一人は拳銃で周囲の幻影ティアナに向かって攻撃を開始し始めると徐々にティアナの幻影は数が減っていく。

「くっ、どうなっているのよ！？ あいつも幻術の能力を持っていた？……いや、たとえ幻術だとしても何で攻撃力を持たない幻影が、なんで私の幻影を攻撃できるの！？」

幻術系の魔法は、【相手を錯乱しつつ別方向からの不意を突いて本物が攻撃する】という戦法の一つだが、三人のディケイドは明らかに

に個別での攻撃力を有しており、別々の意思を持って行動している。本来の幻術魔法では絶対できないことである。

ティアナが三人のディケイドに驚きながらも応戦していたが、ティアナの作り出した幻影は全て潰されてしまい、今度はティアナを取り囲むように三人のディケイドが歩いてくる。そこへマツハキヤリバーを走らせながらスバルがティアナの傍に駆けつけてきた。

「ティア！大丈夫！？」

「スバル？アンタ何で……」

「何でって、私とティアはパートナーだよ。助けに来るのは当たり前だよ……って、士さんが三人もいる！？」

援軍として駆けつけたスバルも三人に増えているディケイドの姿に驚く。その時、ビルからまたディケイドが現れた。

「ほう……よかったな、頼もしい味方が来てくれて……」

後から現れたディケイドがゆっくりとスバルとティアナに向かって歩いてくる。すると他のディケイドたちが近づいていき、一つに集った。

「あんた……一体どんなやり方であいつらを生み出した……」

「ああ、こいつを使ったのさ……」

ティアナの質問にディケイドは一枚のカードを二人に見せた。そのカードは【ILLUSION】のカードだった。【ILLUSION】の能力は自身を分身生成し、各ディケイドは個別に意思を持ち、

それぞれ違う動きをする事ができる。ティアナの技との違いは、‘幻’と、‘実体’、という点である。

「さて・・・やっと二人揃ったんだ。俺も本気でやってやるか。」

ディケイドはカードを取り出してディケイドライバーにセットする。

<K A M E N R I D E・・・K I V A!!>

電子音が鳴ると、ディケイドの体が銀色に包まれ新たな体が作られる。そして銀の部分がはじけ飛び、ディケイドは人間のライフエナジーを吸う怪物“ファンガイア”と戦う戦士【仮面ライダーキバ・キバフォーム】へと変身した。

「ええっ!?!」

「姿が・・・変わった・・・」

スバルとティアナはディケイドの変身に驚く。以前ホテル・アグスタの戦闘でクウガに変身した時は自分達の戦闘でいっぱいだった。だったので士の姿を見ていないのだ。

「よし・・・行くぜ!」

キバへと変身したディケイドはスバルとティアナのほうへと走って行った。

その頃屋上でその様子を見ていたなのは達もディケイドの力に驚いていた。

「士さんの姿が・・・」

「変わった・・・」

エリオとキャロが驚きの声を上げる。

「前に一緒に戦った時とは違う姿だね。」

「ああ。あれはキバつつう名前らしい。」

フェイトの疑問にヴィータが答える。ヴィータは士が八神家にいた時はやてたちと同様にカードの説明を受けていたので覚えていた。その横でなのはは不安そうな顔をしていた。

「スバルとティアナ・・・大丈夫かな・・・」

向かって来たディケイドに対してティアナとスバルは左右に分かれて攻撃を回避する。その瞬間ディケイドは新たにカードをセットする。

<FORMRIDE・・・KIVA・GARURU!!>

電子音が鳴るとディケイドの左腕と胸の装甲に鎖が現れ、青色の新たな形に変わる。そして目の部分が青色に変わり、ディケイドはキバのアームドモンスター“ガルル”の力を借りた【仮面ライダーキバ・ガルルフォーム】へと変わる。そして変身と同時に現れた刀“ガルルセイバー”を手に、スバルのほうに向かって飛ぶ。ガルルフォームになることで脚力が大幅に向上され、一蹴りでスバルのほうへ追いつき、ガルルセイバーを振りかざす。スバルはとっさに魔力を右手に集中させて防御魔法を発動させる。それを見たディケイドはもう一枚カードをセットする。

<ATTACKRIDE・・・HOWLING SHOCK!!>

電子音が鳴るとディケイドはつばの裏に手をかけ、すさまじい衝撃の音波砲・ハウリングショックをスバルに向かって放つ。

「ハアッ！」

「何、この衝撃!?!・・・・うわあああああつ!!」

突然の衝撃にスバルは防御ごと吹き飛ばされた。

「スバル！！くっ、このおっ！！」

吹き飛ばされて瓦礫に埋もれたスバルをティアナは叫び、ディケイドに向かって攻撃したが、ディケイドはガルルセイバーで払うと、新たなカードをセットした。

<FORMRIDE・・・KIVA・BASSHAA！！>

電子音が鳴ると、右手と胸が緑の形に変わる。そして目が緑に変わり、ディケイドはキバのアームドモンスター“バッシュァ”の力を借りた【仮面ライダーキバ・バッシュァフォーム】へと変わった。

「ったく、ころころ変わんじやないわよ！」

ティエナは怒りを露にしながら、ディケイドに向かって攻撃する。ディケイドはそれを避けると、右手に持った銃“バッシュァマグナム”から水の銃弾・アクアバレットを発射する。

「銃使い！？くっ！！」

「おいティアナ、なのはの教えてもらったのはそんな風に動き回って回避することなのか？」

次々に打ち出されるアクアバレットをティアナは必死に動き回って避けようとするが、ディケイドはティアナになのはから教えられた事を思い出させようとする。しかしティアナは勝とうとする焦りとディケイドに指摘されたことにも腹を立てたのか全く行動しようしない。

「うおおおおおおつ!!」

そこへ瓦礫から這い出てきたスバルがマツハキヤリバーで向かって来た。ディケイドはひらりと簡単に避けると、溜息をつきながらやる気の無いように両手をダランとさせる。

「はぁ、お前ら本当にやる気があるのか？ 今までの訓練は一体何のためにやっていたんだ？」

「……何ですって……」

「さっき俺がお前に攻撃した時、お前も撃って俺の体制を崩す、という手段もあったはずだ。あまり動かず視野を広く持つて攻撃する・だったか。それをなのはとの訓練で嫌と言うほど教えられたはずじゃなかったのか？」

「うつ……」

ディケイドがティアナに言った事は的を射ていた。確かにティアナのポジション・センターガードは動き回らず視野を広くして、あらゆる相手に正確な弾丸を選択して命中させる判断速度と命中精度が大事になってくる。しかし今までの戦闘でのティアナはなのはの教えを完全に無視したものだった。

「そしてスバル、お前もさっきのなのはとの戦闘を見ていたが、何であんな無茶な動きをしたんだ？」

「えっ、それは……そういう作戦で……」

「作戦？あんなのが作戦と言うのか？俺から見れば、ティアナはお前をただの“囷”として利用しているように見えたが……」

ディケイドは瓦礫から這い出てきたスバルにも言い放つ。スバルはヴィータが誉めるほどの防御能力の高いことは士も知っていた。しかしいくら高い防御力を有していたとしても、戦場では何が起きるか分からない。ましてや先程のなのはとの戦闘では、なのはの放つ魔力弾の中を危険も顧みず突撃を仕掛け、なのはの動きを止めると言う危険行為を行ったぐらいだった。そしてディケイドは再びティアナを見る。

「もしあの状況でお前がなのはを撃破できればお前は満足だろう。頑張ってやった訓練の成果がうまく出せた、とな……だがな、その無茶な作戦のせいでスバルが怪我をしたりしたらどうする？」

『!?!』

「そうになったら、お前はどう責任を持つんだ？」

ディケイドの話にティアナもスバルも言い返せなかった。たしかに士の言う事も二人は理解していた。実戦では何が起こるか分からず、自分たちが危険な状況に陥ることも必ずある。二人は六課に来る前は陸士隊の救助部隊にいたこともあり、危険な場所に赴く事が多かった……いや、危険じゃない場所なんて無かった。

「でっ、でも私は頑丈だし、ティアが頑張るのはお兄さんの夢を叶えてあげようと……」

「そこが気に入らないんだよ……」

「・・・えっ？」

「ティアナの兄貴のことはなのは達の話聞いて知っているし、こいつがその夢を叶えようとしていることも知っている。だが、夢を叶たらどうする？こいつが執務官とやらになってそれでお終いか？」

スバルはティアナの頑張る理由を知っているためか、ディケイドにティアナの夢を話そうとするがディケイドはティアナの頑張る理由が気に入らないと言う。結局のところ、ティアナは兄であるティーダの“執務官になる”という夢を叶えるために頑張っているだけで、ティアナ自身が執務官になった後はどうなる・・・自分自身の目標も無く、今の状態では執務官になって夢を叶えた“だけ”で終わってしまうと士は考えていた。

「・・・だから何よ・・・私は兄さんの夢を・・・」

「・・・全く、どうやらいつまでも兄貴の背中ばかり見て、過去に囚われ続けている甘ちゃんには何を言っても無駄か・・・」

ティアナは言い返そうとしたがディケイドはあくまでティアナを“兄の背中を追いかけるだけの甘ちゃん”と言う。その言葉を聞いたティアナはついに感情的になり、突然廃ビルの瓦礫の山に飛び移ってディケイドのいる位置から高い場所に移動した。両手にはクロスミラージュを所持してディケイドに狙いを付けた。

「私は！！もう誰も傷つけない・・・ッ！亡くしたくない・・・ッ！だから強くなるんだ！！あんたみたいな奴に・・・分かってたまるかあっ！！」

ティアナは魔力を収束させて、砲撃魔法を発動させようとする。そ

のティアナの様子を見たディケイドはヤレヤレと言っているような感じで首を横に振る。

「どうやら“強くなる”事の意味を理解できていないみたいだな・
・あいつの言う通り、徹底的に叩きのめさないと分からないみたい
だな・・・・」

そう言うときディケイドは新たなカードを取り出す。スバルはティアナの攻撃を仕掛けようとしていると感じて止めようとしたが、ディケイドはバッシュ・マグナムをスバルの足元へ数発放つ。

「うわあっ！」

「じっとしてろ。よく見てるんだな、闇雲に無茶を繰り返したただの甘ちゃんがどうなるかをな・・・・」

冷たくそう言うときディケイドはカードをセットする。

<FORMRIDE・・・KIVA・DOGA!!>

電子音が鳴ると、両手と胸が紫の形に変わる。そして目が紫になり、ディケイドはキバのアームドモンスター“ドッグ”の力を借りた【仮面ライダーキバ・ドッグフォーム】へと変わり、巨大なハンマー“ドッグハンマー”を構える。

「喰らえっ！ファントムブレイザーアアアアッ！！」

魔力のチャージが完了したティアナはディケイドに向かって狙撃砲撃魔法【ファントムブレイザー】を放った。射線上にスバルがいるにも拘らず。

「ハアアアアアアアアッ!!」

ディケイドは迫り来るオレンジ色の魔力砲に向かってドツガハンマーを振るう。魔力砲とドツガハンマーがぶつかり合い、強烈な衝撃がディケイドを襲う。ディケイドは衝撃に耐えながらドツガハンマーに力を込めながら叫ぶとティアナの放ったファントムブレイザーは弾かれ、方向を変えて遥か上空へと飛んでいった。

「なっ!?! そ……そんな……」

ティアナがファントムブレイザーが弾かれたことに咄然とし飛んでいった方向を見て立ちつくしていた。そしてディケイドはすかさずキバフォームへと戻り、カードを取り出しセットする。

<FINAL ATTACKRIDE・・・KI・KI・KI・K
IVA!!>

電子音が鳴ると、キバの右足“ヘルズゲート”を拘束する鎖・カテナがはじけ飛ぶ。そしてディケイドは空高く飛び、キバの必殺技“ダークネスムーンブレイク”を立ち尽くしているティアナに放つ。

「ティアアアアアッ!!!!!!」

(はっ!?)

スバルの叫び声で我に返ったティアナだが、気づいた時には既に遅くディケイドのキックが放たれる。同時にもの凄い砂煙が発生し、ティアナがとうなったか確認できない。そこへエリオとキャロがスバルに向かって走ってきた。

「スバルさんっ!!」

「スバルさん、ティアさんはっ!？」

エリオとキャロはスバルに事の状況を聞こうとするが、スバルは啞然とした状態で砂煙のほうを見つめている。二人は「まさか!？」と思った時、砂煙が風によって徐々に晴れてきた。砂煙が晴れた場所にはティアナが立ち尽くしていて、ティアナの足数センチのところに地面にめり込んだディケイドの足があった。そして地面には巨大なキバの刻印が刻まれていた。

「あ・・・ああ・・・」

「・・・所詮、お前はその程度だ。・・・」

そう言うヘルズゲートが閉じ、キバからディケイドの姿に戻る。そしてディケイドはティアナに背を向けるとそのまま歩き出した。

『ティアさん!!』

エリオとキャロは歩いてくるディケイドの横を通り過ぎてティアナの傍へ駆け寄る。そしてスバルの横を通った時、スバルはディケイドに今にも泣き出しそうな声で言った。

「・・・士さん・・・なんで・・・なんで、こんな・・・」

「・・・まあ、自分で考えるんだな。」

ディケイドは立ち止まって返答を返すと再び歩き出す。スバルは齒

を食いしばって怒りの目を向けて立ち去っていくディケイドを睨み続けた。

突然のディケイドの乱入によって模擬戦は滅茶苦茶になってしまい、一人戻ってきた士は何も言わずに隊舎に戻って行ってしまう、あとから来たフォワードチームの精神状態が悪い事もあってか午後の訓練は急遽中止となった。スバルの肩を借りて歩いてきたティアナは隊舎についた途端、糸が切れた人形のように眠ってしまい、そのまま医務室へと運ばれていった。どうやら今までの無茶な自主訓練のせいで疲労が溜まっていたようだ。その日の夜、はやは士を部長室に呼んで話をする事にした。部屋にははやての他にリイン、シグナム、ヴィータの三人が集まっていた。

「それで士さん、何であんな事をしたんや？」

「どうもこうも、あいつのあの態度が気に入らなかったからさ・・・」

「どうしてですか？ティアナはちゃんと訓練もしていますし頑張

ってるじゃないですかあゝ」

はやての質問に士は「気に入らない」と話し、リインは不思議そうな感じで士の肩の上に乗ってくる。士はまんざらでもないのか、払おうとはしなかった。

「・・・今のあいつはただ“兄貴は無能ではない”と世間に見せ付けさせようとしているだけで、過去との決別ができていないのさ・・・」

「ティアナ自身が・・・か？」

「ああ、結局今のあいつは自分以外の周りの連中に劣等感を感じているだろうよ。周りには凄い才能を持っている奴らばかりだからな、その場にいる自分は“凡人だ”とか考えているんじゃないのか」士の話にシグナムが「どういうことか？」と聞くと、士はティアナ自身しか持っている才能が“自分は凡人”という思いと過去にの壁に阻まれて発揮できていないと答える。このままではティアナは六課の中で孤立していくだろう。

「ところではやて、なのはの事について一つ確認しておきたいことがあるんだが・・・」

「ん？何や？」

「俺が見る限り、なのはの訓練内容には個人能力ばかり向上させているようだが、あいつも過去に何かあったのか？」

「えっ！？そつ、それは・・・」

士の質問にはやての様子が変わり、ヴィータの表情も暗くなる。はやては意を決したように士の質問に答えようとした時だった。突然、モニターが空中に映し出された。その表示にはアラートの文字と警報が六課内に鳴り響く。

「!? これは・・・」

「緊急警報・・・主はやて!!」

「シグナム、ヴィータ、私は司令室に向かうから、皆を集めておいで! シャマル、なのはちゃんとフェイトちゃんを司令室に呼んどいて!」

「はいっ!」

「分かった!!」

「了解です!!」

はやての指示にシグナム、ヴィータ、シャマルは部屋から飛び出していき、はやては「話はまた今度や」と言っリインと一緒に司令室に向かって飛び出していった。

（・・・あの様子からして、何かあったようだな・・・なのはの奴にも・・・）

士は過去になのは自身に何かあったんだと、はやて達の様子を見て感じていた。

第七話：解き放て！過去の鎖（後書き）

こんにちは。diendです。

前書きで言いましたが、Wが第1話公開と言うことで、アップしました。Wも楽しみですが、こちらもぜひお楽しみに。

後、この話からはしばらく間を置きます。と言うのも自分も学生と言う身分で、色々と予定が詰まっておりますゆえ、できなくなってしまうようなのです。勝手言って申し訳ないのですが、ご理解いただけますと幸いです。

それでは、次回でお会いしましょう。

第八話：真実・過去への思い（前書き）

前回の更新から1ヶ月以上かかってしまいました。
遅くなって申し訳ありません。

第八話：真実・過去への思い

六課内に響くアラート音。はやては司令室で、ロングアーチから状況の報告を聞いていた。報告にはミッド近海にガジェットドローン二型つまり飛行型が12体出現したという。しかし付近にはガジェットは常に狙っているレリックやロストロギアの反応は無かった。しかもガジェット二型はこれまでの二型とは性能が格段に上がっているようだった。

それと同時に、Dr. ジェイル・スカリエッティの元へある通信が入った。仲間の召喚師ルーテシア・アルピーノからだった。

「おや、これは珍しい。君から連絡をくれるとは嬉しいじゃないか。ゼストとアギトはどうしたね。」

「今は別行動。」

ルーテシアは静かに答えると、空を見上げた。

「遠くの空にドクターの玩具おもちゃが飛んでるみたいだけど。」

「じきにきれいな花火が見えるはずだよ。」

そこでルーテシアは核心を突く。

「レリック？」

「だったら、君に真っ先に報告しているさ。」

そう言いながらスカリエッティはコンソールを叩く。

「私の玩具おもちゃの動作テストなんだよ。破壊されるまでのデータがほしくてねえ。」

「壊されちゃうの？」

「私はあんな鉄くずに直接戦力は期待してないんだよ。私の作品たちがより輝くためにデコイとして使うガラクタさ。」

「そう……じゃあせつかくだし、私にもやらせてくれない？」

そう言うところではディロンドライバーを取り出す。

「それはかまわないが、もう少し待っていてくれ。私から連絡する。」

「……………わかった。」

スカリエッティのお願いに少ししよんぼりした感じで同意し、通信を閉じた。

「しかし……おとなしかったあの子があそこまで出しゃばる様になってしまふとは……これもあの銃の影響かな。フフフフ……やはり私の作品はいい出来ばかりだ。」

スカリエッティは自ら作り上げた「作品」の完成度の高さに酔いし

れていた。

場所を戻して機動六課司令室。ガジェット二型は変わらず、旋回飛行を続けていた。場所は何もない海上でレリックも近くに海上施設も船もなく、明らかに「撃ち落しに來い」と誘っているようだった。

「テストロッサ・ハラOWN執務官、どう見る？」

はやては横にいるフェイトに意見を求める。

「犯人がスカリエッティなら、こちらの動きとか航空戦力を探りたいんだと思う。」

「うん。この状況ならこっちは中、長距離砲撃を放り込めば済むわけやし……」

「一撃でクリアですよ。」

横からラインが入ってきた。そこにフェイトが続ける。

「うん、でもだからこそ奥の手は見せないほうがいいかなって。」

「まあ実際、この程度のことでは隊長達のリミッター解除ってわけにもいかへんしな。高町教導官はどうやる？」

今度はなのはに問いかける。

「こっちの戦力調査が目的なら、なるべく新しい情報を出さずに今までと同じやり方でかたづけちゃう・・・かな？」

なのはの意見にはやてはグリフィスと顔を合わせてうなずき、「それで行こう」といいなのはとフェイトもうなずいた。

その後、ヘリポートには前線メンバーが集合してなのはとフェイトが状況を説明した。

「今回は空戦だから、出撃は私とフェイト隊長、ヴィータ副隊長の三人」

「みんなはロビーで出動待機ね」

「そっちの指揮はシグナムだ。留守を頼むぞ。」

『はいっ！』

「・・・はい・・・」

ヴィータの声にスバル、エリオ、キャロは元気よく返事を返すが、ティアナの声には覇気が無かった。ティアナは士リディケイドとの模擬戦という名の喧嘩の後、ずっと続けていた自主訓練での疲労のために戻ってきてから医務室ですっと眠っていたのだ。そして目を覚ました後も、士に負けたことが悔しい為か、酷く落ち込んでいる様でもあった。

「……ティアナは出動待機から外れておこうか……」

『!?!』

「そのほうが方がいいな、そうしとけ。」

ティアナの様子を気遣ってか、なのははティアナを出動待機から外して休ませようと思いヴィータもなのはの決定を肯定する。なのはの言葉にスバル、エリオ、キャロは驚きの声を上げる。しかしティアナは「命令に従わない奴は、使えないってことですか……」となのはに呟くように口にした。なのははティアナに「そんなことは当たり前的事だ」と言うが、ティアナはその言葉に反発する。

「現場での指示はちゃんと聞いて……教導だってちゃんとサボらずやって……それ以外の努力だって、教えられた通りじゃないと駄目なんですか？」

ティアナの発言にヴィータは足を踏み出そうとするが、なのはが手を出してヴィータを止める。

「私は、なのはさんたちのようなエリートじゃないし、スバルやエリオのような才能も……キャロみたいなレアスキルもない!少しぐらい無茶したって、死ぬ気でやらなきゃ強くなんなれないじゃないですか!?!」

ティアナがそう叫んだ瞬間シグナムがティアナの顔面を殴り、その場へ倒れる。

「心配するな。加減はした。」

シグナムはそう言うが、スバルはティアナの元へ駆け寄る。

「駄々をこねるだけの馬鹿は、なまじ付き合っているからつけあがる。」

「まったくだな。」

その時、奥から士が出てきた。どうやら今までをすべて聞いていたらしい。

「全く、少しは反省したかと思えば今度は駄々っ子か……ついには只のガキに成り下がったか……ティアナ。」

士はティアナを馬鹿にするかのように言いながら歩いてくる。ティアナはうつむいたままだ。

「士さん……」

「なのは、俺もつれてけ。」

「えっ!？」

「司令塔のティアナがああ調子じゃ、フォワードはまともに動けないだろ。それだったら俺が行ったほうがマシってもんだろ。」

「でも、はやてちゃんには……」

「話してある。だからさっさと行くぞ。」

なのは達にそう告げると、士はへりの中へ入って行った。なのは、フェイト、ヴィータは納得いかないようだったがへりに乗り込んでいく。その窓からフェイトがエリオとキャロに念話を送る。

「（エリオ、キャロ。ごめん、そっちのフォローお願い。）」

「（あつ、はい。）」

「（がんばります）」

エリオとキャロは表情を変えずにフェイトに返す。そしてへりは海上に向けて出発した。

「目障りだ。いつまでも甘ったれてないで、さっさと部屋に戻れ。」

シグナムはスバルに抱えられ、殴られたほほを抑えているティアナに冷たく言い放つ。

「あの、シグナム副隊長・・・その辺で・・・」

「スバルさん、とりあえずロビーに・・・」

エリオとキャロはフェイトに言われた通りフォローに回ったが、スバルが立ち上がり「シグナム副隊長」と力を込めたような感じでシグナムに向かって言った。シグナムが「何だ？」と返すとスバルは少したじろぎながらも続ける。

「命令違反は絶対だめだし・・・さっきのティアのものいいとか、それを止められなかったあたしは確かに駄目だったと思います。」

スバルの発言にティアナは少し首を上げる。

「だけど・・・自分なりに強くなろうとするのとか、きつい状況でも何とかしようと頑張るのってそんなにいけないことなんですか!!」8」

目に涙を浮かべながら訴えるスバルを見てシグナムは黙っている。

「自分なりの努力とか・・・そういうこともやっちゃいけないんでしょうか!!」

「自主練習もいいことだし、強くなることの努力もすごくいいことだよ。」

とそこへ何処からか声が聞こえた。そこにはいつの間にかシャーリーがそこに立っていた。

「持ち場はどうした？」

「メインオペレートはリン曹長がやってくれますから。なんかもう、みんな不器用で、見てられなくて・・・」

そしてシャーリーは真剣な顔で告げる。

「みんな、ちょっとロビーに集まって。私が説明するから・・・なのはさんのことなのはさんの、教導の・・・意味。」

「一方その頃、出動したへりの中」

なのはが士に問いかける。

「あの士さん、本当にはやてちゃんから許可をもらったんですか？」

「んっ？ いや・・・あれは俺の勝手な話だ・・・」

士の回答にヴィータとフェイトが驚く。

「はぁ！？ 貰ってない！？」

「士さん、それはさすがにまずいんじゃない・・・」

「そんなもん後でどうにでもなるってもんだ。」

『なるかぁ！！！！』

『うわぁっ！？』

「おわっ!？」

その時突然はやてが通信越しに大声を上げた。突然のことにその場の全員が驚く。

『ちょっと士さん、何で士さんまでのつとるんや!!』

「あゝまあいろいろあつてな。フォワードの代わりと言うか・・・なんというか・・・とにかく、お説教は後にしてくれ。」

『えっ、あつちよつと、士さー』

そう言うとき士はやてからの通信を強引に切った。

「あのゝ、さすがにあれはまずいんじゃない・・・」

「まあ何とかなるだろ。」

「だといいけどな・・・」

心配するなのはとヴィータをよそに士は一人平然としていた。

その頃スカリエッティアジト

ガジェットの迎撃が始まった頃、ルーテシアが再びスカリエッティに通信を入れた。

「おや、ルーテシア。どうかしたかい？」

『始まったのに、まだ行っちゃだめなの？』

ルーテシアは言う。どうやらさいそくのようなのだ。

「ああ。今管理局が現れて、撃墜中だからね。君もガジェットより管理局相手のほうがいいだろう。だからもうちょっとだけ辛抱してくれ。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

スカリエッティの要望にルーテシアは少し黙ってから「わかった」と言っただけで通信を切った。通信を切る瞬間、スカリエッティは彼女が舌打ちをしたように見えたという。

その頃上空のなのは達

ガジェットのポイントに到着し、先に出動したフェイトとヴィータの様子をなのは見ていた。

「なんだ、行かないのか？」

唐突に既にディケイドに変身した士が声をかける。

「いえ、すぐに行きますよ。さっさと終わらせて・・・」

「ティアナに言わなきゃいけないことがある・・・だろ？」

なのはの言葉の続きを行ってしまったディケイドになのはは笑って「はい。」と答える。それを聞いたディケイドは笑い返して、カードを取り出す。

「よしっ、じゃあさっさと片付けるか！」

<FORMRIDE・・・BLADE・JACK!!>

「はい！いくよ、レイジングハート。」

《All right, my master.》

ディケイドは“ブレイド・ジャックフォーム”に変身し、なのははレイジングハートに声をかけてガジェットの元へ出動した。

『おまたせ、ルーテシア・・・おや?』

スカリエッティがルーテシアに通信を入れた時、ルーテシアはすでにディロンドへの変身を終えていた。

『おやおや、ずいぶんと準備が早いね。待ちわびたかい?』

「・・・もう、行っているの?」

『ああ、思う存分やってくれたまえ。』

「そう・・・わかった。」

そう言うときディロンドはカードを一枚取り出し、ディロンドライブーにセットする。

<K A I J I N R I D E・・・B A T I M A J I N! !>

電子音が鳴り、ディロンドが前に向かって放つと三つの影が集まり、【バットイマジン】を呼び出す。続いてもう一枚の金色のカードを取り出し、セットした。

<F I N A L F O R M R I D E・・・I・I・I・I・I M A J I N
! !>

「ごめんね。すぐ終わるから・・・」

そう言うときディロンドはバットイマジンに向かって放つ。するとバットイマジンたちはまち姿を変え、巨大な体のイメージの暴走体“ギガンテス・ヘブン”へと姿を変えた。

「いってらっしゃい。がんばってね。」

ディロンドがそう言うと、ギガンテス・ヘブンはガジェットとなのは達のいる海上へ飛んで行った。

その頃なのは達

「ラスト2機。ヴィータ、士さん、願い。」

「あいよ。」

「まかせろ。」

フェイトの声にヴィータとディケイドはそれぞれ答える。

「行くぞ、アイゼン！ フォルム、ツヴァイ！！」

《Explosion!》

ヴィータの声にグラフアイゼンが反応すると柄の部分が伸び、カートリッジをロードした。

《Raketen Form》

電子音と共に、ハンマーヘッドの片方が推進剤噴射口に、その反対側がスパイクに変形し、大威力突撃型の【ラケーテンフォルム】へと姿を変えた。

「ラケーテェン・・・ハンマァァァァァァァァ！」

そしてヴィータはグラーファイゼン・ラケーテンフォルムの必殺技“ラケーテンハンマー”でガジェットを破壊する。

一方ディケイドは手にしていたライドブッカードを戻し、カードをセツトする。

<FINAL ATTACK RIDE・・・B・B・B・BLADE
E!!！>

電子音と共にディケイドはガジェットに向かってブレイドのキック技“ジャック・ライトニングブラスト”で破壊した。
ロングアーチもその様子を確認する。

「スターズ2と士さん、23、24機目撃墜。これで全滅です。」

「増援ありません。」

アルトとルキノの報告を聞き、グリフィスは残骸の回収を要請するよう指示した。

「待機する必要もなさそうやから、三人には戻ってもらってもええかな?。」

「はい、フォワード部隊も解散でいいでしょう・・・」

2人が話していると、突然アルトは「なっ、これは・・・」と大声で驚いていた。

「どないした!?!」

「未確認の反応がヘリのほうへ向かってきています!!」

「なんやて!?!?」

「映像出ます。」

そして現れた映像を見てはやて達は驚愕した。

「なんや・・・これ・・・。」

一方、そのことを知らないのはたち一行。

「さて、じゃあ戻るとするか。」

「そうだな。けど、後ではやてに何言われるか楽しみだな」士。」

「嫌なこと思い出させるな・・・」

ヴィータがディケイドをからかいながらも、4人がへりへ戻ろうとしたその時、突然何処からか巨大な針状の物体が飛来した。突然のことに驚きながらもなんとかその場から退避した。そしてその方向を見たなのはたちは驚いた。

「なっ・・・なんだ、あれ!!?」

ヴィータが大声で驚く。そこには巨大な羽を持ったギガンテス・ヘブンがいたからである。

「あいつは・・・」

「士さん、ご存じなんですか!？」

「ってことはこいつも・・・」

「ああ、ライダーの世界の奴だ。まったく、よりによってこんなのが出てくとはな。」

ディケイドは大雑把にギガンテスヘブンの説明をし、迎撃に入った。しかし、巨体の割に素早い移動で、接近戦では苦戦を強いられる。そこで距離を取り、砲撃を撃とうとするが巨大な針を飛ばす妨害を受け、まともに攻撃することができない。

「くそっ、このままじゃラチあかねーな・・・」

「そうだね。いったい、どうしたら・・・」

ヴィータとフェイトはこの状況をどうするか考えていた。その近く

でディケイドはなのはに話しかける。

「なのは。お前、足場とか作れるか？」

「えっ、足場ですか？一応、できますけど・・・でもどうして？」

「ま、ちょっと待ってな。フェイト、ヴィータ！！」

そう言うのとディケイドはフェイトとヴィータに大声で伝える。

「今から俺があのだかぶつをぶっ倒す！準備がいるから、それまで引き付けててくれ！」

「えっ、あっ、はい！」

「お、おう。なんかよくわかんねーけどわかった！」

フェイトとヴィータは言われた通りギガンテスヘブンを自分達に引き付ける。ディケイドはその場から少し離れ、なのはが作った魔法陣型の足場の上に乗り、ケータッチを取り出す。

<KUGA! AGITO! RYUKI! FAIZ! BLADE!
HIBIKI! KABUTO! DEN-O! KIVA! >

それぞれのライダーマークをタッチし、最後にディケイドのマークをタッチする。

<FINAL KAMENRIDE・・・DECADE!!! >

電子音と共にディケイドはコンプリートフォームへと変身した。

「よし、なのは。俺の隣にもう一つ作ってくれるか？」

「えっ、わ、わかりました。」

なのはは言われた通りもう一つ足場を作る。そして足場ができたのを確認すると、ディケイドはケータツチをタッチする。

<H I B I K I ! K A M E N R I D E . . . A R M E D >

電子音が鳴ると、ヒストリーオーナメントのカードが変わり、足場の上に【仮面ライダー^{アームド}装甲響鬼】を呼び出した。そして新たにカードをセットする。

<F I N A L A T T A C K R I D E . . . H I ・ H I ・ H I ・ H I ・ H I B I K I ! ! >

電子音が鳴ると、ディケイドはライドブッカー・ソードモードを顔の前に構え、響鬼も手にしていた“アームドセイバー”を同じように構える。そして技を放つための力をチャージする。

「ハアアアアア・・・・・」

「フェイトちゃん、ヴィータちゃん、離れて!!」

なのはの声にフェイトとヴィータは即座にその場から離れた。

「ハアアアアアアアア!!」

その瞬間ディケイドと響鬼は音撃による波動をぶつける必殺技“鬼^きしんかくせい”

神覚声”を放つ。それをくらったギガンテスヘブンはうめき声をあげながら爆発し、ディケイドのヒストリーオーナメントのカードが戻り、響鬼が消えた。

「やったな、士。」

「ああ・・・ま、何とかなったか。」

ディケイドはヴィータの言葉にブッカーソードをなぞる仕種をしなから答える。さらにフェイトが士に尋ねる。

「でも士さん、今のもさっき言った通り・・・」

「ああ、ライダーの世界のだ。だが、なんであんなのまで・・・」

「お前のせいだよ、ディケイド。」

『!?!?』

突如何処からか声が聞こえ、あたりを見回した士たちの前にオーロラが現れ、その中から鳴滝が現れた。

「あなたは・・・」

「おお。君はあの時の・・・」

鳴滝はフェイトの顔を思い出し、軽く答える。なのははフェイトの様子を感じ問いかける。

「フェイトちゃん、この人知ってるの?」

「えっ、えっと・・・士さん」

「後で話す。それより俺のせいってどういうことだ？」

フェイトはディケイドにどうするか尋ねたが、ディケイドは適当に流し、鳴滝の言葉の意味を訪ねた。

「この世界にもライダーが生まれたということだよ。」

『!?!?』

その言葉に四人は驚愕した。鳴滝はさらに続ける。

「そのライダーはとてつもない力を持っている。果たして君が勝てるか・・・今のうちに旅を終わらせたらどうかかな？」

「余計なお世話だ。何と言われようと旅を終わらせるつもりはねえ。」

「ふん、まあいい。いずれこの世界も君に破壊されてしまうのだから。それまでせいぜいいきがっているといい。」

「あっ、待ちやがれ！」

とつさにヴィータが捕まえようと鳴滝にアイゼンをふるったが鳴滝はオーロラを出現させ防ぎ、そのまま消えていった。

「わりい、逃がした。」

「仕方ないよ。早くへりに戻ろう。」

なのはがヴィータを慰めている時、デイケイドは鳴滝の言葉がずっと引っかかっていた。

（この世界にもライダーが・・・ま、だったらまた倒せばいいか。）

そう納得し、4人はへりへと戻った。

「えーっ、駄目だよシャーリー。人の過去勝手にばらしちゃ。」

「ごっ、ごめんなさい。その・・・なんかこう・・・見てられなくて。」

出勤から帰ってきたなのははシャーリーからなのはの過去をティアナ達に話したことを告げられた。なのはが9歳の時魔法と出会い、命がけの戦いを繰り返し、体の負担を考えずに無理をした挙句、八年前歩くことすら危ぶまれるほどの重傷を負ったこと。それを聞いたフォワード陣はずっと絶句状態だったという。これを聞いた士は「やっぱりあったんだ・・・」と改めてはやてやヴィータの動揺を思い出した。

「ま、いずれはばれることだしな。」

ヴィータも半笑いで応じる。

「シャーリー、ティアナは今どこにいるかな。」

なのははシャーリーにティアナのいる場所を訪ねた。シャーリーが「あつ、それなら・・・」と場所を伝えると、なのははすぐさま駆けて行った。残ったメンバーは少しの沈黙があつたのちシャーリーが口を開いた。

「あつ、そうだ。士さん、ちょっとロビーに来ていただけますか？
フェイトさんもヴィータ副隊長も。」

「なんだ？ここじゃだめなのか？」

「ちょっと重要なので。八神部隊長もいらしてますし・・・」

それを聞いた士に嫌な予感が走る。フェイトは苦笑いで、ヴィータはニヤニヤしながらその様子を見たながら、一行はロビーへと向かった。

ロビーにはすでにはやて、シグナム、シャマルが座っていた。特にはやては明らかに怒りをあらわにした顔をしている。士達もその周りに座ると、はやてが士に問う。

「さくてまずは、勝手な事をした理由を話してもらおうか士さん？」

「うつ・・・」

はやての顔は笑っているが、その表情から放たれているドス黒いオーラとその迫力に士の顔が少しひきつる。

「あゝ・・・えと、これには・・・その・・・」

「まあ、どんな理由があらうと、部隊長の判断に勝手な事をしたらあかんのやけどな」

（じゃあ、なんで聞いたんだよ！）

士は心の中で突っ込む。さすがにあの気迫の前で声に出すのは不可能と感じたからだらう。ちなみに周りのメンバー全員もはやてのオーラには恐怖を感じて、苦笑い状態である。あのはやて大好きっ子のヴィータでさえも。

「でもまあええ。シャーリーの話もあるし、今はまだええわ。けど後でそれなりのお仕置きがあるから覚悟することやな」

「まじかよ・・・」

士の顔はとてつもなく青ざめて、がっくりとうなだれた。そんな士を無視してはやてはシャーリーに話を振った。シャーリーはコンソールを叩きながら話し始めた。

「実は今まで士さんに協力していただいて、士さんのデバイスを調べさせてもらいまして・・・それで変なものが見つかったんです。」

「変なもの？」

「とにかくこれを見てください。」

そう言うとシャーリーはコンソールを叩き、いくつかのモニターを出す。士も顔をあげてそれを見ると、そこにはいくつかの絵が映っていた。士はすぐさま反応する。

「これは・・・まさか・・・」

「やはりお分かりですか、士さん」

「ナイト・・・威吹鬼・・・サガ・・・全部俺が旅してきた世界のライダーだ。」

士はモニターに映っているライダー達の映像に驚愕した。その横でフェイトが改めてシャーリーに問う。

「それで、士さんのデバイスにこれが入っていたのはわかるけど・・・」

「これが何だというのだ？」

シグナムが途中から加わるとシャーリーはおもむろにいつの間に持ってきたのかアタッシュケースを取り出した。

「それを元にこれを作ったので、見ていただきたくて・・・」

そう言いながらアタッシュケースをあける。そこには黒と銀の謎の機械ともう一つ・・・

「それってまさか・・・」

「士の持つてるカードか!？」

「何!？」

はやてとヴィータに言われ士は驚いてそれを見る。だが士はすぐに気付き、答える。

「いや・・・違う。似てるけど、こんなカードは持ってないぞ。」

「はい。これはデータを元に魔力で生み出したものです。ですが質感は士さんの持つてるものと同じですよ。」

「確かに・・・」

いくつかを手にとった士は自分のカードと感じは同じだと実感した。

「それで・・・」とはやてがシャリーに尋ねる。

「このカードをその機械を使って士さんのように仮面ライダーの力を使える・・・ってことでええんか？」

「はい。この機械・・・『ライドドライバー』は士さんのベルトと同じように、カードをセットすれば力が使えます。」

「それじゃ俺の立場が危うくなるんじゃないか？」

「あっ、ご心配なく。士さんが既に持っているカードはありませんから。もちろん、士さんが渡してあげれば使えますし、逆もできますよ。」

シャーリーの説明を聞いた士は「それならいいが・・・」と若干気に入らない様子だった。シャーリーはさらに続ける。

「まあ、一応ほぼ完成で、人数分もありますので、実戦で使っただいてテストする感じにはなるんですけど・・・」

「何か問題でもあるの？」

シャーリーの様子を見てフェイトが尋ねると、シャーリーは続ける。

「問題というわけでもないんですけど、隊長、副隊長の方々はともかく、フォワードのみんなにどのタイミングで渡そうかと思って・・・」

「まあ、そこはなのはちゃんと相談して決めればええんちゃうか？」

「確かに、成長ぶりを見ながら考えればよからう。」

はやての提案にシグナムも同意し、シャーリーは「わかりました。」と言ってカードとライドドライバーを仕舞った。

「さて、シャーリーの話も終わったとこやし、そろそろ士さんのお仕置きを決めへんとなあ」

「げっ・・・！」

はやては怪しい笑みを浮かべながら目を光らせる。逆に士は今まですっかり忘れていたので、一気に顔が青ざめた。

「はぁ・・・」

あの話が終わった後、士は海岸沿いを歩いていた。結局士の今回の処分は“一週間ほどはやての命令に絶対服従”というラインの提案で終わった。そのすぐ後になのはが合流し、今はライドドライバーの詳しい説明を受けているはずである。

「しかし一週間とはまいったなあ、ったく・・・ん？」

これからどんなことをされるのかとため息をつきながら歩いていた士の前にティアナの姿があった。

「よう、ティアナ。」

「あっ、士さん・・・」

「まだいたのか？なのはと戻ったのかと思ったが・・・」

「ええ。そう言われたんですけど、もう少し考えたくて。」

「そうか。」

士はティアナに話しかけてから少し沈黙が続いた。

「・・・んで、いつまで見てんだ？スバル、エリオ、キャロ。」

「えっ!？」

士の言葉にティアナが驚いていると、近くの草むらからスバルとエリオとキャラが顔を出した。

「あっ、あんたたち・・・」

「ごめん、ティア・・・」

「大方、盗み聞きでもするつもりだったんじゃないのか？」

「すみません・・・」

「ごっ、ごめんなさい・・・」

驚くティアナに士が隠れていた理由を話すとスバル、エリオ、キャラは謝る。

「それで、なのはの話を聞いてどうだった？」

「・・・自分たちのやっていた無茶が間違っていた事を思い知らされました・・・」

「そっか。まあ次からは気をつけろよ。」

「はい・・・あの、士さん。一つ、お聞きしたいんですけど。」

ティアナはとつに士に尋ねる。

「何だ？」

「士さんは言いましたよね、兄の背中を・・・過去に囚われているようでは強くなれないと・・・あれはどうしてですか？」

「・・・過去の事をずっと引きずっていたって過去は過去だ。完全に忘れるとは言わないが、いつまでも囚われずに過去を踏まえて未来に向かえということさ・・・現にエリオとキャロだってフェイトに助けられたから今の自分があるんだろ？そして自分の力を未来に向かって使うために頑張ってるんだろ？」

「未来に向かえ・・・」

士は過去を踏まえて未来へ向かえとティアナに話し、エリオとキャロも士の言葉に強く頷く。

「・・・それに、過去の自分がどういう奴だったかも分からない奴だっているんだぞ。お前らの目の前に・・・」

『えっ！？』

士の一言に四人は驚く。士は自分の過去の事が一切分からない記憶喪失者であり、世界を旅することですっかり自分の世界が見つかるかとも思い旅を始めることにして、旅の中で、その世界の者からは“世界を破壊する存在”とか“悪魔”と言われていた、とスバル達に話した。その話にスバル達は驚きを隠せないでいた。

「士さんが・・・世界の破壊する存在！？」

「まあ、本当かどうか分からないが・・・だが俺は過去がどうあ

れ自分の道は貫き通すつもりさ」

驚くティアナに士が答えると、スバルが突然声を上げた。

「そんなわけないですよ！士さんが破壊者だなんて絶対にないです！」

「何でそう思うんだ？」

士はあくまでも冷静に返す。

「理由はないですけど・・・けどあたしは絶対に違うって信じます。」

「僕も！」

「私でもあります！」

「お前ら・・・」

スバル達の言葉に少し嬉しさを感じているとティアナも士に言う。

「士さん。私もスバル達と同じです。あなたがどういう存在であれ、私は士さんが世界を破壊するようなことをしないとします。士さんも“強さの意味”を教えてくれた者の一人ですから。ですからこれからも仲間として共に戦ってくれますか？」

ティアナが士にそう言うのと右手を差し出してきた。士は「せいぜい足手まといになるなよ」と皮肉を言いつつもティアナの手を握り返す。そこへスバルも「私も宜しく願います！」と言って二人の

手の上に手を乗せ、さらに「僕たちも!!」とエリオとキャロもスバルの手の上に自分たちの手を乗せる。士はまたこの世界での仲間を得る事になった。

しかしこの後、隊舎に戻った士を待っていたはやてによって機動六課の隊舎内では不気味な笑い声が約二時間ほど響き渡ったとか・・・

第八話：真実・過去への思い（後書き）

なんか・・・無理矢理な感じになってしまいました。自分ではよくできたかなと自負しております。（ライドドライバーについては剣のラウズアブゾーバーを想像していただければいいかと。また後日説明します。）

まあこんな所で軽くディロンドの説明を。

今回初登場したファイナルフォームライド（以下FFR）は多数あり、中には特定怪人用のスペシャルFFRもあります・・・といった感じです。

今回は時間が掛かるかもしれませんが応援していただけると幸いです。

改めて言います、遅くなって申し訳ありませんでした。m（）m（10／1／26追記：新アイテム「ライドリーダー」を「ライドドライバー」に変更しました。）

番外編：派遣任務・13番目の地球（前編）（前書き）

完全オリジナルで書いた番外編です。
楽しんでいただければ幸いです。

番外編：派遣任務・13番目の地球（前編）

これはホテル・アグスタへ向かう4日前の話である。

「えっ、派遣任務・・・ですか？」

「しかも異世界に!？」

「うん、決定事項。緊急出動がなければ2時間後には出発だそうだから、スバル、ティアナ」

『はいっ!』

「今の作業かたずけたら、出動準備をしておいてね。」

「はいっ。なのはさん」

「了解です。」

スバルとティアナはなのはからの連絡に対して、それぞれ返した。

つい先ほど、聖王教会からロストログア回収の依頼が来た。元々本局から聖王教会へ向かって送られたものだが、どこも人手不足のため、やむを得ずに機動六課へ来たのである。依頼者である聖王教会騎士カリム・グラシアも六課はあまりミッドから出たくなかった

らしい。

なのはがスバルとティアナに話している頃、フェイトもエリオとキヤロにそのことを伝えていた。
キヤロがフェイトに尋ねる。

「レリックかガジェットの出現なんでしょうか？」

「まだわからないけど、ロストログア関連ではあるみたいだね。」

「はい。」

その答えにエリオが答えた。

「ま、前線メンバー全員出動だし、いつもの任務とあまり変わらないよ。エリオもキヤロも平常心でね。」

『はいっ』

「じゃ、準備して屋上へリポートに集合ね。」

『はいっ、フェイトさん』

エリオとキヤロはフェイトからの励ましと連絡に二人同時に返した。

それから数時間後、ひと足早くヘリポートへ着いたスバルとティアナの元へエリオとキヤロが合流した。

「あつ、エリオ〜キャロ〜!」

「スバルさん、ティアさん。」

「すみません。おまたせしました。」

「まだ時間あるわよ。隊長達も来てないしね。」

そんなことを話していると、いいタイミングで隊長副隊長陣＋3人が入ってきた。

「おお〜。みんなおそろいやね。」

「あれ？八神部隊長にヴィータ副隊長・・・」

「おう。」

「シグナム副隊長にシャル先生も・・・」

「ああ。」

「は〜い。」

スバルとキャロがメンバーを確認すると、ヴィータ、シグナム、シャルはそれぞれ返し、そしてどこからかリインが飛んできた。

「私もいるですよ。」

「リイン曹長も・・・それに士さんも!？」

「ああ。部隊長殿に誘われてな。」

隊長達の後ろのほうには士の姿もあった。士の言う通りはやてが誘ったからである。

このメンバーを見てエリオが尋ねる。

「まさか、この全員で出動ですか？」

「うん。部隊はグリフィス君が指揮を取って、ザフィーラがしっかりと留守を守ってくれる。」

「詳細不明とはいえロストロギア相手だし、主要メンバーは全員で出撃ってことで。」

「あとは、行き先も・・・ちょっとね。」

「行き先・・・何所なんですか？」

「そういや、俺も聞いてないな。そろそろ教えてくれ。」

ティアナの問いに士が便乗する。というものはやてに誘われた際、行き先に関して士が尋ねたのだが「後のお楽しみや。」と言われ、聞けなかったのだ。そしてはやてはゆっくりとその行き先を告げた。

「第97管理外世界・・・現地惑星名称、地球」

『!?!?』

（なるほど。そういうことか。）

それを聞いたフォワード陣は驚き、士は自分が呼ばれたわけを理解した。

そしてはやては続ける。

「その星の小さな島国の小さな町・・・日本、海鳴市。ロストロギアはそこに出現したそうや。」

それを聞いてキャロが尋ねる。

「地球って・・・フェイトさんが昔住んでた・・・」

「うん。」

「私とはやて隊長はその生まれ。」

「そや。」

フェイトに加え、なのははやてが補足する。シグナムとシャマルも語る。

「私たちは6年ほど過ごしたな。」

「うん。向こうに返るの、久しぶり。」

「まあ、ある程度の広域捜査になるから、司令部も必要やしな。」

「というわけで出発だ。準備はいいか？」

ヴィータの言葉にフォワード陣は『はいっ!!』と返事をする。

「では、出発！」

なのはの掛け声とともにへりは発進した。

出発したへりの中で唐突にエリオが口をあけた。

「ちょうどこの間、みんなの故郷の話をしたばかりで、なんか不思議なタイミングですね。」

その発言にスバルは笑って、「ほんとっ」と返した。その隣ではこれから向かう第97管理外世界のデータに目を通していた。

「えーっと・・・第97管理外世界・・・文化レベルB・・・」

「魔法文化なし、次元移動手段なし・・・って、魔法文化ないの！？」

「ないよ。うちのお父さんも魔力ゼロだし。」

「スバルさん、お母さん似なんですよね。」

「うん。」

「いや、なんでそんな世界からなのはさんとか八神部隊長みたいなオーバーSランク魔導師が・・・」

「突然変異と言うか、たまたまうな感じかな。」

突然のはやてからの説明に驚き、勝手にこんな話をしていたことにティアナは謝ったが、はやては「ええよ別に。」と返した。代わりになのはが補足する。

「私もはやて隊長も魔法と出会ったのは偶然だしね。」

それを聞いたはやても「なっ。」と返すと、フォワード陣は『へえ。』と呆気ない声を出していた。

その頃別の席ではシグナム、ヴィータ、士もだべっていた。

「お前にとっても久ぶりじゃないのか、士。」

「だな。だが、そっちには危険要素みたいのはないのか？」

「どういう意味だよ？」

ヴィータが尋ねると士は答える。

「俺が今まで旅してきた世界では妙な怪物ばっか出てきて平和な世界なんてなかったからな。」

「なるほどな。だが安心しろ。これから行くところは平和そのもの

だ。」

「そうか。なら少しはゆっくりできそうだ。」

シグナムの言葉に士は少し安堵込めたように言った。

ちなみに士が異世界から来た事を知っているのは八神家とシャーリィ、なのはとフェイトだけである。というものはやてが士が異世界から来たことがばれると色々ややこしくなるからと言うので極力自分が異世界から来たことは言わないようにと言われているからである。この3人の会話もフォワード陣には聞こえないようにしている。

その隣でシャルマルはあるものを取り出した。子供用の洋服だった。

「はい。リインちゃんのお洋服。」

「あつ、シャルマルありがとです。」

それを見たキャロが疑問を投げかける。

「え？リインさん、その服って・・・」

「はやてちゃんの、ちっちゃい頃のお下がりです。」

「あ、いえ、そうではなく・・・」

「なんか、普通の人のサイズだなんて。」

エリオもそのことに疑問を持っていたようだ。それに対してリインは「あゝ。」と言った感じで答える。

「フォワードのみんなにはまだ見せたことなかったですね。」

『?』

フォワード全員が首をかしげる。その後ろで士は「ああ、あれか。」と言った顔をしながら見ていた。

そしてリインはある特殊魔法を発動する。

「システムスイッチ、アウトフレームフルサイズ!」

リインが唱えた瞬間リインの体が巨大化し、人間くらいの大きさになる。その様子にフォワード一同は驚いた。

「一応、これくらいのサイズにもなれるですよ。」

「でかっ!」

「いや、それでもちっちゃいけど・・・」

「普通の女の子のサイズですね。」

ティアナがスバルが驚き、キャロは冷静に反応する。

「向こうの世界にはリインサイズの人間も、ふわふわ飛んでる人間もいねーからな。」

「こっちにもいないんじゃないか。あいつが特殊なだけで。」

士がヴィータの発言に突っ込むと、ヴィータは「うるせー!」とか

騒いでいたが無視して、リインの写真を取った。ちなみに士が驚かないのは八神家で世話になっていたときに掃除をするからと言って一度見たからである。その時士は「やっぱ何でもありだ・・・」と心から思ったという。

「だいたい・・・エリオやキャロとおんなじくらいですかね。」

「ですね。」

「リインさん、かわいいです。」

リインが二人に歩み寄りながら言う二人は返し、リインはキャロに褒められて「えへへっ。」と笑った。スバルがリインに尋ねる。

「リイン曹長、そのサイズでいたほうが便利じゃないですか？」

「こっちの姿は、燃費と魔力効率があんまりよくないですよ。コンパクトサイズで飛んでるほうがラクチンなんです。」

「なるほど。」

リインの答えにキャロが納得したように言った。その時、到着を知らせるアラームが鳴った。シグナムがはやてに声をかける。

「八神部隊長、そろそろ・・・」

「うん。ほんならなのは隊長、フェイト隊長。私と副隊長達はちょうど寄る所があるから。」

「うん。」

「先に現地入りしとくね。」

『お疲れ様です!』

フェイト、なのは、フォワードからの言葉に「はーい。」と返すはやて。

「あ、士さんはなのは隊長達と一緒にいってな。」

「ああ。わかった。」

士は適当に答え、機動六課はそれぞれ地球へと向かった。

なのはにフェイト、フォワード陣と士は先に待機場所となる場所へ転送ポイントで到着した。

「はいっ、到着です!」

リインがいち早く声を出す。

「はあー。」

「ここが・・・」

「なのはさん達の・・・故郷。」

キャロ、ティアナ、スバルが驚いていると、フェイトが声をかける。

「そうだよ。」

「ミッドとほとんど変わらないでしょ。」

「空は青いし・・・太陽も一つだし・・・」

「山と水と、自然のにおいもそっくりです。」

キャロの言葉にフリードも「キュクル。」と反応する。

「湖、きれいです。」

「うん。」

フォワードが初めての地球に感動している頃、士は一人悠々と端のほうで写真を取っていた。そこへフェイトが話しかける。

「どうですか、士さん。この世界の地球は？」

「ああ。すごくのどかでいいんじゃないか？」

士のぶっきらぼうな反応にフェイトは「そうですか。」と笑顔で返した。その時ティアナが切り出す。

「つというか、ここは具体的には何処でしょう？　なんか、湖畔のコ

テージって感じですが・・・」

「現地の住人の方がお持ちの別荘なんです。捜査員待機所としての使用を快く快く許諾していただけたですよ。」

「現地の方・・・」

キャロがそうつぶやいた時、1台の車が近づいてきた。

「あ、自動車。こっちの世界にもあるんだ・・・」

ティアナが小さく関心していると、車からショートカットの女性が現れた。

「なのは！フェイト！」

「アリサちゃん」

「アリサ」

その女性に対してなのはとフェイトは気軽に声をかけ、ハイタッチをした。

「何よもう、ご無沙汰だったじゃない。」

「にやははは、ゴメンゴメン。」

「色々忙しくって。」

「あたしだって忙しいわよ。大学生なんだから。」

そんな中、リインも気軽に声をかけた。

「アリサさん、こんにちわです。」

「リイン！久しぶり。」

「はいです。」

リインがあいさつを終えると、わけがわからないみたいな感じをしているフォワードメンバーにフェイトが説明する。

「あ、紹介するね。私となのは、はやての友達で、幼馴染の・・・」

「アリサ・バニングスです。よろしく。」

『よろしくお願いします！』

「まあ、よろしくな。」

アリサが挨拶をして、フォワード陣が返すと、いつのまにか現れた士も返して、アリサの写真を取った。それを見たアリサがなのはとフェイトに小声で話しかける。

「ねえ、あの人が門矢士さん？」

「えっ！？そうだけど・・・」

「どうしてアリサが知ってるの？」

「前にはやてからメールをもらって、それでね。」

アリサは以前はやてからメールをもらって知っていたという。

「あ、それで思い出したけどはやて達は？」

「思い出したって・・・」

アリサの発言になのはが突っ込み、リインが補足する。

「別行動です。違う転送ポートで来るはずですので。」

「多分、すずかのところに・・・」

なのは達が着いたのと同じ頃、はやて達も地球のある場所へ到着した。その時、近くにいた猫達が驚いて逃げ出した。

「あつ、ごめんなにゃんこたち！」

「猫ちゃん、久しぶり。」

シャルが久しぶりに会った猫達に挨拶をした。

「はやてちゃん！」

「すずかちゃん！」

はやてを呼びながら、一人の女性が現れた。はやて達のもう一人の幼馴染・月村すずかである。

「久しぶりや。すずかちゃん、元気やったか？」

「うん。元気、元気。」

「いつもメールありがとうな。後にゃんこたちの写真。」

「ううん。はやてちゃんこそ、ありがとう。いつも気を使ってくれて。」

「あゝもう、そんな・・・お家のお庭を転送先に使わせてもらうてるんやし・・・」

と、はやてとすずかは久しぶりに会ったことを喜ぶ。そしてすずかは後ろにいた守護騎士たちにも挨拶をし、シグナム達もそれを返した。そして、はやてに向き直る。

「お仕事だから、あんまりゆっくりはできないんだよね。」

「ううん、そうなんよ。まあ、なくし物探しなんやけどね。」

「がんばって。時間あるようなら、ご飯とか一緒に食べよ。」

すずかのそんな誘いにはやては笑いながら「きつと。」と答えた。
そのあとすずかは車を出しに行くと言い、はやてもそれに付いて行った。シグナム達ヴォルケンリッターは入口の方へ回ることになった。

「今日はアリサちゃんとお出かけの約束だったから、途中まで一緒に行ってもいいかな？」

「もちろん！・・・あ、そうそう。前にメールで話した門矢士さんも来てるんやで。」

「へえ、そうなんだ。早く会ってみたいなあ。」

はやてから士が来ていることを聞いたすずかは、士と会うことをさらに楽しみにした。

現地の付きしばらくして、なのはは今回の任務について説明簡単に説明を始めた。

「さて、じゃあ改めて今回の任務を簡単に説明するよ。」

『はいっ！』

フォワード4人の返事をする、モニターを展開した。

「搜索地域はここ、海鳴市の市内全域。反応があったのは、ここと、ここ。」

「移動してますね。」

なのはモニターに反応地点を示すと、ティアナが対象が移動していることに気付く。フェイトが「そう。」肯定する。

「誰かが持って移動してるか、独立して動いてるのかわからないけど・・・」

「対象ロストログアの危険性は、今のところ確認されてない。」

「仮にレリックだったとしても、この世界は魔力保有者がめったにいないから、暴走の危険はかなり薄いね。」

フェイトが話し終わると、なのはがコンソールをいじりながら続ける。

「とはいえやっぱり相手はロストログア。何が起こるか分からないし、場所も市街地。油断せずに、しっかり搜索をしていこう。」

「では、副隊長達には後で合流してもらおうので・・・」

「先行して出発しちやおう。」

『はいっ!』

フォワード4人の声と共にスターズ、ライティングに別れた。捜査

方法としては、スターズは広域探査をリインにしてもらい、ティアナのクロスミラージュにも簡易版の探査魔法がセットしてあるのでリインとクロスミラージュで別れて搜索することになった。ライトニングは市内の各所にサーチャーとセンサーを設置するだけと、割と簡単なものだった。しばらくしてシグナムが合流し、ロングアーチの準備も完了。ウィータは探索と設置をしながらスターズに合流することとなった。

そしてはやてが仕切る。

「ほんなら、機動六課主張任務、ロストログア探索、任務開始や！」

『了解！』

はやての掛け声と共に任務が開始した。

開始してしばらくして、なのはが広域探査中のリインに話しかけた。

「リイン、久しぶりの海鳴の街はどう？」

「ふうりん・・・やっぱり懐かしいです。なのはさんは？」

「私は懐かしいっていうより、『あれ？ 仕事なのに帰ってきちゃった。』みたいな感じ。」

なのはのそんな言葉に、リインは笑って返した。

スバルとティアナは探索しつつ、初めて来た海鳴市の様子を見ていた。

「つか、ミッドのちょっと田舎の辺りと大差ないわね。街並みも人の服装も。」

「うーん、あたしは好きだな。こういう感じ。」

「まーね。なんかのんびりしてる。」

ティアナが肯定すると、スバルが「あっ!」と何かを見つけた。

「ティア! あれ、アイス屋さんかな?」

「ああ、そうかも・・・って止めなさいよ、任務中に買い食いなんて。恥ずかしい。」

即行でティアナに止められ止められ、残念そうな声を漏らしたスバルであった。

その頃ヴィータは上空からなのはに連絡を入れる。

「おう、なのは隊長。あたしはロングアーチからの直接指示で動いてっからな。上空からのセンサー散布だ。」

「(了解。お願いね、ヴィータ副隊長。)」

「(リインも手伝わなくて平気です?)」

途中でリインが通信に割り込む。

「平気だ。リインはなのはを手伝ってやんな。お前の探査魔法は優秀だからな。」

「（はいです、ヴィータちゃん。）」

「（じゃ、またあとで）」

「おう。」

その頃、ロングアーチ。シャルはコンソールを叩いていた。

「サーチャー、動作確認。順調です。」

「ん。これなら、夜までにはけっこう進むな。」

「はい。」

はやてとシャルは順調な様子に満足げだった。そんな中・・・

「それにしても士さん、暇そうやな。」

「まあな。」

士はそばのソファに寝っ転がっていた。魔法の使えない士はサーチャーをセットすることができないので、ロングアーチで待機することになっていたからだ。

「しかし、なんかやることはないのか？写真も大体撮ったし、やることがないんだが。」

「うーん・・・まあ、その内何かあるんちゃうか？」

「まさか、このまま何もなかったりして・・・」

「不吉なこと言うな、シャルマル。」

シャルマルの言葉に突っ込みながらも、士は出番はないかと軽く心配だった。

その頃、車で移動中のアリサとすすか。

「なのは達、相変わらずがんばってるみたいね。」

「うん、晩ご飯は私達で用意しておこう。せっかくコテージなんだしバーベキューとか良いよね。」

「いいわね。なのはの生徒達、たっくさん食べそうだったし。たっぷり買い出し行っところか。」

「うん！・・・そう言えばさっき会った士さんて、はやてちゃんの話だと異世界の人なんだよね。」

「ああ、そうね。何かそっけない感じの人だったけど・・・」

「でも、なんか良い人みたいだったよね。」

「うん、それはあたしも感じた。もっといろいろな話聞いてみたいかな。」

「うん、私も。」

2人は士の話をとても楽しそうに話していた。

番外編：派遣任務・13番目の地球（前編）（後書き）

今回は本編を一時中断して、番外編を先に書きました。

サウンドステージ01を元にしたので若干セリフが多めですが、その辺はご容赦願います。

（あと、知っている方がいればヘリ内でティアナが何に対して謝ったか教えてください。聞いているだけではよく判らなかったの・・・）

ではまた（＾Ｏ＾）
またしばらくかかるかもしれません・・・

番外編：派遣任務・13番目の地球（後編）（前書き）

あけましておめでとうございます。

やっと完成したのでアップします。

これからどうぞ、よろしくお願いします。

番外編：派遣任務・13番目の地球（後編）

第97管理外世界・地球でロストログア搜索の任務にあたっていた機動六課は任務を一段落させて一度コテージへと戻ることになった。その途中、手ぶらでは悪いと思ったのはが両親が経営している店『喫茶翠屋』に向かった時、スバルとティアナはあまりに活き活きしているのはが「普通の女の子に見える。」と発見とも言い難い様なこともあったが・・・。

そんなこともありつつフェイトの運転する車でスターズとライトニング分隊が戻ってきた。

「運転お疲れ、フェイトちゃん」

なのはの言葉にフェイトは「うん。」と答える。その横でキャロが「ん？」と何かに気付いた。

「なんか、すごくいい匂いが・・・」

キャロの言葉にフリードも反応し、エリオもうなずく。

「はやて達が、もう晩御飯の準備はじめてるのかな？」

フェイトがそう察した時、一同の姿に気付いたアリサとすすかが近づいてきた。

「あっ、おかえり〜。」

「なのはちゃん、フェイトちゃん！」

「すずかちゃん！」

「すずか。」

なのはとフェイトは来てから初めてすずかと会ったため、久しぶりに会った友のもとへ駆け寄った。

「にやはは、久しぶり。」

「すずか、元気だった？」

「うん。」

「写真とメールばかりで、声聞けてなかったもんね。」

「だよね。」

と、楽しそうな会話をしている中、フォワード陣はひそかに念話で話していた。

「（ティア、やっぱり隊長さん達が普通の女の子だよ。）」

「（同感・・・どうよ、ライティング的には？）」

ティアナはエリオとキャロに話を振る。

「（あの・・・僕的にはなのはさんもフェイトさんも普通の女性です
ので・・・）」

「（そっか、エリオ君私達の中だと、一番昔からなのはさん達のと知ってるんだもんね。）」

「（うん。）」

と、会話をしていたその時、一台の車が走ってきて、中から3人の人物が現れた。

「はぁい。」

「みんな、お仕事してるか？」

「お姉ちゃんズ、参上。」

その面々にフォワードはそれぞれ反応する。

「エイミィさん・・・」

「アルフ！」

「それに・・・美由希さん？」

「さっき別れたばかりなのに・・・」

現れた面々はフェイトの義姉のエイミィ・ハラウン、フェイトの使い魔・アルフ、スバル達が翠屋であったなのは姉・高町美由希であった。

「いやぁ、エイミィがなのは達に合流するって言うから・・・あたしもちょうど、シフトの間だったし。」

「そうだったんですか・・・」

美由紀が軽く説明している頃、エイミィとアルフは久しぶりに会ったエリオとキャロと話していた。

「エリオ、キャロ。元気だった？」

『はいっ!』

「二人とも、ちょっと背伸びたか？」

「あははっ、どうだろ？」

「ちょっと伸びたかも・・・」

エリオとキャロの返答にアルフは満足げにうなずいた。その横でスバルとティアナは初めて見るアルフの姿を見て念話で会話をする。

（うゝん・・・誰かの使い魔かな？）

（犬耳と尻尾・・・わんこ素体）

（見た目十歳くらい？ちっちゃくてかわいい。）

と考察している最中、フェイトがアルフの元へ駆け寄ってきた。

「アルフ。」

「フェイトー!!!」

アルフはフェイトの姿を見た瞬間に抱きつき、すさまじく甘えて
いる。

「アルフ、元気そうだね？」

「元気！！」

「いやあ〜本当アルフにはお世話になりっぱなしでね。うちの子
たちのお世話と遊び相手。」

「そうですか。」

「ハラオウン家の使い魔だからな。チビたちの世話楽しいし。」

エイミイの説明になのはが答えアルフ自ら補足する。

「あれ？なのはちゃん、ユーノ君と一緒にじゃないの？」

「はい。機動六課でのお仕事です。」

「エイミイ、カレルとリエラは？」

「義母^{かあ}さんが見てくれる。連れてこようかと思ったんだけど、
もうおねむの時間だしね。」

「そう。」

といった世間話をしている隊長達を横で見ながらフォワード達が何
かに気付いた。

「ん？」

「この音・・・」

「この匂い・・・」

その元へ行ってみると、そこにははやてとシャルが夕食の準備をしていた。

「おっ、みんなお帰り。」

「お帰りなさい。」

『や、八神部隊長！！！！』

その様子にフォワードはとてつもなく驚いた。

「部隊長自ら鉄板焼きを！？」

「そ、そんなの私達がやります！」

「ああ、でも待ち時間あったし、お料理はもともと趣味なんよ。」

「はやて隊長の料理はギガウまだぞ。ありがたくいただけ。」

ヴィータの言葉にフォワードは期待ももめたように『はいっ！』と返事をした。そんな中シグナムがシャルに話しかける。

「シャル、お前は手を出してないだろうな？」

「あゝっ、シグナム酷い！」

「ちょっと手伝ってくれたよな。材料切りとか。」

はやての補足にシャルが「はい。」と答えると、ヴィータとシグナムは顔を見合わせ、

「まあ、切るだけなら・・・」

「大丈夫だな。」

と、ほっとしたような感じだった。その様子を見たスバルが恐る恐る聞く。

「シャル先生、もしかして・・・」

「違うもん！シャル先生、お料理下手なんかじゃないもん！」

「いや駄目だろ、絶望的に。」

シャルが必死に否定しているのを、こちらに歩いてきた士に一刀両断された。

「前に食った時は死ぬかと思ったしな。」

「士さんまで・・・酷い。」

士の言葉にシャルは完全にいじけて、端のほうでしゃがんでしまった。

「士さん、あんまりシャルをいじめんといてな。」

「いじめるも何も、事実を言ったまでだ。」

はやての言葉にも士は冷たく答えた。そのあとでティアナが士に問う。

「あの、ところで士さんは何を？」

「見てわかんないのか？俺も料理をしてるんだ。離れてたのは足りない材料を取りに行ってたな。」

確かに士の手には野菜やお肉といった食材がある。ティアナが続けて士に聞く。

「士さんも料理できるんですか？」

「ああ。俺には苦手な事はないからな。」

「写真を取ることで以外は、な？」

「ヴィータ、余計な事を言うな！」

「だが事実だろう？」

「シグナム、お前まで！ったく……」

横からヴィータがニヤニヤしながら言ったのに、士はその言葉にあせったように怒鳴る。その様子にシグナムも笑いながら肯定すると

士はまた怒鳴り、疲れたのかそのまま調理に戻った。その後、なのはとフェイトが料理の手伝いを申し出て、フェイトはフォワードに食器出しと配膳を命じるとフォワード4人はそろって肯定した。その様子を見たアリサとすずかは

「おおっ、元気だ。」

「みんな、かわいいね。」

と言いながらその様子を眺めていた。

それからしばらく経って、食べ物や飲み物は行きわたったところではやてが切り出した。

「ええーみなさん。任務中にもかかわらず、何だか休暇みたいになってますが・・・」

「ちょうど、サーチャーの反応と広域探査の結果待ちということで、少しの間休憩できますし・・・」

「六課メンバーはお食事で鋭気を養って、引き続き任務をがんばりましょう。」

隊長達が順に話していき、最後のなのはの声にフォワードは『はいっ!』と答える。

「現地の皆さんはどうぞごゆっくり。」

はやての言葉にアリサ、すずか、エイミィ、アルフ、美由希は『は

「い」と答える。その後はやての計らいで協力者と六課メンバーの初対面同士の自己紹介をすることになった。協力者陣はアリサからすずか、アルフ、エイミィ、美由希の順に回り、そのあとフォワード4人に続き、士は最後になった。ちなみにこの時も自分が異世界から来た事は伏せていた。

その後はそれぞれ楽しく食事をした。途中、飲み物を取りに行ったフォワード陣はキャロの「家族みたい。」という言葉でチームの絆を深めたり、スバルとティアナもいつものじゃれあいもありながらコンビとしての絆も深めていった。だが、ティアナには自分が本当に強くなったのかという一抹の不安もあったが・・・

その後、食事が終わるとはやてが切り出した。

「さて、サーチャーの様子を監視しつつ、お風呂すませとこか。」

その言葉に『はいっ!』と声が合わさる。

「まあ、監視といってもデバイスを身につけてればそのまま反応を確認できるし。」

「最近は本当に便利だね。」

シャマルの言葉になのはは最近の機能の便利さを改めて実感した。リインも「技術の進歩です!」と付け足す。そのあとすぐにアリサが困ったように「あぁ・・・」と声を上げた。

「ただ、ここお風呂ないし湖で水浴びって季節でもないし・・・」

「そうすると、やっぱり・・・」

「あそこですかね。」

「あそこでしょ。」

すずか、エイミー、美由希はお互いの考えを一致させるように言う。そしてなのはとフェイトが全員に伝える。

「それでは六課一同、着替えを用意して出発準備。」

「これより、市内のスーパー銭湯に向かいます。」

「スーパー・・・」

「セントウ？」

（ほう、こっちの世界にも銭湯見たいのがあんのか。）

スバルとティアナは全くわからないといった感じで首をかしげている一方で士はこの世界の新たな発見をしていた。

そして一行は海鳴市内の巨大銭湯「海鳴スパラクーア2^ッ」へと訪れた。中に入ると女性定員が声をかけた。

「はーい、いらっしやいませ。海鳴スパラクーア2へようこ・・・団体様ですか？」

「えーっと、大人13人と・・・」

「子供4人です。」

はやてとフェイトが人数を定員に伝えると、ティアナが子供の人数に疑問を抱く。

「エリオとキャロと・・・」

「私とアルフです。」

「おうっ。」

リインの補足にアルフも答える。それを聞いたスバルが尋ねる。

「えっと・・・ヴィータ副隊長は？」

「あたしは大人だ。」

「ずいぶんと無理があるな。」

「うるせえ!!」

スバルに若干睨^{にら}んだ様に返したヴィータは土の茶化しに怒鳴って返す。それを見た定員は苦笑い気味になりながらも一同を案内した。

「お会計しとくから先行っててな。」

はやての言葉に一同は『はい』と返し、浴場へと向かった。

（よかった。ちゃんと男女別だ。）

浴場の入口でエリオが安堵する。まだエリオは十歳だが精神的にはだいぶ大人びており、羞恥心からかなのは達女性陣と共に入らないことを知り、ホッとした。その横からキャロが声をかけた。

「広いお風呂だって。楽しみだね、エリオ君。」

「あ、うん、そうだね。スバルさん達と一緒に楽しんできて。」

「え、エリオ君は？」

「えっ！？ぼつ、僕はその、一応男の子だし……」

「うん……でも、ほら、あれ。」

いきなり核心を突かれ、あわてるエリオにキャロが前にある看板を指差す。エリオはそこに書いてあったことを読み上げた。

「注意書き？えーっと……『女湯への男児入浴は十一歳以下のお子様のみでお願いします』？」

「うふっ、エリオ君十歳。」

キャロに言われエリオがあたふたと焦っている中、フェイトがキャロに賛同した。

「うん。せっかくだし、一緒に入ろうよ。」

その言葉にキャロは「フェイトさん！」歓喜を上げ、エリオはしどろもどろでまともに喋ることも危うかったが何とか反論する。

「あのですね、それはやっぱり、スバルさんとか隊長達とか、アリスさん達もいますし、それに僕がそっち行くと男湯は士さん一人になっちゃいますし……」

「別にあたしはかまわないけど。」

「というか、前から『頭洗ってあげようか?』とか言ってるじゃない。」

ティアナもスバルも簡単に了承する。それを聞いたエリオは少したじろぐ。

「あたしらもいいわよ。ねっ?」

アリサが確認すると他の現地陣もうなずく。

「俺もかまわん。一人で入るのも悪くないしな。」

士も同じように了承する。そのあとすぐなのはが言う。

「いいんじゃない? 仲良く入れば。」

「そうだよ。エリオと一緒にのお風呂は久しぶりだし、入りたいなあ・
・・」

フェイトの言葉にエリオは完全にろれつが回ってない状態にもかかわらず、必死に告げる。

「お気持ちは非常に・・なんですが・・すみません! 遠慮させていただきます!」

それを聞いたフェイトとキャロは「ええゝつ。」と残念そうにつぶやく。

「さっ、先にあがって、このへんで待ってますから！ほら士さん、行きましょう！」

「っってお前、ひっぱるなよ！おい！」

そう言ってエリオは逃げるように士を連れて男湯へと入って行った。

「ああ・・・行っちゃった・・・」

フェイトが残念そうな声を漏らした直後シャマルが戻ってきた。

「人数分、ロッカー確保できたわよう。入りましょ。」

それを聞いた一同は『はい。』ときれいに声をそろえて女湯へと入って行った。

「えーっと・・・」

しかしキャロは行かずに、ある看板を眺めていた。

そのあとはそれぞれで入浴を楽しんだ。スバルは初めて来た銭湯にわくわくしてティアナと一緒に様々な風呂を楽しみ、ヴォルケンズは久しぶりに訪れてだいぶ変わったことに驚き、なのは達は昔のようじゃなかったり、エイミィ、アルフ、美由希はのんびりと浸かっていた。一方男湯ではエリオの元へいきなりキャロが乱入し、子供用露天風呂で一緒に入っじつくり話したことで、よりパートナーとして絆を深めた。その後エリオが女湯に連れて行かれたおかげで、士はのんびりと入浴を楽しんだのだった。

そうして十人十色な入浴を楽しんだ一行は銭湯を後にした。その道中、スバルが「ういゝ」とゆったりした声を発した。

「なんかすっかり堪能してしまいました。」

「日ごろの訓練の疲れもちょっと取れたでしょ。」

なのはの言葉にティアナが「はい」と答えた直後、キャロのケリュケイオンとシャマルのクラールヴィントにそれぞれ反応が出たためリインがエリアスキャンを行うとロストログアの反応が現れた。現地陣は皆にエールを送り、コテージのほうへ向かうことになった。なのははティアナにシャマル、はやて、リインに幻術魔法「オプテックハイド」かけるよう指示し、それぞれが空に上がり結界に閉じ込めて、その内部で捕獲する方針となった。ちなみに士の力は非殺傷設定がないのでコテージで待機となった。

「ほんなら、スターズ&ライトニング出動や！」

『了解!!』

はやての号令と共にロストログア確保任務が開始された。

戦闘空間の内部ではフォワードメンバーはそのロストログアに関して妙な反応だった。開口一番スバルが叫ぶ。

「いつ、なにこれ!？」

「ぷによぷによスライム？」

それは何やら跳ね回っているスライムのような形をしている無数の

物体だった。それを見たキャロにいたっては「ちょっとかわいい」とか言っていた。そしてエリオが無数のスライムについてはやて達に問う。

「これ、全部本体ですか？」

「（危険を感じると複数に分裂してダミー体を増殖する。でも、本体は一つや。）」

「（本体を封印すれば、ダミーはすべて消えるです。）」

はやてとリインの説明の後、空を飛んでいたシグナムが通信に入る。

「放っておけば本体から離れたダミーが町中に広がりかねん。」

「空戦チームは広がったダミーを回収する。そっちはお前らがやってみろ。」

「素早く考えて、素早く動く！」

「練習通りで行けるはずだよ。」

『はい！』

続けてヴィータ、なのは、フェイトにもエールをもらいフォワード陣は動き出す。まずスバルがスライムに殴りかかったが、体から滑って当たらない。襟もストラダーで攻撃するも同じで、打撃斬撃共に無効だった。ティアナの魔力弾とフリードの火炎で攻撃するも、やはり効果無しだった。そこでスバルがエリオにストラダーによる電気攻撃を提案したが、電気で止まるかわからないしダメーシコン

トロールがしにくいということでティアナに却下された。最終的にスバルとエリオが広がるダミーを抑え、ティアナとキャロが本体を見つけ出し封印する方向となった。

その頃、上空からその様子を見ていたシャルが言う。

「新人たち、悪くない動きよね。入隊当時から比べたら別人みたい。」

「なのはちゃんの教導の成果かな？」

「ヴィータちゃんも最近は教導、頑張ってくれてるです！・・・ん？」

「リインちゃん、どうしたの？」

シャルがリインに尋ねると、リインは急に血相を変えて叫んだ。

「た、ただ大変です！！士さん達のいるコテージの近くに未確認の反応が！」

「なんですって！？」

「まいったなあ・・・こっちは全員出払っとるし・・・かと言って士さん一人にするわけにもいかんし・・・よし！」

はやてが未確認に対しての対策を考えたのか、全員に通信を入れた。

「みんな、聞こえる？」

『はやて？』

『どうしましたか？』

「さっき、士さん達のいるコテージ付近で未確認の反応が出たんや。」

『ホントに！？』

「うん、それで誰か一人だけそっち行ってもらいたいんやけど。」

『確かに士の奴一人じゃ、もしもってこともあるしな・・・』

『じゃあ、私が行くよ。』

はやての相談になのはが名乗り出た。

「じゃあ、なのはちゃん。至急士さん達の所へ頼むな。他のみんなは作業続行や。」

『了解！』

そして通信は途切れ一同は作業に戻り、なのはは士の元へ向かった。

機動六課魔導師陣が任務に合ってたっている頃、士はコテージでアリ

サ達に自分のこれまでのことを話していた。仮面ライダーのこと、自分のこれまでの旅のことなどをすべて話したのだった。

「なんていうか、疑問ばかり頭に浮かぶわね。」

「確かにね。仮面ライダーとか怪人とか、あんま想像つかないというか。」

「まあな。戦う姿を見せられればいいが、この世界には倒すような奴もいないようだからな。」

アリサとエイミィは士の話にがうまく理解できないようだった。

「でも、戦うところ見てみたいな。」

「あゝ、できれば見たいね。」

「無理言うな。今は任務中だから、あいつらと模擬戦ってわけにもいかねえからな。」

アルフと美由希は士の戦いを見たいと言ったが、任務の最中ということもあり、断念した。とここで「ところで・・・」とエイミィが唐突につぶやいた。

「すずかちゃん、遅いね。」

「そういえば、『ちよつと出てくる。』って行っただけきりね。」

エイミィの言う通り、すずかは今この場にはいない。士の話が終わった直後、外へ出て行ったのだ。

「士さんの話聞いて、頭がこんがらがったのかしらね？」

「ま、その内戻ってくるさ。」

と考えていたその時だった。

「キャアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！」

「なんだ！？」

「すずかの声！？」

突如何処からかすずかの悲鳴が響き、士達は外に出て、声のあった方向に走る。そこには・・・

「何あれ！？」

「怪物！？」

「あいつは！？まさか・・・」

そこにいたのは壁に寄り掛かって怯えているすずかとキバの世界で戦った仙台ファンガイアのキング【ビートルファンガイア】だった。

「ガアアアアアアアアアア！！！！」

「すずか！！！」

「クソッ！」

すずかに襲いかかろうとしたビートルファンガイアに士が走って蹴りをいれ、ビートルファンガイアが転がる。その間に士やアリサ達がすずかに駆け寄る。

「すずか!」

「大丈夫!？」

「う、うん・・・それより、あれって一体・・・？」

「説明は後だ。とにかく今は逃げろ。」

「士さんは？」

「俺はあれを何とかする。」

そう言うと士はビートルファンガイアに向かって行き、ディケイドライバーを装着し、カードを取り出す。

「変身!」

<KAMENRIDE・・・DECADE!!>

士はディケイドに変身すると、ビートルファンガイアに向かって行く。

「あれが・・・」

「ディケイド。」

ディケイドの姿を見たアリサ達は士の話の通りであることをようやく実感した。

一方、ディケイドはビートルファンガイアと戦いながらアリサ達から遠ざけた。

「ここまで来れば大丈夫か。」

そう言うと士はライドブッカードをソードモードに構え、ビートルファンガイアに向かって行く。ディケイドがライドブッカードで斬りかかるが、ビートルファンガイアは持ち前の頑丈さで防ぎ、お返しとばかりにパンチを浴びせてディケイドを吹っ飛ばした。ディケイドはうまく着地し、体勢を立て直す。

「くそっ、こいつも強くなってやがんのか。だったら・・・一気に倒す！」

ディケイドはパンチに一切臆することなく、カードを取り出してセツトする。

<FINAL ATTACKRIDE・・・DE・DE・DE・DE・DE
ECADE!!>

電子音と共に十枚のカードが現れるとディケイドが飛び上がり、必殺技“ディメンションキック”放つ。しかし、ビートルファンガイアはそれを軽々と受け止めた。

「何っ!？」

ディケイドが驚いているすきも与えず、ビートルファンガイアはすさまじい力でディケイドを投げ飛ばした。

「うわあああああ!」

ディケイドは木を何本か倒しながら地面に転がった。

「グルアアアアアアアアアアア!!!」

「こいつ・・・無茶苦茶だな。強くなるにも限度とかないのか?」

ディケイドはビートルファンガイアのありえないほどの強化に驚いていたが、すぐさま新たなカードを取り出す。

「なら、カブト虫にはカブト虫か。」

そう言いながら、ディケイドライバーにカードをセットする。

<FORMRIDE・・・KABUTO・MASKED!>

電子音が鳴ると、ベルトから六角形状の鎧が形成され、ディケイドは人類に擬態する宇宙生命体“ワーム”と戦う戦士【仮面ライダーカブト・マスクドフォーム】へと変身した。そしてディケイドはパワーが強いマスクドフォームでビートルファンガイアに打撃を撃ち

こむ。が、いくら叩きこんでも防がれ、逆にビートルファンガイアの攻撃にまたも転がる。

「パワーじゃ勝てないか・・・だったらスピードだ。」

そう言うとき、デイクイドはカードを取り出し、セットする。

<ATTACKRIDE・・・CAST OFF!!>

電子音が鳴るとマスクドフォームのアーマーが弾け飛び、ビートルファンガイアにその一部が激突する。そしてカブトホーンが上がり、カブトの第2形態【ライダーフォーム】へと変身し、また新たにカードをセットした。

<ATTACKRIDE・・・CLOCK UP!!>

電子音が鳴ったその瞬間、ビートルファンガイアはどこからか攻撃を受け吹っ飛んだ。さらに次々とあらゆる方向から攻撃が繰り出されるが、デイクイドの姿はない。いや、正確には見ることができない。カブトの持つ視覚できないほどの超高速移動“クロックアップ”により、超高速で攻撃を繰り出しているのである。これならファンガイアには手の出し様がないとデイクイドは思ったのだ。しかし、ありえないことが起こった。クロックアップ中のデイクイドがパンチを繰り出した瞬間、ビートルファンガイアがその拳を受け止めたのだ。

「何だとき!?」

デイクイドは予測不可能な行動に驚いた瞬間、最悪のタイミングでクロックアップが解除され、通常空間に戻った。さらにその瞬間、

ビートルファンガイアの強烈な一撃をくらって吹っ飛び、ディケイドの姿に戻された。

「くそっ・・・何したらここまでなるんだよ・・・」

ディケイドは体勢を立て直そうと立ち上がりながら思ったが、ビートルファンガイアはお構いなしに攻撃を仕掛ける。その時・・・

《Accel Shooter》

電子音と共に十数個の魔力弾が飛んできて、ビートルファンガイアに当たる。そしてディケイドが魔力弾が飛んできた方向を見るとそこにはなのはの姿がった。

「なのは！お前なんでここに！？」

「はやてちゃんが未確認の反応が出たって言ってたので。それより、あれは・・・」

「ああ、ライダーの世界のだ。どうやって来たのかは知らないがな。」

なのはとディケイドが話している間にも、ビートルファンガイアは体勢を立て直す。

「グルアアアアアアアアアアアア！！！！」

甲高い雄叫びを上げるビートルファンガイアを見て士がなのはに声をかける。

「来たんだったら、あいつを倒すの手伝え。」

「はっ、はい！」

なのはは言われた通りビートルファンガイアに向かって行く。その間ディケイドはケータッチを取り出し、パネルのライダーマークをタッチする。

<KUGA! AGITO! RYUKI! FAIZ! BLADE!
HIBIKI! KABUTO! DEN-O! KIVA! FINAL
KAMENRIDE・・・DECADE!!>

電子音と共にディケイドはコンプリートフォームへと変身し、ビートルファンガイアに向かって行きライドブッカードを一振りする。

《Short Buster》

「シュウウウウト！」

なのはが続けて最速砲撃“ショートバスター”を放ち、ビートルファンガイアと距離ができる。その間にディケイドはケータッチをタッチする。

<KIVA! KAMENRIDE・・・EMPEROR>

電子音が鳴るとヒストリーオーナメントのカードが変わりディケイドの隣に【仮面ライダーキバ・エンペラーフォーム】が現れる。そしてディケイドはライドブッカードをしまい、カードを取り出してセツトする。

<FINAL ATTACKRIDE・・・KI・KI・KI・K
IVA!!>

電子音が鳴るとディケイドとキバはてを交差してかまえる。その間ビートルファンガイアはこちらに向かって来たが、すぐさま飛びあがるとディケイドとキバは必殺技“エンペラームーンブレイク”を放つ。するとビートルファンガイアは爆発と共にガラス体となって砕けた。そしてディケイドはキバを戻して変身を解いた。すぐなのはが寄ってくる。

「士さん、大丈夫ですか？」

「俺の方はいいい。それより、すずかのところに行ってやれ。だいぶ怯えてたみたいだからな。」

「えっ!?!・・・わかりました。はやてちゃんへの報告もしておきますね。」

「ああ、頼む。」

そう言うとなのはバリアジャケットを解き、コテージの方へ向かって行く。そして一人になった士は突然声を出す。

「いるんだろ?そろそろ出てこい。」

士の言葉に木の後ろから何者かが出てきた。それは・・・

「やっぱりお前か、鳴滝。」

そこにいたのは鳴滝だった。そして鳴滝は不気味な笑みを浮かべて

言う。

「君を倒すためなら、何だってやってみせるさ。」

「そのために無関係なやつを襲ったってのか？」

「あれは想定外だ。奴は君を誘き出す為だけに用意したからな。自我のない状態だったからから無理もない。」

「お前・・・」

士は鳴滝の「無理もない」という言葉に苛立ちを覚えた。そんなことで人一人が最悪の場合死んでしまったかもしれないからだ。そんなことも気にせず鳴滝は続ける。

「まあいい。今回は失敗だったがいずれ君は必ず滅びる。そうでなければこの世界は君によって破壊される・・・それをよく覚えておくことだ。」

そう言う鳴滝はオーロラの中に消えて行った。一人になった士はふと考えた。

（鳴滝は俺がいたからあいつを呼んだ・・・そのせいですがが襲われた・・・ってことは間接的に俺のせいかな？）

そう考えながら士もなのは達の元へ戻った。

その後フォワード達のロストログア封印も無事完了し、機動六課メンバーは撤収となった。

「そう・・・もう帰っちゃうんだ。」

「一晩くらい止まっていけばいいのに・・・ってわけにもいかないのか。」

「ああ・・・ごめんね。」

「今度は休暇の時に遊びに来るよ。」

残念そうにしていたすずかとアリサにフェイトとなのはは申し訳なさそうに言う。

「うん・・・待ってるからね。」

「今度は家にも遊びにおいで。カレルとリエラも待ってるから。」

「あたしもな。」

美由希、エイミー、アルフもそれぞれ言葉を送りなのはが「はい」と返した。そのあとフェイトがすずかに問う。

「そういえばすずか、襲われたって聞いたけど、ほんとに大丈夫なの?」

「うん、怪我もしてないし、士さんが助けてくれたから。」

「そっか。」

「ホントびっくりしたよ。声がしたと思ったら、いきなり怪物がいてさ。」

「でもすぐ士が、変身してやつつけてくれたしな。かつこよかったよ。」

「ホント、ホント。まあ、すずかちゃんが無事で、士さんの戦いも見れて、一石二鳥って感じ？」

「お姉ちゃん、すずかちゃんが襲われたっていうのに不謹慎だよ。」

「エイミィとアルフも。」

「まあいいじゃない。結局無事だったんだし。」

「アリサちゃんまで・・・」

すずかのことを心配しながらも、士の戦いを見て楽しんだといった様子の面々になのはとフェイトはあきれた様子だった。

「気にしないで。私もちょっと良かったって思ってるから。」

「なら、いいんだけど・・・」

「まあ、怪我もなかったし・・・ね？」

だが、すずかの柔らかい声になのはとフェイトは納得するしかなかった。

その頃、はやては依頼主のカリムに任務完了の報告をしていた。

「封印したロストログアは今夜のうちにシグナムがそっちに持って行くから。」

『お疲れ様、はやて。今回の迅速な解決、部隊にとっては順調な実績よ。』

「うん。」

『騎士シグナム。私が途中までお迎えに上がりますね。』

「はい。ありがとうございます、シスターシャッハ」

通信に入ったシャッハの言葉にシグナムは礼を言う。

『はやて、少しくらい寄り道してもいいのよ。行きたい場所とかあるんじゃないの?』

「別に来たくなかったらいつでも来れるし、友達にも会えた。私の帰る場所は私達の部隊、機動六課やからな。」

『・・・うん。』

カリムの誘いにもはやては清々しく答え、カリムもうなずいた。

その頃、士はヴィータとシャルを交えて、今回現れたビートルフアンガイアのことについて話していた。

「じゃあ、今回の未確認もお前が旅した世界の奴だったってのか？」

「ああ。」

「でも、どうやってこの世界に来たのかしら・・・」

「それは・・・わからない。だが、誰かが送り込んだのが妥当だろうな。」

シャルの質問に、士は鳴滝のことを伏せて答えた。

「まあ、お前が倒したってんなら大丈夫だろうけどな。」

「ああ。きっちり倒した。この世界でまた暴れることはない。」

「そう、なら安心ね。たぶん、明日にでも報告書を書くことになるだろうから、よろしくね。」

「わかった。」

ヴィータやシャルと話している間、士は別のことを考えていた。

（イマジンに続いてファンガイアまで出てくるとは・・・そこまで俺を倒したいのか・・・鳴滝。）

士は鳴滝に対し、少し怒りの感情が芽生えた。

その頃、荷物をまとめていたフォワード陣だったがティアナは無事に任務を終えたにもにもかかわらず浮かない顔をしていた。そこへスバルが尋ねる。

「ティア、何で任務完了したのに、そんなにご機嫌斜めなの？」

「今回はあたし、どうもいまいちね。」

「そんなことないと思うけど・・・」

「隊長達や副隊長達なら、それこそ一瞬だったろうなって。」

「ううん・・・それはそうかもしれないけど・・・ティア、進歩してるよ。大丈夫！」

「うん・・・そういえば、アンタ聞いた？ 私達の戦闘中に別の未確認が出たって話。」

「ああ・・・なのはさんが途中で抜けて、倒したってやつ？」

「そう・・・でも、隊長達が話してるのを小耳にはさんだんだけど、なのはさんだけじゃなくて、士さんモ戦いに加わってたって言ったのよ。」

「へえ、そうなんだ！ 未確認を倒せるってことは、相当すごいんだね、士さん。戦うとこ早く見てみたいなあ。ねえ、ティア！」

「そうね・・・」

スバルは士の戦いの様子に胸を躍らせていたが、ティアナは一層暗い顔になった。

（未確認とはいえ、それと互角に渡り合うなんて・・・一体どんな力を持つてるの・・・？）

そんな考えをしていると、なのはとヴィータがやってきた。

「あつ、みんな、片付け終わったね。」

「掃除も・・・うん、きれいにしてあるな。」

『はいっ!』

なのはとヴィータの部屋の確認をすると、フォワード陣は声をそろえた答える。

「今日の連携はいい感じだったよ。」

「まだ甘いところも多いがな。」

「でも、しっかりやれてた。この調子。」

『ありがとうございます。』

なのは達の評価にフォワード達は感謝の言葉を述べる。

「明日も朝から練習だからね。頑張っていこう。」

『はいっ!』

元気に答えるフォワードメンバーになのはとヴィータは満足げな表情だった。

こうして、機動六課の第97管理外世界での派遣任務は無事、終了したのだった。

番外編：派遣任務・13番目の地球（後編）（後書き）

改めてこんにちは。d i e n d です。

ゆっくり書いていたらもう下旬になってしまいました。o r z

まあ、あったかい目で見ていただけると嬉しいです。これからよろしく願います。

明日僕は学校が休みなので、なのはの映画を見に行ってきます。同じ日に見に行く人はお互い楽しみましょう。

では、またお会いしましょう。

第九話：決戦！デイクイドVSフォワード（前書き）

割り込みだと更新されない状態になるので、また改めて載せました。
続きは5月に。

第九話…決戦！ディケイドVSフォワード

なのはとの模擬戦で乱入したディケイドとの戦い、そしてなのはの過去を知って自分のやっていた事が間違いだと気づいたティアナ。そして過去に囚われず、未来に向かって進めという士の言葉に改めて“強さの意味”を知ったフォワード部隊は士との絆が大きくなった。

しかしその騒動から一週間の間、士にとっては死ぬような日々だった。ガジェット？型の迎撃に出撃する際、無断で出撃した士に対し、はやては命令違反の罰として「一週間、はやての命令には絶対に従うように！！」という課題を与えられてしまい、外回りの際には、はやての補佐兼護衛としての付き添い、または六課内全ての清掃をやらされるという過酷な日々だった。

そして、そんな一週間たったある日……

「はああああ……疲れたなんてもんじゃないなこれは……」

一週間という地獄からやっと開放された士はロビーで大の字になってソファアに座っていた。

「あつ、士さあああん……って、わあああつ！！！？」

ロビーに現われたリインが士を見つけて飛んで来てから士の顔を見て驚きの声を上げた。士の顔はかなりやつれているような表情に思わず驚いてしまったのだ。

「……何の用だリイン、もう罰の期間は終えたんだから何かやれ、と言われても俺には拒否権があるぞ」

「違いますよ～はやてちゃんが士さんと呼んでいるんですよ」

「頼む・・・今は休ませてくれ・・・」

士はやつと開放された休みの時間を取られたくないため、リインの用事を断ろうとするが、動こうとしない士にリインは頬をプクウと膨らませると士の傍に寄り、袖をつかんで引っ張る。

「緊急の用事なんです。さあ、早く来て・・・くだ・・・さ～い。」

「なっ、何すんだ！痛っ！そんな小せえ体のどこにそんなバカ力が・・・痛たたたたっ！わかった、わかったから無理に引っ張るな！！」

怒ったリインに無理やり引っ張られ、疲労による全身の筋肉痛を一気に刺激されたためやむおえず承諾した。その瞬間リインは満面の笑みになり、歩いて行く士の肩に乗った。士にはリインの笑顔がまるで子悪魔のように見えていた。そして士ははやてのいる部隊長室の前でインターホンを鳴らしてから室内に入室した。

「あっ、士さん。よう来てくれたな」

「・・・このチビッコに無理やり引っ張られたんだよ。しかも全部筋肉痛に響いたんだからな。」

「さっさと来ない士さんが悪いのですよ。」

「そういうことやな。」

「おいおい・・・」

（また先が思いやられるな・・・）

士のツツコミにはやてとリインは笑顔で受け流す。そして士は部屋の中央に設置されているソファに腰を降ろすとはやてとリインは士の反対側に座る。

「それではやて、一体何のようだ？」

「うん、実はホテル・アグスタで士さんが交戦していた銃を持っていた人物について何やけど・・・」

「ああ、海東の事か・・・」

「海東？士さんはその人の事知っているんか？」

はやてが聞いてきたのはホテル・アグスタに現われたディエンドくと海東大樹の事だった。はやてはあのオークション会場の護衛任務の後、ティアナやスバルの報告書に目をやっていたはやてが士と同じカードを使って戦うディエンドの事を知ったので、士に質問しようと思っていたのだが、部隊長の仕事や、ティアナと模擬戦騒動も重なり、さらに外回りやらなんやらの事もあって聞く機会がなかったのだ。そしてやっと今日になって話す機会が出来たという事だった。

「それで士さん、その海東って人は具体的にどんな人なんや？」

「どんな奴って言われても、単にあいつはただの泥棒だ・・・」

「泥棒さんですか？」

「ああ、あいつは行く先々の世界で“その世界の一番のお宝”を狙うのが目的さ。アグスタに現われたのもそれが理由だろうな、俺が見つけた際に海東を見つけたんだが、その後思っていた程のお宝じゃなかったようにすぐに手放したんだが、もう一人いた虫みtainな姿をした人型に持って行かれちゃったけどな・・・」

士は自分の知っている海東のこと、アグスタでの出来事をはやてとリインの説明しながら、次に海東の変身するディエンドのことも話した。

「“ディエンド”、士さんのディケイドと同じカードを用いて能力を発揮する力を持った仮面ライダー・・・そして他の仮面ライダーという戦士を召還する能力を持った存在・・・」

「ああ・・・というか、それだけか？動くのだけでも辛い俺を連れて来たんだから、余程のことなんじゃないのか？」

「うん、まあな。実はな、士さんが私と外回りしていた時にな、シグナムとティアナ達はその海東って人と戦闘をした、との報告が入ってるんや」

「何!？」

いくらか話しをした後、士に言われてはやてはここ一週間の間に一度だけシグナムとティアナ達フォワード部隊とディエンドと戦闘した時の話を士に話した。

ティアナとの騒動の三日後、ちょうど士がはやての護衛で外回りをしていた時に、機動六課のリーダーにロストログリア反応を追っていたガジェットを発見、グリフィスはシグナムをリーダーにしてスバル達フォワード部隊を向かわせた。しかし現場に到着した時、既にガジェットは既に破壊されていて、そこにはディエンドの姿があった。

「おや？ 君達は士と一緒にいた・・・」

「あゝ！！ あなたホテル・アグスタの時の・・・！！」

スバルはディエンドの姿を見て驚く。その横でティアナはディエンドの手にしている物を見て「ハッ」となる。なんとディエンドが持っていたのはレリックの収納ケースだった。

「あつ、あの人が持つてる物・・・レリック！？」

「えっ？ あつ、本当だ！」

「このレリックと呼ばれる宝石、この世界で価値のあるお宝と見た。だから、もらって行くことにしたのさ。」

ディエンドが持っているのは確かにレリックのケースだった。ディ

エンドはケースを高らかに掲げてシグナム達を挑発するかのように見せつける。その態度をとるディエンドにシグナムはレヴァンティンをディエンドに向けて冷たい口調で警告する。

「貴様、大人しくそのレリックケースを渡してもらおうか。それは貴様のような者が持っていていいものではないぞ・・・」

「へえ・・・でもそんなのは僕だけが決めることだ。それに僕は、人に指図されるのが嫌いなんで・・・ねっ！」

シグナムの警告にディエンドは答えると同時にディエンドライバーをシグナム達に向けて発砲した。シグナム達は素早く散る。

「剣に槍に銃・・・ならこれなんか丁度良いかな？」

そう言うディエンドは腰のホルダーからカードを取り出し、ディエンドライバーにセットした。

<KAMENRIDE・・・>

「よろしく。」

<LANCЕ!! RARC!! GLAIVE!!>

すると3つのAのマークが浮かび上がり、“醒杖ランスラウザー”を持った【仮面ライダーランス】“醒銃ラルクラウザー”を持った【仮面ライダーラルク】“醒剣グレイブラウザー”を右腰に収めた【仮面ライダーグレイブ】が出現した。そして、グレイブはシグナム、ランスはエリオ、ラルクはティアナとそれぞれ対峙する。

「わわっ!! ティア、これって・・・」

「ええ、ホテル・アグスタでも同じ・・・そして士さんが言っていた仮面ライダーよ!」

驚くスバルにティアナは以前ホテル・アグスタ戦った戦士と同じだと判断し、迎撃体制をとる。その時、ディエンドはまるで傍観者を気取っているように木に寄りかかって五人の様子を見ている。

「ティアナ、お前とスバルはエリオとキャロと合流しろ。そして指揮をとって弓使いと槍使いの相手を頼む。私はあの剣士を何とかする。」

「えっ!?! でもそれじゃあ、あいつはどうするんですか!?!」

「恐らくだが、あの士の騎士甲冑に似た銃使いは傍観者を気取るらしい。私があの剣士と戦っている際に隙を突いてレリックのケースを取り返す!」

シグナムはスバルとティアナに作戦を告げると、グレイブに向かって突っ込む。それと同時にランスとラルクも攻撃を始めた。

まずラルクはスバルとティアナに手にしたラルクラウザーから矢を放つ。スバルはマッハキャリバーを走らせて銃弾を回避しラルクの背後に回る。ラルクはスバルに標準を合わせようとするが、今度はティアナがラルクに向かって発砲、背後を取られたラルクはティアナの攻撃を回避しようとするが魔力弾の一部がラルクの肩にヒットする。その隙にスバルがリボルバーナックルを回転させてゾルダに殴りかかろうとするが、身軽な動きを活かした高速戦法を得意とするラルクは素早く攻撃をかわした。

その頃、エリオとキャロはランスと対峙していた。ランスはランス

ラウザーを地面に叩きつけて気合を入れるとエリオに向かってランスラウザーを振り下ろす。ランスの攻撃をエリオはストラーダで防御するとギリギリといがみ合いになる。しかし大人のランスとエリオは子供、力ではランスの方が上である事は明白で徐々に押され始める。

「くっ・・・」

「エリオ君！フリード、ブラストフレア！！」

「キュクルウウウ！！」

エリオのピンチにキャロはフリードにブラストフレアを放つよう指示を出すとフリードの口から魔力を受けた火炎砲を吐き出してランスを攻撃、それによってランスとエリオの間に距離が開く。

「エリオ君、大丈夫！？」

「うん。ありがとうキャロ！」

エリオは一度キャロの傍に駆け寄ると「ティアさん達と合流しよう」と言うキャロも同意してティアナのいる場所へと駆け出すと、ランスもエリオとキャロの後を追いかける。その後、ラルクと戦っているティアナとスバルと合流を果たし、ランスもラルクと合流してティアナ達と対峙する。

そして一度作戦を立て直すために、ランスとラルクをうまく攪乱して物陰に隠れた。

「これでこっちは四人、相手は二人だね」

「でも油断が禁物よ・・・仮面ライダーなんて私たちにとっては未知の相手なんだから。」

「なら目には目を、じゃない？」

スバルが珍しく知的な事を行ったと思ったら、手にはすでにライドドライバーを手にしていた。

「大火にそれなら何とかなるかもしれませんが・・・」

「でも、隊長達から非常時以外はつかはないようになって・・・」

「大丈夫。これから聞けばいいんだし。ねっ、いいでしょティア？」

エリオとキャロの心配を笑顔で返したスバルはティアナに目をキラキラさせながら確認を求める。その顔を見たティアナはため息をついた。

「ようするに、あんたは新しく手に入っただけのものを使ってみただけなんですよ。」

「うっ・・・バレた？」

「まったく、子供なんだから。」

スバルはティアナに本心を突かれてしまった。隣で聞いていたエリオとキャロも苦笑いである。

「でも、まあいいわ。確かにやってみる価値はあるかもしれないしね。」

「うんっ！」

「エリオもキャラもそれでいい？」

『はいっ！』

ティアナはスバルの意見を承諾し、エリオとキャラに確認を取ると、シグナムへ念話を送る。

「（シグナム副隊長！）」

「（どうした？）」

「（ライドドライバーの使用許可をお願いします。）」

「（何っ！？お前達には渡していないはずだが・・・）」

「（なのは隊長からは非常時のみ、その場の上司の許可の元使用可能と言われています。仮面ライダーとの戦闘は非常時と判断し、許可を志願しました。）」

「（ふむ・・・）」

シグナムは少し吟味した後、ティアナに結論を告げる。

「（・・・わかった。副隊長権限において許可する。とはいえ、まだ試作段階だ。慎重に使い。）」

「（了解！）」

シグナムの許可をもらったティアナはスバル達に伝える。

「許可が下りたわ。さっさと終わらせるわよ！」

「うんっ！」

『はいっ！』

ティアナの指示に3人はそれぞれ答え、隠れていた場所から出る。そして、ライドドライバーを手にして左腰に当てると、黒いベルトが伸び装着された。

「準備よし。スバル、先行して。」

「オッケー！」

スバルはティアナの指示に答え、ライドドライバーのカードホルスターからカードを一枚取り出す。そして本体外側に付いたカード挿入口にカードをセットする。

《ATTACKRIDE・・・》

電子音が鳴ると、ライドドライバーの側面を押しこんだ。

《STRIKE VENT!!》

さらに電子音が鳴ると、上空にスバルの魔力光のベルカ式魔法陣が浮かび上がった。だが、その魔法陣は本来あるはずの十字はなく、代わりにあるライダーの紋章が入っていた。その魔法陣から何かが

現れ、スバルの右腕に装着された。

「わわっ、つとと。」

初めてのことに驚いたが、スバルは“龍騎の世界”の戦士【仮面ライダーガイ】の武器“メタルホーン”を眺めた。

「すごい・・・仮面ライダーって、こんなの使って戦うんだ・・・よし。」

スバルは初めて見るライダーの武器に感激しながらも、右腕を構えた。

「うぁおおおおおおおっ！！！」

そして、マッハキャリバーを走らせてランスとラルクに向かって行く。その途中、ラルクがラルクラウザーを発射したがメタルホーンを盾にしながら突き進んだ。

「うおりゃぁ！！！」

そしてスバルはランスとラルクに強烈な一撃を浴びせた。それをくらったランスとラルクはそれぞれの方角へ吹っ飛んだ。

「す、すごい・・・こんな威力・・・すごすぎるよ！」

「スバル！いちいち感激してないの！」

スバルは改めたライダーのすごさを実感していたが、ティアナはそれを一蹴する。そして自らもカードを取り出し、同様にセットした。

《ATTACK RIDE・・・RAPID!!》

電子音が鳴ると、キツツキの絵をした紋章がクロスミラージュに溶け込む。そして、ティアナはラルクに向かって引き金を引くと、通常ではありえないほどの連射を見せた。それをくらったラルクはまたも倒れる。これが“ブレイドの世界”の戦士【仮面ライダーギヤレン】のカテゴリ4^{フォー}、ラピッドペッカー^{ラピッドペッカー}の力である。

「確かにすごい・・・これならいけるわ!」

「おうっ!」

ティアナとスバルは力を見て、勝利を確信した。

その頃、エリオはランスと対峙していた。吹っ飛ばされた時、ラルクの元へ向かうところにエリオが立ちはだかったのである。ランスがランスラウザーを構えて臨戦態勢の状態で、エリオはライドドライバーからカードをセットした。

《ATTACK RIDE・・・ONGEKIGEN RETSURI
AI!!》

電子音が鳴ると、エリオの前に自身の魔力光のベルカ式魔法陣が現れた。中心には十字ではなく、三つ巴のマークが描かれたその魔法陣から“響鬼の世界”の戦士【仮面ライダー轟鬼】の愛用武器“音撃弦・烈雷”が現れる。それを手にしたエリオはストラーダとの二刀流で、ランスに向かって行く。しかし、身長差に加え、一つでも扱いが大変な槍方武器二本を同時に使っているのは、槍使いの達人で

あるランスにはかなわなかった。ランスの強烈な突きをくらい、エリオはその場に倒れた。

「うわああ！」

「エリオ君！」

それを見かねたキャロはライドドライバーからカードを取り出し、セツトした。

《KAMENRIDE・・・LEANGLE！！》

電子音が鳴ると、キャロの前に自身の魔力光の召喚魔法陣が垂直に現れる。そしてその中心にはクローバーのマークがあり、その中から“ブレイドの世界”の戦士【仮面ライダーレンゲル】が現れた。

「お願い！エリオ君を助けて！」

キャロの声を聞いたレンゲルはランスの元へ向かうと、ランスを手にしていた“醒杖レンゲルラウザー”で一突きした。そして立ち上がったエリオと並ぶ。

「大丈夫？エリオ君。」

「ありがとうキャロ。あと、君もね。」

エリオはキャロとレンゲルに礼を言うと、キャロはいつもどおりに、レンゲルは深くうなずいた。そして、エリオは烈雷を手放し、ストラーダ一本でレンゲルと共にランスに挑む。身長やパワーの差はレンゲルと二人になったことによりカバーされ、ランスを圧倒した。

そして二人が強烈な突きをぶつけると、ランスは吹っ飛び、そしてラルクも転がってきた。その後、スバルとティアナとも合流する。

「エリオ、キャロ！」

「そのライダーは・・・」

「あつ、大丈夫です。私が召喚しましたから、味方です。」

ティアナはレンゲルの姿に新手かと思ったが、キャロがすぐ弁解した。

「なら、キャロはそのライダーを連れてシグナム副隊長のところへ行つて。こっちはあたし達で押さえるから。」

「はいっ！」

「スバルもエリオもそれでいいわね!？」

「おうっ！」

「はいっ！」

ティアナが指示を出すと、キャロはレンゲルと共にシグナムの元へ向かった。

「スバル、あいつ等を攪乱して。その間にあたしとエリオが攻撃する。」

「うんっ。」

「スバル、離れて！」

「わかった！」

スバルが離脱した瞬間、エリオは右足をランスに向け、ティアナはクロスミラージュからそれぞれ二重の四角錐状の光と三角錐状の光を放ち、ランスとラルクをポイントする。そして二人はその場で飛び上がり、エリオは両足で、ティアナは右足でキックを放つ。

『はああああああああああっ！！！！』

《Gold Smash》

《Lucifer's Hummer》

ストライダーとクロスミラージュから音声の流れ、二人は“ファイズの世界”の戦士【仮面ライダーカイザ】【仮面ライダーデルタ】の必殺技‘ゴルドスマッシュ’、‘ルシファーズハンマー’を放つと、ランスとラルクにXと△のマークが浮かび上がり、爆発する。そして、着地した二人の元へスバルが駆け寄る。

「やったね。二人共、すごいよ。」

「はい、なんとか。」

「喜んでる場合じゃないわ。早く副隊長達と合流しないと。」

ティアナがそう言うときスバルとエリオは答え、シグナム達の元へ向かって行った。

一方、シグナムはグレイブと互角の戦いを繰り広げていた。同じ剣士同士、一進一退の攻防が続く。

「ハアアアアアッ!!」

「ハアッ!!」

もう何度目かわからない鏖迫り合いに入ると、シグナムは少し笑う。

「ふっ、なかなかの腕前だな。同じ剣士として、素晴らしいと思うぞ。」

「.....」

シグナムはグレイブの剣の腕を讃えるが、グレイブは「醒剣グレイブラウザー」を構えたまま何も答えない。シグナムとグレイブはジリジリと距離を詰めながら相手の隙を伺いながら睨みあう。

『!!』

隙を伺っていた二人は同時に動いた。シグナムのレヴァンティンとグレイブのグレイブラウザーがまた激突すると思ったその時だった。

<ATTACKRIDE・・・BLAST!!>

「何っ!？」

突如、ディエンドから‘ディエンドブラスト’がシグナムに向かって放たれた。シグナムはそれを防御魔法‘パンツァーシルト’で防ぐが、グレイブの攻撃には間に合わずレヴァンティンを弾かれ、蹴りをくらって倒れこんだ。

「くっ、貴様・・・」

「悪いね。でも、誰も一対一なんて言ってないし。さ、さっさと片付けてくれ。」

ディエンドは冷たく言い放つと、グレイブは飛び上がり、グレイブラウザーを振り上げた。そして、シグナムを斬りつけようとしたその時、突如シグナムの前にレンゲルが現れ、ガラ空きの腹部にレンゲルラウザーで突きを入れた。そして、グレイブは吹っ飛び、その場に転がった。

「何っ!? あれは、レンゲル! どうして・・・」

「お前は・・・」

「シグナム副隊長!!」

ディエンドとシグナムがレンゲルの存在に驚いていると、キャロがシグナムの元へ駆け寄る。

「キャロ!? どうして・・・」

「ティアさんの指示で、助けに来ました。それにあのライダーは私が呼び出したものです。」

「!?!?・・・そうか、ライドドライバーか・・・ならば私も!」

シグナムはキャロからの説明に納得すると、自分もライドドライバ―を取り出し装着した。その時、グレイブが再び向かって来た。

「お願い! 足止めして!」

キャロの指示にレンゲルはグレイブの相手をする。その間にシグナムはカードをセットする。

《FINAL ATTACKRIDE・・・SA・SA・SA・S
AGA!!》

電子音が鳴ると、シグナムはレヴァンティンを自らの顔の前にフェンシングのように構える。さらに、レヴァンティンをカートリッジなしで、シュランゲフォルム、へと変え、天に掲げると頭上に赤い‘皇帝の紋章’が現れた。そして、レヴァンティンをグレイブに向けてかまえる。

「下がって!」

キャロはレンゲルに指示を出し、レンゲルはその場から離れる。その直後、レヴァンティンがグレイブを刺し貫き、シグナムが飛びあがる。そして、皇帝の紋章を通り抜け、グレイブを宙吊りにした。

《Snaking Death Break》

レヴァンティンの声を聞いた直後、シグナムがレヴァンティンの鰐に近いところを指でなぞり“キバの世界”の戦士【仮面ライダーサガ】の必殺技‘スネーキングデスブレイク’を放つ。そしてグレイ

ブは爆発し、レヴァンティンは、シュベルトフォルム、に戻った。その様子を見たディエンドがつぶやく。

「ふうん・・・どうやら、ライダーの力を手に入れたようだね。これは土の影響かい？」

「まあな。それより、それを早く渡してもらおう。」

シグナムがそう言ってレヴァンティンをかまえた直後、ランスとラルクを撃退したスバル達がシグナムの元へかけより、ディエンドの向かってかまえる。

「そう言われて渡すと・・・ぐわあ!？」

ディエンドは話している途中に吹っ飛ばされた。シグナム達も何が起きたかわからない。

「一体何が・・・はっ、お宝がない!？」

吹っ飛ばされたディエンドは抱えていたレリックのケースがないことに気付く。その時、こちらに向かって足音が聞こえた。全員がそちらに振り向く。

「お前は・・・ドレイク!？」

「また別のライダーが・・・」

「まさか・・・キャロ!？」

「はい。実は、副隊長のところへ行く途中に召喚しておいたんです。

」

そう、実はキャロはシグナムの元へ向かう途中“カブトの世界”の戦士【仮面ライダードレイク】を召喚し、しばらく身を潜めてさせていた。そして気付かぬ間に指示を出し、高速移動‘クロックアップ’でディエンドからレリックのケースを奪い取ったのである。

「すごいよキャロ！お手柄だね！」

「確かに、よく思いついたな。見事だ。」

「ありがとうございます。」

キャロは皆に褒められ、満面の笑みを浮かべた。

「そんな・・・くそっ！」

放心状態だったディエンドだったが、我に返りカードホルダーに手をかけた。だがその瞬間、ドレイクが‘ドレイクゼクター’乱射し行動を止めた。そして四方からティアナ達を取り囲むように近づいてくる。

「さあ、大人しく投降していただきます。」

ティアナティアナはクロスミラージュの標準をディエンドに合わせて投降を勧告する。周りには、スバルやエリオ、シグナムやレンゲル、さらに少し離れた所にレリックケースを抱えたキャロとドレイクゼクターを構えたドレイクもいる。その状況にディエンドは「はあ・・・」とため息をつく。

「しょうがない。今日のところは引き上げるとするか・・・」

そして、自分が不利な状況になっていると判断し、両手をダラリとまるで戦意喪失したような態度をとる。ティアナはクロスミラージュを降ろしてスバルとエリオはディエンドに近づこうとした時だった。

「なあゝんてねっ!!」

突如、ディエンドは回転しながら地面に向かって円形にディエンドライバーを乱射した。囲んでいた面々は怯んでしまい、ドレイクは発射直後の煙幕で視界が定まらない。

<ATTACKRIDE・・・INVISIBLE!!>

「じゃあね。機会があれば、また会おう。」

ティアナ達が手が出せない一瞬の隙を突いてディエンドは【インビジブル】のカードを装填して姿を消した。皆はディエンドの姿を探すが見失ってしまった。

「なるほどな、つまり海東の奴は見事ティアナ達にお宝を奪われたわけだ・・・」

はやての話しが終わり、士は失敗した海東を心の中で笑う。まあ士自身も海東に対して邪魔するつもりでいた。

「それにしても海東の奴がレリックを狙っているとはな・・・」

「そう、そこや。その海東とかいう人が何でレリックを狙っとるってとこや」

士の疑問にはやても合意した。たしかにレリックはこの世界ではかなりの高位ランクに位置するロストログア、海東にとってお宝と言えるだろう。そしてはやては士にもう一度質問をした。

「なあ、士さん。この海東って人、スカリエッティとかかわってるんやないかって思うやけど・・・」

「それはないだろ。あいつは人のために何かをするような奴じゃない。接点はないとー」

その時士はある事を思い出した。以前の戦いで鳴滝は「この世界にライダーが生まれた」と言っていた。それが大樹の力をコピーした者だと思ったのだ。士の様子を不審に思ったはやてが「どないしたん？」と問いかけた。

「はやて、ホテル・アグスタの報告書の中に謎の怪物が出たって書いてないか？」

「えっ、ええつと・・・あつ、確かに。でもこれが何なん？」

「この時の怪人とこの前海上に現れた怪物はライダーの世界の奴だ。そして、鳴滝・・・海上に現れたあの男は『新たなライダーが現れ

た』で言っていた。」

「あっ、それはリイン達も見てましたし、士さんも説明してしてくれましたね。確か、士さんを破壊者って言ってた人らしいですけど・・・？」

リインの言葉に士は「ああ。」と肯定する。

「もしかしたら、この怪人たちを呼び出したのはその新たなライダーで、そのライダーの力は海東のディエンドと同じようにライダーの代わりに怪人を呼び出す。で、それを作ったのは・・・」

「スカリエッティ・・・っていうことか？」

「ああ。海東自身もあの銃を「盗られた」って言ってたからな。もしかして、俺が今まで倒してきた奴らが復活したのも・・・」

「その鳴滝って男がスカリエッティに依頼した・・・ということやな？」

士の言葉の一つ一つをつなぎ合わせ、はやては結論を出す。

「なるほど。こうして考えると辻褄が合うな。まあ、そっちの捜査はフェイトちゃんがやってくれるからええけど、最終的に海東って人はスカリエッティに利用されただけで、協力してるわけではないと・・・」

「ああ、それでいいだろう。俺としてはその新たなライダーってのが気になるが、まあ向かってくるなら立ち向かうだけだ。」

「まあ、私もそれでええと思うよ。ほんなら、そんな時はよろしゅうな。」

はやての言葉に士は「任せろ。」といい、部隊長室を後にした。

海東のことをはやてに話して三日後の夜、士はスバル達のデバイス第二段階に移行するかの確認をするために仮想敵としての相手を頼みたいとスバル達の訓練を終えたのはやフェイトから話が出た。

「俺がスバル達の相手をしろって？」

「はい、デバイスの第二段階を使用できるかどうかの見極めに最適なのは士さんが一番だと思っています」

「いつも訓練での相手は私かヴィータちゃんやフェイトちゃんばかりですから、士さんの特殊な能力を持った人との戦闘を想定した訓練もいいんじゃないかなと思いますね。どうですか士さん？」

フェイトとなのは士に仮想敵の役を任せようと話すと、士は少し考え込んだが一週間のあいだに溜まったストレスを発散するにはうってつけだと思える。

「……なあなのは、スバル達の相手をするに当たってマジになっても構わないか？」

「え？それは構いませんが・・・」

「ふっ、ならその話し乗ったぜ！」

士はなのはの返事を聞くとニヤリと笑みを浮かべるとスバル達の相手をする事を聞き入れた。士の返事を聞き、なのはは喜んでいるような顔を浮かべるが少しスバル達は大丈夫だろうかと内心心配した。フェイトも同様の思いのようであった。

次の日の朝、いつものように朝の訓練のために訓練施設に足を運ぶとスバル達は目の前の光景に唖然としていた。そこにはなのは、フェイト、ヴィータの見慣れた姿に加えて士が局員の制服ではなくエリオやフェイトの着ている運動に適した服を着て立っていた。

「あ、あのくなのはさん・・・？」

「ん？なあに、スバル」

「どうして士さんがここにいますか？」

「うん、今日の朝の訓練は士さんとの戦闘訓練だよ」

『えっ！？』

スバルの問いになのはは普通に答えるとスバル達は驚きの声を上げる。士自身もこうして訓練場に足を運んだのは訓練を始めた頃のスバル達の見学の時となのはとの模擬戦の時ぐらいしかない。しかし目の前にいる士は完全に訓練姿になってここにやってきたのは初めてのことである。

「さあゝて、さっそく訓練を始めようとしようぜ！」

「なっ、何か士さんやる気マンマンですね……」

士のやる気のある声にエリオは汗を垂らして士の意外な一面を目撃する。なのははさっそくコンソールを操作して施設のフィールドを作り出す。模擬戦の舞台となるフィールドは森林の高台のある場所だった。

「最初に言っておくが……手加減はしない方向で行くからな。お前らも本気で来い!!」

<KAMENRIDE・・・DECADE!!>

『はっ、はいっ!!』

《Stand by!》

士がディケイドライダーにカードをセットしてディケイドへと変身し、スバル達も自らのデバイスを起動させてバリアジャケットを身に纏う。

「それでは勝利条件を教えるよ、目的は士さんのディケイドをティアナ、スバル、エリオ、キャロの四人で撃破すること。時間制限はないから皆、全力で相手をするように。あっ、言い忘れてたけど、ライドドライバーは使用禁止だから、今のうちにあずかっておくよ。」

「えっ!? あれ、使っちゃだめなんですか!？」

「あたりめーだ。そんなに頼ってばっかじゃいつまでたっても強くなれねーだろ。」

『はーい・・・』

ヴィータに言われてスバル達はライドドライバーを渡した。そして戦闘区域まで移動し、なのはが通信で指示を送る。

『それでは、準備はいい？』

『はいっ！』

「いつでもいいぞ。」

『では、レディ・・・ゴー！』

なのはの訓練開始の号令がかけられ模擬戦が開始され、最初にデイケイドが動いた。ライドブッカーをガンモードにし、カードをセットした。

<ATTACKRIDE・・・BLAST!!>

電子音が鳴ると、スバル達に向かって引き金を引き、連続射撃‘デイケイドブラスト’を放つ。フォワード陣はすぐさま四方にジャンプし、回避する。

「（スバル、リボルバーナックルで砂煙を巻き上げて。その隙に私とキャロは指揮のしやすい高台で援護するからスバルとエリオは士さんに攻撃を仕掛けて！！）」

「(分かった!)」

「(分かりました!)」

ティアナの作戦にスバルとエリオは念話で会話してスバルはりボルバーナツクルのタービンを高速回転させて地面に拳を叩きつける。するとスバルを中心にももの凄い勢いで砂煙が巻き起こり、ディケイドの視界が遮られてしまった。

「くっ、砂煙に紛れての奇襲攻撃か? 毎度毎度同じ手には……」

ディケイドは砂煙に紛れての奇襲攻撃を読んで前後左右を警戒する。すると煙に紛れてスバルがディケイドの背後から殴りかかってきた。

「甘いぜ、スバル!」

<FORMRIDE・・・KUGA・TITAN!!>

スバルの攻撃を呼んでいたディケイドはカードをセットした。すると、新たな鎧が形成され【仮面ライダークウガ・タイタンフォーム】へと変身した。パワーや頑丈さに優れたタイタンフォームでスバルの拳を受け止めた。そして、近くに落ちていた木の枝を掴み、それを専用武器‘タイタンソード’に変えた。そしてスバルの拳を払い、タイタンソードを振り下ろす。だが、すぐさま障壁で防ぎ、後ろに飛んで煙の中へ消えた。

「全く、煙に紛れての攻撃なんて古いにも程があるぞって・・・何!?!」

ディケイドが周囲にいるだろうスバル達に聞こえるように言う。煙

が晴れていく。するとディケイドの周りには何人ものスバルとエリオが取り囲むように配置されていた。

（ティアナの幻術魔法か・・・どうやら幻術を使ってこっちが疲れてくるのを待ってから総攻撃を仕掛けてくる気か・・・）

周囲にいる沢山のスバルとエリオにディケイドはティアナの作戦の狙いを推測し、タイタンソードを投げ捨てる。タイタンソードはただの木の棒に戻り、ディケイドは新たにカードを取り出す。

（なら、その前に見つけてやるまでだ！）

そう考えて手にしたカードをセットした。

<FORMRIDE・・・KUGA・PEGASUS!！>

電子音が鳴るとディケイドは【仮面ライダークウガ・ペガサスフォーム】に変わり、変身と同時に出した専用武器‘ペガサスボウガン’を構える。クウガ・ペガサスフォームに変身すると視覚、聴覚といった感覚神経が極限まで研ぎ澄まされ、遠くにいる敵や見えない敵を見つけることができる。その力を利用し、ディケイドは幻影の中の本体を見つけようとしたのだ。

「そこか！」

ディケイドはまず、スバルの位置を特定しペガサスボウガンの弓の部分を引き、引き金を引いて弾丸を放つ。途中、幾つかの幻影をあたってはいたがまっすぐ突き進み、スバルの元へたどり着く。

「えっ！？うわぁ！」

スバルはとっさに防御障壁を張り防御するが、本体を見破られたことに驚いていた。

（うそ・・・この幻影の中から・・・本体^{わたし}を見つけるなんて・・・）

スバルが軽く放心状態なのは気にせず、さらにディケイドは弓を引く。

「あと・・・そこだ！」

発射した先には、幻影に紛れていたエリオがいた。エリオはストライダーで防いだが、ディケイドはカードをセットしながら一直線に向かって行く。

<FORM RIDE・・・KUGA・DRAGON!!>

電子音が鳴り、ディケイドは【仮面ライダークウガ・ドラゴンフォーム】へと変わり、専用武器‘ドラゴンロッド’を構え、エリオと対峙した。

「さあ・・・まだまだこれからだ！」

士とティアナ達の戦闘を訓練施設の外でなのは達はティアナの作戦について話し合っていた。

「うーん……最初の戦場構築（ステージ作り）はよかったと思っただけど……」

「まさか、スバルの拳を受け止めたり幻影の中から本物を見つけるなんて思わないだろうしね。」

「さすが士ってとこか。この分だとあいつの勝ちか？。」

「どうかな？フォワードのみんなも、日々の訓練で力を付けてるし……」

フェイトとヴィータがどっちが勝つか考えていると、なのはが結論付けるように言う。

「まあ、ティアナ達にしても士さんにしても、お互いにいい経験になればいいと思うな」

士のいる地点から少し離れた森を見渡せる場所で、ティアナは幻術の魔法を継続して使用し、キャロはティアナに加えてスバルとエリオにもブースト魔法を使用しているのでかなりの負荷が掛かっていた。

「……キャロ、平気？」

「ハアハア、大丈夫です。まだいけます」

（無理しちゃって……でもキャロは凄いわ、こんな小さな体でも

私を含めてスバルとエリオに強化魔法を掛けつづけられるんだもの。でも妬んだりはいしない、それがキャロの才能だと言うのなら、私は自分の持てる能力でキャロの負担を少しでも減らさなきゃ!!」

ティアナの声にキャロは心配させないように笑顔を见せて答える。そんなキャロにティアナは彼女の才能に再度驚きを見せるが以前のような自分は“凡人だ”と決め付けず、自分の持てる力で少しでも負担を軽くしようと思う気持ちをティアナは持てるようになっていた。

一方、クウガ・ドラゴンフォームになったディケイドはエリオと対峙し、二人は同時に動いた。エリオはストラダーを構えディケイドに向かって行くがドラゴンフォームの水を受け流すような棒術に突発型のエリオは簡単に受け流される。勝ち目がないと思ったエリオはいったん引くために幻影の中に紛れた。ディケイドはその姿を見失ってしまう。

（ちっ、面倒だな。だが、これも魔法なら使えばティアナの魔力つてのも底を尽きるはずだ・・・だったら先に潰す!）

ディケイドはティアナの生み出した幻術をつぶして魔力をなくそうと考え、カードを新たにセットする。

<KAMENRIDE・・・HIBIKI!!>

電子音が鳴ると、ディケイドは響鬼へと変身し、さらにカードをセットする。

<ATTACKRIDE・・・ONIBI!!>

電子音が鳴ると、響鬼になったディケイドの口から炎が噴射し、幻

影を攻撃していく。これが響鬼の持つ技‘鬼幻術・鬼火’である。次々に幻影を消していく中で、茂みの中にも何かがあった。

「そこか、スバル！」

「ヤバッ、バレた！？」

本物のスバルを見つけたディケイドはスバルの元へ駆け出し、鬼火を放った。スバルはそれを何とか避け、迎撃体制をとってディケイドに向かってマツハキャリバーを走らせる。

「行くよ、マツハキャリバー！」

《All right.》

スバルがマツハキャリバーに声を掛けるとリボルバーナックルから煙が排出される。するとスバルの右腕に魔力が集まり出す。

（何か来るな・・・なら！）

スバルの動きを感じ取ったディケイドはライドブッカーからカードを取り出し、セツトする。

<KAMENRIDE・・・FAIZ!!>

電子音が鳴ると、ベルトからディケイドの体を血管のようなラインが駆け巡る。そして全体に行きわたるとディケイドは人間を装って人を襲う怪物“オルフェノク”と戦う戦士【仮面ライダーファイズ】へと変身した。さらに手には専用ツール“ファイズショット”を着している。そしてディケイドはスバルが向かってくるのを確認し

[illegible]

「ナツクルウウ、ダスタアアアアアアツ！！」

「うわあ、危なかった」

「（スバル、大丈夫だった？）」

「ティア、こっちは大丈夫だよ。でもちよつと危なかったかも・・・」

308

スバルがティアナの生み出した自分自身の幻影の群れの中で一息つくとしてティアナが念話を送ってきた。ティアナはスバルと士の戦いを見ていて士の対応力の良さに驚いていた。このままでは勝てないと思ったティアナは脳をフル回転させ、士を倒す手段を考え始めた。その頃、再び幻影の中に消えていったスバルを追おうとするディケイドだったが、森という地形での戦闘は障害物が多く動きが制限される。スバル達も当然同じ状況であったが、ティアナの作り出す幻影のおかげで狙いが定められないというハンデを持っているディケイドにとって状況としては不利であった。

「ふう、これで五体目のハズレか・・・仕方ない、また一気につぶすか。」

幻影にうんざりしたディケイドは先ほどの響鬼の時のように幻影を一気に減らそうとカードを取り出そうとしたその時だった。

「ヤアアアアッ!!」

「!?!」

突然の声にディケイドは頭上を見上げると、電気を帯びたストライダーを振り下ろそうとしているエリオの姿が目に入った。なんとエリオはスバルの幻影を追い掛け回している姿を目撃し、木の上で待ち伏せをしていたのだ。

「士さん、覚悟!!」

「上からの奇襲か!?!」

ディケイドは振り下ろされるストライダーの斬撃をギリギリの所で回

避けようとしたが、ストラーダの槍先に発生していた電撃は避けきれずにディケイドの体に電気が走る。思わずよろけるディケイドにエリオはさらに突撃を仕掛ける。

「ダアアアアッ!!」

「そう何度も喰らうか!!」

突撃してくるエリオの攻撃を横飛びして回避するとエリオは木を利用して引き返してくる。ディケイドは再びライドブッカーに手にかけた。

「槍には槍だ!」

<FORMRIDE・・・DEN-O・ROD!!>

電子音が鳴るとディケイドの周りに銀色の破片が舞い、体に装着される。そしてオーラアーマーと電仮面が装着され、ディケイドは【仮面ライダー電王・ロッドフォーム】へと変身し、変身と同時に生成了た‘デンガッシャー・ロッドモード’でエリオの突撃を払う。そして二人はお互いに向かいあった。

「また長物勝負だな、エリオ。」

「今度は勝たせてもらいますよ!」

「そいつはうまくいくかな?」

ディケイドはエリオを挑発するかのように言うが、エリオは一切怯むことなく士に向かって行った。得意のストラーダ出の突撃を行う

が、電王・ロッドフォームの巧みな棒術で軽々と受け流される。

（くっ……このままじゃきりが無い。一度離れよう。）

エリオはそう判断するとストラダーのブースターを起動し、ディケイドから離れようとする。

「逃がすか！」

エリオが離脱しようとするのに気付いたディケイドはデンガツシャシーを構え直し、エリオが行った方向に振り下ろす。するとデンガツシャシーの先‘ロッドヘッド’からオーラの糸‘オーラライン’を伸ばしてエリオの体を巻きつけた。

「捕まえたぞ！」

「そんな！？うわああああ！！」

そして、魚を釣るかのように自らの元に引き寄せ、傍にあった木に叩きつけた。叩きつけられたエリオは何とか立ち上がったが、いかにも立っているのがやつとのようなだった。

「ほう、よく立てたな。」

「まだまだですよ……士さん……」

「悪いが、そろそろ終わらせてもらう。」

そう言うディケイドは、新たにカードをセットした。

<FINAL ATTACK RIDE・・・DE・DE・DE・DE・D
ENO! !>

電子音が鳴ると同時にディケイドはデンガッシャーを肩の位置に構え、エリオに向かって投げつける。デンガッシャーはエリオに命中すると、甲良状の綱‘オーラキャスト’に変化する技“ソリッドアタック”でエリオの動きを止める。そしてディケイドは飛び上がり、エリオに向かって必殺キック“デンライダーキック”を放つ。それをくらったエリオは吹っ飛んで、その場にガクリと倒れた。そしてディケイドは電王から元に姿に戻る。

「(エリオが倒されたか・・・スバル!)」

「(何ティア?)」

「(今エリオが倒されたわ。それにキャロももう限界に近い状態みたいだし・・・こうなったらスバル、士さんをこの地点に誘い出してくれない?)」

「(えっ? 何か作戦があるの?)」

「(うまくいくか分からないけど、ここから攻撃してみるわ。なのはさんの教えてくれた射撃技術で士さんを狙撃する!)」

エリオを倒され、キャロも補助魔法を行使しすぎてもう限界だと悟ったティアナはスバルにディケイドがある地点、ティアナの狙撃ポイントに適した場所に誘い出して欲しいと念話を送り、スバルは了解してディケイドの元にその身を晒しに駆け出した。

「くそっ、余裕だと思ったんだが、あいつらもなかなかやるな。だ

いぶ疲れやダメージが溜まってきた。」

エリオを倒したディケイドはスバル達との戦いでダメージが徐々に蓄積されている事に気がついた。その時、ディケイドの目の前にスバルが現れリボルバーナックルで攻撃を仕掛けてきた。

「ハアアアアアアッ!!」

「チィッ!!」

<ATTACKRIDE・・・INVISIBLE!!>

スバルの攻撃に対し咄嗟にディケイドは“ディケイドインビジブル”を使って姿を消した。スバルは突然ディケイドの姿が消えたことに慌てふためいていた。

「（あれっ!? ティア、士さんが消えちゃったよ!?!）」

「（大丈夫。すぐに座標を特定するから。）」

ティアナは冷静に士の現在位置を探し始める。そこでふとあることを思いつく。

（ん? そういえばどうして士さんは逃げたんだろう? 普通ならスバルに攻撃を仕掛けてくるはず・・・もしかして士さんも疲れ始めている?）

ティアナは士の動きがいつもと違うことに気付き、その直後士を見つけてスバルに念話を使って場所と「追い込んでいって」と伝え、ティアナも狙撃用の魔法を詠唱しつつ残りの幻影を操ってスバルを

フォローする。

ディケイドは森の中を駆け回ってスバルを引き離そうとしていたが、行く先々にティアナの操る幻影が出現し、出会う度に進行方向を変えざるを得ない状態にされていた。そして森の中を暫く突き進んでいると士はあることに気が付きはじめていた。

（おかしい・・・幻影の動きが明らかに変だ。もしかして誘導されているのか！？）

士は今まで幻影が行く手を塞いでいる度にライドブッカーを発砲していたが、幻影はその攻撃をなぜか避けてまた走り出していた。さらに幻影の中に紛れ込んでいるだろう本物のスバルが一行に攻撃を仕掛けてこない。その事から推測するとスバルは自分を何処かに誘導させようとしているのだろうと考えるがスバルがそのような考えを出すとは思えない・・・

（いや、スバルじゃなくてティアナか・・・）

士はこの誘導を考えたのはスバルじゃなくてティアナだと考える。確かにティアナなら幻影を使ってこちらを誘導させることもできるし、何処かにある高台でこちらの動きを確認しながらフォローも出来る。

（ってことはこのまま進むと何かを仕掛けてくるってことか・・・上等だぜ！！）

ディケイドは移動しながら森の中を進む。たとえ誘導されているとしても・・・

第九話：決戦！デイクライドVSフォワード（後書き）

こんにちは。diendです。

最近コメントがめつきり減ってしまって多少がっかりしていますが、これからもがんばるので応援よろしくお願いします。

さて、今回は満を持して登場したオリジナルアイテム『ライドドライバー』についてご説明します。外観は剣のラウズアブゾーバーのカード挿入口を上にして左（ギンガはリボルバーナックルの関係上、右）に装着、アブゾーバーのカードプレートをカリスやレンゲルのようなカードケースに変えた感じでした。（絵が苦手なので、図で説明できない・・・orz）

基本的には士の持つているカードとは違い、サブライダーの能力を使うことができます。それではカードごとにご紹介します。

KAMENRIDE・・・キャロが使うとそのライダーを召喚でき、それ以外だと戦闘スタイルが変わります。（例 キックホッパーのカードを使えばキック主流、ギルスならワイルドな戦法など）その際、額にそのライダーの色をした紋章が入ります。

FORMRIDE・・・これもほぼカメンライドと同じで、スタイルチェンジと召喚したライダーのフォームチェンジができます。

ATTACKRIDE・FINAL ATTACKRIDE・・・デイクライドと同じですが、カメンライドしなくても使えます。

FINAL FORMRIDE・・・サブライダーのは存在しませんが、デイクライドから借りれば使えます。

こんな感じです。まあ、めちゃくちゃだとは思いますがどうぞ温かい目で見てください。それでは！

第十話：決着！そして・・・（前書き）

九話と同じです。

第十話：決着！そして・・・

再び訓練施設の外にいるなのは達はティアナの様子やディケイドの動きを観察していた。

「さすが士だな、やっぱライダーってすげえんだな。」

「でもエリオとキャロも凄いね。エリオは士さんにやられはしたけど、士さんにダメージを与えたみたいだよ。さすが私のバリアジャケットに傷を負わせた頃より性能が上がってるよ」

「キャロだってスバル達全員にブースト魔法を掛け続けられる時間が随分伸びたと思うよ。やっぱり若いっていいね・・・」

士が仮面ライダーの力で戦っている様子を見ていたヴィータ、なのは、フェイトはそれぞれ感想を言い、フェイトは最後に何やら妬むような発言をしたようだが、なのはとヴィータは聞かなかった事にしてスルーした。しかしスバルの高速移動での突進力、ティアナの指揮能力及びフォロー、エリオの高速戦闘、キャロの補助魔法及び支援魔法。それぞれの個性がどんどん成長しているのをなのはは満足そうに見ていた。

その頃、森の中を進んでいるディケイドは自分がティアナに誘導されているのに気づいているのにも拘らず、あえて敵の術中に嵌ろうとしていた。

「この先はどうやら見晴らしが良い場所みたいだな、ということは
出た瞬間にティアナかスバルのどっちかが仕掛けてくるか……」

ディケイドはそのまま見晴らしの良い広場に姿を現すと地面に桃色のミッド式魔法人が出現し、さらに魔方陣からは桃色の鎖がディケイドの体を縛りつける。

「くっ、こいつは……キャロの魔法か!？」

ディケイドはキャロの拘束魔法‘アルケミックチェーン’で身動きが取れないでいた。ふと、別の方を見てみるとオレンジ色の光とミッド式魔方陣が見えた。

（やっぱり拘束して動けなくなっているところを長距離から砲撃か・
でもなティアナ、俺に掛けたバインドをもう少し嚴重にしてお
くべきだったな!!）

ディケイドは右手に持っていたストラダー（D）を一度地面に刺し、バインドを外そうと体を動かしてみる。そして自分の状態を再確認したディケイドの仮面の下にある士の口はニヤリと笑みを浮かべた。

「ハアハア……ティアさん、士さんを拘束できました。今のうちに攻撃を……」

「ええ、アリガトねキャロ。後は私に任せて!!」

魔力の殆どを使い切ってしまったのかキャロはヘナヘナと息を切らしてヘタリこんでしまい、フリードはそんなキャロの傍に駆け寄る。そんなキャロの姿に「良くやった」とお礼を言うティアナは両手にクロスミラーージュをディケイドに向けて構える。

（今度は迷わない・・・私の全力を士さんにぶつける。身動きの取れない今の状態では得意のカードを使用する事は出来ない筈、今こそ攻撃のチャンス！！）

ティアナは以前士の乱入した際に自分の中に持っていた他者へのコンプレックスのせいで力を出し切れずに敗北してしまった。でも今は違う・・・ティアナは自分の弱さを知り、そして前に進む事で自分の出来ること、自分の中にいる兄ティード・ランスターの目指した夢と共に頑張ることを決め完全に迷いを捨てた。

「これが私の力・・・受けてもらいますよ士さん！！ファントム・ブレイザーアアアアア！！！」

ティアナの放ったファントムブレイザーはもの凄い爆音を響かせながらディケイドに向かって突き進む。その光を確認したディケイドの緑色の瞳にティアナ特有のオレンジ色の閃光が迫ってきてディケイドは光に包まれた。

ファントムブレイザーの着弾によりディケイドのいた地点に黒い煙が立ち昇る。スバルはその煙を森の中で見上げていた。

「あれは・・・ティアの作戦が成功したんだ！！」

スバルはディケイドを仕留めたと思いマツハキャリバーを走らせて現場に向かう。現場に着くと黒い煙が立ち昇り、大きなクレーターが出来ていた。

「（ティア、これってティアがやったの！？）」

「（まあね、今出来る限りの全力で士さんに撃ち込んだから、これで無事だったら士さんは私達じゃ敵わないでしょうね・・・）」

ティアナの砲撃に驚くスバルにティアナはこれで無事だったら士はかなりの脅威になるだろうと考える。

暫くすると黒い煙が徐々に晴れてくるが、その時スバルとティアナ、さらにはその状況を見ていたなのは達の顔が一瞬にして驚きに変わった。

「（士さんが・・・いない！？）」

「（そんな！？あの拘束状態からどうやって・・・）」

煙が晴れるとそこに士の姿はなかった。一体どうやってキャロの拘束から抜け出したのか、スバルとティアナは理解できなかった。スバルはあたりを見回す。

「一体どこに・・・」

「ここにいるぞ。」

突然声がしたのでスバルはその方向を見る。そこにはディケイドが木に寄り掛かっていた。だが・・・

「士さん、その姿は・・・」

「ああ、こいつは普通より早く動けるんだな。」

ディケイドはいつの間にか【仮面ライダーカブト】に変わっていた。ディケイドはキャロのアルケミックチェーンに体を拘束されていたが、キャロの鎖はディケイドの両肩から肘までしか巻かれておらず、肘から下は自由が利いていたことが幸を称し、カブトに変身し、‘クロックアップ’を使ってティアナの砲撃から逃れたのである。

「もう少し考えれば、俺の負けだったけどな。さあ、そろそろ終わらせてやるよ。」

ディケイドはカブトから元に戻り、スバルに挑戦的な言い方をする。

「(ど、どうしようティア。このままじゃ負けちゃうよ・・・)」

「(仕方ないわね・・・スバル、士さんを足止めしておいてくれない？ 私もすぐに合流するから!!)」

ティアナの砲撃を避けたことに戸惑うスバル。しかしティアナは予想外の事が起きたが焦らずにスバルと合流するためにスバルの元に急ぐ。ディケイドはライドブッカードソードモードに構えるとスバルもシューティングアーツの構えを取る。しかしディケイドは度重なる戦闘で既に肩で息をするほど体力を消耗していた。

(ハアハア、すぐ終わると思っていたが、あいつらも進歩してるってわけか・・・これでまだ成長過程にいるなんて、なのはの訓練は相当のものだったんだろうな・・・)

士は以前より確実に強くなっているスバル達、そしてなのはの訓練を受けているだけタフさや連携での団結力が向上している事にさすがに感心した。スバルはディケイドに殴りかかりながらウイングロ

ードを展開、その上を走ってディケイドを翻弄する。すかさずディケイドはライドブッカードをガンモードに変え、スバルに発砲する。だが小回りの効くスバルのマッハキャリバーにディケイドの弾丸は当たらなかった。

「スバル!!」

「あっ、ティア!!」

「ちっ、こいつも来やがったか・・・」

スバルとディケイドが戦っていると両手にクロスミラージュを手にしたティアナがスバルの援護のために現われた。スバルはティアナが現われた事に喜び、士には厄介な相手が増えた事に舌打ちする。

「まさか私のフアントムブレイザーをあのような手で避けるなんて、やはり油断できませんね士さん・・・」

「まあ、結構ギリギリだったけどな。さて役者も揃ったようだし、そろそろこの模擬戦も終わりにしようぜ」

ディケイドはティアナとスバルに言い放つとライドブッカードから新たにカードを取り出した。

「行くぜ!!」

<FORMRIDE・・・DEN-O・GUN!!>

ディケイドは【仮面ライダー電王・ガンフォーム】に変身し、ライドブッカードを放つ。二人は素早く避け、ティアナは魔力弾を放つ。

だけ、ディケイドも避けるがティアナはある事に気づく。

（何なの、この動き・・・まるで踊ってるような・・・）

そう、ディケイドの動きは電王・ガンフォームのブレイクダンス戦法を使っている。踊っているかのような不規則な動きにティアナは翻弄されるが、スバルがマツハキャリバーでディケイドに向かって行く。ディケイドはスバルにも発砲するが、マツハキャリバーで走り続けるスバルには弾丸が当たらない。これではだめだと判断したディケイドは新たなカードを取り出す。

「当たらないなら・・・もっと早く動いてやる！」

<FORMRIDE・・・DEN-O・WING!!>

電子音が鳴ると、ディケイドは【仮面ライダー電王・ウイングフォーム】へと変身する。そして、向かって来たスバルの足を払った。

「えっ!？」

何が起こったのかわかる前に、ディケイドに受け流され転び、木に激突した。

「うわあああああ!？」

「スバル！」

「やっぱり、この姿は動きやすいな。」

ディケイドは改めて電王の中で一番機動力のあるウイングフォーム

の力を実感した。そしてティアナが撃った魔力弾も軽々と避け、一度ディケイドの姿に戻る。

「うーん・・・なんかマンネリになってきたな。少し刺激を与えてやるよ。」

「えっ!？」

「一体何を？」

妙な事を言うディケイドに、立ち上がったスバルとティアナは首をかしげる。その間ディケイドはカードをセットする。

<KAMENRIDE・・・FAIZ!!>

ディケイドは再びファイズに変身し、新たにカードを取り出す。

<ATTACKRIDE・・・AUTO VAJIN!!>

電子音が鳴り、しばらくすると上空からファイズ専用が開発されたバイク型自律行動ロボ“オートバジン・バトルモード”が現れた。それを見たスバルは驚いた。

「うわぁ!?! 何ですかそれ!?!」

「まあ、援軍ってとこだ。ティアナ、お前はこいつと戦ってもらおう。」

「えっ!?! なぜ私が・・・」

「さあな、じきにわかるさ。」

ディケイドは適当に説明すると、新たにカードを取り出し、セットする。

<FORMRIDE・・・FAIZ・ACCEL!!>

電子音が鳴ると、ファイズの胸部アーマーが展開しディケイドは【仮面ライダーファイズ・アクセルフォーム】に変身した。そして左腕に付いた腕時計型ツール‘ファイズアクセル’のスタータースイッチを押す。

〈Start Up〉

ファイズアクセルから電子音が流れると、ディケイドは少しかがんで構える。スバルとティアナもまた何か来ると思い構えた。そしてディケイドが動いたと感じ取った直後、ティアナの視界からディケイドとスバルの姿が消えた。

「えっ！？スバル？スバル！」

二人の姿が消えたことで気が動転するティアナ。だがオートバジンの放つガトリング砲によって強制的に現実に戻された。何とか避け、オートバジンの視界を魔力弾を放って煙幕で欺き、木の後ろに隠れた。その間ティアナは必死に考える。

（どうこと！？何で士さんがスバルを・・・それに、私とあのロボットを戦わせる理由は・・・待って、なら・・・）

ティアナは士がスバルを連れて行ったと真っ先に考え、何かを思い

ついた。

（まさかあのロボットは囧・・・私とあいつを戦わせている間にスバルを・・・）

そう考え付いた時、突然砲撃が止まった。そしてオートバジンはマシンデイクイダーに戻った。

「これは士さんのバイク・・・これを使ってたんだ。いや、それより、どうして止まったのかしら・・・まさかスバルが!?!」

ティアナはデイクイダーに戻ったのはスバルが撃墜されたからだと推測し、スバルの場所を探しだしてすぐその場にかけて行った。

ティアナのいる場所からかなり遠い場所でデイクイドは立ち止まり、抱えていたスバルは突然止まったため「うわぁ!!」軽く吹っ飛ぶ。

〈Time Out〉

アクセルフォームの起動時間を過ぎたため、デイクイドの姿に戻った。

「ま、ここなら問題ないな。」

デイクイドはその場所を見渡し、つぶやく。そして立ち上がったスバルはデイクイドに問う。

「士さん、こんなところで何を・・・」

「ん？ああ、お前もさすがに動き回るのも疲れてきただろう。ここは一つ、最後の一撃で勝負を決めようじゃないかと思ってな。」

そう、ディケイドはスバルと一対一で決着をつけるつもりで、オートバジンを皿に使ってティアナを引き離したのだ。

「どうだ？お前がやるってんなら、俺も本気を出してやるよ。」

ディケイドはケータッチを取り出し、スバルを挑発する。そしてスバルの目つきが変わる。

「・・・いいですよ、私の全力・・・受けでもらいますよ士さん！
」

「ああ。だが俺も負けねえぞ。」

<FINAL KAMENRIDE・・・DECADE!!>

スバルの了承を確認すると、ディケイドはコンプリートフォームへと変身した。スバルは右腕のリボルバーナックルのカートリッジをロードしてスバル自身の持っている最高の魔法の準備し、右腕に魔力を集中させながら構えを取る。ディケイドはディケイドはケータッチをタッチする。

<FAIZ！KAMENRIDE・・・BLASTER>

電子音が鳴ると、ディケイドのヒストリーオーナメントが変わりディケイドの隣に【仮面ライダーファイズ・ブラスターフォーム】を

「えっ！？私の魔法が押されてる！？」

「ハアアアアアアッ！！！」

自分の魔法がどんどん押されていることに驚いていると、ディケイドはファイズと共にさらに力を込めて声を上げる。

「わあああああつ！！！！！」

ディケイドのフォトンバスターがスバルのディバインバスターを押し返してスバルはマゼンタと赤の閃光に包まれその場に倒れた。スバルを倒したディケイドだったが、ファイズが消えると膝について息を切らしていた。そこへ、追いついたティアナが姿を現した。しかし、オートバジンの攻撃を少しくらったのか肩や足から少し血が流れていた。

「なんだ、ずいぶんと早かったな。だいぶ離れたはずだったんだが」
ディケイドはそう言うと、ライドブッカードをガンモードにして立ち上がる。するとティアナもディケイドの姿を見つけて対峙する。

「・・・どうやらお前で最後までいたなティアナ。キャロも今頃、お前らの補助魔法とやらを使い切って戦力にはならない状態じゃないのか？」

「・・・・・・・・」

ディケイドの問いにティアナは黙ってクロスミラーージュを構える。ディケイドは既にティアナ達に打つ手はないと予測し、ライドブッ

カーを構える。ティアナが何か考えていても素早く他のライダーに変身すればティアナに勝つ事は出来ると士は思っていた。

「（今よ、キャロー!!）」

「（はいっ!）」

ティアナはゆっくりと構えているディケイドは恐らく「自分は勝てる」と確信していると感じると念話で近くの茂みの中に潜んでいたキャロに連絡する。するとディケイドの後ろ上方にキャロの使役竜であるフリードリヒが飛翔してきた。実はティアナはスバルと元へ移動している最中にキャロにある作戦を話していた。そしてキャロはティアナとスバルがディケイドと戦っている間にフリードと共に魔力を少しずつ回復させながら接近して来ていたのだ。

「キュクル〜!!」

「何!？」

「フリード、ブラストフレア!!」

突然の伏兵にディケイドの視線はフリードの方を向くと、キャロの指示に従ってフリードは口から【ブラストフレア】を吐き出した。吐き出された火の玉はディケイドのいる地面に着弾すると真っ赤な炎が燃え広がった。

「うわあっ!？」

「よし、この一撃で……ヴァリアブルシュウウツッ!!」

「!？」

フリード“ブラストフレア”の炎で怯んだディケイドの隙についてティアナは残った魔力を全て込めて“ヴァリアブルシュート”をディケイドに向かって撃ち放った。ディケイドは体制を立て直して回避しようとしたが、怯んだ時の体制や今までの戦闘でのダメージが祟ってしまい回避が間に合わず、ティアナの弾丸はディケイドに直撃した。

「ぐわあああああああつ!!!!!!」

ティアナのヴァリアブルシュートの直撃を受けたディケイドは変身が解けて士の姿に戻ってしまった。士が敗れた事で訓練場に訓練終了のブザーが鳴り響く。

『はい、士さんのディケイドが敗れた事により、勝者はティアナ達フォワードチームに決定!!』

訓練場に鳴り響くのはの声に呼応するように訓練施設のフィールドが元に戻った。変身の解けた士は転がりながら大の字になって仰向けに寝っ転がる。そこにバリアジャケットを解除して訓練着に戻ったエリオとスバルが、ヘロヘロになりつつあった士の傍に歩いてくる。

「ハアハア・・・ハアゝ負けたか・・・」

「やったねティア、士さんに勝てたよ!!」

「全員で頑張った結果よ、エリオも頑張ったわね。」

「ええ、でも体がもうガタガタです・・・」

負けた事を息を切らしながら悔しがっている士、士に勝った事を喜ぶスバルにティアナは全員で協力してこそ勝利だと話し、最初に撃破されたエリオの心配をすると、エリオは既に体が痛んでしょうがない状態だと話す。

「みんな、ご苦勞様でした。士さんもお疲れ様でした。」

「皆よく頑張ったね。」

「まっ、今の段階で全員揃ってそこ一人前になった感じだな・・・」

そこへなのはとフェイト、ヴィータの三人が士達のところにやって来た。三人はそれぞれ良く頑張ったと全員に話し掛ける。スバル達は深呼吸して立ち上がってなのは達の前に姿勢を正して並び、士は「おう」と寝っ転がったまま手を上げて答える。

「実は何気に、今日の模擬戦が第二段階クリアの見極めテストだったんだけど・・・」

『えっ!?!?』

なのはの言葉にスバル、ティアナ、エリオ、キャロは驚きの声を上げる。訓練の開始前にこの戦闘訓練が第二段階クリアへのテストだというのはなのは達以外で知っていたのは士のみだった。なのははフェイトとヴィータの方を振り返って二人に質問する。

「どうでした?」

「合格。」

『早っ!!』

「ま、こんだけみっちりやって問題ある様な大変だってこった。」

『ははは・・・』

なのはの質問にフェイトは合格だと言うとスバルとティアナは同時に驚きの声を上げ、ヴィータは今までの訓練で問題が生じたのならそれこそ問題だと話すとエリオとキャロは少し汗を垂らしながら薄ら笑いを浮かべる。

「私も皆いい線いっていると思うし・・・士さんはどうでしたか？」

「そうだな、俺を負かす位の力を持ってるんだ。第二段階とやらもクリアで問題ないんじゃないのか？」

なのはもスバル達に合格点をあげ、士も同意する。士の同意になのはは第二段階のクリアを宣言した。その声にもスバル達は大喜び、フェイトはデバイスのリミッター解除のためにシャーリーの所に行くように指示を出し、ヴィータも明日からの訓練は皆のデバイスのセカンドモードを基本にして訓練を始めると言う、スバル達は一斉に「えっ!?!」と声を上げる。

訓練が後日になった理由はなのは達は今日は隊舎で待機の予定であった事と、スバル達が機動六課に来てからずっと訓練続きだったとフェイトが話すとスバル達は何かとざわめきだす。

「今日はみんな、一日お休みです。街にでも出かけて遊んでくるといいよ。」

『わあああいい!!』

なのはの一言にスバル達は大声をあげて喜ぶ。その姿を見た士は起き上がり、何処から取り出したのか、カメラを取り出してスバル達に向かってシャツターを切った。

その頃、スカリエッツィの研究所内にある訓練ドームではガジェット1型五体と3型一体が一つの目標に向かって攻撃を仕掛けていた。1型の中には左右に魔力弾頭のミサイルを装着した機体が混じっており、目標に向かってミサイルを一斉に発射した。しかし目標である狼の怪人は腕から雷を出し、ミサイルもろともガジェット1型をすべて破壊した。そして3型一体だけになると、自らの体を宙に浮かせた。3型はアームを出して捕まえようとするが怪人はそのアームを掴み、無理矢理引きちぎる。そしてそのまま3型に突っ込んで行き、拳による打撃でガジェット3型を破壊した。

『目標、全て撃破。お疲れ様でしたミスター・ガミオ』

ドーム内に響くスカリエッツィの作品であるナンバーズNO, 1ウィノの声に怪人は「うむ。」とうなずいた。この怪人こそかつて士が最初に訪れた“クウガの世界”で戦ったグロンギの王【ン・ガミオ・ゼダ】だった。

「力が有り余っている・・・この上ない力だ。」

ガミオは蘇った新たな肉体でも当時と同じ力が出せることを実感する。するとガミオの前にスカリエツテ映像付きで通信を入れてきた。

『やあ、調子のほうはどうか？』

「ドクターか・・・いや、特に問題はない。いい調子だ。」

『それはよかった。他のみんなも調子がよさそうで何よりだよ・・・』

「そうか・・・」

スカリエツティが通信越しにガミオに質問をして笑みを浮かべる。そしてスカリエツティの姿が映っている映像の他の映像には、“龍騎の世界”と“ブレイドの世界”で士達と戦ったハートのキングのカテゴリークィング【パードキサアンデッド】こと【鎌田】、ファイズの世界で戦った【タイガーオルフェノク】こと元ラッキークローバーのリーダー格であった【百瀬】、“アギトの世界”のバッファローに似たアンノウン【バッファローロード タウルス・バリスタ】、“カブトの世界”の仮面ライダーカブトⅡソウジの姿に擬態し、世界を牛耳ろうとした【フィロキセラワーム】、“響鬼の世界”の鬼の力を制御を失い、力の暴走により誕生した伝説の魔化魍【牛鬼】がガミオと同様にガジェット相手に戦闘を行っていた。そしてかしこくもガジェットドローンを壊している理由は、スカリエツティが実戦で使えるかどうかの装備を開発すると同時に使えるかの実験をし、その相手をそれぞれに任せていた。

スカリエツティが二人と一体の様子を見ていると、後ろから白いスーツに身を包み、サングラスをかけた男が現れた。

「ドクター。」

「おや、君か。どうかしたかね？」

「できれば私も少し運動したいのだがね。」

「それは勘弁願いたいな。君が本来の姿になってしまうと、研究所が破壊されてしまうからね。」

「それは残念だ。」

スカリエッティはそう言うと、男は残念そうに言った。この男こそ“ディエンドの世界”を大量のダークローチを率いて、人間を管理していた支配者【巨大邪神・フォーティーン】である。がっかりしているフォーティーンにスカリエッティはさらに付け加える。

「だが君は我々の切札だ。ゆっくり体を休めていてくれさえすれば、君の力は負けることないよ。」

「そうか。ならばゆっくりしているとしよう。」

そう言うとフォーティーンはそのままラボの奥へと消えて行った。その後を見ながらスカリエッティは思う。

（まあ、彼らの力は素晴らしいものだが、所詮私の作品達の引き立て役でしかないんだがね。ディケイドさえ倒してしまえば、自由に使っていると鳴滝は行っていた。ククク・・・これから面白くなりそうだ・・・）

スカリエッティは不気味な笑みを浮かべて、怪人たちの映像を眺め

て
いた。

第十一話：出会いと再会の休日（序章）（前書き）

今回から更新を月一、一日更新にしたいと思います。
何卒よろしくお願いします。

第十一話：出会いと再会の休日（序章）

朝の訓練の後スバル達は朝食を終え、今はそれぞれ出かける準備をしている。その間、なのは達隊長陣、シャマル、リイン、ザフィーラ、士も朝食にありついていた。そんな朝食の最中、食堂に備えられている映像にニュースが流れていた。

『魔法と技術の進歩と進化、素晴らしいものではあるがしかし！それゆえに我々を襲う危機や災害も十年前とは比べ物にならないほどに危険度を増している！……』

映像から流れてくるニュースには、地上本部で行われた会見で地上本部の総司令であるレジアス・ゲイズ中將が演説する光景が流されていた。

「このおっさんはまだこんな事言ってるんな……」

「レジアス中將は古くから武統派だからな……」

「あつ、ミゼット提督……」

「ミゼットばあちゃん？」

演説での放送を聞いていたヴィータは呆れたような事を言う。その時、なのはが演説会場にある人物の名を言うとヴィータも聞き覚えのある様な反応をし、映像にはかなり年の行った三人の老人達が同席していた。

「ああ、キール元帥やフィルス相談役も一緒なんだ。」

「伝説の三提督そろい踏みやね。」

「なあ、お前らあの爺さん達知ってんのか？」

「駄目ですよ、士さん。偉大な人たちなんですよ。」

「管理局の黎明期から今の形まで整えた功労者たちなんです。」

士は三人の老人達の事を爺さん呼ばわりした事にフェイトが注意し、なのは士に三人の功労者、【レオーネ・ファイル】【ラルゴ・キール】【ミゼット・クローベル】の名前をそれぞれ説明した。それを士は「だいたい分かった。」と言って食事に戻った直後、はやてが「そういえば」と士に問う。

「士さん、この後どうするん？」

「この後？」

「フォワードの皆は休みでお出かけするみたいやし、士さんも出かけてきたらどうや？」

「いや俺はミッドのことはよく知らないし、第一金もないぞ。」

「お金なら渡すし、そこまで変わってるわけでもないから大丈夫やと思うで。」

「だがな……」

はやての説得に士は迷ってはいたが、なのは達からも声がかかる。

「いいじゃんか士、行ってこいよ。」

「ああ、お前もミッドのことを知っておいて損はない。」

「そうですよ。隊舎には私達もいますし。」

「たまには息抜きも必要ですよ。」

「その通りです。」

ヴィータやシグナム、フェイトやなのはリインにまで説得され、士は「うーん」と唸っていたが諦めたのかため息をつく。

「わかった。なら、俺も少し楽しんでくるとしよう。」

「よしっ！決まりや！」

士の言葉にはやては大げさにガッツポーズを取り、他の皆は笑顔でその様子を見ていた。そんな様子を見ながら士は再度ため息をついた。その後、ティアナとスバルはヴァイスから借りたバイクに乗って街に行き、エリオとキャロもまるでデートみたいに二人仲良く街に向かって歩いていった。そのしばらく後に、士もはやてから少量の金銭をもらい、街に出かけて行った。ちなみにはやてから金銭をもらう際、士は「まるで小遣いをもらうガキだな」と小さくつぶやいたのは余談である。

その頃、街の一角の地下道でトラックの横転事故が発生していた。現場の検証にやって来た108部隊所属であり、スバルの姉である【ギンガ・ナカジマ】は先に来ていた局員から事情を聞いていた。

「横転事故と聞きましたが・・・」

「ええ。ただ、事故の状況がどうも奇妙でして・・・」

その局員によるとトラックを運転中に何かに攻撃を受け、荷物が突然爆発した、という運転手の証言を話した。ギンガはふと当の運転手に目をやったが、混乱し何かに怯えてしまったように頭を両手で抱えて震えていた。

「運んでいた荷物はカン詰めや飲料ボトル・・・爆発するようなものじゃないですね・・・」

「それと、下の方に妙な遺留品があつてですね・・・」

局員の話聞きながらギンガはトラックの積荷を見ながらトラックの先を歩いていくと、そこにはガジェットドローン？型の残骸を発見した。ギンガはガジェットが何故こんな所にいるのか疑問に思っている、残骸の先に何かの器のような物が置かれていた。

「これは！？生体ポット・・・？」

残骸の先に置かれていた物は、中身の無い生体ポットだった。ギンガは不吉な予感がすると眉をひそめた。

丁度同じ頃、スカリエッティのアジトではウーノからガジェットドローン？型六機がリック反応を追っていた時に三体破壊されたという報告を聞いていた。

「ほう。破壊したのは局の魔導師か、それとも“当たり”を引いたか？」

『確定は出来ませんが、どうやら後者の様です。』

「素晴らしい。さっそく追跡をかけるとしよう。」

『それと、？型の破壊された近辺にどうも妙な反応がありまして・・・』

「というと？」

『それが、以前ディケイドや鳴滝様が現れたものと同じ反応の様で・・・』

「なるほど。どちらかとあの青年が使ったか、それともまた新たに異世界から来た者か・・・」

ウーノの報告を聞いたスカリエッティは当たりの追撃をかけることと、謎の反応のことについて考えていると、一人の少女が歩み寄ってきた。

「ねえドクター、それならアタシも出たいんだけど・・・」

「ノーヴェ、君か・・・？」

『駄目よノーヴェ、あなたの装備はまだ調整中なんだし・・・』

ノーヴェという少女の要求にウーノは反論するが、ノーヴェは引かない。

「今回出てきたのが当たりなら、自分の目で見てみたい。」

「別に焦らずとも、あれはいずれ必ずここにやって来ることになるわけだがね。まあ、落ち着いて待っててほしいな。」

「・・・分かった・・・」

スカリエッティの言葉にノーヴェは大人しく待つことにし、部屋を出て行く。スカリエッティは追撃と回収を行なうガジェットを編成しようとした時、ノーヴェと入れ替わるように今度は怪人達がやってきた。その中を代表し、パラドキサアンデットの人間態の鎌田が尋ねる。

「スカリエッティ、その当たりというのはどういうものなんだ？」

「おやおや、今度は君達か・・・丁度良いところに来てくれたね、これからその当たりの回収に行ってきたてほしいんだ。君達もそろそろ外での戦闘を試みたいだろう？恐らく管理局の者も現れるかもしれないし、何より“彼”も来てくれるかもしれないよ？」

「ふんっ、まあいいだろう。さて誰が行く？」

スカリエッティから事情を聞いた鎌田は他の怪人たちに誰が行くか尋ねる。

「では、俺が行こう。」

「ならば僕も行こうかな？」

立候補したのはフィロキセラワームが擬態した弟切ソウとタイガーオルフェノクの間態百瀬だった。

「ではよろしく頼むよ、二人とも。」

スカリエッティの言葉にも応じず、二人はラボから姿を消し、他の怪人たちも出て行った。

ミッドチルダのある地下水路。ここには薄手のシャツを着た青年と青いパーカーを着た女性が左手に巻かれた鎖と一緒に繋がれている二つのケースを持つ少女を抱えて必死に何かから逃げようと水路を走っていた。しかし背後から何かの気配を感じたのか青年が振り返ると、そこにはガジェット？型三機が青年を追って来ているかのように向かってきていた。

「くそっ、まだ追ってくる。」

「一体どうしたら・・・」

「・・・うう、怖いよ・・・」

「大丈夫です、私達が必ず守りますから。」

「!? 危ないっ!!」

しがみ付いて怖がる少女を女性は安心させるかのように優しく声をかける。しかしガジェット一型の一機が青年達に向けて光線を放ち、それに気づいた青年は咄嗟に女性と少女を避けようとしたが、光線の一部が少女を繋いでいた鎖の一部を破壊し、ケースの一つが水路に落ちてしまった。青年はケースを拾おうと試みるが、他のガジェットも光線で攻撃してきた為、回避するのがやっとの思いだった。青年はとにかくこの場から逃げようと走り出し、ガジェットとの距離を開け、曲がり角を曲がった際に二人をしゃがませた。

「とりあえず、な・みちゃん達はここにいて。」

「ユ・・ケハ？」

「何とか追い払ってみる。だからそれまで動かないで。」

女性にそう言うと、青年は曲がり角から出て姿を晒し、ガジェット三機は動きを止めた。そして青年は自らの腹部に手をかざす。すると青年の体から銀色のベルトが現れ、青年は右手を前に出し、左手を腰の位置でベルトの上にかまえる。そして、ゆっくりと手を動かしてポーズを取る。

「変身っ!」

青年はそう叫び、ベルトの左横のスイッチを押す。するとベルトの中心部が赤色に光り、ベルトを中心に青年を包み込む。そして青年

は黒のスーツに筋肉をイメージしたような赤い鎧、赤い大きな瞳に金色の角をあしらった仮面の戦士に姿を変え、ガジェットへ向かって行った。その姿はまるで昆虫のクワガタを思わせるような姿だった。

その頃、士はミッドの街をぶらぶらと歩いていた。近くにバイクを止めて、適当に昼食を済ませたまではいいがそこからのことはまるで考えていなかったのだ。

「それにしても、こうしてのんびり歩くのはなんだか久しぶりな気がするな。」

ふと、士は歩きながらつぶやいた。士が仮面ライダーの世界に訪れればまずやっていた事はその世界の仮面ライダーを捜して、見つけたらすぐに戦いが始まっていた。そしてカードの能力を手に入れたらすぐに別の世界へと向かった・・・そんなことの繰り返しだった為、のんびりとした時間はあまり無かった。しかし世界崩壊が始まっているという理由があった事もあり、のんびりとしていられなかった。

（そう言えば、ナツミカンやユウスケはどうしてるんだ・・・今頃前の世界で探し回ってるのか？）

ライダーの世界のことを考えたからか士は光夏美と小野寺ユウスケ

のことを思い出した。次の世界に向かおうとした時、何も言わずにこの世界に来てしまったのだ。今頃探し回っていても無理はないだろう。

（まあ、あいつ等は大丈夫だろう。帰ったら思いっきり何か言われるだろうがな・・・今はゆっくり楽しむとしよう。）

夏海達へのことは一段落させ、士はせっかくの休日を有意義に過ごすことにした。

その頃、士とはやてのいる場所から少し離れた場所にはエリオとキヤロの二人が楽しそうな笑顔を見せながら歩いていた。エリオは街に向かい際に、シャーリーから【今日のプラン】なるモノをストラードに渡されていた。内容は「レールウェイでサードアベニューまで出て、市街地を二人で散歩、ウィンドウショッピングや会話を楽しみ、食事はなるべく会話の弾見そうな場所で・・・」などなどのプランが記されていた。そして現在は「市街地を散歩」の部分を実行していた。

何もプラン通りに事を進めないでもいいと思うところだろうが・・・それでも二人にとって初めての事だったので楽しそうだった。

「んっ!？」

「エリオ君？」

「キャラ、今何か聞こえなかった？」

「何か？」

「バンッていうか・・ドカンッていうか・・・」

ふと歩いていると突然エリオが足を止めた。エリオの感覚は昔、フ
ェイトに助けられる前にいた研究所の非人道的な実験の影響のため
か、普通の人より感覚が鋭い。エリオは音のした方向に向かって駆
け出すと、キャラも後を追うように駆け出す。

エリオとキャラの向かった場所は、ビルとビルの間の裏路地だった。
エリオとキャラは裏路地を進んでいくと「バコンッ！！」と物音が
聞こえ、二人は周囲を警戒する。すると目の前にあるマンホールの
蓋が開いていて、その穴から何かが飛び出した。

エリオ達が裏路地にくる数分前、地下水路ではクワガタに似せたせ
たような姿をした戦士がガジェットに向かって駆け出す。ガジェッ
ト？型は光線を発射して撃退しようとするが、戦士は軽々と避け、
ガジェットの懐に入り込んだ。

「たりゃあー！！」

戦士はガジェットに右手を突き出し、ガジェットの装甲を紙切れの
ようにぶち抜き貫通させる。そしてそのガジェットから拳を引き抜
き、その場に放り投げる。すると他のガジェットも攻撃を仕掛けし
ようとしたので、戦士はとっさに破壊したガジェットの棒状の部品を

掴み、変身の時と同じ構えをする。

「超変身っ！」

戦士が叫ぶとその鎧が形を変え、紫色の目と紫色の重厚な鎧へと変わる。そして手にしていた部品は巨大な剣の姿へ変わり、戦士はガジェットに向かって行く。ガジェットも光線で対抗するが、戦士はびくともせずに進んで行き、大剣を横に一振りしてガジェットを二体同時に破壊する。

追撃をかけていた三機のガジェットは瞬く間に破壊され、戦士は女性と少女の元へ駆け寄る。

「・つみちゃん。」

「ユウ・ケ、もう来ないんですか？」

「ああ、全部倒した。他にはいないみたい。」

「そうですか・・・よかった・・・もう大丈夫ですよ。」

戦士からもう大丈夫だと聞いた女性は少女にもそのことを伝える。

「ぐすっ、本当？」

「ああ、本当だ。俺が全部やつけた。それより、早くここから出よう。」

少女の問いに戦士が答えると、女性は少女を抱え直し戦士はケースを抱え歩き出す。暫く進むと途中で上に上がるはしごとを見つけ、上を見上げるとマンホールの蓋の小さな穴から少し光が差し込んでい

る。

「あそこから出られるかも・・・ユ・スケ。」

「ああ・・・超変身っ！」

戦士は再び姿を変え、今度は青色の目と鎧の姿に変わった。そしてマンホールの蓋の元まで一気に飛び上がり、蓋を開ける。そして元の位置へ戻る。

「これでよし。さ、つかまって。」

女性は戦士につかまり、少女もまたしっかりと抱きかかえる。そして、マンホールの蓋の所まで一気に飛びあがり、地上に着地する。

「大丈夫？」

「はい・・・なんとか。」

戦士は女性に無事を確認すると、女性は無事だと答える。そして戦士は背後に気配を感じ、振り返るとそこにはエリオとキャロが立っていた。

「あなたは！？それにさっきの姿は・・・」

「えっ！？えと・・・その・・・」

エリオに見られたことで戸惑う戦士。だが、キャロがあることに気が付く。

「エリオ君、あれってレリックのケースじゃないかな？」

「えっ・・・あっホントだ。」

キャロは戦士が抱えていたレリックのケースに気がつくどエリオも反応する。その反応に気がついたのか、女性が二人に問いかける。

「あの・・・あなた達、何か知ってるんですか？」

「えっ、ああ、それは我々時空管理局という組織が管理しているんです。」

「時空管理局？」

「やはり・・・ここは別の世界？」

女性の問いにエリオは答えたが、戦士と女性は、時空管理局、という言葉に首をかしげ、別の世界であるという。

「ご存じありませんか？」

「それに別の世界って・・・あなた方は一体？」

エリオとキャロは二人に尋ねる。そして戦士は青年に戻り女性と共にその問いに答える。

「俺は小野寺ユウスケ。」

「私は光夏美と言います。私達は別の世界から来たんです。」

青年・小野寺ユウスケと女性・光夏美の言葉にエリオとキャロは驚愕した。

その頃、スバルとティアナの元にキャロから通信が入った。

「ん？キャロから、全体通信？」

「何だろ・・・」

スバルとティアナは突然のことに嫌な予感を感じていた。通信内容はミッドチルダ・サードアビニューF23の路地裏にてレリックと思しきケースを発見、ケースを持っていた小さな女の子と、女の子と一緒にいた男性と女性を保護。指示を求めると言う内容だった。同時に通信は六課本部にも届いていた。

「スバル、ティアナ。ごめん、お休みはいったん中断。」

『はいっ！』

『大丈夫です。』

「救急の手配はこっちです。二人はそのままケースと少女達を保護。大急手当をしてあげて。」

『はいっ』

なのははスバルとティアナに指示、フェイトもエリオとキャロに素早く指示した。同時に士も通信を開き、指示を仰ぐ。

『なのは、フェイト。俺はどうする？』

「士さんもエリオ達向かってください。私達もすぐ向かいますから。」

『わかった。』

士なのはからの指示を受け、通信を切ろうとする。そこでフェイトが「待ってください。」と制止する。

「キャロの話によると女の子と一緒にいた二人は異世界来たって言うてるらしいんです。」

『何っ！？・・・わかった。それも含めてとにかくそこに行く。』

『お願いします。』

そこで通信は途切れ、士はバイクを走らせる。

（異世界から来た・・・か。まさかとは思うが・・・）

士はフェイトの言った言葉が妙に引かかってはいたが、とにかく急いで現場に向かった。

サードアベニューF23の路地裏、そこにはエリオとキャロ、そして小野寺ユウスケと名乗る青年と光夏美と名乗る女性小さな少女の四人が皆の合流を待っていた。少女はマンホールから出てから緊張の糸が切れたのか気を失ってしまい、今は夏海に抱きかかえられている。その間にエリオとキャロは念話があるにもかかわらず、小声で話す。

「ねえエリオ君、さっきのって士さんの姿に似てなかった？」

「うん、確かに。似てるところかそっくりだった。」

「えっ・・・士!？」

「もしかして、門矢士ですか？」

キャロとエリオが以前士の変身した姿について話していると、士の名前にユウスケと夏海が反応する。

「えっ、士さんを知ってるんですか？」

「知ってるも何も・・・」

「エリオ〜! キャロ〜!」

ユウスケが答えている途中で、スバルとティアナがエリオ達と合流

する。

「スバルさん、ティアさん!!」

「この子か、これまた随分ボロボロに・・・ってそちらの人達は？」

「女の子と一緒に地下水路を通って来たらしんです。何でも士さんとお知り合いみたいで・・・」

ティアナは少女を確認しその姿を見て少し驚くが、少女を抱きかかえている夏美と目が合い、ユウスケと一緒にキャロに何者かと尋ねるとキャロは答える。その時、聞きなれたエンジン音が路地裏の表から聞こえ、士がやってきた。

「おいっ、お前ら!」

「士さん! どうしてここに?」

「なのはの奴から連絡をもらってな・・・って。」

士はティアナに説明すると、奥にいた二人に驚愕する。

「ユウスケ、夏海!!!!」

「士君!!」

「士あゝ! お前今までどこ行ってたんだよ!?!」

夏海とユウスケも士の姿に感激し、傍に駆け寄った。

「お前ら、何でここに・・・」

「いや、ほら。前の世界でお前突然どっか行っただろ。それで俺たちずっと探してたんだよ。」

「そしたらいきなりあのオーロラ見たいのが現れて、この世界の地下水路に来たんです。そしたら奥から女の子が歩いてきて、変な機械まで現れて・・・」

「なるほどな、だいたいわかった。だが今はそっちが先だ。」

ユウスケと夏海の話聞いた士は、キャロに抱えられている少女指差す。夏海は士に駆け寄る際に少女をキャロに預けたのだ。それを聞いたティアナはエリオに尋ねる。

「ケースの封印処理は？」

「キャロがしてくれました。ガジェットが見つける心配はないと思います。」

「うん。」

「それから、これ・・・」

エリオの報告にティアナがうなずくと、エリオはレリックに繋がれている鎖を見せる。

「ケースはもう一個あった？」

「ああそれ、もう一個ついてたんだけど、途中で落としちゃって・・・」

・
」

ティアナはレリックのケースがもう一つあるのではないかと推測するが、ユウスケの言った一言がもう一つレリックがあると確信させた。

「落としたって、それはどういうことですか？」

「この子と一緒に妙な機械に追われていて、逃げている途中で機械の攻撃を受けて水路に落ちてしまったんです。」

「拾おうと思ったんだけど、逃げるので手いっぱい……」

ティアナの質問に夏海とユウスケは事情を話す。ティアナはファーストの言っていた“妙な機械”がレリックを追ってきたガジェットだと推測した。しかしガジェットがいたならここに現われていてもおかしくない、しかし増援の気配が無いところを見ると、ガジェットはこの二人のどちらかもしくは二人で破壊したと思い、二人の姿を見る。すると上空からなのは達を乗せたヴァイスのヘリがやって来た。

「みんな！」

「やっと来たか。」

ヘリから降りてきたなのは、フェイト、シャル、リインの四人は士達の元に駆け寄る。シャルは少女をその場に寝かせ、持ってきた医療道具で少女の検査を始める。

「士君、あの人たち大丈夫なんですか？」

「ん、ああ。こっちで出会った奴らだ、心配はない。」

夏海は少女に何かされるんじゃないかと心配していたが、士は大丈夫だと声をかける。

「・・・うん、バイタルは安定してるわね。危険な反応もないし、心配ないわ。」

「はい。」

「よかった。」

シャルの診断にキャロとスバルが安堵する。

「ごめんね皆。お休みの最中だったのに・・・」

「いえ。」

「平気です。」

フェイトのお詫びにエリオとキャロが代表して答える。

「ケースと女の子はこのままヘリで搬送するから、皆はこっちで現場捜査ね。」

『はいっ!』

「士さんもフォワードの皆と行動してください。」

「わかった。」

なのはフォワードと士にこの後の行動について指示を出すと、夏海とユウスケを見ながら「ところで」と士に聞く。

「そちらのお二人は……」

「ああ、俺の旅の仲間だ。俺と同じでこの世界に迷い込んだらしい。」

士は大雑把に説明すると夏海とユウスケは名を名乗り、簡単にこの世界に来てから現在に至るまでを説明した。

「なるほど。では詳しくお話をお聞きたいので、お二人には私達と来て頂きたいんですが、よろしいですか？」

「えっと……」

二人は少し不安なのか顔を見合わせた後、士を見る。そして士はため息交じりに言う。

「大丈夫だ。俺も世話になってるところだからな。」

「そうか……なら大丈夫かな。」

「わかりました。」

士に言われてようやく安心したのか夏海とユウスケはなのは達と共に六課隊舎へ向かうことになった。

「じゃあ、なのはちゃん。この子、ヘリまで抱いてってもらえる？」

「あっ、はい。」

話しがひと段落したところでなのははシャルに言われ、少女を抱きかかえてヘリまで向かった。だが、少女の顔を近くで見たなのはの顔は少し不安そうだった。

なのは達がヘリへ移動したすぐ後、ロングアーチがガジェットを発見した。地下水路に数機ずつのグループで20ほど、海上にも12機単位の編成が五グループ確認された。

「多いな。」

「どうします？」

「そうやなあ・・・」

『スターズ2からロングアーチへ！！こちらスターズ2！！』

はやてと六課の副指揮官であるグリフィスとどうするか相談していると、そこへスターズ2のウィータから連絡が入った。ウィータは別の場所で演習中の際にガジェット出現の報を受け、108部隊のゲンヤから許可を貰ってこちらに向かっていると報告を受ける。そしてもう一人、トラック横転事故の調査をしていたギンガも関係が

ある事例だと話して合流すると言ってきた。

『ほんならヴィータはリインと合流、協力して海上の南西方向を鎮圧。』

「南西方向、了解です。」

『なのは隊長とフェイト隊長は、北西部から。』

「了解！」

『ヘリの方はヴァイス君とシャルに任せてええか？』

「お任せあれ。」

「しっかり守ります。」

『ギンガは地下でスバル達と合流。道々、別件の方の話もきかせてな。』

「はいっ！」

はやてはそれぞれに一気に指示を送る。その頃、地下水路のガジェット殲滅の命令を受けたフォワード陣もやる気十分だった。

「さて。みんな、十分休みは堪能したわね？」

「お仕事モードに切り替えて、しっかり気合い入れて行こう！」

『はいっ！』

「士さんお願いしますね。」

「ああ、任せろ。」

同じく命令を受けた士もやる気十分で、ベルトを装着する。

《Stand by》

「セーット、アップ!!」

「変身!!」

<KAMENRIDE・・・DECADE!!>

スバル達はデバイスを起動、士はディケイドに変身して地下水路へガジェット殲滅に向かった。

第十一話：出会いと再会の休日（序章）（後書き）

どうも、お久しぶりです。

さて、満を持してユウスケと夏海が登場しました！今後の事も色々
とアイデアは考えているのですが、なかなかまとめられない状態
です。でも何とか頑張りますのでよろしくお願いします。

ではまた来月、お会いしましょう（＾Ｏ＾）

第十二話：出会いと再会の休日（前編）（前書き）

すいません、忘れてて一日遅れましたorz

第十二話：出会いと再会の休日（前編）

フォワードと士が地下水路を進み始めていた頃、なのはとフェイトはヘリが飛び去った後のビルの屋上にいた。

「フォワードの皆、ちょっと頼れる感じになってきた？」

「あははっ、もっと頼れるようになってもらわなきゃ。」

「うん」

二人は最近のフォワードの様子に実感と期待を寄せながら、デバイスを起動しバリアジャケットを装着する。

「早く事件をかたずけて、また今度お休みあげようね。」

「うん。」

「みんなで遊びに行ったら、きっと楽しいよ。」

「うん。」

なのはとフェイトはそう交わしながら、海岸上のガジェットの元へ向かって行った。そしてヘリの中のリインも騎士甲冑を纏い、出撃準備に入る。

「気をつけてね？」

「はいです。」

シャルからのエールを受け取り、リインはヘリから出撃した。

「ヴァイス陸曹もよろしくですよ。」

「ウッス！」

「ストームレイダーも皆を守ってあげてくださいです。」

《All right, my friend.》

そしてヴァイスとその相棒、ストームレイダーにも頼みヴィータの元へ向かった。

その頃、ミッドチルダのある場所にいたルーテシアにスカリエツェイの戦闘機人No. 1であるウーノが連絡を入れていた。

『ヘリに確保されたケースとマテリアルは妹達が回収します。お嬢様は地下に。』

「うん。」

『騎士ゼストとアギト様は？』

「別行動・・・」

『お一人ですか？』

「一人じゃない・・・私にはガリユールがいる・・・」

『失礼しました。協力が必要であればお申し付けください、最優勢で実行します。それから、百瀬様と弟切様がすぐそちらに向かわれますので。』

「わかった。」

ウーノとの会話が終った後、ルーテシアは足下に紫色の転移魔法陣を展開してガリユールと共に地下水路へと向かった。その間、海上ではなのはとフェイトが現場に接近中、ヴィータもリインと合流して南西方向のガジェットの入った。暫くするとなのはとフェイトもガジェット？型の編成を確認し、迎撃に入った。

の頃、地下水路へと向かったスバル、ティアナ、エリオ、キャロ、ディケイドの五人はレリックを探しながら水路を進んで行き、その間ティアナはギンガと通信をしていた。

「ギンガさん、お久しぶりです！」

『うん、ティアナ。現場リーダーはあなたでしょ？従うから指示をくれないかな？』

「はい。」

ギンガに言われ、ティアナは南西のF-94区画で合流するよう指示した。それを聞いたギンガは手持ちの端末で位置を確認する。

「そう言えば、ギンガって誰だかよくわからないんだが・・・」

「確か、スバルさんのお姉さん……ですよね？」

「そう。あたしのシューティングアーツの先生で、年も階級も二つ上。」

「なるほどな。だいたいわかった。」

ディケイドは聞いたことがない名前に疑問を持つと、エリオを經由してスバルが説明する。その間にもティアナはギンガに指示を出す。

「ギンガさん、デバイス同機で総合位置把握と独立通信ができます。準備いいでしょうか？」

「うん。ブリッツキャリバー、お願いね。」

《Yes sir.》

ブリッツキャリバーの反応と共にギンガはバリアジャケットを身に纏う。そして目的地へ向かう中、通信で自分の追っていた事故の話しをはやてや聖王教会にいるクロノやカリムにした。

『私が呼ばれた事故現場にあったのはガジェットの残骸と、壊れた生体ポットなんです。丁度、五、六歳の子供が入るくらい、近くに何か重い物を引きずって歩いたような跡があって、それを辿って行こうとした最中、連絡を受けた次第です』

ギンガの話聞いていたはやて、クロノ、カリムは真剣にその内容を聞いていた。さらにギンガは発見された生体ポットが過去の事件で見た事があると話し、はやても同意する。その生体ポットは人造魔導師計画の素体培養機だった。その通信はヘリにも繋がっており、

話を聞いたシャルは驚きの顔をする。だが、一緒にいた夏海とユウスケはなんのことかさっぱりだった。そして地下水路を進んでいたスバル達もその話を聞いていた。聞きなれない言葉にディケイドが問う。

「人造魔導師？」

「優秀な遺伝子を使って人工的に生み出した子供に、投薬とか機械部品の埋め込みで、後天的に強力な魔力や能力を持たせる・・・それが人造魔導師です。」

「論理的な問題はもちろん、今の技術的じゃどうしたっていろんな部分に無理が生じる、コストも合わない。だからよっぽどどうかしてる連中でない限り、手を出したりしない技術のはずなんですけど・・・」

その話を聞いたエリオが複雑な顔をしていたのをディケイドは見逃さなかった。その時、キャロのケリュケイオンに反応が現れた。

《A movement reaction perception, at the Gadget Drone.》（動体反応確認。ガジェットドローンです。）

「来ます！小型ガジェット六機！」

それを聞いたフォワード全員とディケイドは前後を警戒する。一方海上ではなのはやフェイト、ヴィータとリインの活躍でガジェット部隊も後少しで片付こうとしていた。

「おしっ、いい感じだ。」

「リインも絶好調です〜!」

「ガンガン行くぞ。さっさと片付けて他のフォローに回らねーと。」

「はいですっ!ん?あれは・・・」

喜んでいたリインは何かを発見する。それは敵の増援だったが、何かがおかしい。なのはとフェイトも警戒する。

その頃、なのは達がいる別のエリアでは、ナンバーズの一人、N.O.4クアットロが^{インヒューレントスキル}先天固有技能を発動していた。

「ふふふ、クアットロのインヒューレントスキル【シルバーカーテン】。嘘と幻のイリュージョンで回ってもらいましょう。」

クアットロが発動させたIS【シルバーカーテン】。レーダーや電子機器を狂わせ、その能力はロングアーチのレーダーに映っていたガジェット?型の数を瞬く間に増やし、その光景にシャーリーやロングアーチチーム全員は驚きを隠せないでいた。なのは達にも確認を取ったが、黙視で確認できるなのは達も全てのガジェット?型が本物に見えていた。それを聞いたはやてはいきなり立ち上がる。

「グリフィス君。」

「・・・はいっ。」

はやてはグリフィスに目を向けると、グリフィスは何かを察したようにうなずく。海上ではフェイトが放った魔力弾がガジェット数機に当たったが、その何体かがその球をすり抜けた。

「幻影と実機の構成編隊・・・」

「防衛ラインを追われない自信はあるけど、ちょっとキリがないね。」

なのはは自信の広域防御魔法の中でフェイトと話す。

「ここまで派手な引き付けをするってことは・・・」

「地下か、ヘリの方に主力が向かってる。」

「なのは、私が残ってここを抑えるから、ヴィータと一緒に。」

「フェイトちゃん？」

フェイトは他の方に主力があると考え、なのはが向かうように行った。それを聞いたなのはは当然驚く。

「コンビでも、普通に空戦してたんじゃない時間がかかりすぎる・・・限定解除すれば、広域殲滅でまとめて落とせる。」

「それは、そうだけど・・・」

「なんだか嫌な予感がするんだ。」

「でも、フェイトちゃん・・・」

フェイトはなのはを説得するが、なのはやはり納得が行かない様子だった。その時、突如通信が入る。

『割り込み失礼!』

「!？」

突然の通信に二人は驚いた。それは騎士甲冑を纏ったはやてだったからだ。はやても嫌な予感を感じており、クロノから自分の限定解除許可を申請し、上空のガジェットを自分が引き受けると言った。その様子になのは達は少し心配そうな子をした。はやてはなのはとフェイトにヘリの護衛を頼み、ヴィータとリインはスバル達に合流するように指示を出し、クロノに限定解除許可の申請を申し出た。

「君の限定解除許可を出せるのは現状では僕と騎士カリムの一度ずつだけだ。承認許諾の取り直しは難しいぞ。使ってしまったのか？」

「使える能力を出し惜しみして、後で後悔するのはいややからな。」

「場所が場所だけに、SSランク魔導師の投入は許可できない。限定解除は3ランクのみだが、それでもいいか？」

「シングルS・・・それだけあれば十分や！」

クロノは最後まではやてに忠告したが、はやては一切引くことはなかった。クロノは諦めもまじったようにため息をつく、手をかざして魔法陣を展開する。

「八神はやて。能力限定解除、スリーランク承認。リリースタイム・120分!!」

クロノが魔法陣の中心を押し、はやての限定解除を承認した。そして限定の解除の出来たはやては、空高く上がりガジェットのある地点の方を見る。

「よし・・・久しぶりの遠距離広域魔法、行ってみよかつ!!」

気合を入れたはやては魔導書型ストレージデバイスである【夜天の書】を出現させ、攻撃準備に入った。

その頃、地下にいたフォワード達も順調にガジェットを破壊していた。

「空の上はなんだか大変みたいね。」

「うん。」

ティアナの言葉にスバルが同意する。その間キャロがケリュケイオンで現在位置を確認する。

「ケースの推定位置までもうすぐです。」

「よしっ、上は上で任せて俺達はさっさと先を急ぐぞ。」

『はいっ!』

珍しく士がエールを送ると、全員は意外な顔をした後に笑顔で答える。その時、奥の通路から何かが飛び出した。フォワード達はすぐさま警戒する。煙が晴れて行くと、そこにいたのは別ルートで向かっていたギンガだった。

「ギン姉！」

「ギンガさん！」

スバルとティアナは久しぶりに会ったため、驚く。そしてギンガは笑顔で告げる。

「一緒にケースを探しましょう。ここまでのガジェットはもうほとんど、叩いてきたと思うから。」

「うん！」

その言葉がよほど嬉しいのかスバルは大声で答える。その後ろでエリオとキャロは始めて見るギンガの姿に固まっていたが、ギンガが笑顔で二人を見るとエリオとキャロは素早く敬礼した。そして士もギンガの傍に近づき、話しかける。

「お前がギンガか。ま、よろしく頼むぞ。」

「えっ、えと……もしかしてあなたが門矢士さんですか？」

「そうだが……はやてから聞いてたのか？」

「はい、八神部隊長から少しお聞きしました。こちらこそよろしく願います。」

「ああ。」

デイケイドはギンガに軽く挨拶をし、ギンガも挨拶を返した後フォワード達はすぐさま走り出した。

再び上空。ロングアーチははやてに準備完了の知らせをしていた。

「ロングアーチ1、シャリオからロングアーチ0、八神部隊長へ。」

『はいな?』

「ファイティング・サポートシステム準備完了です。シュベルトロイツとのシンクロ誤差調整終了。」

『うん、了解。ごめんな、精密コントロールとか長距離サイティングはリインと一緒にできないとどうも苦手で・・・』

はやては自分の短所に関してフォローしてくれることにお詫びする。しかしシャリーは笑顔で返した。

『その辺はこっちにお任せください。準備完了です。』

「おおきにな。」

はやては礼を言ってから通信を閉じ、広域魔法の詠唱を行う。

「来よ、白銀の風・・・天よりそそぐ矢羽となれ。」

はやてが魔法の詠唱をする最中、なのはとフェイトは安全圏に退避し、シャーリーから付近の住宅街の着弾のない事を確認してはやてに連絡を入れる。安全確保の報を聞いたはやては魔法を発動した。

「おっし、第一波・・・行くよお！！フレース・・・ヴェルグ！！」

超長距離視程を誇る着弾炸裂魔法である【フレースヴェルグ】を発動させたはやての魔法陣から白銀のビームのようなものが発射される。発射されたフレースヴェルグを感知したガジェット？型は当然回避行動に入るが、炸裂型の魔法は目標のエリアに着弾すると同時に大爆発を起こして周囲にいたガジェット？型は回避できずに瞬間に撃破された。

そして再び地下水路。スバル達フォワード陣とディケイド、ギンガはまた新たに出現したガジェットの対応をしていた。だが、なのは達の訓練を毎日行っていたスバル達にとってガジェット？型程度では全く相手にならず、しかもディケイドやギンガといった強力な面々もあり、おまけに仮面ライダーの力を操るライドドライバーもあるため、なんの心配もなく順調に倒していった。

<ATTACKRIDE・・・BLAST!!>

ディケイドは“ディケイドブラスト”でより広範囲に攻撃を広げ、ガジェットを破壊する。

《ATTACKRIDE・・・FIRE!!》

ティアナはギャレンの“ファイアフライ”のカードを使い、クロスミラージュの魔力弾に炎の力を付加して攻撃する。

《ATTACKRIDE・・・BLIZZARD!!》

エリオはレンゲルの“ブリザードポラー”のカードでガジェットをまとめて凍らせ、一気に砕く。

「フリード!!」

キヤロはフリードの‘ブラストフレア’でガジェットを焼き尽くす。そして、スバルとギンガは水路一杯に転がりながら現われたガジェット?型に突っ込んでいく。

「スバル、一撃で決められる?」

「決める!・・・あつ、そうだ。せっかく一緒に戦えるんだし、コンビ技やろうよ!」

「コンビ技?」

「うん!ギン姉もライドドライバ―あるでしょ?それを使って。」

「なるほど、わかった。」

《Are you ready?》

《Yes.》

ギンガの声にスバルは答え、二人でコンビ技を撃つ提案もギンガは少し疑問に思ったがすぐに理解し、聞き入れる。そしてマツハキヤリバーに問いかけにブリッツキャリバーも答え、二人は同時にライドドライバーにカードをセットする。

《《FINAL ATTACKRIDE・・・GA・GA・GA・
GAI!!》》

電子音が鳴るとスバルの右腕に“メタルホーン”が装着され、その場でジャンプする。するとギンガはその足を掴み、肩に乗せて走りだす。?型もレーザーやアームで対抗するも、すさまじい高速突進を前になすすべもなかった。

《《Hebby Pressure》》

マツハキヤリバーとブリッツキャリバーの音声と共にスバルとギンガは【仮面ライダーガイ】の必殺技“ヘビープレッシャー”を叩きこむ。ガジェット?型は伸ばしたアームで防御していたが、衝撃に耐えきれずアームは破壊され、本体を貫通され機能を停止した。無事にガジェットを破壊する事の出来たフォワード陣とギンガ、デイケイドはさらに奥に進むと、水路の合流地点だろう広い場所に出た。キヤロはフリードと共に周囲を見渡しながら歩いていると、見覚えのある四角い物体を見つけた。その近くに駆け寄り、それを持ちあげた。

「ありました!」

その言葉に皆安堵した。だがその時、ティアナはどこからともなく妙な音が聞こえるのを感じ取った。その音は壁から水面に移り、しだいにキャラに近づいていた。キャラが何かに気付いた瞬間、黒い魔力弾がキャラの元へ飛んで行った。直撃は受けなかったものの、その衝撃でレリックのケースを落としその場に転げた。キャラが転げた直後、エリオが何もないはずのその場に攻撃を仕掛ける。何かにぶつかった後、着地するとエリオの腹部には傷ができていた。

「エリオ君！」

キャラが心配そうに叫ぶが、エリオは腕を伸ばしてキャラをかばうように身構える。煙が晴れると、今まで見えなかったその姿を現した。

「あいつは……」

ディケイドはその姿に見覚えがあった。それは以前、ホテル・アグスタでディエンドと戦ったガリユーだった。エリオ達がガリユーを見ていたその瞬間に、キャラの後ろではルーテシアがレリックのケースを拾った。キャラがあわてて取り返そうとするが、ルーテシアは「邪魔。」とだけ言ってディロンドライバーを乱射した。キャラはとっさにバリアで防ぐが、耐えきれずバリアが破壊された衝撃に吹き飛んだ。キャラはその場にいたエリオもろとも壁に激突する。ガリユーは二人を補足し攻撃を仕掛けようとしたが、ディケイドがライドブツカーを放ちそれを止める。そしてギンガがガリユーに向かって拳を叩きこむ。ガリユーは腕で防御するも耐えきれず吹っ飛んだ。その間にスバルはルーテシアの元に駆け寄る。

「こらっ！ その女の子、それは危険な物なんだよ、触っちゃ駄目

！こっちに渡して！！」

「・・・・・・・・・・」

レリックケースを持ち逃げしようとするルーテシアの姿を見たスバルは大声で叫ぶが、ルーテシアは全く動じず、ディロンドライバーをスバルの足元に数発放つ。ルーテシアは煙で見えていない間に立ち去ろうとする。その時、ルーテシアの首元にオレンジ色の魔力刃が現われ、ルーテシアの傍にティアナが姿を現す。姿を消す幻影魔法‘オプティックハイド’を使って自身の姿を消し、ルーテシアに近づいていたのだ。

「ごめんね、乱暴で・・・でもね、これホントに危ない物なんだよ・・・」

「くっ・・・」

その姿は、まさに悪役のような感じ？になってしまったティアナの行動にルーテシアは動く事が出来ないでいた。その時、ルーテシアに何者かが念話を送ってきた。

（ルールー、1、2、3で目を瞑れ！！）

その声はルーテシアはとも聞きなれたものだった。

「いいか？1、2・・・」

それを聞いたルーテシアは言われた通り目を瞑る

「スターレンゲホイール！！」

すると、一つの魔力の玉が水路に飛来して爆発した。その爆発と同時にもの凄い轟音と閃光が水路一杯に広がり、スバル達はおろか、ディケイドですら全く身動きが取れなくなってしまった。

「くそっ、何なんだこいつは!？」

その場にいた全員が怯んでいる隙にルーテシアはその場から逃走しようとするが、いち早く怯みから脱したティアナはクロスミラージュをルーテシアに向ける。だが、素早くガリユーが蹴りを入れティアナは吹き飛ばされる。ティアナは体制をすぐに整えてクロスミラージュをガリユーに向けるが、狙いを変えてルーテシアに発砲、しかしティアナの放った魔力弾は庇いに入ったガリユーの左肩の鎧の一部を壊す程度に終わった。

「まったくあたし達に黙って勝手に出かけちゃったりするからだぞ、ルールールもガリユーも！」

「・・・アギト・・・」

ルーテシアの元に現われたのは、自らを【烈火の剣精】と名乗る身長が丁度リイン並みの大きさの【アギト】と呼ばれる少女だった。それを見ていたスバル達は啞然としていたが、ディケイドがいきなりため息をついた。

「まったく・・・次から次へと、わけのわからない事ばかり起きやがる。」

ディケイドは今までのことに謎が多すぎて、しびれを切らしたのだった。そしてディケイドはルーテシアの持つディロンドライバーを

指しながら問う。

「まずお前の持つてるその銃。それによく似た奴を俺はよく知っている。」

「そういえば・・・」

「何所かで見たような・・・」

ディケイドの言葉にスバルとティアナも見覚えがあった。ディケイドは続ける。

「そしてその持ち主はこの世界で一度盗られたと言っていた。ということは・・・」

「その通りだよ。」

ふと、何処からか声がする。声のする方を見るとそこにはディエンドライバーを持った大樹の姿があった。

「海東・・・」

「えっ、海東って・・・」

「まさかあの人が・・・」

ディケイドの言葉を聞いてスバルとティアナは今まで変身後の姿しか見ていなかったので驚愕する。

「士、見事な推理だね。探偵でも初めてみたらどうだい？」

「そんなことはどうでもいい。それより・・・」

「ああ、そうさ。あのお嬢ちゃんの持っている銃は、コイツを元に作られた忌々しいバツ物さ。」

そう言い放つと大樹はカードをセットする。ルーテシアもケースをガリューに預け、カードをセットする。

<<KAMENRIDE・・・>>

「変身っ!!」

「変身・・・」

<DI!END!!>

<DI!RONDO!!>

電子音が鳴り、大樹はディエンドにルーテシアはディロンドへと変身した。

「ディロンド・・・あれがこの世界に生まれたライダー・・・」

ディケイドがこの世界のライダー・ディロンドを見ていると、ディエンドが「ところで・・・」と切り出す。

「そこの二人は、いつまで隠れてるんだい？」

「何?」

ディエンドの言葉にディケイドが反応すると、ルーテシアの後ろから二人の人物が現れた。

「気付いていたか。」

「まさか、お前らまで蘇ってるとはな。」

「まあな。物はついでだ。あの時の借りを返させてもらうぞ、ディケイド！」

それはスカリエッティに回収を命じられた百瀬と弟切の二人だった。

「・・・モモセ、ソウ・・・」

「なんだよ、てめーらも来たのかよ。」

「来たくて来たわけではないがな。まあ、ヤツらに借りを返せると思えば気が楽だ。」

「とにかく、さっさと終わらせるぞ。」

不服そうなアギトをよそに百瀬はタイガーオルフェノクに、弟切はフィロキセラワームに姿を変えた。

「・・・じゃあ、私も・・・」

ディロンドはその言葉に答え、ディロンドライバーにカードをセットする。

<KAIJINRIDE・・・WORMS!!>

電子音が鳴りディロンドライバーを放つと、フィロセキラワームの後ろに十数体の【ワーム・サナギ体】が出現する。さらにディロンドはカードをセットする。

「・・・・モモセには・・・・これ・・・」

<KAIJINRIDE・・・CENTIPEDE ORPHEN
OCH!! DRAGON ORPHEN OCH!! ROBSTER
ORPHEN OCH!!>

再び電子音が鳴り放つとタイガーオルフェノクの周りにオルフェノクのエリート集団“ラッキークローバー”の【センチピートオルフェノク】【ドラゴンオルフェノク】【ロブスターオルフェノク】が現れた。

「ほほう、ラッキークローバー復活か・・・」

「面白い。さて、覚悟してもらおうぞ貴様ら！」

タイガーオルフェノクとフィロセキラワームはディケイド達を見て嘲笑う。

「海東、力貸せ。」

「僕に指図はしないでくれたまえ。まあ、お宝を手にいれるには、通らきゃならない道みたいだからいいけどね。」

「決まりだな。」

「あの、士さん……一体何がどうなっているんでしょうか……」

ディケイドがディエンドから協力をもらった直後、ティアナがディケイドに問う。今までのことが複雑すぎて他のみんなも困っているらしい。それを見たディケイドはため息交じりに言う。

「とりあえず、あいつらを倒す。それでレリックを取り返す。その他は後でだ。行くぞ！」

『はっ、はいっ！』

ディケイドはそう言い放ち、怪人たちの元へ向かって行った。

第十二話：出会いと再会の休日（前編）（後書き）

こんにちは、d i e n dです。

ようやく高二最初の定期テストが終わり、週末の体育祭に向けがんばっております。

さて、実は私最近ブログを始めました。そっちの方でも小説を書いていますので、よかったら足を運んでみてください。ユーザー情報にリンクがあります。

では、これにて。（宣伝しかしてねえ・・・（ー！；））

第十三話：出会いと再会の休日（後編）（前書き）

なんだかんだで一ヶ月も遅れてしまった・・・orz
これからは不定期になりそうです。

第十三話：出会いと再会の休日（後編）

地下水路内でレリックのケースを探していたフォワード達だったが、突如現れたこの世界で誕生したライダー・デイルンドと蘇った怪人・タイガーオルフェノクとフィロキセラワーム、そしてデイルンドの呼び出した怪人たちが現れた。フォワード達はレリックを取り戻すため、乱入したディエンドと共にレリックを取り返すべく怪人たちに向かって行った。

先頭にいたディケイドは向かって来たタイガーオルフェノクとフィロキセラワームに突進され、怪人集団とは離脱され二体と対峙した。

「貴様の相手は我々だ。」

「あの時の恨み・・・晴らさせてもらう！」

「ほう、ならしうがねえ・・・もう一度地獄に送り返してやる！」

すさまじい殺気を放つ二体に対し、ディケイドも思いを新たにしようかっていく。ディケイドはライドブッカードをソードモードにして斬りつけようとしたが、タイガーオルフェノクが受け止めフィロキセラワームが腹部の打撃を食らい怯む。その隙に二体から立て続けに打撃を受け、最後に二体から強烈な打撃を受けたが、転げた瞬間にライドブッカードをガンモードにして二体に放つ。それを食らった二体が怯んだ隙に体勢を立て直し、カードを取り出してセットする。

<KAMENRIDE・・・AGITO!!>

電子音が鳴ると、ベルトから十字の光が現れディケイドを覆う。そしてディケイドは未知の生命体“アンノウン”と戦うために覚醒し

た戦士【仮面ライダーアギト・グランドフォーム】に変身した。さらに、ディケイドはカードをセットする。

<FORMRIDE・・・AGITO・STORM!!>

電子音が鳴るとベルトから青い光が現れ、ディケイドは【仮面ライダーアギト・ストームフォーム】に変身し、同時に現れた武器“ストームハルバード”を手にして二体へ向かっていく。ストームフォームの風のように軽やかな動きと、ストームハルバードによる攻撃があれば二体相手でも軽々と相手にできるかと思えた。だが、タイガーオルフェノクがストームハルバードを軽々と受け止めその隙にフィロキセラワームが攻撃し、徐々に追い詰められる。そしてタイガーオルフェノクが黒い炎弾を放ち、それを食らったディケイドは変身が解かれ転げる。

「どうした？そんなものか？」

「我々はまだ、本気すら出してはいないぞ。」

二体はディケイドを嘲笑い、ディケイドは片膝をつき、次の手を考える。

（・・・まったく、やっぱりこいつらも強くなってやがるか・・・さっさとかたを付けねえとマズイな・・・ん？）

これからの戦い方を考えていたディケイドがふと別の方向を見る。それを見たディケイドはマスクの下の口に笑みがこぼれる。

（なるほど・・・だったらこいつ等にかまってられなさそうだな。）

何かを思いついたディケイドは再び立ち上がり、新たにカードを手にする。

「まだ何かするつもりか？」

「何をしても我々は倒せぬぞ。」

二体はディケイドがまた何かしようとしていると思いディケイドを挑発する。だがディケイドは笑みを浮かべながら言う。

「いや、わざわざ今勝たなくてもいいと思ってな。」

「何？」

「どういう意味だ？」

「まあ、見てな。」

そう言ってディケイドは手にしていたカードをセットする。

<KAMENRIDE・・・RYUKI!!>

電子音が鳴ると人型の鏡のようなものがいくつか現れディケイドの体に重なる。そしてディケイドは鏡の世界“ミラーワールド”から現れる怪物“ミラーモンスター”と戦う戦士【仮面ライダー龍騎】に変身した。

「じゃあな。」

そう言うとディケイドは突然飛び上がると、近くの水たまりの中に

姿を消した。

「何っ!？」

「何所へ行った!？」

突然ディケイドが消えたことにタイガーオルフェノクとフィロキセラワームは慌てふためいた。

一方、ディケイド達と共に向かって行ったディエンドは怪人たちから離れ、一人ディロンドと対峙していた。

「君は僕がお相手しよう。お宝も君が持ってるしね。」

「・・・・・・」

「ンだと、この泥棒野郎!! ルールはやらせねえぞ!!」

ディロンドを倒そうとするディエンドにアギトは憤慨し、ガリユーも戦闘態勢に入る。

「おチビちゃんと下僕君に用はないよ。」

ディエンドは冷たくそう言い放つとディエンドドライバーにカードをセツトする。

<KAMENRIDE・・・GILLS!! ZOLDA!!>

電子音が鳴り、ディエンドライダーを放つと【仮面ライダーギルス】
【仮面ライダーゾルダ】を召喚する。ギルスはガリューに向かつて
行き、ゾルダはアギトに‘機召銃マグナバイザー’を乱射する。ガ
リューは向かって来たギルスと戦い、アギトは「うわぁ!？」と言
いながらも、ゾルダからの銃撃をかわしていく。そして3人と一匹
は離れて行く、場にはディエンドとディロンドだけとなった。

「これで邪魔者はいないね。」

そう言うディエンドは新たにカードをセットする。

<KAMENRIDE・・・GA-OH!! YUKI!!>

電子音が鳴り、ディエンドライダーを放つとディエンドは新たに【
仮面ライダーガオウ】【仮面ライダー幽汽・ハイジャックフォーム】
を召喚する。

「さあ、どうする?」

「・・・・・・」

ディエンドの問いにディロンドは答えず、無言でカードをセットす
る。

<KAIJINRIDE・・・NEGATAROS!! SKULL
IMAGINE!!>

電子音が鳴り、ディロンドライダーを放つと【ネガタロスイマジン】
【スカルイマジン】を召喚する。

「そんなもので・・・」

ディエンドの言葉はそこで止まった。なぜならディロンドはさらに二枚のカードを手にしていた。そして、そのカードをディロンドライバーセットする。

<FINAL FORM RIDE・・・NE・NE・NE・NEG
ATAROS!! S・S・S・SKULL IMAGINE!!>

「少し、我慢してね・・・」

そう言ってディロンドが銃を放つと、ネガタロスイマジンとスカルイマジンが姿を変え【仮面ライダー・ネガ電王・ネガフォーム】【仮面ライダー幽汽・スカルフォーム】へと姿を変えた。

「へえ・・・少し驚いたかな。」

ディエンドがそう言った瞬間、“ガオウガッシャー・ソードモード”を持ったガオウと“サヴェジガッシャー”を持った幽汽・ハイジヤックフォームが襲いかかる。それを見たディロンドも無言で腕を前へ向けると“ネガデンガッシャー・ソードモード”持ったネガ電王とイマジン時に持っていた剣を持った幽汽・スカルフォームも向かって行く。周りで多数の戦闘が行われている最中、ディエンドとディロンドは改めて向かい合う。そして同時にカードをセットした。

<ATTACK RIDE・・・BLAST!!>

<ATTACK RIDE・・・SHOOTER!!>

電子音が鳴るとディエンドは“ディエンドブラスト”を放ち、ディ

ロンドは“ディロンドシューター”を放つ。ディエンドのホームイング弾とディロンドの誘導弾が相殺する。さらにディロンドは新たにカードをセットする。

<ATTACKRIDE・・・BUSTER!!>

次の攻撃が来ると踏んだディエンドはカードをセットした。

<ATTACKRIDE・・・BARRIER!!>

ディロンドの砲撃“ディロンドバスター”をディエンドは“ディエンドバリア”を発動し攻撃を防ぐ。

「このお・・・コソ泥野郎っ!!!!」

その時ゾルダと戦っていたアギトが急に飛び上がり、ディロンド以外の周りに大量の炎弾を放ち、ライダー達が消滅する。ディエンドもそれを食らい、さらにバリアが解けディロンドの攻撃を受ける。

「大丈夫か、ルールー？」

「・・・うん、ありがとう・・・」

「まったく、余計な事をしてくれるね・・・」

ディエンドは再び立ち上がりカードを出そうとする。その時ギルスが消えたことで動けるようになったガリユーがディエンドを妨害する。ディエンドはその攻撃を避けたが、ディロンドがすかさずカードをセットする。

<ATTACKRIDE・・・BIND!!>

電子音が鳴るとディエンドの体にリング状の【ディロンドバインド】が巻かれ、ディエンドの動きを拘束する。

「何っ!?!くそっ・・・」

ディロンドはバインドを外そうとするがバインドブレイクの技術を知らないディエンドは苦戦する。そしてその間、ディロンドは自らの紋章の描かれた金色のカードを取り出し、セットしようとしたその時妙な音が聞こえてきた。

「・・・・・・?」

「この音は・・・・まさか!?!」

ディロンドはその音を不思議に思い、ディエンドは聞いたことのある音に反応する。その時、ディロンドの傍の水たまりから何者かが飛び出し、ディロンドの近くにあったレリックケースを奪って着地した。

「よお、こいつは返してもらうぜ。」

それは龍騎に変身したディケイドだった。龍騎に変身することでディケイドは写りこむ物なら何所からでも入ることができる鏡の世界・ミラーワールドを行き来することができる能力を使い、水辺を利用してディロンドの元へ来たのだった。

「てんめえ・・・・返しやがれ!!」

アギトはディケイドに向かって炎弾を放ち、ガリユーも向かっていく。しかしディケイドはそれを軽々とかわし、再びミラーワールドの中へはいつて行った。

一方、半ば無理やり戦いに参加させられたフォワード陣はディケイドとディエンドが別に移動したため、よくわからないままディロンドの呼び出したワーム数十体、ドラゴンオルフェノク、シュリンプオルフェノク、センチピードオルフェノクと対峙していた。すると、スバルが尋ねる。

「ねえ、一体どうしよう？」

「どうするも何も・・・とにかく倒すしかないんじゃないかしら？
そうよね、ティアアナ？」

「確かに、それしかなさそうですね。幸いこっちにもライダーの世界の相手に対抗する手段はありますし、問題はなさそうです。」

ギンガは解決策をティアアナに確認すると、ティアアナもうなずく。そしてすかさず作戦を提示する。

「私が牽制しますので、スバルとギンガさんが向かってください。」

「うんっ！」

「わかった。」

「エリオはキャロを抱えてるし、後ろに下がって待機してて。」

「わかりました。」

「よしっ、行くわよ!」

ティアナは全員に指示するとライドドライバーにカードをセットする。

《ATTACKRIDE・・・CERBERUS!!》

電子音が鳴るとティアナの下に魔法陣が出現し、そこから“アギトの世界”の戦士【仮面ライダーG3-X】の武器“GX-05 ケルベロス”を召喚する。そして引き金を引き、怪人たちに向かって乱射する。その銃弾はワーム十数体を破壊したが、ドラゴンオルフェノクがティアナに向かっていく。ティアナはドラゴンオルフェノク一体にケルベロスを放つが、ドラゴンオルフェノクは銃弾をもろともせず向かってくる。

「ティア、危ない!」

《ATTACKRIDE・・・GUARD VENT!!》

ティアナのピンチにスバルは“龍騎の世界”の戦士【仮面ライダーゾルダ】の武器“ギガアーマー”を呼び出し、ドラゴンオルフェノクの攻撃を防御する。

「大丈夫、ティア?」

「ナイスよスバル。」

ティアナはスバルに言うと、ギガアーマーからケルベロスの銃口をドラゴンオルフェノクにあて、ゼロ距離からガトリングを放ちドラゴンオルフェノクと距離を取る。

「ギンガさん！」

「まかせて！」

ティアナはギンガに指示を送ると、ギンガはドラゴンオルフェノクに向かって走りながらカードをセットする。

《ATTACKRIDE・・・UPPER!!》

電子音が鳴り、ギンガは“ブレイドの世界”の戦士【仮面ライダーギヤレン】のカテゴリ3《スリー》“アッパーフロッグ”の力でドラゴンオルフェノクを攻撃する。それを食らったドラゴンオルフェノクは最初の位置に戻ったものの、再び動き出そうとしていた。

「ティア、このままじゃきりがいいね。」

「そうね、せめて士さんが来てくれればいいんだけど」

「でも仕方ないわ。私達だけで何とかしないと！」

ティアナの言葉にギンガは「仕方ない」というと、一人怪人の元へ突っ込んで行く。それを見たセンチピードオルフェノクがギンガに鞭を放つ。ギンガはシールド防ぐが、そのすきにドラゴンオルフェノクとシュリンプオルフェノクがギンガに向かって攻撃する。

（しまっ・・・！？）

「ギン姉っ!!」

ギンガの防御が間に合わず、それに気付いたスバルが叫ぶ。その時、近くの水たまりから何かが飛び出し、ドラゴンオルフェノクとシュリンプオルフェノクを吹っ飛ばした。

「よお、お前ら。」

「士さん!？」

「また姿が・・・!？」

それは龍騎に変身し、ディロンドからケースを取り返したディケイドだった。ディケイドの新たな変身にスバルは驚き、ティアナは驚きながらディケイドがレリックのケースを持っていることに気付く。

「それは・・・レリックのケース!？」

「ん? ああ、さっき取り返してやったぜ。」

士はそう言うと、ティアナに「ほら。」とレリックを投げ渡し、後ろの怪人たちの方を向く。

「さあゝて、鬱陶しいのを片付けるか。」

士は龍騎のままライドブッカーからカードを取り出し、セットする。

<ATTACKRIDE・・・STRIKE VENT!!>

「士さん、私も手伝います!」

「私も!」

士がカードセットした時、スバルとギンガもカードをセットした。

《《ATTACKRIDE・・・COPY VENT!!》》

電子音が鳴ると、士は龍騎の武器“ドラグクロー”を呼び出し、右腕に装着される。するとドラグクローから白い影が現れ、スバルとギンガにも同じ物が装着された。スバルとギンガがセットした“コピーベント”は他のライダーの武器を複製し、自分の力として使うことができる同じ“龍騎の世界”の力である。

「よし、いくぞ。」

「はいっ!」

士は二人に声をかけ、スバルとギンガはそれに答えると、三人はドラグクローをかまえる。

「ハアアアアア・・・ハアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

そしてドラグクローを前に突き出し、凄まじい火炎照射“ドラグクローファイアー”を放つ。それを食らった怪人たちは3つの炎に焼かれ、全て爆発した。そしてスバルとティアナからドラグクローが消え、ディケイドは元の姿に戻った。

「おのれ・・・」

「貴様よくも!!」

ディケイドにまんまと逃げられたタイガーオルフェノクとフィロキセラワームはディケイドの姿を見つけ迫ってくる。だが、その二人の足元に銃弾が放たれる。ディケイドの近くにいつの間にかディエンドの姿があった。

「まったく、大変そうだね士？」

「海東、お前いつの間に……」

「お宝を取り返してくれたのなら、あのお嬢ちゃん達と戦う理由はないからね。」

ディエンドがいなくなった為か、ディロンドやガリユー、アギトもタイガーオルフェノクとフィロキセラワームに合流した。

「こんの野郎……うおりゃあ!!」

「おのれえっ!!」

突然アギトとタイガーオルフェノクはスバル達に向かって炎弾と黒炎を放つ。スバル達はすかさず避けるが、二体が変わらず炎弾と黒炎を撃ち続けるため、一旦ディケイドやディエンドと共にエリオのいた柱の裏に隠れた。スバルがティアナに尋ねる。

「ティア、どうする？」

「任務はあくまで、ケースの確保よ。撤退しながら引き付ける」

「こっちに向かつてるヴィータ副隊長とリン曹長にうまく合流できれば、あの子たちを止められるかも、だよな？」

「そう。」

「（よし、なかなかいいぞスバルにティアナ。）」

スバルとティアナが打開策を話し合っていると、ヴィータから念話で連絡が入った。

「（ヴィータ副隊長！？）」

「私も一緒です。二人とも、状況をちゃんと読んだナイス判断ですよ。」

リンがティアナ達を褒める。そしてアギトはヴィータ達の接近に気づいた。

「！ルールー、何か近づいてきてる。魔力反応……でけえ！！」

「！？」

ヴィータの接近に気づいたアギトはディロンドに声を掛けると、ディロンドも魔力を感知したのか天井を見上げる。

「アイゼン！」

《G i g a n t F o r m》

「行くぞ、リイン！」

「はいです！」

ヴィータはグラーファイゼンを“ギガンとフォルム”に変え、リインに声をかけると天井を思いっきり砕く。

「何っ！？」

「何だっ！？」

突然天井崩れた事にタイガーオルフェノクとフィロセキラワームは驚く。その時、煙の中から蒼天の書を抱えたリインが飛び出してきた。

「捕らえよ、凍てつく足枷・・・【フリーレン・フェッセルン】！」

リインの魔法が発動し、ルーテシアとアギトの周囲の水分が一瞬にして凍り、まるで氷の檻のように二人を包み込んだ。そして煙の中からヴィータが現れ、ライドドライバーにカードをセットする。

《ATTACKRIDE・・・TORNADO！！》

電子音が鳴ると、ヴィータは自分の体をラケーテンの時のように回転させる。すると、ヴィータを中心に竜巻が発生し、回転を加速させる。

「ぶつとべえええええつ！！！」

ヴィータは“ブレイドの世界”の戦士【仮面ライダーカリス】の“トルネードホーク”で強化させたギガントハンマーをガリュー、タイガーオルフェノク、フィロキセラワームにぶつける。ガリュー達はただでさえすさまじい破壊力のあるアイゼンのギガントフォームに竜巻の力を付与した攻撃に吹き飛ばされた。

「ぐわあっ!!」

「がはあっ!!」

ガリューは柱を貫通して壁に衝突し、タイガーオルフェノクとフィロキセラワームはそれぞれ壁に激突した。そして、回転を止め、着地したヴィータはグラーフアイゼンを元の形態に戻す。

「よう、待たせたな・・・」

「皆、無事でよかったです!!」

『・・・・・・・・』

颯爽と現われ、ルーテシアとアギトを拘束したリインと、ガリューを容赦なく殴り飛ばしたヴィータの実力にスバル達フォワード陣は呆気にとられた。

「副隊長達、やっぱり強い・・・でも局員が公共施設を壊しちゃっていいのかな？」

「まあ、この辺はもう廃棄都市区画だし・・・」

「う、うん・・・」

「あつ、キャロ。」

スバルとティアナが驚いているとキャロがようやく目を覚ました。エリオとフリードが声をかけると、キャロはエリオとフリードの名前を呼ぶ。特に別状はないようだった。その間、ヴィータはガリユーが激突した壁に向かう。だが、そこにはガリユーの姿はなかった。

「ちっ……」

「こっちもです！逃げられた、ですね……」

逃げられたヴィータは舌打ちし、リインもそう言いながらフリーレン・フェッセルンを消す。だがルーテシアとアギトの姿はなく、そこから逃げたと思われる大きな穴が開いていた。

「何だ、だらしないね。」

それを聞いたディエンドはあきれたように言う。ヴィータはその声を聞いて、初めてディエンドの存在に気付いた。

「なっ、テメエは……おい士！何でこいつがいるんだ！？」

「ああ……まあ、ちよつとな……ん？」

ヴィータは士に説明を求めると、ディケイドは何と言ったらいいかといった感じで答えると、何かに気付いて振り向く。そこには先ほどヴィータに吹っ飛ばされたタイガーオルフェノクとフィロキセラワームが立ち上がっていた。

「おのれ、よくもやってくれたな……」

「奴らは逃げたようだが……我々だけでも貴様らを始末してやる！」

二体はここにいる全員を倒すと意気込んでいた。それを聞いたフォワード達は瞬時にかまえたその時、地下内に自身のような揺れが起こった。

「なんだ!？」

「何が起きた!？」

突然のことにヴィータとディケイドは驚いていると、エリオに支えられながらキャロが説明する。

「大型召喚の気配がします……多分その影響で……」

キャロの説明を聞いていたタイガーオルフェノクとフィロキセラワームは瞬時にある答えを導き出す。

「となると、あの小娘か。」

「とにかく、我々も退散するぞ。掴まれ。」

「わかった。」

フィロキセラワームの言葉を承諾したタイガーオルフェノクは百瀬に戻り、フィロキセラワームの体につかまる。それを確認したフィロキセラワームは羽を広げ、ヴィータが出てきた穴から飛んで行っ

た。

「なっ、待て！」

「無理だ士、アタシらも逃げるぞ！スバル！」

「はいっ！ウイング……ロード！」

追いかけてようとしたディケイドをヴィータが止めると、ヴィータはスバルに銘じる。それを聞いたスバルは同じ穴に向かって螺旋状のウイングロードを展開する。

「スバルとギンガが先頭でいけ！アタシは最後に飛んで行く！」

『はいっ！！』

「どうやら脱出が先みたいだね。士、先行くよ。」

ヴィータの指示を受け、スバルとギンガが走り出す。その後にディエンドが続く。ディケイドはその間にキャラを呼びとめる。

「キャラ、起きてすぐで悪いが、こいつを頼む。」

ディケイドはそう言うと言いつつライドブッカーからカードを一枚取り出し、キャラに投げ渡す。

「えっ、はっ、はいっ！」

キャラは突然のことだったがキャラは承諾し、ライドドライバーにカードをセットする。

<KAMENRIDE・・・AGITO!!>

電子音が鳴ると、六本の角の紋章の魔法陣が出現し、そこから【仮面ライダーアギト・グランドフォーム】が現れる。

「上出来だ!」

ディケイドはアギトを確認すると、ライドブッカーからもう一枚カードを取り出し、セットする。

<FINAL FORMRIDE・・・A・A・A・AGITO!
!>

電子音が鳴ると、アギトの前に黄色の円と「AGITO TORN ADER」の文字が浮かび上がる。そしてアギトはたちまち姿を変え、ファイナルフォームライド形態（以下、FFR形態）【アギトトルネイダー】へと変わり、ディケイドがその上に飛び乗る。

「おお・・・」

「す、すごい・・・」

その様子を見ていたティアナとキャロは驚きの声を上げる。

「せっかくだ、乗ってくか?」

「えっ、ええっと・・・」

「大丈夫です。先に行ってください。」

「そうか、わかった。お前らも急げよ。」

ディケイドは自分の後ろに乗ることを勧めるが、ティアナが断それを断るとディケイドはウイングロードの上を走っていった。そしてティアナはキャロに声をかける。

「キャロ、レリックの封印処理お願いできる？」

「はい、やれます。」

「ちょっと考えがあるんだ。手伝って。」

ティアナの要望にキャロは「はいっ」と答え、地下から脱出した。

リインのフリーレン・フェッセルから逃れたディロンド達は地上に逃げ延び、ルーテシアの召喚獣・地雷王が放電しながら地震を起こしていた。

「駄目だよルールー、これはまずいって！！埋もれた中からどうやってケースを探す！？あいつらだって局員とはいえ、潰れて死んじやうかもなんだぞ！！」

「・・・あのレベルならたぶん、これくらいじゃ死なない。ケースはクアットロとセインに頼んで、探してもらう・・・」

「良くねえよルールー、あの変態医師とかナンバーズ連中なんかと関わっちゃだめだって!! ゼストの旦那も言ってたろ!? あいつ等口ばっかうまいけど、実際の所アタシ達のことなんて、せいぜい実験動物位にしか・・・ってうわっ!？」

あg人がルーテシアに説教をしていたその時、地下から逃げてきたフィロキセラワームと百瀬が急に現れ、近くのビルに着地した。そして、フィロキセラワームは弟切ソウの姿へと戻る。

「まったく、災難だったな。」

「我々もろとも生き埋めとは、悲しいものだ。」

「・・・ごめん。二人なら、大丈夫だと思ったから・・・」

「・・・まあ、脱出できたのだから、良しとしよう。」

「だが、奴らは逃げられるかな?」

ディロンドの謝罪にソウは答え、百瀬は今だ中にいるディケイド達の事を考える。その会話の最中、アギトはとても憤慨していた。

「んだよテメェら! 変なところで来やがって!! それよりルールー、さっきの続きだけどあいづらとは涉んなって! その銃だって、ホントはヤバイかもしれねえんだぞ! ルールーそれ持ってから、何か色々と変・・・」

「・・・・・・・・」

「えっ!？」

アギトはディロンドに対してドクターやナンバーズ達と関わらないよう説得した瞬間、ルーテシアの口の動いた。それを聞いたアギトは言葉を失った。

(ルールー、どうしたんだよ？前はそんなこと、絶対に言うことなんてなかったのに・・・・)

アギトはルーテシアが発した言葉が、とても信じられなかった。アギトが絶望していたその時、ついに地雷王が地下水路の崩壊を完了してしまった。

「終わったな。」

「そのようだ。」

「やっちまった・・・・」

「ガリユー・・・・怪我、大丈夫？」

ディロンドの問いにガリユーは頷く。

「戻っていいよ。アギトがいてくれるから・・・」

ディロンドの言葉を聞いたガリユーは魔法陣の中へ戻った。

「地雷王も・・・・!？」

ディロンドが地雷王も戻そうとした時だった。地雷王のいる位置にミッド式の魔法陣が出現し、体に桃色の鎖が巻きついて動きを封じた。その鎖はキャロのアルケミックスチェーンだった。

離れたビルの上、そこには魔法を発動しているキャロの姿があり、そして後ろから二つのウイングロードが伸び、その上をスバルとギンガ、そして中央にヴィータとアギトトルネイダーに乗ったディケイドがディロンドらに向かって突き進んでいた。ディロンドとアギトはその存在に気づいたが、別の方向からティアナがディロンドとアギトに向け魔力弾を発射、ディロンドとアギトは当然ティアナの攻撃を回避し、向かってくる全員に向けてアギトは炎を放ち、ディロンドはディロンドライバーを乱射した。ティアナ、ギンガ、スバル、ヴィータの四人はルーテシアらの猛攻を掻い潜ってさらに接近しようとする。

ディロンドは一旦、地上に降りて体制を整えようとするが、そこへ高速移動する物体がディロンドに近づいてきて、気が付くとディロンドの前にはストラダーを構えたエリオが動きを封じた。そしてアギトの周りにはリインの放った魔法【フリジット・ダガー】張り巡らされ、完全に動きを封じられた。

「ここまでです!!」

ルーテシアの隣に降り立ったリインは二人にバインドを掛けて拘束する。

「子供を苛めてるみてゝで、良い気分はしねえが……市街地での危険魔法使用に公務執行妨害、その他諸々で逮捕する。」

ヴィータはそう言いながらも、罪状を言い放ち二人を逮捕した。その様子を近くのホテルで見ている物がいた。タイガーオルフェノクと

フィロキセラワームである。二体は地雷王にチェーンが巻かれた瞬間怪人体となり、素早く離脱していたのだ。

「ちっ、情けない奴らだ。」

「こうなれば、我々だけでも逃げるぞ。」

二体はここから脱出しようとするが、突如足元に銃弾が飛んでくる。その方向を見ると、アギトトルネイダーに乗ったディケイドとディエンドがいた。

「そうはいかないよ。」

「せっかくだ。お前らはここで倒してやる。」

「おのれ……ハッ！」

ディケイドの言葉を聞いたフィロキセラワームは飛び上がり、ディケイドもそれに続き戦い始める。そしてビルの上にはディエンドとタイガーオルフェノクが残った。

「……そう言えば、貴様にはあの時の借りがあったな。ちょうどいい、今ここでその借りを返してやる！」

タイガーオルフェノクはそう言って、ディエンドに向かっていく。それを見たディエンドはカードを取り出す。

「悪いけど、ちゃっちゃと終わらせたいんでね。」

<KAMENRIDE・・・RAIOTROOPERS!!>

ディエンドがカードをセットしてディエンドライバーを放つと、“
ファイズの世界”の量産型ライダー【ライオトルーパー】を3体召
喚し、ライオトルーパーはタイガーオルフェノクに向かっていく。

「くそっ、邪魔をするな！」

タイガーオルフェノクはライオトルーパーに攻撃し、薙ぎ払おうと
する。だが、ライオトルーパーはしなやかな動きでかわし、攻撃す
る。そしてディエンドはその隙に、金色のカードをセットする。

<FINAL ATTACKRIDE・・・>

電子音がなるとディエンドライバーとタイガーオルフェノクの間に、
何枚ものカードが幹状になって現れる。すると、戦っていたライオ
トルーパーはカードの中に吸い込まれていった。タイガーオルフェ
ノクは戦いに夢中で、発動したこともライオトルーパーが囹でこれ
が本命であることに気付かなかった。

「はっ！？しまったっ！！」

「残念でした・・・ハッ！」

<DI・DI・DI・DIENDO!!>

ディエンドはトリガーを引き、カードのエネルギーを込めた巨大な
ビームを放つ必殺技【ディメンション・シュート】を放つ。

「ぐわああああああああああああああっ！！」

それを受けたタイガーオルフェノクは青い炎の爆発と共に、砂のよ
うに崩れ去った。

「なにっ！？おのれ……」

「よそ見してる場合か？」

ディケイドと戦っていたフィロキセラワームはタイガーオルフェノ
クがやられたことに驚く。そしてディケイドは淡々と告げると、金
色のカードをディケイドライバーセットした。

<FINAL ATTACKRIDE・・・A・A・A・AGIT
O!!>

電子音が鳴ると、アギトトルネイダーからアギトの紋章が現れ、デ
イケイドはそのままフィロキセラワームに向かっていく。そしてデ
イケイドは、アギトトルネイダーで突進しライドブッカードソードモ
ードで切りつける合体技【ディケイドトルネード】を放った。

「ぐがああああああああああっ！！！」

フィロキセラワームは油断していたため、ディケイドの攻撃をダイ
レクトに食らい爆発した。

そしてディケイドとディエンドはヴィータ達に合流した。

とある廃墟地区の元高層ビルの屋上。ここにはスカリエッティの作品、戦闘機人のNo. 4クアットロとNo. 10ディエチが何かを見つめているように立っていた。

「ディエチちゃん、ちゃんと見えてる？」

「ああ、遮蔽物もないし、空気も澄んでる……よく見える」

クアットロの問いにディエチは答え、彼女の瞳の中にレンズのようなモノが映る。彼女ら戦闘機人は人体に機械を埋め込んでいる為、かなり離れた場所にある目標も鮮明に見る事が出来る。さらにディエチは長距離での狙撃や砲撃を前提にして作られた戦闘機人であり、ディエチの瞳にはヴァイスのヘリが映っていた。

「でもいいのかクアットロ、撃っちゃって……ケースは残せるだろうけど、マテリアルの方は破壊しちゃうことになる。」

「ふふふ、ドクターとウーノ姉様曰く、あのマテリアルが“当たり前”なら、本当に“聖王の器”なら、砲撃くらいでは死んだりしないから大丈夫……だそうよ。」

質問の答えを聞いたディエチは、持っていた武器“イノームスカノン”をヘリに向けて砲撃の準備に入る。その時ウーノからクアットロに連絡が入った。

「クアットロ、ルーテシアお嬢様とアギトさんが捕まったわ。」

「ああ、そういえば例のチビ騎士に捕まってましたねえ。」

「今はセインが様子を見てくれているけど……」

ウーノから状況を聞いたクアットロは眼鏡を光らせて邪悪な笑みを浮かべて尋ねる。

「フォローします?」

「お願い。」

ウーノは一言で指示し、通信を切る。クアットロは状況を見ているNo. 6セインに念話を送った。

「(セインちゃん?)」

「(はいよ、クア姉。)」

セインは地面から指だけを出し、指先のカメラから監視しながらクアットロの念話に答える。

「(こっちから指示を出すわ。お姉さまの言うとおりに動いてねえ?)」

「(ふふん、了解。)」

クアットロに返事を出したセインは、これから行動を起こすために一度地面の中に沈んだ。先ほどセインが見ていた先では、ヴィータ達に捕らえられたルーテシアは地雷王を戻し、皆に囲まれていた。ちなみにデイロンドへの変身は解除され、デイロンドライバーはティアナが持っている。その時、クアットロから念話を送られてくる。

「(はぁい、ルーお嬢様。)」

「(クアットロ……!?)」

「(何やらピンチのようで、お邪魔でなければクアットロがお手伝いいたします。)」

「(お願い……)」

「(はい)。ではお嬢様あ、クアットロの言う通りの言葉、その赤い騎士に……)」

クアットロは怪しい笑みを浮かべながらルーテシアへの指示を始めた。

その頃、なのはとフェイトははやての指示でヴァイスのヘリの護衛に向かう為に合流を急いでいた。

「見えた!」

「良かった、ヘリは無事!」

ヴァイスのヘリを目視で確認したなのはとフェイトが安堵その時、なのはは何かを感じ取った。それと同時に六課本部にいたロングアイチも廃棄都市区画の市街地で巨大な魔力反応を感知、しかも魔力

チャージ型の物理衝撃推定Sランククラスのモノだった。
エネルギーが感知された屋上ではディエチがヘリに向け、イノーマスカノンをかまえていた。

「インヒューレントスキル‘ヘヴィバレル’発動」

その後ろではクアットロがルーテシアにセリフを言っていた。

「逮捕はいいけどお……」

「……逮捕はいいけど……」

ルーテシアがいきなり喋り出したことに周りは少し驚いた。

「「……大事なヘリは、放っておいていいの……?」」

ルーテシアの言葉に全員が驚愕の声を上げた。傍にいたディケイドでもある。

（ヘリだと？まさか攻撃か！？あの中にはナツミカンやユウスケもいんだぞ……ユウスケ？）

ディケイドは一緒に乗っている夏海やユウスケまで巻き込まれることを危惧していたが、ここで一つの考えが浮かんだ。

（しょうがねえ。一か八かだ！）

そう考えたディケイドはカードを一枚取り出し、ディケイドライバーにセットする。

その頃ディエチは、既に発射までのカウントダウンを始めていた。

「あと12秒、11、10・・・」

「ああ、お嬢様？もう一言追加いいですかあ？」

クアットロはルーテシアに言葉の追加を頼むと、ルーテシアはヴィータに顔を向け言い放つ。

「「あなたは、また・・・守れないかもね。」」

その言葉を聞いたヴィータの脳裏に“あの頃”の記憶が蘇る。かつて自分が味わったあの記憶を・・・

「発射」

そして、ディエチの冷静な声と共にヘリに向かって砲撃が放たれた。

放たれた巨大魔力砲がヘリに直撃、その余破の影響のせいか、ロングアーチのリーダーは全てジャミングが掛かり、ヘリの状態が一切確認できないでいた。その報告にヴィータやフォワード達もヘリの安否が心配になっていた。ヴィータは怒りのあまり「ダメエ！」とルーテシアの胸ぐらをつかむ。スバルの制止も聞かずに、ルーテシアに問いたです。

「おい！他にも仲間がいんのか！？どこにいる！？言え！！」

その時、ギンガはレリックのケースを持っていたエリオの足下に何かがゆっくりと近づいているのに気づいた。

「エリオ君！足下に何か！！」

「えっ！？」

ギンガの声にエリオは何事かと下を見ると、何もないコンクリートの中からナンバーズの一人、N O . 6 セインが I S 【ディープダイバー】を使用してエリオの持つレリックのケースを強奪しようとした。セインはエリオにかすり傷程度の傷を負わせるが、そのせいでエリオの手が僅かに緩みその隙を突いてレリックのケースを横取りしていった。

「頂き・・・」

「なっ！？」

「僕のお宝を・・・横取りするな！」

ティアナとディロンドはセインに向かって引き金を引いたが一足遅く、セインは再び地面の下に潜った。それを見たヴィータ達はすぐさま周辺を搜索する。その間にセインはルーテシアと念話で会話を
する

「（ルーお嬢様、ナンバーズ六番セインです。私の I S ‘ディープダイバー’にてお助けします。フィールドとバリアをオフにして、
じっとしててくださいね？）」

「（うん。あと、ディロンドライバーも・・・）」

「（ああ、はいはい。一緒に取り返しますから。）」

セインの確認を取ったルーテシアは、目を閉じてじっとする。するとセインはルーテシアの近くにいたティアナの傍で浮上、怯んだティアナの間隙を突いてディロンドライバーを奪った。その勢いのままルーテシアの傍に行き彼女を抱きかかえる。

「デメエ！」

ヴィータは捕まえようとするも、間に合わず二人は地面の中へと消えた。降りる最中、ルーテシアがアギト置いて来た事に気付いた。

「アギトが・・・」

「ああアギトさんなら、さっきの一瞬で離脱しました。さすが、いい判断です。」

セインはアギトを評価すると、ルーテシアを抱え直して地面へ潜っていく。

「反応・・・ロストです。」

「クソッ！」

リインの結果を聞いたヴィータは悔しさのあまり地面を殴った。

「ロングアーチ、ヘリは無事か？あいつら、落ちてねえよな！？」

ヴィータはわずかに希望を込めてロングアーチに尋ねる。その時デイクイドが笑って言った。

「大丈夫だ。ヘリは落ちてねえ。」

「何だと！？何でわかるんだよ！？勝手なこと言うな！！」

ヴィータが叫ぶ中、ディケイドは一枚のカードを見せながら言った。

「まあ、あいつが何とかしてくれるさ。」

ディケイドが手にしたカードにはあるライダーと虫のような絵が描かれていた。

その頃、クアットロとディエチは攻撃したヘリの確認を行っていた。

「うふふのふ？どう、この完璧な計画？」

「黙って。今命中確認中。」

ディエチはクアットロの言葉をはねのけて、ヘリの確認を行う。煙の立ち込める中、暫く見つづけているとそこに信じられない光景が目に入った。

「あれ？まだ飛んでる……」

「あら？」

ディエチが見たのはヘヴィバレルの直撃を受けたはずのヘリが平然と飛んでいた光景だった。そして煙が完全に晴れよく見ると、そこには何か得体の知れない物が飛んでいた。その姿は黒と金の体に巨

大な二本の角を持った甲虫のような姿だった。

ディエチの砲撃が放たれる数分前、ヘリの内部では夏海とユウスケが管理局や魔法、機動六課のことなどこの世界に係る話をシャルから聞いていた。

「……と、ここまでの説明でわかっていただけました？」

「えっと、まあ、なんとか……」

「魔法や次元世界を管理する組織があるということ、くらいでしよ
うか？」

「まあ、そんな感じで理解していただければ、大丈夫です。」

二人の言葉にもシャルは笑顔で答える。そして説明を聞いた二人は小声で話す。

「でも夏海ちゃん、何で俺達までこの世界に来たんだろう？」

「わかりませんけど……きっと私たちにも、この世界でやるべき事があるんです。」

「そうかな……」

とユウスケが言ったその時だった。

<FINAL FORMRIDE・・・KU・KU・KU・KU
GA!!>

ユウスケは聞き覚えのある声を聞いた。だが、シャルと夏海は気づいていないようだった。

(この感じは・・・まさか!?)

ユウスケはこの感覚に覚えがあった。以前士と共に戦ったときに得たのと同じ物。ユウスケがそう感じ取る横で夏海はユウスケの様子がおかしい事に気づく。

「どうかしたんですか?」

そう尋ねた瞬間、ユウスケはシャルに向かって叫ぶ。

「すみません!ハッチを開けてくれませんか!?!」

「えっ!?!」

「早く!」

「あっ、は、はい!ヴァイス君!」

シャルはユウスケに押されてヘリのハッチを開くようヴァイスに指示する。ハッチが開いたのを確認したユウスケはその前に立ち、腰に手を当て変身ベルト“アークル”を出現させる。変身のポーズをとる。

「変身！」

そしてユウスケはベルトのスイッチを押し【仮面ライダークウガ】へと変身した。それとほぼ同時にディエチから砲撃が放たれた。

「はっ!？」

「きゃっ!？」

シャルと夏海が自分達に砲撃が当たると覚悟したその時、クウガはヘリから飛び降りる。するとクウガの体はたちまち姿を変え、クウガはFFR形態【クウガゴウラム】へと姿を変えた。そして向かってくる砲撃をギリギリで受け止め、その際に体を回転させて受け止めたおかげで体へのダメージを軽減した。

『いってゝ・・・士の奴、覚えとけよ。』

しかし、軽減したからといって痛みがないわけではないユウスケは、士へばやいていた。そして、ユウスケは別の方向へ飛んで行った。その様子を見ていたディエチとクアットロは驚いていた。

「あらゝ。」

「こっちもフルパワーじゃないとはいえ、マジで? つか、あの虫みたいな一体何？」

「んゝ、多分あの時の泥棒さんみたいに仮面ライダーって言うのじゃない? ……ってあら？」

クアットロが予想した直後、金色の魔力弾が二人を襲った。二人はすぐに避け、近くのビルに飛び移ったと同時に、高速移動してきたフェイトが二人の前に降り立った。

「見つけたっ!!」

「こっちも!？」

「早いっ!!」

フェイトの姿を見るや否やクアットロとディエチはすぐに逃走しようとして逃げ出すが、それを黙って見過ごすフェイトではなかった。実はフェイトはユウスケが砲撃を守った時、そこに飛んできた方向に犯人がいると確信し、限定解除したなのと共にクアットロらを追いかけてきていたのだ。

「止まちなさいっ!! 市街地での危険魔法使用及び殺人未遂の現行犯で逮捕します!!」

「今日は遠慮しておきます〜IS発動、シルバーカーテン、!!」

逃げる二人に警告するフェイトを余所に、クアットロは自身のISシルバーカーテンを発動してディエチと一緒に姿を消した。しかしその事はフェイトも予測していたのか、はやてに連絡を入れる。

「はやて!」

「位置確認、詠唱完了、発動まで・・・あと4秒」

それを聞いたフェイトは急旋回して現場から遠ざかる。その様子を

見ていたディエチはフェイトの行動の意味が分からず、クアットロは諦めたのかシルバーカーテンを解除してしまう。しかし空を見上げた瞬間二人の顔は驚きの顔となる。なんと空に黒い稲妻を放つ黒い巨大な球体がいたのだ。

「広域・・・空間攻撃！」

「うっそくん！」

二人は突然のことに驚きの声を上げる。

「遠き地にて・・・闇に沈め・・・【デアボリック・エミツション】！！」

はやての声に反応して空間攻撃型の殲滅魔法【デアボリック・エミツション】が発動。黒い球体が大きくなりながら周囲を飲み込んでいく。クアットロとディエチはその中を間一髪逃げ切った。その時どこからか銃弾が飛んでくる。二人は避け、その飛んできた方を見る。

「逃がさねえぜ。」

そこにいたのはクウガゴウラムに乗ったディケイドだった。

遡ること数分前

ディケイドはヴィータにカードを見せた後、何かが近づいて来るのを感じ、その方向見た。

「来たか。」

ディケイドがそう呟くと、ヴィータ達も何かとその方向を見る。すると、先ほどヘリを守ったクウガゴウラムがディケイドの元へ近づいてくるのが分かった。クウガは勘を頼りにディケイドを見つけたのだった。ヴィータも思わず声を上げる。

「あれは……お前のカードに描いてあった……」

「なるほど……小野寺君を使ったのか。考えたね、士。」

「まあな。」

ディエンドはあの姿を見てすぐにユウスケだと気付いた。それを聞いたエリオがディケイドに尋ねる。

「小野寺さんって……もしかして、士さんの仲間の？」

「ああ。あいつもライダーだからな。さっき俺が乗っていた奴のように、姿を変えられる。」

ディケイドは軽く質問を返すと、飛んできたクウガゴウラムの背中に乗り、飛んで行った。

「よおユウスケ、どうやらヘリは守ってくれたみたいだな。」

『まったく、勝手すぎんだよお前は。もし俺が気付かなかったらどうするつもりだ。』

「ま、そんな時はそんな時だ……ん？」

ディケイドとクウガがやり取りをしていると、クアットロとディエチを追跡するフェイトの姿が目に入った。

「ユウスケ、話はあとでゆっくり聞いてやる。まずは俺に付き合え。」

『えっ、おっ、おう！』

ディケイドはクウガに無理やり納得させると、ある位置まで飛んでいく。そしてはやての魔法から出てきた二人を待ち伏せし、行動を止めた。

「逃がさねえぜ。」

突如現れたディケイドの姿に二人は驚く。しかも、サイドにはなのはとフェイトが囲んでいた。

《They never surrender. Judged to have in danger of escape.》（投降の意志なし…逃走の危険ありと認定）

バルディッシュの判断により、フェイトは魔法陣を展開する。

《Knockout by buster. After that, arrest it.》（砲撃で昏倒させて捕らえます）

レイジングハートもそう判断し、なのははターゲットに向かって杖を構える。

「じゃ、俺もやるか。」

ディケイドは二人を見て、カードを取り出し、セットした。

<FINAL ATTACKRIDE・・・>

電子音が鳴ると、ディケイドはライドブッカーをガンモードに構え、その前にカードが現れる。

それを見たクアットロとディエチはもう駄目かと諦めかけていたその時だった。

「ディエチ、クアットロ。じっとしている！IS発動、ライドインパルス、」

二人に声を掛ける者がいた。

「トライデント・・・スマッシュアアッ！！！！」

「エクセリオン・・・バスタアアアッ！！！！」

「ハッ！」

<DE・DE・DE・DECADE！！>

お互いにカートリッジをロードして放たれたフェイトの金色となのはの桃色の閃光、そしてディケイドの【ディメンションブラスト】がクアットロとディエチに襲い掛かる。そして爆音と共に誰もが直撃したかと思っていたが、なのはとフェイトは直撃する瞬間に逃げられたと報告してすぐにロングアーチに跡を追うように指示を出した。

なのはとフェイトのいる位置から離れた場所。そこに背の高い女性に抱えられたクアットロとディエチが姿を現した。二人を救助したのは高速機動を可能にするIS【ライド・インパルス】を持つNO.3トーレだった。

「ふう〜トーレ姉様、助かりました〜」

「感謝・・・」

「ボーとするな、さっさと立て・・・馬鹿者どもめ、監視目的だったが来ていてよかった・・・セインはもう、お嬢とケースの確保を完遂したそうだ。だが、百瀬と弟切の二人はやられた。」

「まあ、あの二人死んじやいましたか〜」

「もしかして、さっきもいたディケイドってやつに？」

「おそろくな。とにかく今は、お嬢達に合流して戻るぞ。」

トーレは二人と先に行ったセインとルーテシアと合流して戻ると言ってスカリエッティのアジトへと戻っていった。

その頃、ロングアーチではクアットロ達の行方を探していたが、完全に見失ってしまったことをはやてに報告していた。そしてヴィータもはやてに報告していた。

「悪い、こっちは最悪だ。召喚師一味には逃げられて、ケースは持

ってかれちゃった。逃走経路も掴めねえ。うかつだった……ん？」

ヴィータが報告をしている最中、クウガゴウラムに乗ったディケイドが戻ってきた。ディケイドはフォワード達の後ろで着地し、クウガもゴウラムから元の姿に戻り、着地した。

「よお、待たせたな。」

「士さん！」

「小野寺さんも。」

「ああ。」

ディケイドとクウガはフォワード陣に対して軽く挨拶する。ちなみにクウガがゴウラムから戻った時、フォワード陣全員が「ホントにあの人だったんだ……」と思っていたのは余談である。

「ん？ ああ、悪い。報告を続ける。」

ヴィータは通信ではやてから呼ばれたからか、再び報告を始めた。その時ギンガはスバルに肘を小突き、スバルはそれを受けて恐る恐るヴィータに話しかける。

「あのー、ヴィータ副隊長……」

スバルが声をかけた瞬間、ヴィータはグラーファイゼンを突き付け以降の言葉を止め、報告を続ける。

「ああ、フォワード陣はベストだった。今回は完全にあたしの失態だ。」

「リインもです……」

「副隊長、あの……」

今度はティアナから呼ばれたヴィータは、さすがに少しいらつき気味に向き直った。

「なんだよ？ 報告中だぞ。」

「いや！ あの、ずっと緊迫してたんで切りだすタイミングがなかったんですけど……」

「レリックには私達でちょっとひと工夫してまして……」

それを聞いたヴィータとリインは不思議そうな表情をした。

その頃、ルーテシアとアギト、ナンバーズ一行はスカリエッティラボ内の廊下を歩いていた。

「ふうー、やっと戻ってこれた。」

「お嬢の集団転送のおかげですね。ありがとうございます。」

「うん」

セツテの礼にもルーテシアは静かにうなずくだけだった。すると、クアットロが思い出したように提案する。

「ああ、セインちゃん。ケースの中身確認。」

「はいよ」

クアットロが言うと、セインは手近な台にケースを置き、ケースの蓋をあける。

「じゃじゃ〜ん………!?!」

『!?!』

だが、ケースの中を見た時、全員が驚愕する。

「空っぽ!?!」

「どういうことだ!?!」

そう、ケースの中にはレリックが入っていなかったのだ。そうすると、必然的にケースを持ってきたセインに疑いがかかる。

「セインちゃん、あなたまさか……」

「って、アタシはちゃんと運んできた!」

「ディープダイバーの使い方間違えて、中身だけ落としてきたとか?」

「間違えねえ〜!!」

クアットロやディエチがセインを非難する中、ルーテシアはレリックケースに刻まれた番号を見て、少しがっかりしたようだった。そしてセインは、自分の疑いを晴らすべくモニターをいくつか開く。

「ちゃんとスキャンして、本物のケースだって確認して・・・ほれっ！」

セインに言われ、全員がスキャン映像を見る。

「まあ、ケースは確かに本物だけど・・・」

ディエチは映像に関して問題がなさそうな事を言ったが、隣で見ていたトーレはあることに気付いた。クアットロも変わった様子はないうことを確認し、首をかしげる。

「うーん、おかしいわねえ〜？」

「バカどもが。お前らの目は節穴か。」

トーレの言葉に全員が疑問を浮かべる。するとトーレは自分の見ていた映像のある部分を指差す。

「ここだ。」

それはケースと同じ反応をしたキャロの帽子だった。

さらにその頃、ヴィータとリインはティアナから彼女らの言う“工夫”について説明を聞いていた。

「ケースはシルエットではなく本物でした。あたしのシルエットって衝撃に弱いんで、奪われた時点でばれちゃいますから。」

「なので、ケースを開封してレリック本体に直接嚴重封印をかけて・・・」

「その中身は・・・」

キャロが引き継いだ説明の後、スバルがキャロの帽子を取る。その中のキャロの頭には、花がついたカチューシャが付いていた。

「こんなかんじで。」

そう言ってティアナが指をはじくと、カチューシャがレリックの姿に変わった。

「敵との直接接触が一番少ないキャロに持ってもらおうって。」

「なるほどー!」

「あ、あはは・・・」

エリオのまとめに、リインは驚きヴィータは苦笑を浮かべる。その様子を横で見ていたディケイドも納得する。

「なるほどな。あいつら、中々キレるじゃねえか。」

「なあ、一体どういうこと？」

「ま、後でじっくり説明してやるよ……ん？」

ディケイドは横で理解に苦しんでいるクウガにそう告げたのち、何かを探すようにあたりを見渡した。その様子に気付いたティアナが声をかける。

「士さん、どうかしました？」

「海東はどうした？」

『えっ？』

それを聞いたフォワード達も周りを見渡すが、どこにもディエンドの姿はなかった。

その頃、スカリエツティアジトでは、フォワード達の作戦にまんまとはまったことに落胆していた。

「してやられたわけだ……」

「なあんだ。せっかく潜り込んだのに、ハズレだったのか。」

突如後ろから声がしたため、全員があわてて振り返る。そこにはディエンドの姿があった。

「キサマ、いつの間に……!？」

「いやあ、お嬢ちゃんの転送魔法とやらに紛れこんでただけど、気付かなかったかな？」

ディエンドが手をやれやれと言った感じで振ると、ルーテシアは少し顔をしかめる。

「でもまあ、お宝がないならここに意味はない。失礼するよ。」
そう言うとディエンドは既に持っていたカードをセットする。

<ATTACKRIDE・・・INVISIBLE!!>

「あっ、こらまで！」

慌ててセインが飛びかかるが、ディエンドはそのまま姿をくらました。

「くっ、すみませんお嬢。何から何まで、愚妹の失態です・・・」

「別に、あの泥棒さんの事は私にも責任はあるし、それに私が探してるのは11番のコアだけだから。」

そう言うところルーテシアはナンバーズに背を向けて歩きだす。その時、かすかに唇が動いたのをアギトは見逃さなかった。

「っ!？」

そして、その言葉を理解した瞬間、何やらゾツとしたような感覚がアギトを突き抜けた。

「ルーラー……ホントに、何があったんだよ……」

それはあの時のようにルーテシアが絶対にはくはずもないと思って
いた言葉。

「うるさいな」そして「役立たず」と……

こうして機動六課初めての休暇は波乱の一日となった。保護した少女は聖王教会所属の医療施設で治療を受け、夏海とユウスケはその後、事情聴取も兼ねて改めて機動六課へと同行される事となった。

第十三話：出会いと再会の休日（後編）（後書き）

どうも、お久しぶりです。diendです。

随分と遅れてしまい、大変申し訳ありませんでした。

学校や勉強の事もありますので、これからはどうやら不定期更新になってしまいそうです。

身勝手ではありますが、ご了承ください。

あと大分超展開になってしまいましたが、自分の文章力の無さは自覚していますので、どうかあったかい目で見てください。

では以上です。またお会いしましょう。

P. S.

よかったらブログにも来てください。ユーザーページのURLからどうぞ。

第十四話：少女の戸惑い・戦士たちの困惑（前書き）

苦節10ヶ月・・・

堂・々・完・成！！

第十四話：少女の戸惑い・戦士たちの困惑

機動六課との初の戦闘を行ったスカリエッティの作品、戦闘機人ナンバーズ。ルーテシアの援護、“当たり”の回収に加えてレリックを回収しようと思ったが、結局、成功できたのはルーテシアの救助のみだった。

「申し訳ありませんでしたドクター。レリックの回収に失敗してしまい、さらには百瀬達までも失うという失態となりました・・・」

「いや、気にしないでくれたまえ。あの二人は色々と役立ってくれたし、機動六課の新しい戦闘データを得ることが出来たんだ。それだけでもよしとしよう・・・」

戻ってきたトーレはスカリエッティに謝罪するが、当の本人は新しく手に入った戦闘データを見ながら気にしない様子でいた。その後、トーレはセインとディエチを連れて研究室から退出し、クアットロのみが残った。

「所でドクター、一つ報告があるんですけど」

「なんだい？クアットロ」

「私とディエチちゃんとヘリを砲撃した際に現われたあの大きなクワガタさんなんですけど」

クアットロはディエチのイノームスカノンの砲撃の際に出現したクワガゴウラムの事を映像付きでスカリエッティに報告した。映像にはディエチの砲撃を防御するクワガゴウラムの姿が映し出されてい

た。

「ほほう・・・これは奇怪な姿だね・・・」

「そうでしょう？でもあのディエチちゃんの砲撃を防いだんですよ、一体何者なんでしょう？」

「ふむ・・・この映像を見る限りは、おそらくディケイドの仲間かと思われるがねえ・・・」

映像に映し出されているディケイドを乗せて飛びまわるクウガゴウラムの姿を見たスカリエッティは推測する。その時、扉が開きある者が入室した。

「ドクター、少しよいか？」

「おや、ガミオ君。どうかしたかね？」

「退屈だな。少しガジェットどもで運動をしようとな。」

それは“クウガの世界”で究極の闇をもたらす者と言われたグロンギの王ン・ガミオ・ゼダだった。

「わかった、手配しよう。訓練室で待っていたまえ。」

「ああ・・・ん？これは・・・」

ふと、ガミオは先ほどまでスカリエッティ達が見ていた映像を見てはたと気づく。

「どうかしたかね？」

「なに、少し懐かしい物を見ただけだ。」

「懐かしい？もしかして、このクワガタちゃんですか？」

「奴の名はクウガ。我らの世界でリントと共に我らと戦った戦士。その姿は上に乗った奴の力で姿を変えたのだ。」

「ふむ・・・そういうことか。ディケイドにそんな力があつたとはね・・・」

「ああ。だが、クウガがいるというのは好都合だ。戦う日が待ちどうしい。フッフ・・・」

ガミオは楽しそうな笑みを浮かべながら部屋を後にした。その後ろ姿をスカリエッティは怪しげな笑みを浮かべる。

（つまり、あれも仮面ライダーということか・・・これはまた面白い。祭りの準備を速めねばならないなあ・・・ククク・・・）

その頃、なのははシグナムの運転で保護した謎の少女のいる聖王医療院に向かっていた。

「すみませんシグナムさん。車、出してもらっちゃって……」

「なに、車はテストロッサからの借り物だし、向こうにはシスターシャツハがいらっしゃる。私が仲介した方がいいだろう。」

「はい……」

「のんきに会話してくれるな。」

その時、運転席のシグナムと助手席のなのはの会話に唐突に別の声が入って来る。

「何で俺まで行かなきゃいけないんだ？」

「士君、そんな言い方ないじゃないですか。せっかく乗せて頂いたんですから。」

「そうだぞ士。我慢しろ、我慢。」

それは後部座席に乗った士だった。そしてその両サイドには保護した少女と行動を共にしていた士の仲間・光夏美と小野寺ユウスケだった。なぜ彼らが乗っているかというと、なのはとシグナムが病院に向かうところを士が見つけ、一緒にいた夏海とユウスケが「自分達も行きたい」と言い出したのだ。士は行くのを渋ったが、夏海の「光家秘伝・笑いのツボ」を押され、しぶしぶ同行したのだった。ちなみにいきなり笑いだした士を見てなのは達は心配そうにしていたのだが、ユウスケの「大丈夫大丈夫。いつもの事だから」という

言葉で若干納得していないような複雑な顔をしたのは余談である。

「残念だが士、実はお前も誘うところだったのだぞ。」

「はぁ？なんでだ？」

「あゝ、はやてちゃんから聞いた話だと、さっき言ったシスターシヤッハもシグナムさんと同じバトルマニアらしいとかで……」

「その時にお前の話をしたら「是非、お手合わせてしてもらいたい」と仰ってな。顔合わせも兼ねてこうして連れて来たという訳だ。もつとも、私から誘う手間は省けたがな。」

「……」

シグナムの話す士を連れて行く理由……それはシヤッハと名乗る女性と“戦え”としか士には聞こえなかった。恐らく顔合わせが20%で、戦闘が80%の割合だろうと士は考えた。その理由に士は何も言わずに「はぁ」と溜息をつくしか出来なかった。その横で、夏海はなのはに問う。

「あの、高町さん……でしたっけ？」

「なのはでいいですよ、夏海さん。」

「じゃあ、なのはさん。私達と一緒にいたあの子はどうなるんでしょうか？」

「そうですね、当面は聖王教会か機動六課で預かる事になりますけど、長期の検査や安全確認が取れないと受け入れ先も見つからない

だろうし……」

「そうですか……」

なのはから答えを聞いた夏海は少し落胆した様子だった。その横で聞いていたユウスケも少し暗くなった感じだった。

暫くすると、聖王医療院にいるシャツハからの通信が入り、運転席のフロントガラスの所にシャツハの顔が映る。

『騎士シグナム、聖王教会【シャツハ・ヌエラ】です!!』

「どうされました？」

『すみません、こちらの不手際がありまして……』

シャツハの通信にシグナムとなのはの表情が真剣な顔になる。なんでも病院内の者が少し目を離れた隙に保護した少女が姿を消してしまったというのだ。いくら子供であろうと生まれが人造魔導師素体であるが故に、どのような潜在的な危険を持っているかは分からない。

聖王医療院に到着した三人はさっそくシャツハと合流し、なのはは状況をシャツハから聞いた。既に病院内は特別寮塔とその周囲の避難は完了しており、今のところは侵入者や飛行魔法、転移魔法の反応は出ていないとシャツハは説明を聞き、なのはは手分けして探すかと提案する。シグナムはシャツハと病院内、なのはと土は外回りを探す事にした。そこで、夏海とユウスケも探すと言い出したため、なのははユウスケはシグナムと、夏海は自分と来るよう指示した。

なのはと士は病院の周辺を左右から別れて探す事にし、なのはは左へ、士は右へと別れ、右へと向かった士は湖の傍を歩いていた。この聖王医療院は周囲を湖で囲まれた物静かな場所であり、自然と気持ちいが和らいでくる。

「んっ？あれは・・・！？」

ふと士が建物のほうを見上げると、そこにはあの保護した少女が建物の三階の窓から宙ぶらりんの状態で地面に落ちないように必死になって耐えていた。

「おいおいっ、何だってあんなところに居るんだよ！！」

<KAMENRIDE・・・DECADE！！>

士は慌てて駆け出しながらディケイドライバーを腰に装着してディケイドへと変身する。そしてディケイドは必死に走るが、子供である少女も限界がきてしまったようで手すりから手を離して落ちてしまった。

「ぎゃあああああっ！！」

「くそ、間に合わねえ！」

ディケイドがそう確信した時、ライドブッカードからカードが3枚飛び出してくる。そのカードをディケイドは走りながらつかむ。

「なんだこりゃ？とにかく使ってみるか！」

それは今まで見たこともないカードだった。不思議に思いながらも、

ディケイドはディケイドライバーにカードをセットする。

<ATTACKRIDE・・・DASH!!>

電子音が鳴ると、ディケイドの走るスピードは瞬間的に加速した。そして見事落下しつつある少女の真下へと着き、キャッチした。

「ふう。無事か？」

「あっ・・・」

無事に救出した少女に優しく話し掛けるディケイド。その姿を見た少女は少し驚いた表情でディケイドを見つめていた。

「てりやあああっ!!!!」

「おわああっ!!!？」

その時、背後から何か気配を感じたディケイドは振り返ってみると、そこに何か棒のようなモノを自分に向かって振り下ろされようとしていた。それを見たディケイドは少女を抱えたまま、何者かの攻撃をギリギリの所で回避してディケイドは攻撃してきた相手を見る。

するとそこには、先程少女の行方が分からなくなったことを知らせてきたシャッハの姿があった。しかもシャッハの姿はさっきまでの修道女の姿ではなく、服装が軽装に変わり、見た感じはシグナムの騎士甲冑のような感じになっていた。そして両腕にはまるでトンファのような武器を手に入っていた。

どうやら何所かでディケイドの姿を見ていたらしい。

「その不審者！直ちにその子をこちらに渡しなさい！！」

「ちよっ、ちよっと待て！俺は敵じゃない！！」

「問答無用っ！！」

シャツハはディケイド度の変身の瞬間を見ていないようで“少女を狙ってきた不審者”と判断したのか、ディケイドに向かってトンファー型のデバイス【ヴィンデルシャフト】を振り下ろして攻撃を仕掛けてきた。ディケイドは武器を使ってシャツハの攻撃を防ごうとも思ったが、両手で少女を抱えている今の状態では武器を振り回して攻撃を防ぐなんてことは出来ず、回避するのが精一杯だった。そこでふと、ディケイドはある事を思い出す。

「なら・・・あれを使ってみるか！」

そう言うディケイドは少女を片手に抱え直し、ライドブッカードを取り出し、セットする。

<ATTACKRIDE・・・BARRIER！！>

電子音が鳴ると、ディケイドの周りにマゼンタカラーのバリアフィールドが展開される。そしてそのバリアに当たったシャツハの攻撃は弾かれ、少し距離を広げた。

「このっ・・・」

「ちよっと待ってください、シスター・シャツハ！！」

シャツハがヴィンデルシャフトを構え直し、攻撃を再開しようとした瞬間、その場にやってきたのはとシグナムがシャツハを止めにはいる。

「なのはさん！？どうして止めるのですか！？」

「その人は私たちの仲間です！！」

「えっ！？」

不審者を庇おうとするなのはの発言にシャツハは何故かと問おうと、なのははディケイドは仲間だと叫ぶ。その言葉にシャツハは驚きの声をあげる。そして一緒にいたシグナムがディケイドの傍に駆け寄った。

「大丈夫か、士？」

「何とかな・・・」

シグナムとディケイドの様子にシャツハは少し唾然としてしまった。ディケイドはシグナムの手を借りて立ち上がり、少女を降ろしてやると変身を解いて士の姿に戻る。

「えっ！？貴方は確か先程の・・・」

「門矢 士だ。だから言っただろ敵じゃないと・・・まったく。」

士の姿にシャツハは驚き、士は寄れてもいない服をパンパンと払っている。その様子にシャツハは「申し訳ありません」と士に謝っていると、なのはは少女の傍に歩み寄り、膝を付いて視線を合わせる。

「ビックリさせちゃったね、私は高町なのはって言います。お名前
は言えるかな？」

「……ヴィヴィオ……」

なのはは少女に声をかけると、少女は自分の名前を【ヴィヴィオ】
と名乗り、少し怯えながらもなのはの質問に答える。

「ヴィヴィオは何処かに行きたかったの？」

「ママ……いないの。それにお兄ちゃんも、お姉ちゃんも……」

ヴィヴィオの言葉になのはは「はっ」となり、一緒に探そうと持ち
かけると、ヴィヴィオは今にも泣き出しそうなのを我慢して頷く。
そしてなのははヴィヴィオと手を繋いで歩き出そうとした時、何故
かヴィヴィオは土の服を掴んで立ち止まってしまった。

「あれ？」

「……なあ、何でこいつに俺の服を掴まれてんだ？」

「……一緒じゃなきゃ……ヤダ……」

ヴィヴィオの行動に土はなのはに質問するが、涙を浮かべて今にも
泣き出しそうなヴィヴィオの顔を見た土は焦りつつもなのはと一緒に
行くことにした。そして夏海やユウスケと合流し、ヴィヴィオの
涙は少し晴れ、土となのははほっとしたのだったが、この後に起こ
る悲劇を二人は知らなかった。

一方その頃、機動六課内部隊長室ではフェイトがはやりからある重大な事を聞かされていた。

「臨時査察って……機動六課に？」

「うん……地上本部にそういう動きがあるみたいなんよ……」

「地上本部の査察は、かなり厳しいって……」

「うちは多々出さえ突っ込みどころ満載の部隊やし……士さん達の事もあるしなあ……」

「今配置やシフトの変更命令が出たら、正直致命的だよ？」

「うーん、何とか切り抜けな。」

はやては地上本部が機動六課へ査察へ訪れる事にかなり戸惑っていた。自分達の部隊がかなり無理をしてできた事や民間協力者である士達がいる等指摘される可能性のある物は数えきれない。そのため、はやてもかなり頭を悩ませているのである。と、ここでフェイトが一つ提案する。

「ねえ、これ査察対策にも関係してくるんだけど、六課設立の本当の理由……そろそろ聞いてもいいかな？」

「そやね。まあ、ええタイミングかな。」

そう、なのはやフェイトもはやてが機動六課を設立した理由を“どんな状況でも迅速に対応できる部隊”であること以外聞かされていない。はやてはそれを聞かれ、査察の事もかねて本当のことを話すことにした。はやてはこれから報告も兼ねて聖王教会へ向かうので、そこで話すという。そしてその場にはフェイトの義兄・クロノも訪れるという。

「なのはちゃんとついて来てくれるかな？そこで全部話すから。」

「うん。なのは、戻ってるかな？」

フェイトははやての言葉に答えると、なのはに連絡を取ろうとして、画面を操作する。

『うわああああああああん！！！！』

しかし、画面に出てきたのは盛大に泣き叫ぶ少女・ヴィヴィオと、それをあやすのはとフォワード陣、そして夏海という不可解な状況だった。フェイトは思わず尋ねる。

『あの……何の騒ぎ？』

「ああ、フェイト隊長。実は……」

「やゝだゝ!! 行っちゃやゝだゝっ!!」

なのはは説明をしようにも、泣き叫ぶヴィヴィオのせいでうまく話せないという、厄介な状態にフェイトもはやても首をかしげるばかりであった。

いつまでも泣きやまないヴィヴィオに困り果てていたなのはたちの元へ、先ほど通信をしていたフェイトとはやてがやってきたのにティアナとエリオが気付いた。

「八神部隊長。」

「フェイトさん。」

「‘エース・オブ・エース’にも、勝てない相手がおるもんやね。」

「（フェイトちゃん、はやてちゃん。あの・・・助けて。）」

はやては面白半分に言うと、なのはからはさすがのように助けを求める声が返ってくる。それを聞いたはやては肩をすくめてスバルとキヤロに落ち着くように促し、フェイトがヴィヴィオに向かっていき、ヴィヴィオを慰め始めた。その様子をはたから見えていたフォワード陣は頭を下げたり、一部が顔を赤くしたりしていた。どうやら念話で会話しているらしい。その隙にはやては、壁の方にもたれかかっていた士に近づいた。

「なあ士さん、いまさら聞く事やないと思うけど、軽く状況説明頼めるか？」

「説明も何も、なのはの奴が仕事に行こうとしたらあのガキがぐずった。それだけだ。」

「ああ、やっぱりか。」

「俺としては、なのはの慌てふためくところはなかなか見て面白かったぞ。」

「助ける気ゼロやな。」

「ガキは嫌いだしな。」

慰めるフェイトや、頭を下げていた（おそらく念話で何かあったのだろう）フォワード陣を見ながら二人は会話を進める。そのすぐ横で会話を聞いていたユウスケは「どんな会話だ……」と心の中で突っ込んでいた。

「まあ世間話はこのへんにして、本題に移るか。」

「本題？」

「実はな……」

はやては機動六課に地上本部の査察が入る事、その事を含めてなのは達と共に聖王教会に向かうことを説明した。

「そんでな、それに士さんも連れてくるようにってカリムに言われとるんよ。」

「俺もか？なんでだ？」

「さあ。着いたときに話すって言うとしたで。」

「なるほど……」

はやてからの説明を聞いた士は少し考え込んだ。そして数秒考えた後に、結論を出した。

「わかった。俺もついていこう。」

「そう言うてくれると思ったわ。お、ちょうど向こうも終わったみたいやね。」

はやての言う通り、フェイトの説得が功を奏してヴィヴィオが涙ながらに小さくうなずいた。

こうしてなのはとフェイト、はやてといった隊長陣と士は聖王教会へと向かっていった。

聖王教会に到着したなのは達は、聖王教会の騎士・カリムの執務室を訪れた。ドアをノックすると「どうぞ」というカリムの返答を受けたのはたちは「失礼します」とドアを開けて入室し、敬礼する。

「高町なのは一等空尉であります。」

「フェイト・テストロッサ・ハラオウン執務官です。」

敬意を払う二人に対して、士はただ腕を組んで黙っている。そこへカリムが歩み寄る。

「いらっしゃい。はじめまして。聖王教会、教会騎士団騎士カリム・グラシアと申します。えと……」

カリムはなのはとフェイトにあいさつをすると、士のほうに目を向ける。なのはの横にいた士は、腕を組んでただ立っているだけだった。なのはがあわてて糾弾する。

「つ、士さん！失礼ですよ。」

「知るか。俺は組織に入った覚えはないしな。」

「うふふ、かまいませんよ。」

カリムは微笑みながら返し、士のほうへ歩み寄る。

「お話は伺っていますよ、門矢士さん。どうぞ、よろしくお願いします。」

「ああ。まあ、それなりにな。」

カリムがあらためて挨拶をすると、士はあくまでも自分のペースで返答する。カリムはそれを笑顔で受けとめ、皆に席に着くよう促し

た。

「失礼します。」

「クロノ提督、少しお久しぶりです。」

「ああ、フェイト執務官。士も久しぶりだな。」

「ああ、あんたには世話になった。」

なのはは座る前に一礼し、フェイトは義兄であるクロノに敬礼する。クロノはフェイトに何やら固い感じで返答し、士にも挨拶をする。士は全くいつも通り返した。クロノの返答の仕方を見たカリムが、笑いながら言う。

「お二人とも、そう固くならないで。私達は個人的にも友人だから。いつも通りで平気ですよ。」

「と、騎士カリムが仰せだ。普段と同じで……」

「平気や」

クロノとはやてが提案すると、なのはもフェイトも普段道理の口調に戻った。

「じゃあ、クロノ君久しぶり。」

「お兄ちゃん、元気だった？」

フェイトの「お兄ちゃん」という単語に、クロノは顔を赤らめた。

「そ、それはよせ。お互いもういい歳だぞ。」

「兄弟関係に年齢は関係ないよ、クロノ。」

フェイトの意見に、クロノは何も言えずに俯いている。それを見た士は「妹には敵わないのか」と心の内で判断した。一段落ついたところで、はやてが咳払いして本題に移る。

「さて昨日の動きについてのまとめと、改めて起動六課設立の裏表について。それから、今後の話や。」

そして、なのはとフェイト、士はこの起動六課の真実を知ることとなった。

なのは達が出かけた後、エリオとキャロは遊び疲れて眠ってしまったヴィヴィオをベッドの上へと移動させ、上から布団をかけてやっていた。

「落ち着いてくれてよかった。」

「うん。」

「なんか、本当に普通の子供だよね。」

「うん。」

キャロのそんな感想に、エリオはただ「うん」としか答えない。当のエリオは、ヴィヴィオについてある考えを巡らせていた。

（この子が人体魔導師素体だとするなら、知識や言語がはつきりしすぎてる。人工受精児ならこうはならない。たぶん、記憶があるんだ。もともになった人物の・・・）

「エリオ君？」

そう考えているエリオの顔が、だんだんと陰しくなる。そんな様子を感じ取ったキャロの一言で、エリオは現実へ戻される。

「どうかした？」

「あっ、ごめん。なんでもない。」

「？」

エリオのがあわてて答えたのに、キャロは疑問符を浮かべる。その時部屋の自動ドアが開き、そこに少し席を外していた夏美とユウスケが入ってきた。

「あっ、寝ちゃったんですね。よかった。」

「お疲れ二人とも。飲み物もらってきたよ。」

「あっ、ありがとうございます。」

「いただきます。」

エリオとキャロはユウスケに駆け寄り、トレイの上の飲み物を受け取る。そしてまた扉が開き、今度はヴィータとシグナムが入ってきた。

「邪魔するぞ。」

「ヴィータ副隊長、シグナム副隊長も・・・」

「どうかしたんですか？」

「いや、用があんのはこいつだ。」

ヴィータはそう言うと、ユウスケを指さす。ユウスケは戸惑っているのか、左右を見てから自分を指さした。

「俺？」

「そう、お前だ。」

「あの、ユウスケが何か？」

夏美は突然ユウスケが指名されたことに、不審な顔をしながら問う。シグナムは、その理由を説明する。

「主はやてからの仰せでな。彼も仮面ライダーならば、我々の戦力として加えたいと。」

「そこで、あたしが実力を見てやろうってわけだ。」

ヴィータは腕を組みながら説明をする。それを聞いたユウスケはどうしたものかといった感じだった。

「えと・・・いいのかな？」

「まあ、大丈夫じゃないですか？たぶん・・・」

「よし、決まりだな。ついて来い。」

「えっ！？ちよつ、ちよつと・・・」

夏美の返答を了承と捉えたヴィータはユウスケの制止も聞かず、彼の腕を強引に引っ張り歩き出す。夏美たちはただその姿を見ながら、シグナムへ確認を取る。

「あの、本当に大丈夫なんですか・・・」

「なあに、ヴィータだって手加減するさ。そうだ、お前たちもいい勉強になるかもしれんぞ？」

シグナムは答えてからエリオとキャロにも提案する。二人は一度顔を見合わせてから、返答した。

「はい！」

「勉強させていただきます。」

「じゃあ、ヴィヴィオちゃんは私が。」

「ああ、お願いしよう。では行くぞ。」

『はい！』

こうしてライティングの3人はヴィータ達を追っかけて訓練場に向かい、夏美は後姿を送り出すのだった。

第十四話：少女の戸惑い・戦士たちの困惑（後書き）

どうも皆さん、10か月ぶりのdie endです。

ようやくなのディケの最新話を投稿できました。長い間お待ちいただいたみな様には、本当に申し訳なく思っております。次回からはもっと更新頻度を多くしようと思っております。

さて、今回ディケイドにオリジナルカードを登場させました。瞬間的に加速させる『DASH』とバリアフィールドを展開する『BARRIER』、そしてまだ見ぬ一枚の登場はまだ先です。それまで、お楽しみに。

また、この作品とは別に違った作品を投稿しました。オーズとVidのコラボでオリ主モノです。まだ1話しか出てませんが、よかったです。よろしくお願いいたします。

最後になりましたが、このたびはお待たせしてしまって申し訳ありませんでした。これから応援よろしく願いいたします。

ではまた（＾Ｏ＾）ノシ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4475h/>

仮面ライダーディケイドEX ～なのはの世界～

2011年6月6日20時27分発行